宇土市埋蔵文化財調査報告書第32集

Sobata

曽畑貝塚

― 慶應義塾大学資料再整理報告 ―

2011

熊本県宇土市教育委員会

曽畑貝塚周辺航空写真（上が北，1993年撮影）

調査地遠景
（南より，発掘当時）

巻頭図版２

Ａトレンチ１区北壁第１及び第２貝層断面（南より）

曽畑式土器出土状況

曽畑貝塚出土曽畑式土器

曽畑貝塚出土石器・石製品・貝製品

曽畑貝塚調査図面や写真などの記録物

序　文

宇土半島北部から同基部に位置する宇土市には，国指定史跡・中世宇土城跡や，古墳時代前期の女性首長が埋葬された市指定史跡・向野田古墳（出土品は国指定文化財）をはじめ数多くの誇るべき文化財が残されています。

また，周辺地域には縄文時代の貝塚が数多く分布しており，九州において最も貝塚が密集する地域として知られています。これら貝塚の存在は，当地域の人々が古くから豊穣の海である有明海や八代海の恩恵を受けて生活していたことを雄弁に物語ります。

宇土市岩古曽町に所在する曽畑貝塚は，曽畑式土器（縄文時代前期後半）の標式遺跡で，100年以上前から学会に知られていた著名な縄文時代の貝塚です。これまでの調査の結果，曽畑式土器をはじめとする大量の縄文土器や石器，貝製品など様々な生活道具が出土しており，貝塚に隣接する低湿地ではドングリの貯蔵穴群が確認されるなど，当時の人々の営みを知るうえで貴重な資料となっています。

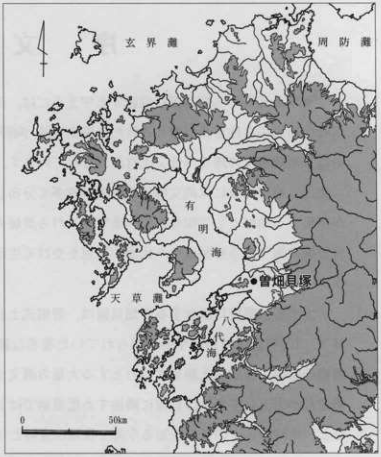
1959年（昭和34）の江坂輝彌氏を中心とした発掘調査では，縄文時代前期と後期の２時期にわたる貝層が確認され，縄文土器や石器などの重要な資料が出土しました。

調査終了後，本資料は長年にわたり慶應義塾大学で保管されていましたが，2001年（平成13）に宇土市に移管され，整理作業を実施しました。本書はその成果をまとめた調査報告書です。

最後になりましたが，資料の移管や報告書作成にあたって絶大なるご理解とご協力を賜りました江坂輝彌氏をはじめとする慶應義塾大学関係者の皆様，調査指導をいただきました関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成23年３月

宇土市教育長　**木下博信**



曽畑貝塚の位置（左：1／20,000,000、右：1／2,000,000）

例　言

1　本書は熊本県宇土市岩古曽町字曽畑に所在する曽畑貝塚の慶應義塾大学（以下，慶応大学）資料再整理報告（国庫補助事業）である。

2　調査地は宇土市岩古曽町字曽畑1196-1，1197-1，1198-1，1198-3に所在する。調査は1959年（昭和34）10～11月に慶応大学考古学民族学研究室の江坂輝彌氏を中心として組織された調査団が実施した。

3　調査終了後，出土品は慶応大学で保管されていたが，平成13年10月に宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）へ，その大半が移管された。本出土品は一般に「慶応大学資料」と呼称されている。

4　発掘調査地における実測図は，乙益重隆氏・賀川光夫氏・渡辺誠氏・後藤英男氏・笹津備洋氏・薛静也氏・東光彦氏・松岡史氏が作成した。

5　発掘調査時の写真撮影は主に江坂輝彌氏が担当した。また，遺物写真は藤本貴仁（宇土市教育委員会）が撮影した。

6　遺物実測図作成および遺構・遺物実測図の製図は，春川香子・境美和・山口陽子・土野雄貴（宇土市教育委員会）が行い，これらを藤本が補正した。また，石器や貝製品の一部は㈱九州文化財研究所に実測を委託した。なお，本編の掉図と図版の遺物番号は対応する。

7　石器・石製品の石材同定については熊本大学名誉教授渡辺一徳氏（地質学）にご指導いただいた。動物遺存体については，貝類を九州大学名誉教授菊池泰二氏（海洋生物学）に指導助言を賜わり，脊椎動物遺体の同定作業は独立行政法人国立文化財機構・奈良文化財研究所埋蔵文化財センター環境考古学室の松井章氏・丸山真史氏指導の下，㈱吉田生物研究所が実施した。

8　出土遺物一覧表の作成は土野・藤本が行った。

9　本書の全般的な内容については，杉村彰一氏（日本考古学協会員）にご指導いただいた。

10　本編で用いた方位は磁北である。

11　本書の執筆は，第1～9章のうち第3章を藤本・土野，それ以外を藤本が担当した。また，第7章第3節は㈱吉田生物研究所及び第8章第2節は㈱九州環境管理協会より報告を受けた放射性炭素年代測定結果を藤本が再構成して掲載した。付編については江坂輝彌氏・可児弘明氏・笹津備洋氏・渡辺誠氏・小片保氏・乙益重隆氏の当該調査にかかる未発表原稿を付編1にて掲載し，若林勝邦氏・杉村彰一氏・清野謙次氏の曽畑貝塚及び曽畑式土器（文化）に関する報告及び論文を付編2において再録した。また，付編3（藤本・土野・杉村担当）は，曽畑貝塚及び曽畑式土器に関する主な論考・調査報告などの文献一覧表である。

12　本書の編集は，高木恭二（宇土市教育部長）の指導のもとに藤本が行った。掲載遺物・関連資料は，宇土市教育委員会に収蔵・保管している。

本文目次

第1章　序章……1
第1節　調査に至る経緯と経過……1
第2節　調査の組織……3
第2章　位置と環境……5
第1節　地理的環境……5
第2節　歴史的環境……6
第3章　曽畑貝塚における過去の調査について……13
第1節　曽畑貝塚の調査概要……13
第2節　明治期の調査……13
第3節　大正期の調査……14
第4節　昭和期の調査……15
第5節　平成期の調査……21
第4章　調査の概要……25
第1節　調査の方法……25
第2節　各トレンチの概要……25
第3節　調査日誌抄……30
第5章　検出遺構……33
第1節　検出遺構の概要……33
第2節　出土人骨について……33
第6章　出土遺物……35
第1節　出土遺物の概要……35
第2節　土器・土製品……35
第3節　石器・石製品・貝製品……71
第7章　動物遺存体……91
第1節　出土した動物遺存体の概要……91
第2節　貝類遺体……91
第3節　脊椎動物遺体……92
第8章　自然科学分析……101
第1節　放射性炭素年代測定の概要……101
第2節　測定結果……101
第9章　総括……103
第1節　曽畑貝塚の形成過程について……103
第2節　曽畑貝塚の出土遺物について……104
付編1……105
1　江坂輝彌・可兒弘明・笹津備洋「曽畑貝塚発掘調査の成果」……107
2　渡辺　誠・可兒弘明「発掘経過」……109
3　小片　保「曽畑貝塚人骨所見」……119

4　可兒弘明「曾畑貝塚出土ハイガイの開殻痕について」……137
5　乙益重隆「熊本県内の曾畑式土器出土遺跡」……141
6　曾畑貝塚発掘調査関連報道記事 ……149
付編２ ……161
1　若林勝邦　1890「肥後旅行談」『東京人類学会雑誌』第５巻第49号 東京人類学会 ……163
2　杉村彰一　1962「曾畑式土器文化に関する一考察」『熊本史学』第23号 熊本史学会 ……167
3　清野謙次　1969「肥後国宇土郡花園村大字岩古曾字曾畑貝塚」『日本貝塚の研究』 岩波書店 ……173
付編３ ……183
曾畑貝塚及び曾畑式土器（文化）に関する文献一覧 ……185

挿図目次

第１図　曾畑貝塚の位置（1/600,000）……7
第２図　曾畑貝塚周辺遺跡分布図（1/25,000）……7
第３図　熊本県縄文時代貝塚分布図（1/800,000）……9
第４図　宇土半島基部地域の縄文時代貝塚（1/100,000）……10
第５図　若林勝邦氏採集遺物……13
第６図　中山平次郎氏採集遺物……15
第７図　小林久雄氏発掘調査出土品……16
第８図　曾畑貝塚・貯蔵穴群分布想定図……19
第９図　曾畑低湿地遺跡層位概略図……20
第10図　曾畑低湿地遺跡貯蔵穴群分布図……20
第11図　曾畑低湿地遺跡第14号貯蔵穴……20
第12図　曾畑低湿地遺跡出土曾畑式土器及び石器……20
第13図　下水道工事及び範囲確認調査事業に伴う発掘調査……21
第14図　1994年調査土壙墓検出地点……22
第15図　1994年調査出土品……22
第16図　1994年調査土壙墓実測図……22
第17図　調査トレンチ配置図（1/1,000）……26
第18図　Ａトレンチ１～４区北壁土層断面図（1/40）……27
第19図　Ａトレンチ５～７区北壁土層断面図（1/40）……28
第20図　Ａ～Ｃトレンチ土層断面図（1/40）……29
第21図　Ａトレンチ３区検出土壙墓（1/20）……33
第22図　出土縄文土器分類図１（1/5）……38
第23図　出土縄文土器分類図２（1/5）……39
第24図　Ａトレンチ１区撹乱層及び表土層出土縄文土器（1/3）……40
第25図　Ａトレンチ１区第１貝層出土縄文土器・土製品（1/3）……40
第26図　Ａトレンチ１区礫層出土縄文土器（1/3）……40
第27図　Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器１（1/3）……41
第28図　Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器２（1/3）……42
第29図　Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器３（1/3）……44
第30図　Ａトレンチ１区第２貝層最下部出土縄文土器１（1/3）……44
第31図　Ａトレンチ１区第２貝層最下層出土縄文土器２（1/3）……45
第32図　Ａトレンチ１区褐色土層出土縄文土器（1/3）……45
第33図　Ａ・Ｂトレンチ連結部第１貝層出土縄文土器（1/3）……46
第34図　Ａ・Ｂトレンチ連結部第２貝層出土縄文土器１（1/3）……46
第35図　Ａ・Ｂトレンチ連結部第２貝層出土縄文土器２（1/3）……47
第36図　Ａトレンチ２～５区混貝土層出土縄文土器１（1/3）……47
第37図　Ａトレンチ２～５区混貝土層出土縄文土器２（1/3）……48
第38図　Ａトレンチ５区純貝層出土縄文土器（1/3）……48
第39図　Ａトレンチ２～５区茶褐色土層出土遺物１（1/3）……48
第40図　Ａトレンチ２～５区茶褐色土層出土遺物２（1/3）……49
第41図　Ａトレンチ６・７区混貝土層出土縄文土器（1/3）……49
第42図　Ａトレンチ６・７区純貝層出土縄文土器１（1/3）……49

第43図　Aトレンチ6・7区純貝層出土縄文土器2 (1/3)……51
第44図　Aトレンチ6・7区純貝層出土縄文土器3 (1/3)……52
第45図　Aトレンチ6・7区褐色及び茶褐色土層出土縄文土器 (1/3)……53
第46図　Aトレンチ出土層位不明縄文土器 (1/3)……53
第47図　Bトレンチ表土層及び第1貝層出土縄文土器 (1/3)……54
第48図　Bトレンチ第2貝層出土縄文土器1 (1/3)……54
第49図　Bトレンチ第2貝層出土縄文土器2 (1/3)……56
第50図　Bトレンチ第2貝層出土縄文土器3 (1/3)……57
第51図　Bトレンチ第2貝層出土縄文土器4 (1/3)……59
第52図　Bトレンチ第2貝層最下部出土縄文土器1 (1/3)……59
第53図　Bトレンチ第2貝層最下部出土縄文土器2 (1/3)……60
第54図　Bトレンチ褐色土層及び黒褐色土層出土縄文土器 (1/3)……61
第55図　Bトレンチ貝層出土縄文土器 (1/3)……61
第56図　Bトレンチ貝層出土及び出土層位不明縄文土器 (1/3)……62
第57図　Cトレンチ第1貝層出土縄文土器 (1/3)……62
第58図　Cトレンチ礫層・第2貝層出土縄文土器 (1/3)……63
第59図　Cトレンチ第2貝層出土縄文土器 (1/3)……64
第60図　Cトレンチ黒色土層以下出土縄文土器 (1/3)……66
第61図　Cトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器1 (1/3)……66
第62図　Cトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器2 (1/3)……67
第63図　Cトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器3 (1/3)……68
第64図　出土トレンチ不明縄文土器1 (1/3)……68
第65図　出土トレンチ不明縄文土器2 (1/3)……69
第66図　出土トレンチ不明縄文土器3 (1/3)……70
第67図　出土トレンチ不明縄文土器4 (1/3)……72
第68図　Aトレンチ出土石器 (2/3, 1/1) ……72
第69図　Aトレンチ出土石器・石製品 (1/3, 2/3) …73
第70図　B・Cトレンチ出土石器・貝製品 (1/3, 1/2, 2/3)……74
第71図　大型哺乳類骨格名称……98
第72図　ニホンジカ及びイノシシの歯に関する資料……99
第73図　曽畑貝塚検出貝層の推定範囲 (1/1,000) …103

表目次

第1表　縄文土器・土製品観察表……75
第2表　縄文土器観察表1……76
第3表　縄文土器観察表2……77
第4表　縄文土器観察表3……78
第5表　縄文土器観察表4……79
第6表　縄文土器観察表5……80
第7表　縄文土器観察表6……81
第8表　縄文土器観察表7……82
第9表　縄文土器観察表8……83
第10表　縄文土器観察表9……84
第11表　縄文土器観察表10……85
第12表　縄文土器観察表11……86
第13表　縄文土器観察表12……87
第14表　縄文土器観察表13……88
第15表　縄文土器観察表14……89
第16表　石器・石製品・貝製品観察表……90
第17表　曽畑貝塚出土脊椎動物遺体一覧表……93
第18表　放射性炭素年代測定結果 ……101

図版目次

巻頭図版1　曽畑貝塚周辺航空写真（上が北，1993年撮影）
調査地遠景（南より，発掘当時）
巻頭図版2　Aトレンチ1区北壁第1及び第2貝層断面（南より）
曽畑式土器出土状況
巻頭図版3　曽畑貝塚出土曽畑式土器
曽畑貝塚出土石器・石製品・貝製品
巻頭図版4　曽畑貝塚調査図面や写真などの記録物

図版１　調査地遠景（西より）
Ａトレンチ調査状況（西より）
図版２　Ａトレンチ１区及びＢトレンチ調査状況（南より）
Ｂトレンチ３区調査状況
図版３　Ａトレンチ１区北壁西半側中央部土層断面（南より）
Ａトレンチ１区北壁西半側の貝類堆積(南より)
図版４　Ａトレンチ７区土層断面
Ｂトレンチ２区西壁土層断面（東より）
図版５　土壙墓検出状況（Ａトレンチ３区，南より）
Ａトレンチ７区北久根山式土器出土状況
Ｂトレンチ３区曽畑式土器出土状況
図版６　Ａトレンチ１区攪乱層及び表土層出土縄文土器
Ａトレンチ１区第１貝層及び礫層出土縄文土器・土製品
図版７　Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器１
Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器２
図版８　Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器３
Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器４
図版９　Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器５
Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器６
図版10　Ａトレンチ１区第２貝層最下部出土縄文土器１
Ａトレンチ１区第２貝層最下部出土縄文土器２
図版11　Ａトレンチ１区第２貝層最下部及び褐色土層出土縄文土器
Ａトレンチ１区褐色土層出土縄文土器
Ａ・Ｂトレンチ連結部第２貝層出土縄文土器１
図版12　Ａ・Ｂトレンチ連結部第２貝層出土縄文土器２
Ａ・Ｂトレンチ連結部第２貝層出土縄文土器３
Ａ・Ｂトレンチ連結部第２貝層出土縄文土器４
図版13　Ａトレンチ２～５区混貝土層出土縄文土器１
Ａトレンチ２～５区混貝土層出土縄文土器２
Ａトレンチ２～５区茶褐色土層出土縄文土器１
図版14　Ａトレンチ２～５区茶褐色土層出土縄文土器２
Ａトレンチ６・７区混貝土層及び純貝層出土縄文土器
図版15　Ａトレンチ６・７区純貝層出土縄文土器１
Ａトレンチ６・７区純貝層出土縄文土器２
Ａトレンチ６・７区純貝層出土縄文土器３
図版16　Ａトレンチ６・７区純貝層出土縄文土器４
Ａトレンチ６・７区純貝層出土縄文土器５
Ａトレンチ６・７区純貝層出土縄文土器６
図版17　Ａトレンチ６・７区褐色及び茶褐色土層出土縄文土器１
Ａトレンチ６・７区褐色及び茶褐色土層出土縄文土器２
図版18　Ａトレンチ出土層位不明縄文土器１
Ａトレンチ出土層位不明縄文土器２
図版19　Ｂトレンチ表土層及び第１貝層出土縄文土器
Ｂトレンチ第２貝層出土縄文土器１
図版20　Ｂトレンチ第２貝層出土縄文土器２
Ｂトレンチ第２貝層出土縄文土器３
図版21　Ｂトレンチ第２貝層出土縄文土器４
Ｂトレンチ第２貝層出土縄文土器５
図版22　Ｂトレンチ第２貝層出土縄文土器６
Ｂトレンチ第２貝層出土縄文土器７
図版23　Ｂトレンチ第２貝層出土縄文土器８
Ｂトレンチ第２貝層出土縄文土器９
図版24　Ｂトレンチ第２貝層最下部出土縄文土器１
Ｂトレンチ第２貝層最下部出土縄文土器２
図版25　Ｂトレンチ第２貝層最下部出土縄文土器３
Ｂトレンチ第２貝層最下部、褐色土層及び黒褐色土層出土縄文土器
図版26　Ｂトレンチ褐色土層及び黒褐色土層出土縄文土器
Ｂトレンチ貝層出土縄文土器１
図版27　Ｂトレンチ貝層出土縄文土器２
Ｂトレンチ貝層出土及び出土層位不明縄文土器
図版28　Ｃトレンチ第１貝層出土縄文土器１
Ｃトレンチ第１貝層出土縄文土器２
図版29　Ｃトレンチ礫層・第２貝層出土縄文土器１
Ｃトレンチ礫層・第２貝層出土縄文土器２
図版30　Ｃトレンチ第２貝層出土縄文土器１
Ｃトレンチ第２貝層出土縄文土器２
Ｃトレンチ第２貝層出土縄文土器３
図版31　Ｃトレンチ黒色土層以下出土縄文土器１
Ｃトレンチ黒色土層以下出土縄文土器２
図版32　Ｃトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器１
Ｃトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器２
図版33　Ｃトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器３
Ｃトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器４
図版34　Ｃトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器５
出土トレンチ不明縄文土器１
図版35　出土トレンチ不明縄文土器２
図版36　出土トレンチ不明縄文土器３
図版37　出土トレンチ不明縄文土器４
図版38　Ａトレンチ出土石器
Ａトレンチ出土石器・石製品
図版39　Ｂ・Ｃトレンチ出土石器・貝製品

第1章　序　　章

第1節　調査に至る経緯と経過

曽畑貝塚は縄文時代前期後半の曽畑式土器の標式遺跡であり，古くから研究者の間で注目されてきた貝塚である。1958年（昭和33）３月14日には，本市を代表する重要遺跡であることから市史跡に指定され現在に至っている。

本貝塚の存在は，かなり以前から学会では知られており，すでに1890年（明治23）には若林勝邦氏や寺石正路氏により曽畑貝塚に関する報告がなされている（若林1890，寺石1890）。若林氏による出土土器に関する記述では，「土器ハ縁，腹部ニ種々ノ模様ヲ附ス刻ミ目ノ並行アリ斜線ノ交叉アリ表裏ニ書ケル」と曽畑式土器を指したとみられる土器の特徴が報告されている。当時，すでに本貝塚が人為的に形成されたものと認識されていたことを知ることができる。

これまで行われた調査ならびに報告を列記すれば，明治時代に上述した若林氏，寺石氏による報告がなされ，大正時代には，1918年（大正７）に中山平次郎氏による採集資料報告（中山1918），1922年（大正11）の清野謙次氏による当時としては本格的な発掘調査（清野1924）が行われた。

昭和時代に入ると，1930年（昭和５）に小林久雄氏による発掘調査，1959年（昭和34）に実施された江坂輝彌氏を主査とする慶応大学を主体とした発掘調査が実施された。また，熊本県教育委員会による一般国道３号松橋バイパス建設に伴う1974年（昭和49）の試掘調査，1986～1987年（昭和61～62）の本

1959年発掘調査の様子（西より）

発掘調査で，貝塚に隣接する低湿地より縄文時代の貯蔵穴やイチイガシ・アラカシなどのドングリ類が入った編み物製品が出土するなど注目すべき成果が得られた（隈・江本ほか1976，江本編1988）。

その他，宇土市教育委員会が主体となり，1988年（昭和63）から1990年（平成２）にかけて曽畑貝塚の範囲確認調査や1994年（平成６）に個人住宅建築に伴う緊急発掘調査などを実施した（帆足2002，高木・木下2002）。

これらの調査及び報告については，今回報告する1959年調査を除き，第３章でその概要を報告することにしたい。なお，これらの発掘調査の成果や曽畑式土器については，多数の関連論文や報告書などが刊行されている（付編３参照）。

なお，江坂氏は上述した発掘調査に加え，曽畑貝塚から西へ約４kmに所在する轟式土器の標式遺跡である轟貝塚（宇土市宮庄町）の発掘調査も実施している。1966年（昭和41）に江坂氏を中心とする熊日学術調査団による発掘調査では，木製コンテナ180箱（10×40×60cm），小破片まで含めると約27,000点

慶応大学資料保管状況（慶応大学，2000年６月）

曽畑・轟貝塚出土遺物里帰り展（2001年11月）

渡辺誠氏による調査指導（2009年３月）

菊池泰二氏による調査指導（2010年10月）

の人工遺物が出土した（藤本2008）。調査終了後，本出土品は慶応大学で保管され，曽畑貝塚調査出土品とあわせて「慶応義塾大学資料」（以下，慶応大学資料）と呼ばれてきたが，2001年（平成13）に調査図面（原図）・写真・日誌などの複写物とともに宇土市へ移管された。移管後まもなく開催された「曽畑・轟貝塚出土遺物里帰り展」（2001年11～12月，於：宇土市立図書館郷土資料室）では，県内外より数多くの見学者が訪れた。

さて，江坂氏らによる1959年実施の曽畑貝塚発掘調査の目的は次の点であった。曽畑式土器文化の時期を特定するとともに，石器や骨角器などの共伴遺物や狩猟採集に伴う自然遺物などの分析を通じて，曽畑式土器文化の実態を明らかにすることを目指した。調査は1959年10月28日から11月6日にかけて実施され，連日，新聞紙上を賑わせた（付編1－6参照）。本書はこの内容についてまとめた調査報告書である。

なお，付編1において未発表となっていた当該調査に関する報告を掲載し，付編2においては，曽畑貝塚や曽畑式土器を理解するうえで基本となる調査報告や論文を再録した。また，付編3において曽畑貝塚や曽畑式土器に関連する主な論考及び調査報告に関する文献一覧を掲載した。

第2節　調査の組織（敬称略，所属は当時）

－発掘調査－（昭和34年10～11月）

主　　査　江坂輝彌（慶応大学文学部）

調 査 員　笹津備洋・可見弘明・渡辺誠（慶応大学文学部），乙益重隆（熊本女子大学），賀川光夫（別府大学文学部），渡辺直経（東京大学理学部），渡辺正気（九州大学文学部），小林久雄・坂本経堯（肥後考古学会），東光彦（熊本市立博物館），富樫卯三郎（宇土高等学校），松岡史（佐賀大学史学研究室），大給尹（仙台市図書館）

作 業 員　慶応大学学生・宇土高等学校生徒

－報告書作成－（平成20～22年度）

責 任 者　木下博信（宇土市教育長）

総　　括　山内清人（宇土市教育部長，20・21年度），高木恭二（同，22年度）

事 務 局　高木恭二（宇土市教育委員会文化課長，20・21年度），坂本純至（同，22年度），松下敏親（文化課長補佐兼文化財係長，20・21年度），中園静子（文化財係長，22年度），村田嘉奈子（文化財係参事，20年度），湯野良子（文化財係参事，21・22年度），村上淳子（文化財係主事，20・21年度），宮崎幸樹（同，21・22年度）

整理作業員　境美和，春川香子，山口陽子（文化課非常勤職員）

執　　筆　土野雄貴（文化課非常勤職員）

執筆・編集　藤本貴仁（文化課文化財係参事）

協力機関及び調査指導・協力者

慶応大学，日本考古学会，九州考古学会，熊本史学会，岩波書店，熊本日日新聞社，江坂輝彌（慶応大学名誉教授），渡辺誠（名古屋大学名誉教授），菊池泰二（九州大学名誉教授），渡辺一徳（熊本大学名誉教授），近森正（慶応大学名誉教授），阿部祥人（慶応大学文学部），岡村道雄・水ノ江和同（文

化庁記念物課），松井章・丸山真史（奈良文化財研究所），宮地聡一郎（九州国立博物館），島津義昭・木崎康弘・西住欣一郎・丸山伸治・帆足俊文・池田朋生・能登原孝道・前田真由子（熊本県教育委員会），杉村彰一（日本考古学協会員），久野啓介（宇土市史編纂委員長），佐藤伸二・辻誠也・浜口俊夫・村田房夫・吉田恒（宇土市文化財保護審議会），小林明子（医療法人小林会理事長），中村五郎，倉元慎平（福岡県朝倉市役所）

引用・参考文献

江本　直編　1988『曽畑－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－』熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会

清野　謙次　1924「肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑田貝塚」『歴史地理』43－2

隈昭志・江本直ほか　1976『微雨・曽畑』熊本県文化財調査報告第19集　熊本県教育委員会

高木恭二・木下洋介　2002「曽畑遺跡（貝塚）」『新宇土市史』資料編2　宇土市

寺石　正路　1890「九州ノ貝塚」『東京人類学雑誌』5－53　東京人類学会

中山平次郎　1918「肥後国宇土郡花園村岩古曽字曽畑貝塚の土器」『考古学雑誌』8－5　考古学会

帆足　俊文　2002「曽畑貝塚」『新宇土市史』資料編2　宇土市

藤本　貴仁　2008『轟貝塚－慶應義塾大学資料再整理報告－』宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集　宇土市教育委員会

若林　勝邦　1890「肥後旅行談」『東京人類学雑誌』5－49　東京人類学会

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

（１）遺跡の位置（第１図）

熊本県宇土市は，熊本県の中央沿岸部から西側に突出した宇土半島北側から同基部にかけて位置する。市域は，東西約24.8km，南北約7.6km，面積は約74.19km²である。宇土半島は北側に有明海，南側に不知火海（八代海）と面し，先端部に天草諸島が連なり，熊本平野と八代平野，有明海と不知火海を隔てる境界となっている。

宇土半島基部北側には熊本県三大河川の一つである緑川が東西に貫流しており，その下流域南側には緑川の支流である浜戸川（旧緑川）が東西に流れている。流域周辺は両河川によって形成された沖積平野が展開し，北に熊本平野，南に八代平野をのぞむ古代から現在にいたる交通の要衝である。

曽畑貝塚は宇土市岩古曽町字曽畑に所在する。発掘調査が行われた50年程前は周辺に民家が点在し，周囲に田畑が広がる典型的な農村集落であったが，熊本市に比較的近く，国道３号線に隣接するなどの地理的条件から，現在，古くから存在する集落の周辺に新興住宅地が広がっており，宅地造成に伴い周辺の人口は年々増加傾向にある。

（２）地理的特色

宇土半島は白杵－八代構造線（中央構造線）と，大分－熊本構造線に挟まれた地域に属しており，宇土半島基部から突端にかけて白亜系，古第三系の堆積岩がほぼ北東方向に走向している。新第三紀（鮮新世）から第四紀（更新世）の大岳，三角岳を中心とした火山活動による安山岩類や凝灰角礫岩類は，この白亜系，古第三系の堆積岩を不整合に覆っている（林2003）。

本半島の山地群は木原山（314.4m），宇土半島の主峰である大岳（477.6m）を中心とする大岳火山系山地，三角岳火山系山地の３つに分けられ，半島に占める平野部の割合は比較的少ない。木原山は，白亜系の姫浦層群下部の雁回岩層に属し，泥岩，砂岩，砂泥岩，礫岩より構成され，その南麓に曽畑貝塚が立地する。

宇土半島基部に広がる平野は，熊本平野南部にあたり，緑川やその支流の浜戸川の堆積によって形成された沖積平野である。曽畑貝塚はこの沖積平野南東側に位置し，木原山から南側へ向かって派生する標高約８mの舌状台地末端部に立地する。台地末端部から南西側に約２～４m低くなった低湿地の調査では，標高約2.5mで縄文時代の貯蔵穴群が検出されている（江本編1988）。

曽畑貝塚が位置する宇土半島基部周辺は，九州を代表する貝塚の密集地域として著名であるが，これは波穏やかで豊富な魚貝類が生息する有明海に面するという立地的な要因が大きいとみられている。

宇土半島北側に面する有明海は，九州西岸に位置する内湾で，南北約100km弱，東西約20km，面積は約1,700km²である。潮汐による干満の差が日本一大きいことで知られており，湾奥部では６mにも達する。干潮時に露出する干潟の面積は有明海全体で約250km²もあり，日本沿岸の内湾中最大である（弘田2003）。宇土市沿岸の干潟は，海岸から約４kmの沖合まで海底が露出し，主に砂質であるが，場所によっては泥分が多い。熊本平野から宇土半島地域にかけては約１万年前より堆積した有明粘土層と呼ばれる沖積層が形成されている。

第２節　歴史的環境

（１）曽畑貝塚周辺の遺跡（第２図）

曽畑貝塚（１）周辺は，縄文時代から歴史時代までの数多くの遺跡が残されている。本貝塚周辺の主な縄文時代の遺跡として，石ノ瀬遺跡（２），古保里遺跡（３），立岡遺跡（４）がある。

石ノ瀬遺跡では，道路建設に伴う発掘調査で縄文時代早期中葉の押型文土器が出土しており（古森2002），近くに集落の存在が想定されている。古保里遺跡では縄文時代後期の貝塚が確認されており，立岡遺跡では縄文時代早期の押型文土器が出土している。

弥生時代の遺跡として，石ノ瀬遺跡，古保里遺跡，畑中遺跡（５），山内遺跡（６），下松山遺跡（７），境目遺跡（８），善導寺遺跡（９）がある。

石ノ瀬遺跡では，弥生時代中期前半を中心とした土器が出土しており，なかでも朝鮮系無文土器が出土していることは注目される（川口・片岡ほか2001）。古保里遺跡からは中期末から後期初頭の合口甕棺墓が検出され，畑中遺跡では弥生時代中期以降の遺物が出土しており，仰臥屈葬の成人女性が埋葬された甕棺墓が検出されている（金田2002ａ，金田2002ｄ）。下松山遺跡は弥生時代後期の集落跡と考えられる（原田2002）。

境目遺跡と善導寺遺跡は切り通し状の道路を挟んで立地しているが，本来，同一台地上に形成された遺跡である。境目遺跡は，弥生時代中期前半から後期終末まで継続しており，これまでの発掘調査で住居跡は検出されていないものの多量の遺物が出土し，数基の甕棺墓が検出されている。注目すべき遺物として，石戈や鋳造鉄斧，祭祀土器とみられる赤彩を施した高坏などが出土している（富樫1969，金田2002ｂ）。一方，善導寺遺跡では，境目遺跡と同一時期以外にも前期末から中期前半にかけての土器群が比較的まとまって出土していることは注目される（金田2002ｃ）。遺跡の内容から，両遺跡は弥生時代の宇土半島基部地域における拠点的集落であった可能性が高い。

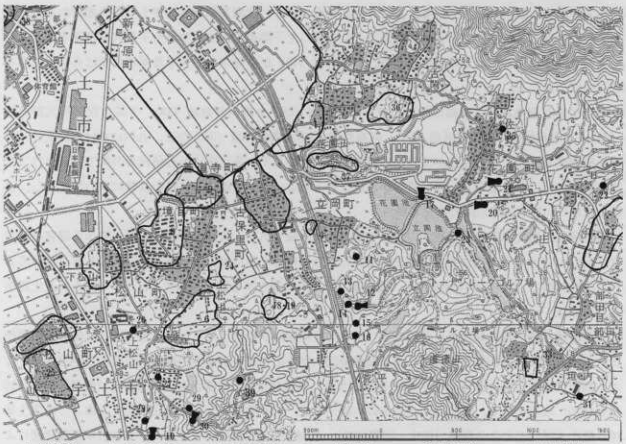
続く古墳時代の宇土半島基部地域は，県下で最も早く首長系譜が形成された地域で，前期の前方後円墳があいついで築造された。当時，宇土半島基部が肥後地域の政治的中心地であったと推測される。

このうち，向野田古墳（10）は前期後半に築造された墳長約86ｍの前方後円墳で，阿蘇溶結凝灰岩製の石棺に納められた遺存状態が良好な30代後半から40代の女性人骨が発見された（富樫1978）。副葬品は，銅鏡，鉄刀，鉄剣，碧玉製車輪石，翡翠製勾玉などがあり，その内容や遺存状況が極めて良好であることから，出土品は国重要文化財に指定されている。また，６基の古墳から構成される立岡古墳群（11～16）のうち，墳長約39ｍの前方後円墳・潤野３号墳（12）では，中心主体部で粘土槨が検出され，出土土師器から４世紀中頃に築造されたと推定される（高木・木下・元松1992）。また，中期には後円部に刳抜式舟形石棺や組合せ式家形石棺など４基の埋葬施設が存在する墳長約46ｍの前方後円墳・楠崎古墳（17）が築造された（高木・木下・元松1986）。

その他の古墳として，２基の古墳で構成される神ノ山古墳群（18・19），ともに後期の前方後円墳である女夫塚古墳（男塚）や女夫塚古墳（女塚）（20・21），横穴式石室を主体部とする円墳・三日鬼の岩屋古墳（22），円筒埴輪が出土した山下古墳（23）など，曽畑貝塚周辺には数多くの古墳が分布している（高木2002，古城2002ａ，高木・木下1985，古城2002ｂ）。なお，古保里遺跡や境目遺跡では箱式石棺群，上松山遺跡（24）では方形周溝墓群が検出されている（武末・高木・木下2001）。

古墳時代の集落については，境目遺跡，善導寺遺跡があり，上述した上松山遺跡でも方形周溝墓群が

第１図　曽畑貝塚の位置（1/600,000）



1 **曽畑貝塚**	2 石ノ瀬遺跡	3 古保里遺跡	4 立岡遺跡	5 畑中遺跡	6 山内遺跡
7 下松山遺跡	8 境目遺跡	9 善導寺遺跡	10 向野田古墳	11 晩免古墳	12 潤野３号墳
13 潤野古墳	14 潤野２号墳	15 西潤野古墳	16 西潤野２号墳	17 橋崎古墳	18 神ノ山１号墳
19 神ノ山２号墳	20 女夫塚古墳（男塚）	21 女夫塚古墳（女塚）	22 三日鬼の岩屋古墳	23 山下古墳	24 上松山遺跡
25 北園遺跡	26 橋底古墳	27 チャン山古墳	28 向野田石蓋土壙	29 南山内箱式石棺群	30 御手洗古墳
31 池尾古墳	32 条里跡	33 古保山廃寺跡	34 三日如来寺跡	35 安国寺跡	36 前田遺跡
37 花園山城跡	38 石ノ瀬城跡	39 高城跡			

第２図　曽畑貝塚周辺遺跡分布図（1/25,000）

形成される以前の竪穴住居跡が検出されている。

古代には境目遺跡や善導寺遺跡，上松山遺跡から土師器や須恵器などの豊富な遺物が出土しており（網田2002ａ，網田2002ｂ），なかでも注目されるのは，境目遺跡出土の瑪瑙製鋳具（丸鞴）や善導寺遺跡出土の硯に転用された須恵器蓋がある。これらの遺跡は旧宇土郡の中心的な集落跡と考えられ，北側には条里跡（32）に推定されている低湿地が広がっている。

中世の遺跡としては，曹洞宗開祖・道元の直弟子である寒厳義尹が1269年（文永６）に開いた三日如来寺跡（34）があり，瓦や塼，土師質土器などが出土している。境目遺跡では，14世紀代とみられる道路状遺構が検出され，青磁や白磁などが出土している（藤本2001）。また，肥後国安国寺跡（35）は天台宗寺院であった佐野寺の寺号を改めたものである。その他，中世の想定古道である岩熊古道（仮称）が条里跡東側に南北方向にのびており，本古道を見下ろす丘陵上に花園山城跡（37）が所在する。

近世では，キリシタン大名・小西行長が近世宇土城や城下の防御を目的に築城したと想定される石ノ瀬城跡（38）があり，発掘調査で空堀跡が検出され，景徳鎮窯系や漳州窯系の染付が出土している。また，宇土半島周辺地域で最大級の灌漑池である立岡池や花園池が築造された。

（２）宇土半島基部周辺地域における縄文時代の貝塚について（第３・４図）

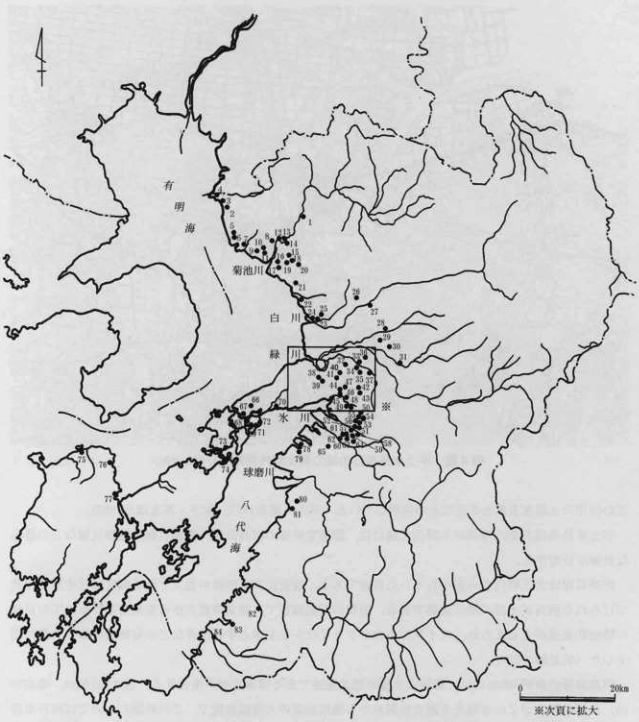
熊本県では84ヶ所の縄文時代の貝塚が確認されており（池田2001，帆足編2005），西日本有数の貝塚が密集する地域として知られている。主に有明海東岸地域，八代海東岸地域，宇土半島先端部から天草上島周辺地域などに集中しているが，遠浅でよく発達した干潟が広がる有明海や不知火海に面するという地理的な要素が極めて大きいとみられる。曽畑貝塚（40）が位置する宇土半島基部北側は有明海東岸地域の南境にあたる。

宇土半島基部地域は，曽畑以外にも宇土市轟貝塚（38）や西岡台貝塚（39），宇城市松橋町大野貝塚（44），熊本市城南町の黒橋貝塚（33），阿高貝塚（34），御領貝塚（35）など，九州における縄文時代貝塚を研究するうえで欠くことができない重要遺跡が点在している。古くから研究者の間で注目されてきた地域であり，これまで18ヶ所の貝塚が確認されている。以下では，これらの貝塚について概観し，曽畑貝塚については次章以降で詳述する。

轟貝塚は，縄文早期末から前期の轟式土器の標式遺跡であり，曽畑貝塚とならび古くから研究者の間で注目されてきた学史的にも重要な貝塚である。戦前には小林久雄氏が「轟式土器」の名称を用いており（小林1935），貝殻条痕を地文とし，隆起線文などを特徴とする轟式土器は，古くから知られた土器型式であった。

大正時代以降，轟貝塚は多くの研究者によって発掘調査が実施されており，古くは1917年の濱田耕作氏や鈴木文太郎氏，山崎春雄氏らによる京都帝国大学や旧制熊本医学専門学校（現熊本大学医学部）による調査（鈴木1917・1918），1919年の濱田耕作氏，清野謙次氏ら京都帝国大学の調査（濱田・榊原1920、清野1920）などがある。戦後は，1958年の小林久雄氏，松本雅明氏，富樫卯三郎氏を主体とした宇土高校や熊本大学などによる調査（松本・富樫1961），1966年に江坂輝彌氏を主査とする熊日学術調査団による調査が実施された（江坂1971，藤本2008）。これらの調査によって轟式をはじめとする縄文土器や貝製品，石器，漁具，骨角器等，多種多様な遺物が出土した（池田2002）。

轟貝塚中心部から東約100mに位置する西岡台貝塚では，発掘調査により貝層が２つに大別されることが明らかとなり，下層が轟・曽畑式土器などの前期の土器を主体とし，上層は出水式や北久根山式な



1 若園貝塚　2 宮内貝塚　3 境崎貝塚　4 四山貝塚　5 堀崎貝塚A　6 堀崎貝塚B
7 腹赤貝塚　8 尾崎貝塚　9 浜田貝塚　10 庄司（貝島）貝塚　11 古閑原貝塚　12 繁根木貝塚
13 保田木貝塚　14 桃田貝塚　15 片諏訪貝塚　16 ビナワラ貝塚　17 キャアガラワラ貝塚　18 竹崎貝塚
19 久島貝塚　20 尾田貝塚　21 湯の浦貝塚　22 中川内平（平）貝塚　23 北内潟貝塚（参考地）　24 千金甲菖蒲谷貝塚
25 川戸貝塚　26 打越貝塚　27 渡鹿貝塚　28 沼山津貝塚　29 カキワラ貝塚　30 甘木貝塚
31 辺田見貝塚　32 ソビエ石貝塚　33 黒橋貝塚　34 阿高貝塚　35 御領貝塚　36 今村貝塚
37 敷田貝塚　38 轟貝塚　39 西岡台貝塚　**40 曽畑貝塚**　41 古保里貝塚　42 北萩尾貝塚A
43 北萩尾貝塚B　44 松橋大野貝塚　45 松橋貝塚　46 上久貝貝塚　47 曲野貝塚　48 仲間貝塚
49 宮島貝塚　50 年の神貝塚　51 瀬戸貝塚　52 七ツ江カキワラ貝塚　53 竹ノ下貝塚　54 中小野貝塚
55 引地貝塚　56 大坪貝塚　57 四ツ江貝塚　58 士穴瀬貝塚　59 段貝塚　60 大野貝塚
61 赤迫A貝塚　62 赤迫B貝塚　63 西平貝塚　64 大瀬田貝塚　65 有佐貝塚　66 州の上貝塚
67 鹿崎貝塚　68 小崎貝塚　69 辺田貝塚　70 西木の浦貝塚　71 道の峯貝塚　72 浜の州貝塚
73 柳貝塚　74 前島貝塚　75 五反田貝塚　81 田ノ川内貝塚　76 一尾貝塚　77 大矢貝塚　78 産島貝塚
79 都築十二番町遺跡　80 五反田貝塚　82 橋本貝塚　83 浜崎貝塚　84 南福寺貝塚

第３図　熊本県縄文時代貝塚分布図（1/800,000）

第４図　宇土半島基部地域の縄文時代貝塚（1/100,000）

どの後期の土器を主体とすることが判明している（平山・高木1977，木下・高木ほか1985）。

宇土半島基部北側内陸部の木原山北麓には，国指定史跡の阿高貝塚，黒橋貝塚，御領貝塚などの著名な貝塚が分布する。

阿高貝塚は大正時代から知られていた貝塚であり，器壁に太形凹線が施文される縄文時代中期に位置づけられる阿高式土器の標式遺跡である。近年の発掘調査で，縄文中期末から後期前半にかけての貝層の時期的変遷がとらえられ，マイワシやカタクチイワシを主体とする魚骨などの動物遺存体が大量に出土した（帆足編2005）。

阿高貝塚の南約300mには，御領式土器の標式遺跡である御領貝塚が所在する。長さ約100m，幅約30m，貝層の厚さが２mを越える縄文後期末から晩期初頭の大規模貝塚で，この時期のものでは西日本最大級である。貝層より磨製・打製石器，石鏃，貝輪，土偶などが出土している。

小林久雄氏は，阿高貝塚と御領貝塚の形成時期について，鹹水産のマガキを主体とする阿高貝塚と，淡水産のヤマトシジミが主体の御領貝塚を，海進海退現象による環境変化によるものと指摘し，阿高式土器と御領式土器の相対的な時期差を明らかにした（小林1931）。

1988～1991年度に実施された黒橋貝塚（縄文中期から後期）の発掘調査では，土壙が73基検出され，縄文時代中・後期の土器の変遷を明らかにするうえで貴重な資料が出土するとともに，石器や骨角器，貝製品，獣骨や魚骨，ドングリが大量に出土した（高木・村崎編1998）。

以上，宇土半島基部周辺地域だけでも縄文時代早期末から前期の轟式土器，同前期の曽畑式土器，中期の阿高式土器，後期の御領式土器が標式土器として型式設定されており，学史的にも遺跡の内容から

みても，九州の縄文文化を知るうえで重要な貝塚が分布する地域といって差し支えないだろう。これらの貝塚以外でも，鳥居龍造氏や清野謙次氏が調査を行った宇城市松橋町松橋大野貝塚や，曽畑式土器出土層の下層から轟式土器が出土した同宮島貝塚などが所在している。

宇土半島基部北側にあたる熊本平野周辺部では，曽畑式土器が出土した上益城郡嘉島町カキワラ貝塚（乙益1959）や，阿高式土器が出土した熊本市渡鹿貝塚（富田1996）など10ヶ所の貝塚が確認されている。宇土半島基部南側の氷川が貫流する八代平野北部では，西平式土器の標式遺跡である八代郡氷川町西平貝塚（今田2002），1879年（明治12）にE.W.モースによって発掘調査が行われた同大野貝塚や，中・後期の貝塚である八代市鏡町有佐貝塚など16ヶ所の貝塚が分布する。

このように熊本平野から宇土半島基部地域，八代平野北部にかけて実に県内の５割強の貝塚が分布しており，九州でも特に多くの貝塚が形成された地域であることがわかる。さらに，学史的・学術的にも貴重な貝塚が多数含まれていることは，九州及び西日本の縄文研究を進めるうえで極めて重要な地域であることを示しているといえよう。

引用・参考文献

網田　龍生　2002ａ「境目遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
網田　龍生　2002ｂ「善導寺遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
江坂　輝彌　1971「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』第19号　日本考古学協会
池田　朋生　2001「熊本県の貝塚の様相」『九州の貝塚』九州縄文研究会・肥後考古学会
池田　朋生　2002「轟貝塚」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
今田　治代　2002「西平貝塚」『竜北町遺跡地図－竜北町遺跡詳細分布調査－』竜北町文化財調査報告第２集　竜北町教育委員会
江本　直編　1988『曽畑－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－』熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会
小田　文弘　2003「宇土半島と宇土市」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市
乙益　重隆　1959「熊本県上益城郡カキワラ貝塚」『日本考古学年報』第８号　日本考古学協会
金田　一精　2002ａ「古保里遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
金田　一精　2002ｂ「境目遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
金田　一精　2002ｃ「善導寺遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
金田　一精　2002ｄ「畑中遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
川口雅之・片岡宏二ほか　2001「石ノ瀬遺跡」『新宇土市史基礎資料』第９巻　宇土市教育委員会
木下洋介・高木恭二ほか　1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集　宇土市教育委員会
清野　謙次　1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊
小林　久雄　1931「阿高貝塚及び御領貝塚の土器について」『地歴研究』７－３～８　熊本地歴研究会
小林　久雄　1935「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』第１巻第２号　東京考古学会
坂本　経堯　1983『肥後上代資料集成』肥後上代文化研究会
鈴木文太郎　1917「河内国府人骨・肥後轟貝塚にて発掘せる人骨について報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第２冊
鈴木文太郎　1918「肥後轟貝塚河内道明寺等にて発掘せる人骨に就いて」『人類学雑誌』第33巻第３号
高木　恭二　2002「神ノ山１号墳」『新宇土市史』資料編２　宇土市
高木恭二・木下洋介　1985『女夫塚古墳（女塚）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第11集　宇土市教育委員会
高木恭二・木下洋介・元松茂樹　1992『立岡古墳群』宇土市埋蔵文化財調査報告書第19集　宇土市教育委員会
高木恭二・木下洋介・元松茂樹　1986『ヤンボシ塚古墳・橋崎古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第13集　宇土市教育委員会

高木正文・村崎孝宏編　1998『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告第166集　熊本県教育委員会
武末純一・高木恭二・木下洋介　2001「上松山遺跡」『新宇土市史基礎資料』第９集　宇土市教育委員会
富樫卯三郎　1969『境目西原遺跡』熊本県宇土市境目西原遺跡調査概報　宇土市教育委員会
富樫卯三郎　1978『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第２集　宇土市教育委員会
富田　紘一　1996「渡鹿貝塚」『新熊本市史』史料編第１巻　考古資料　熊本市
林　　行敏　2003「宇土半島の地質」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市
濱田耕作・榊原政職　1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊
原田　範昭　2002「下松山遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
古城　史雄　2002ａ「神ノ山２号墳」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
古城　史雄　2002ｂ「三日鬼の岩屋古墳」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
古森　政次　2002「石ノ瀬遺跡」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
帆足　俊文　2002「曽畑貝塚」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市
帆足俊文編　2005『阿高貝塚』熊本県文化財調査報告第223集　熊本県教育委員会
平山修一・高木恭二　1977「轟貝塚（西岡台地区）の調査」『宇土城跡（西岡台）－本文編－』宇土市埋蔵文化財調査報告書第１集　宇土市教育委員会
弘田禮一郎　2003「有明海の自然」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市
藤本　貴仁　2001『境目遺跡－第７次調査－』　宇土市教育委員会
藤本　貴仁　2008『轟貝塚－慶應義塾大学資料再整理報告－』宇土市埋蔵文化財調査報告書第30集　宇土市教育委員会
古森政次・金田一精　2003「縄文時代」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市
松本雅明・小林久雄ほか　1965『城南町史』　城南町史編纂会
松本雅明・富樫卯三郎　1961「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告－」『考古学雑誌』第47巻第３号　日本考古学会

第３章　曽畑貝塚における過去の調査について

第１節　曽畑貝塚の調査概要

曽畑貝塚の調査の歴史は古く，1890年（明治23）には若林勝邦氏や寺石正路氏の表面採集資料の報告，1923年（大正12）には清野謙次氏による発掘調査が行われている。その後，1959年（昭和34）に慶応大学を中心とした調査団，1986・1987年（昭和61・62）に熊本県教育委員会などによる発掘調査が実施された。

これまでの調査の結果，貝塚の範囲は南北140m，東西40m程度と推定されており，縄文早期から後期の土器片，磨製石斧や石匙などの石器，貝輪などの装飾品，網代などが出土し，県教育委員会が実施した曽畑貝塚西側の低湿地の調査では，62基にのぼるイチイガシを主体とするドングリ類の貯蔵穴群が検出された。また，縄文時代以外にも古墳時代の土壙墓や土師器が出土している。

以下，これまで実施された明治期から平成期までの調査概要について報告する。

第２節　明治期の調査（第５図）

（１）明治期の調査について

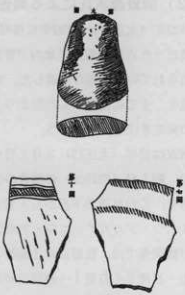
若林勝邦氏，寺石正路氏による調査があり，若林氏による1890年発表の「肥後旅行談」や「肥後ニオケル石器時代ノ遺跡調査報告」，寺石氏による「九州ノ貝塚」として報告された（若林1890ａ・1890ｂ，寺石1890）。

（２）若林勝邦氏及び寺石正路氏による調査

若林報告（若林1890ａ・1890ｂ）によれば，曽畑貝塚について「面積凡ソ七畝（約700㎡）貝殻堆積ス厚サ凡ソ三尺（約90㎝）トス昔時ハ数町ニ渉リシモ田畠開拓ノ為消滅シ現今ノ広サニ縮小」，「貝殻ハ皆鹹水産」，「土器ニハ種々ノ飾紋アル」など，貝塚の特徴を詳細な観察に基づいて記述している。

遺物については，縄文土器や磨製石斧，獣骨，貝殻などの表採資料を報告し，挿図より曽畑式土器と後期の磨消縄文土器とみられる縄文土器を表採したことがわかる。後者のうち１点は赤色顔料が塗布されていたという。

なかでも注目されるのは，「土器ハ縁，腹部ニ種々ノ模様ヲ附ス刻ミ目ノ並行アリ斜線ノ交叉アリ表裏ニ書ケル斜線アリ」と曽畑式土器の文様の特徴を記述していること，さらに「通例貝塚ヨリ出ルコト少キ一種ノ土器ナリ余輩ノ毎ニ称スル朝鮮土器ノ類ナリ」と曽畑貝塚から出土する土器（曽畑式土器）と櫛目文土器のことを指したとみられる朝鮮半島の土器との類似性



第５図　若林勝邦氏採集遺物
（若林1890ｂ）

を指摘した。

寺石氏も，縄文土器や磨製石斧，獣骨，貝殻などが出土したことを報告したが，報文中に曽畑式土器とみられる土器を指したとみられる「朝鮮土器破片」との記述があることは注目される（寺石1890）。このように，若林氏，寺石氏の両者は，曽畑式土器と朝鮮系櫛目文土器との類似性をすでに明治期の段階で示唆している点は特筆すべきである。

このうち，若林氏がまとめた「肥後旅行談」については，曽畑貝塚を学会に初めて紹介したものとして学史的にも重要なため，付編２において再録した。

第３節　大正期の調査（第６図）

（１）中山平次郎氏による調査

中山平次郎氏は表採資料を土器の文様から分類し，その特徴を報告した（中山1918）。記述内容や掲載図版から判断すれば，中山氏は轟式土器や曽畑式土器，阿高式土器，鐘崎式土器などを採集したと判断できる。表採資料のうち最も多いものは，「篦書の横又は斜なる平行線文様を示すもの」として曽畑式土器の詳細を紹介した。その他，曽畑式土器に該当するものとして，「矩形の格子紋があるもの」「菱形の格子紋に平行線を加へたもの」などがある。

（２）清野謙次氏による調査

1922年（大正11），宇城市松橋町の大野貝塚を調査した清野謙次氏は，その帰途，当時熊本県史蹟調査委員だった古賀精義氏の案内で曽畑貝塚を訪問した際，たまたま貝塚部分の土取作業によって土砂が運び去られている現場に遭遇した。すでに地下げされた場所の断面を精査したところ，「二尺内外」の貝層が見え，すでに土取りした所から人骨が出たと地権者から聞いたことから，地権者と相談し急遽発掘調査の実施を決心したという。

調査は翌年（大正12）３月２日～４日にかけて，清野氏及び宮本博人氏によって実施された。調査の結果，約１尺（約30㎝）の厚さの表土の下に厚さ１尺から２尺５寸（約30～76㎝）の黒土まじりの貝層があり，この貝層の下部から人骨が出土したという。また，貝層を構成する貝種は，カキ・ハマグリ・サルボウ・アカガイ・ニシ・アカニシなどの海産貝類が主体であったという。

当該調査では，数百点の土器片をはじめ，人骨６体，ハマグリ製（一部にアカガイ製を含む）貝輪50以上・石杵５・石皿１・磨製石斧11・打製石斧４・土製紡錘車など多数の遺物が出土した（清野1924，清野1969）。

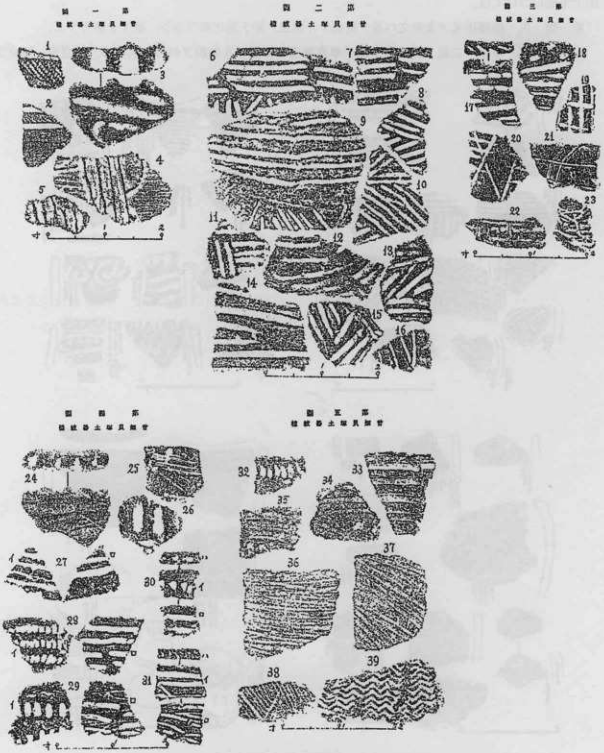
土器については，その８～９割が曽畑式土器を指す「細形刻紋土器」であり，その他は轟式土器や阿高式土器などが出土した。「細形刻紋土器」を構成する文様を，「点線並列紋」，「短直線或は長めの直線の並列紋」，「短直線を斜めに並列させて羽状とした紋様」，「直線を組合せて重ねた四角形紋様」，「直線を組合せて重ねた菱形紋様」の６類に分類し，これらの組み合わせにより「細形刻紋として特異な印象を生ずる」と記している。

なお，清野本人が述べているとおり，このときの調査は「地層的に深さを定めて土層を順次に上げて行ったのではない」ことから層位学的に十分とはいえないという一面もあるものの（加えて，貝層中出土の馬歯を縄文時代の所産と誤認するなどの問題もあった），曽畑貝塚における本格的な発掘調査の初

例として大きな成果をあげた点で特筆すべき調査である。

このことから，1969年に岩波書店から刊行された『日本貝塚の研究』収録の当該調査報告を付編２において再録した。

第４節　昭和期の調査（第７～12図）



第６図　中山平次郎氏採集遺物（中山1918）

（1）小林久雄氏による調査

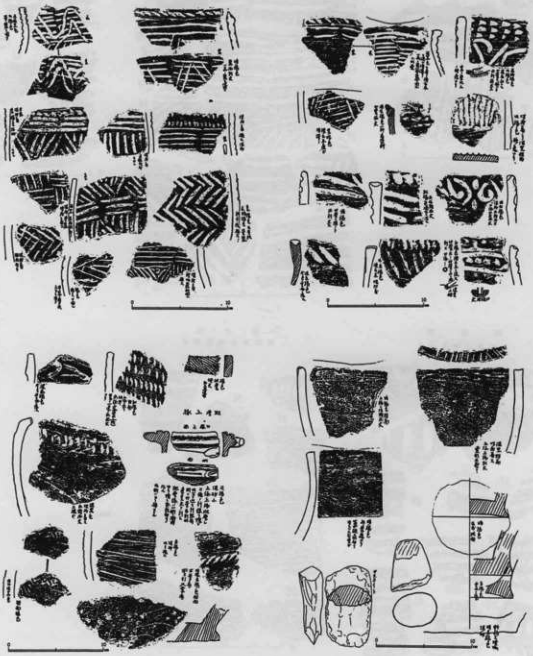
小林久雄氏著『九州縄文土器の研究』（小林1967）の「小林久雄年譜」によれば，1930年（昭和５），10月25日と11月２日に小林氏が曽畑貝塚の発掘調査を実施していることがわかる。この時の成果については次のように記されていたという（坂本1983）。

調査地は「雁回山ノ西麓ガ字土町東方水田二降下接続スル位置ニ残サル」とのみ記されているだけで，具体的な調査地点は不明である。

出土土器については，

「第一類　爪・指頭圧文ノ太形文ハ甚ダ貧弱ナル気風，即チ退化形ヲ示シ，数マタ多カラズ。

第二類　篦，単歯・二歯ノ施文具ヲ以テ単直線及ビ単簡ナル曲線ヲ斜行，羽状形，並立形，連点文



第７図　小林久雄氏発掘調査出土品（坂本1983）

ニ組ミ合ワセテ，幾何学式ノ文様ヲ表ス。滑石ヲ多量ニ混ジテ，裏（口縁ニ限ル）面ニ同様ナル施文ヲ見ルモノアリ。曽畑貝塚ハ第二系ヲ主体トス。

第三類　平行直線間ニ縄文ヲ施セルモノ，研磨精巧ナル一片。

第四類　上縁ニシテ平行線ヲ条刻セルモノ，帯状文ノ一部一片。

第五類　山形ニ組メル籠目文土器一片。底部ニ木葉文ヲ残セルモノアリ，腹片ハ竪形」

とあり，曽畑式土器は第二類に相当するとみられる。曽畑貝塚から出土する土器は，いわゆる「細形刻紋土器」である「第二系（第二類の誤記か）ヲ主体」とする遺跡であることを認識していたことがうかがえる。後年，小林氏はこの「細形刻紋土器」を「曽畑式土器」として型式設定している（小林1935）。

その他の出土遺物については，

「石器　磨製石斧（粘板岩）

猪下顎骨，貝ハカキ・ハマグリ・赤貝・巻貝・シジミ。赤貝ニ穿孔シテ五六十個連繋セリト思ハレルモノ。混乱貝層中ヨリ弥生式・祝部破片混出ス」と記録されている。

小林氏による当該調査の出土品は，現在，熊本市城南町歴史民俗資料館にて「小林コレクション」として収蔵されている。

なお，小林氏は1939年（昭和14）に発表した「九州の縄文土器」（小林1939）で，曽畑式土器の起源について，「阿高式及其類縁土器よりの推移を求むることは困難で，全く他の文化的要素の介入と考へざるを得ない」，「東三洞及牧ノ島瀛仙町貝塚土器と対比すべきもので，其三角組合文及異方向の集束平行線の組合の如き，文様としての類縁を辿る事が出来やう」と指摘した。曽畑式土器の朝鮮半島起源論をはじめて明確に提起した点で重要である（木崎2004）。

（２）江坂輝彌氏を中心とした調査団による調査

1959年（昭和34），江坂輝彌氏を中心とした調査団による発掘調査が実施された。曽畑貝塚を層位的に調査することにより，曽畑式土器文化の時期を特定し，石器，骨角器などの共伴遺物，狩猟採集に伴う自然遺物の分析などを通じて，曽畑式土器文化の実態把握を目的としたものであった。

本書は当該調査に関する再整理報告であり，詳細については後述するが，本貝塚において初めて実施された組織的かつ層位学的な調査であり，大きな成果が得られた。

（３）熊本県教育委員会による調査

①　国道３号線松橋バイパス建設に伴う試掘確認調査

1974年（昭和49）３月，旧建設省九州地方建設局熊本工事事務所は，国道３号松橋バイパス建設計画を発表した。計画路線内における埋蔵文化財の分布確認調査を熊本県教育委員会に依頼したことから，1975年（昭和50）２月５日～３月17日にかけて試掘確認調査が行われた（隈・江本ほか1976）。

調査地点は，これまで貝塚本体があるとされてきた台地の西側約100m付近で，幅約1.5m・長さ約15mの２本のトレンチ（Ａトレンチ・Ｂトレンチ）を掘削したところ，いずれのトレンチからも自然遺物に混じって縄文土器や木製品などの遺物が出土した。また，1959年の調査区西端から約50m西側地点においても試掘確認調査が実施されたが（Ｃトレンチ），ここからは貝類が散在する状況が確認された。

Ａトレンチは部分的に深掘りを実施したため，層序は10層に及んでおり，遺物が認められたのは，ＡトレンチⅣ層，Ⅷ層，Ⅸ層であった。

Ⅳ層（赤褐色粘質土層）では，Ⅴ層と接する部分に弥生式土器と思われる細片が出土した。Ⅶ層（青褐色砂礫層）は，湧水が著しく砂および小石が多く，曽畑式土器や出水式土器，加工痕が認められる木片などが出土した。Ⅸ層（泥炭層）は黒褐色の砂が主で，小石が混じり角閃石が多く，曽畑式土器や加工痕がある木片や網代などが出土した。このことから，Ⅳ層を第Ⅰ文化層，Ⅶ層を第Ⅱ文化層，Ⅸ層を第Ⅲ文化層に比定している。

Ｂトレンチでは６層が確認され，このうちⅥ層（砂礫層）の上部は赤褐色，下部は淡青褐色を呈しており，縄文時代後期とみられる土器が出土した。本層はＡトレンチ第Ⅶ層と同一層に比定されている。

つまり，この調査では縄文時代の文化層が２面存在することが確認され，出土遺物から上層は中～後期，下層が前期に属する可能性が高いことが判明した。

②　国道３号線松橋バイパス建設に伴う本調査

前掲の試掘確認調査結果に基づき，曽畑貝塚低湿地遺跡として1986年（昭和61）９月～1987年６月にかけ，熊本県教育委員会文化課によって記録保存を目的とした本調査が実施された（江本編1988）。

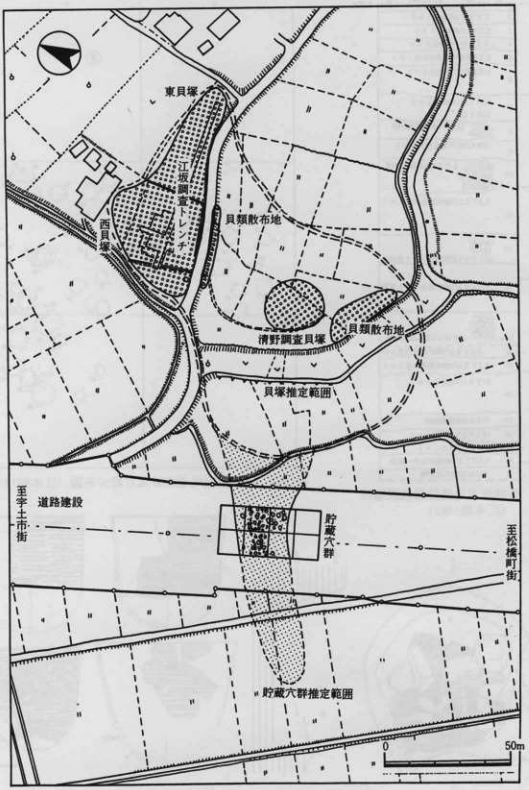
調査区は前掲Ａトレンチを含む形で，計画路線内の20m×40m＝800㎡の範囲で設定され，層序は21層に及び，地表面から約5.2mの深さまで発掘されたが，16層以下の層では無遺物層であった。つまり，遺物が出土したのは15層以上である。また，９層から上層は弥生時代以降の堆積層であり，縄文時代の遺物を含むのは10～15層であった。

各層の概要を以下に示すと，10層（灰褐色砂礫層，地表下約1.7～2.0m）では，阿高式土器や南福寺式土器，御領式土器，古閑式土器など中期から晩期までの縄文土器が出土し，貯蔵穴群５基を検出した。11層（暗灰褐色砂質シルト層，地表下約2.0～2.5m）は前期の曽畑期に形成された土層であり，57基の貯蔵穴群が検出され，曽畑式土器や石鏃，磨製石斧などの石器，獣骨などの動物遺存体が出土した。12～15層（12層：黄灰褐色シルト混砂礫層，13層：暗灰褐色シルト質砂層，14ａ層：黄灰褐色砂礫層，14ｂ層：暗灰褐色礫混り砂層，15層：暗灰褐色砂質シルト層，地表下約2.5～4.5m）は前期の轟式土器の包含層である。

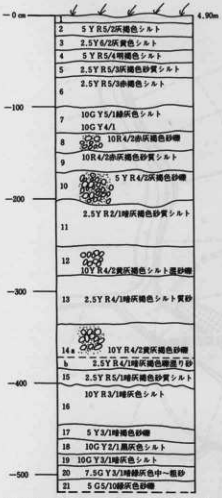
上述した貯蔵穴群中からは，イチイガシを主体とするドングリ類やこれらを貯蔵穴に貯える際に入れた網代，ヒョウタンなど，低湿地の調査であったため通常残り難い植物質の製品や植物遺存体が出土したことは大きな成果であった。これらの貯蔵穴群から出土したドングリ類や網代は，保存処理が施され展示会などで公開・活用されている。

また，当該調査では縄文時代当時の曽畑貝塚周辺における自然環境や地形環境などを総合的に理解するため，出土した植物種子や動物遺存体の同定，花粉分析や珪藻分析，放射性炭素年代測定などの自然科学分析が行われ，大きな成果が得られた。

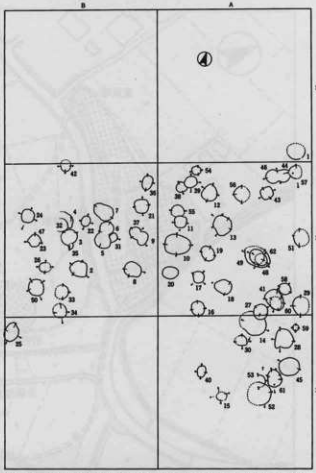
同定された植物種子は20種類，16科19属であり，うち木本は11種類でカジノキ，ヤマグワ，マタタビ，などの食利用可能な植物であり，草本は９種類で，そのうち６種は畑地雑草であった。検出された植物遺体の多くは，今日でもその「木の実」が食利用されるものであったことが判明している（藤沢1988）。また，花粉分析の結果から，縄文時代前期は遺跡周辺の丘陵地一帯にはイチイガシを優先種とするカシ型の照葉樹林が旺盛に繁茂したと推定されている（畑中1988）。さらに，珪藻分析から，轟期は海水の影響が強く，海水が遺跡の近くまで入りこんでいたとみられるが，続く曽畑期では，海に近い場所であったと想定されるものの，轟期よりも海水の影響は薄まることが判明している（海津1988）。



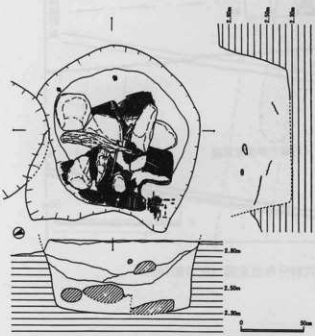
第８図　曽畑貝塚・貯蔵穴群分布想定図（江本編1988）



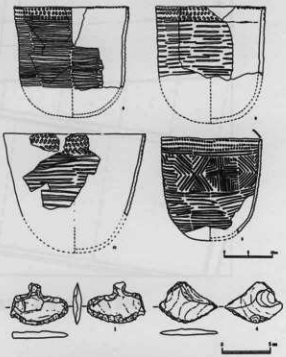
第９図　曽畑低湿地遺跡層位概略図
（江本編1988）



第10図　曽畑低湿地遺跡貯蔵穴群分布図（江本編1988）



第11図　曽畑低湿地遺跡第14号貯蔵穴（江本編1988）



第12図　曽畑低湿地遺跡出土曽畑式土器
及び石器（江本編1988）

本調査において出土した曽畑式土器（11号貯蔵穴内出土，第12図右下の土器）については，付着した炭化物の年代測定が県立装飾古墳館によって実施されており，補正年 BP5240±40という結果が得られている（古環境研究所2007）。

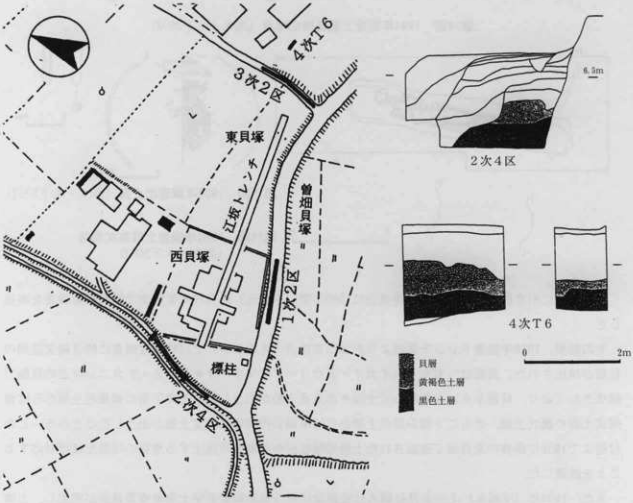
（4）宇土市教育委員会による調査（第13図）

宇土市教育委員会により1986・1987年度（昭和61・62）に下水道工事に伴う緊急発掘調査（１・２次調査），1988年度（昭和63）から1990年度（平成２）には国庫補助金を得て貝塚の範囲確認調査（３～５次調査）を実施した。

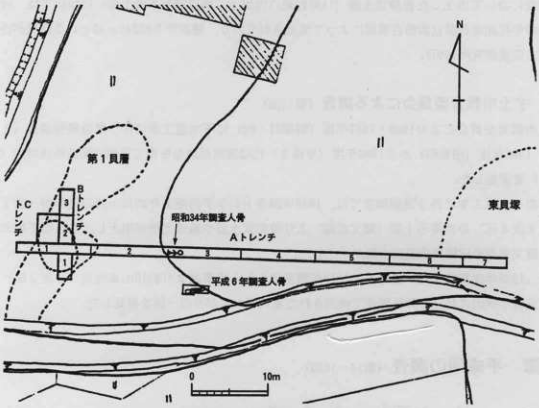
上記の下水道工事に伴う発掘調査では，1959年調査トレンチ西端より約15m西の地形が一段下がった地点（２次４区）の黄褐色土層（縄文前期）より曽畑式土器や轟式土器が出土し，さらに下層の黒色土層より縄文早期の円筒形条痕文土器が出土した。

また，1988年度調査では，後述する1959年調査のトレンチ東端より約10m東地点（３次２区）で縄文後期の貝層が検出され，1959年調査で検出された東貝塚の広がりの一部を確認した。

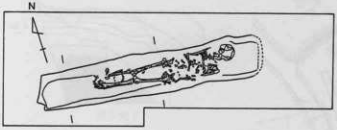
第５節　平成期の調査（第13～16図）

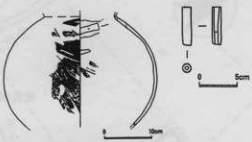


第13図　下水道工事及び範囲確認調査事業に伴う発掘調査（木下1990を改変）



第14図　1994年調査土壙墓検出地点（高木・木下2002）





第15図　1994年調査出土品（高木・木下2002）

第16図　1994年調査土壙墓実測図
（高木・木下2002）

1988年度に引き続き，宇土市教育委員会は1989年度（平成元）から1990年度まで範囲確認調査を実施した。

その結果，1959年調査トレンチ東端より約20m東地点（４次Ｔ６）で1988年度調査に続き縄文後期の貝層が検出された。貝層はマガキ・ハイガイ・アサリ・アゲマキ・オキシジミ・アカニシなどの貝類で構成されており，貝層からは北久根山式土器や市来式土器が出土した。その下層の黄褐色土層からは曽畑式土器や轟式土器，さらに下層の黒色土層からは早期の円筒形条痕文土器が出土したことから，この付近まで1959年調査の東貝塚で確認された土層堆積状況や各層から出土する遺物の時期がほぼ対応することを確認した。

また，1994年（平成６）７～８月に個人住宅建設に伴う緊急調査を宇土市教育委員会が実施し，土壙墓１基を検出した。墓坑はかなり狭く，遺体との隙間はほとんどなかった。墓坑内からは胸部付近を中

心に赤色顔料の散布が見られた20～30代前半の女性人骨が１体検出され，左下顎骨付近から碧玉製管玉が１点，下肢骨付近から刀子片が出土したのみで，細かい時期の特定はできなかったものの，付近から出土した土師器からおおむね古墳時代前期～中期の所産であることが確認された。

上述した人骨の出土状況や土壙墓の形状などが，慶応大学調査における人骨の出土状況と酷似することから，1959年調査当時，縄文時代とされた人骨についても同様に古墳時代の所産と想定されている（高木・木下2002）。

引用・参考文献

海津　正倫　1988「曽畑貝塚付近における地形環境の変遷」『曽畑－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－』熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会

江本直　編　1988『曽畑－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－』熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会

木崎　康弘　2004『豊饒の海の縄文文化・曽畑貝塚』シリーズ「遺跡を学ぶ」007　新泉社

木下　洋介　1990「宇土市曽畑貝塚の範囲確認調査」肥後考古学会第197回例会発表資料

清野　謙次　1924「肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚」『歴史地理』43-2

清野　謙次　1969「肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚」『日本貝塚の研究』　岩波書店

古環境研究所　2007「曽畑遺跡出土曽畑式土器付着炭化物の放射性炭素年代測定」『熊本県立装飾古墳館研究紀要』7　熊本県立装飾古墳館

小林　久雄　1935「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』１－２　東京考古学会

小林　久雄　1939「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11　雄山閣

小林　久雄　1967『九州縄文土器の研究』　小林久雄先生遺稿刊行会

隈昭志・江本直ほか　1976『微雨・曽畑』熊本県文化財調査報告第19集　熊本県教育委員会

坂本　経堯　1983「曽畑貝塚」『肥後上代文化資料集成』　肥後上代文化研究会

高木恭二・木下洋介　2002「曽畑遺跡（貝塚）」『新宇土市史』資料編第２巻　宇土市

寺石　正路　1890「九州ノ貝塚」『東京人類学雑誌』５－53　東京人類学会

中山平次郎　1918「肥後国宇土郡花園村岩古曽字曽畑貝塚の土器」『考古学雑誌』８－５　考古学会

畑中　健一　1988「曽畑貝塚低湿地遺跡の花粉学的研究」『曽畑－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－』熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会

藤沢　　浅　1988「曽畑貝塚低湿地遺跡出土の植物種子の同定」『曽畑－熊本県宇土市花園町 曽畑貝塚・低湿地の調査－』熊本県文化財調査報告第100集　熊本県教育委員会

若林　勝邦　1890ａ「肥後旅行談」『東京人類学雑誌』５－49　東京人類学会

若林　勝邦　1890ｂ「肥後ニオケル石器時代ノ遺跡調査報告」『東洋学芸雑誌』　東洋學藝社

第４章　調査の概要

第１節　調査の方法（第17図）

1959年（昭和34）10月28日から11月６日の計10日にわたり，江坂氏を中心とする調査団は曽畑貝塚が所在する舌状台地末端部（標高約８m）の耕作地で発掘調査を実施した。調査地の地番は宇土市岩古曽町字曽畑1196-1，1197-1，1198-1，1198-3である。調査地より南へ約50mの地点には，清野氏調査地（1923年調査）が所在する。

本調査では，東西方向に１～７区（１～６区：約10m，７区：約６m）からなるＡトレンチ，Ａトレンチ１区中央東よりに南北方向の１～３区から構成されるＢトレンチ，さらにＢトレンチ２区を西に拡張したＣトレンチを設定した（第17図）。各トレンチの規模は，Ａトレンチが長さ約66m・幅約1.5m・面積約99㎡，Ｂトレンチが長さ約12m（Ａトレンチとの重複部分含む）・幅約２m・面積約24㎡，Ｃトレンチは長さ約3.5m・幅約2.5m・面積約９㎡で，Ａ～Ｃトレンチの合計面積は約132㎡である。

まず，Ａトレンチから発掘調査を開始し，層序と出土遺物との関係を把握しながら調査が進められ，調査の進行にともなってＢトレンチとＣトレンチを設定，調査が実施された。また，並行して調査地周辺の地形測量（１mコンター）や土層断面図の作成（縮尺１/10），写真撮影（35mmカラーリバーサル，35mmモノクロ）などが行われた。各トレンチにおいて表土から基盤層までの土層堆積状況を把握することが努められたが，一部に調査期間の関係から未掘となった部分もある。しかしながら，おおむね当該調査地点の土層堆積状況が明らかとなった。

続いて，各トレンチの概要についてふれるが，付編１－２「発掘経過」（渡辺・可児）において各トレンチの層序や出土遺物などに関する具体的な報告を掲載していることから，次節では当該報告を要約するにとどめたい。

第２節　各トレンチの概要

（１）Ａトレンチ（第18～20図）

調査の結果，１区から２区西側において曽畑式土器を包含する貝層（第２貝層）が検出されるとともに，間に礫層をはさみ，その上層においても縄文時代後期の土器を包含する貝層（第１貝層）が検出され，時期が異なる縄文時代の貝層の重複が明らかになった。また，６区から７区においても前述の貝層とは異なる縄文時代後期の貝層が確認されたため，調査団は前者を「西貝塚」，後者を「東貝塚」と仮称し，区別した。

Ａトレンチにおける層序は，土層堆積状況より大きく分けて１区から２区西側，２区中央部から５区，６区から７区で違いがある。

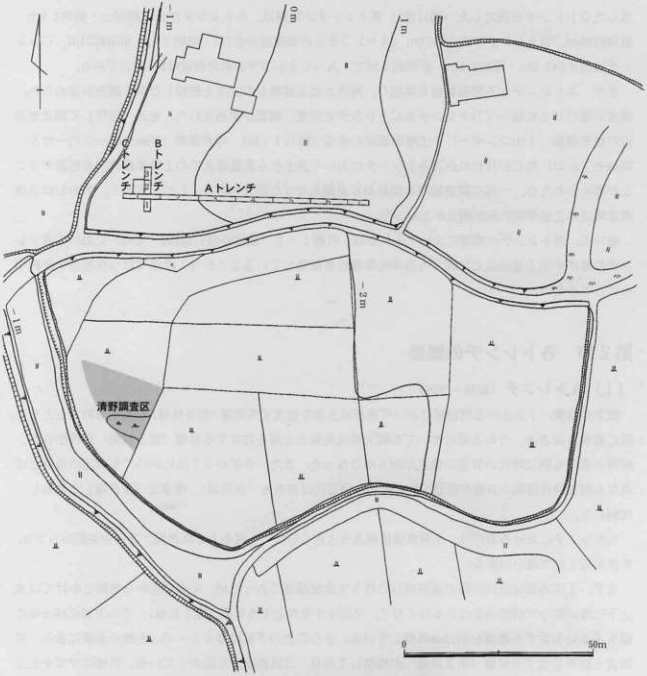
まず，１区西側は近代以降の道路開発に伴う２次堆積層であったが，中央付近から東側にかけては表土下に厚い部分で約20cmをはかるハイガイ，マガキを主体とする貝層（第１貝層），その下層に10cm弱の礫を多量に包含する礫層が約10cm堆積している。さらにその下層に厚さ５～40cmの礫を多量に含み，曽畑式土器を包含する貝層（第２貝層）が堆積しており，２区西端まで広がっている。貝種はマガキを主体とし，ハイガイやカガミガイがやや多い。第２貝層下層は，厚さ約40～60cmの褐色土層が堆積してお

り，褐色土層以下は基盤層である。

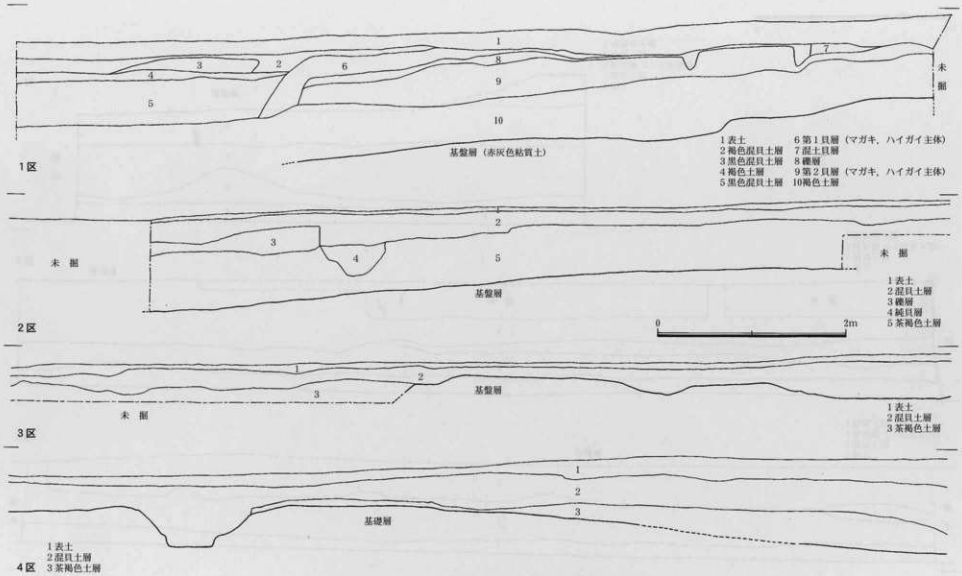
なお，曽畑式土器を包含するのは第２貝層だけでなく，下層の褐色土層上部（約10cm）までおよび，その下部からは微隆起帯文や貝殻条痕文土器などを施す轟式土器や押型文土器が出土した。

次に２区中央付近から５区では，表土下に二次的に破壊された厚さ約10～40cmの混貝土層，その下層に厚さ約10～50cmの茶褐色土層の順に堆積しており，３区では土壙墓，５区東端ではマガキを主体とする厚さ20cm程のごく小規模な貝層が確認された。混貝土層からは，須恵器や土師器，青磁が出土しており，中世以降に形成された堆積層とみられる。混貝土層下層の茶褐色土層からは，曽畑式土器や轟式土器，押型文土器が出土しており，１区における褐色土層と対応する可能性が高い。

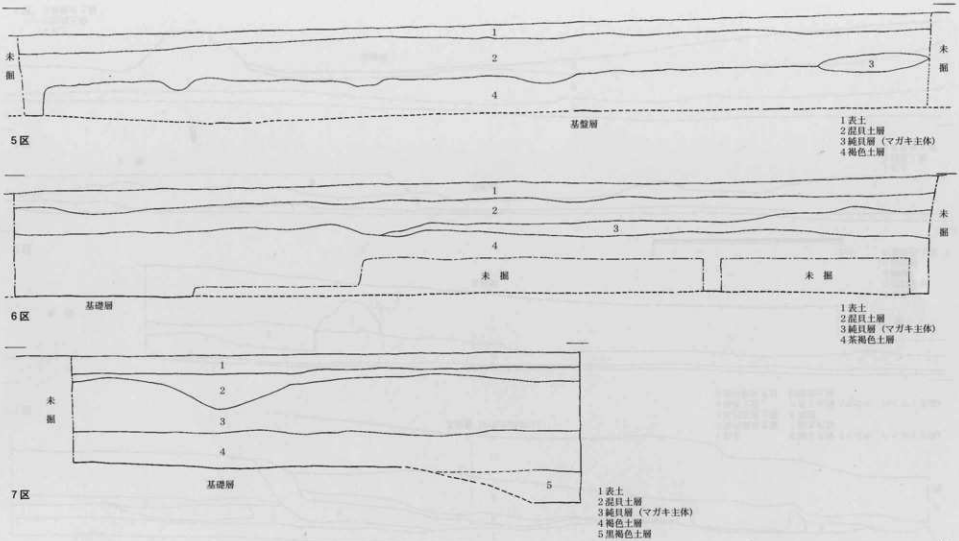
最後に６・７区においては，混貝土層下にＡ１区で検出された第１貝層や第２貝層とは異なる縄文時



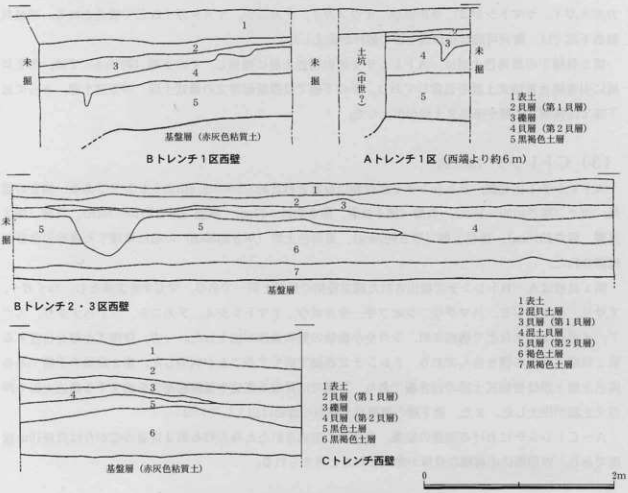
第17図　調査トレンチ配置図（1/1,000）



第18図　Aトレンチ1～4区北壁土層断面図（1/40）



第19図　Aトレンチ5～7区北壁土層断面図（1/40）



第20図　Ａ～Ｃトレンチ土層断面図（1/40）

代後期のマガキを主体とする厚さ約10～70cmの貝層が確認された。マガキ以外にはイワガキ，ハイガイ，マテガイ，ハマグリ，アサリ，シオフキ，オオノガイ，ウネナシトマヤガイなどの二枚貝，アカニシ，テングニシ，イボニシ，フトヘナタリ，イボウミニナ，スガイなどの巻貝がある。また，当該貝層はボーリングや試掘の結果，６・７区の北側や東側に広がることが判明し，南側の道路に面した法面にも露出していることから，直径20m程度の広がりをもつ貝層と想定され，最も厚い部分で約70cmをはかる。

貝層下の褐色土層（厚さ約60cm）上部からは，曽畑式土器や轟式土器，褐色土層下部からは横位の貝殻条痕文を施す轟式土器や山形押型文土器などが出土した。

（２）Ｂトレンチ（第20図）

Ａトレンチ１区から２区西側にかけて検出された西貝塚の規模を確認するために設定されたトレンチであり，３区に分けられる。Ａトレンチ１区南側に設定されたＢトレンチ１区（幅約２m，長さ約3.5m）では，Ａトレンチ１区とほぼ同様の層序であることが確認された。

このうち，Ｂトレンチ１区では，表土（厚さ30cm），貝層（第１貝層，厚さ約５～25cm），礫層（厚さ約10cm），貝層（第２貝層，厚さ約15～30cm），黒褐色土層（厚さ50cm以上）の順に堆積する遺物包含層が確認された。縄文後期の土器を包含する第１貝層ではマガキを主体とし，南へ下降しながら厚みを増

すことが確認された。一方，第２貝層もマガキを主体とし，その他にハイガイ，ハマグリ，マテガイ，カガミガイ，ヤマトシジミ，サルボウ，オウノガイ，アカニシ，ツメタガイなどで構成される。当該貝層最下部では，復元可能な曽畑式土器の破片が出土した。

第２貝層下の黒褐色土層は，Ａトレンチ１区の褐色土層に相当し，その上部（約10cm）では，第２貝層に引き続き曽畑式土器を包含しており，その下層では微隆起帯文の轟式土器，押型文土器，さらに最下部では押型文土器や条痕文土器が出土した。

（３）Ｃトレンチ（第20図）

Ａトレンチ１区北側，Ｂトレンチ２区西側に設定された約3.5m×2.5mのトレンチである。調査の結果，表土（厚さ約20～40cm），貝層（第１貝層，厚さ約15～20cm），礫層（厚さ約10～30cm），貝層（第２貝層，厚さ約15cm），黒色土層（厚さ約20cm），黒褐色土層（厚さ約30cm）の順に堆積する遺物包含層が確認された。

第１貝層はＡ・Ｂトレンチで検出された縄文後期の貝層と同一であり，マガキを主体とし，ハイガイ，アサリ，オキシジミ，ハマグリ，シオフキ，サルボウ，ヤマトシジミ，アカニシ，フトヘナタリ，スガイ，イボウミニナなどで構成され，シカや小動物の動物遺体が出土した。一方，曽畑式土器を包含する第２貝層は多量の礫を含んでおり，トレンチ北西側で消失することが判明した。第２貝層の下層である黒色土層上部は曽畑式土器の包含層であり，下部では貝殻条痕文や微隆起帯文を施文する轟式土器や押型文土器が出土した。また，最下層の黒褐色土層から遺物は出土していない。

Ａ～Ｃトレンチにおける調査の結果，曽畑期に形成されたとみられる第２貝層の広がりは直径10m程度であり，曽畑期に小規模な貝塚が形成されたと考えられる。

第３節　調査日誌抄

1959年（昭和34）10月28日

地権者へ挨拶。トレンチ設定。東西約66m，幅約1.5mのＡトレンチを設定。

10月29日

Ａトレンチ１～３区より調査開始。２区の貝層（地表下約31～40cm）及び貝層下褐色土層（地表下約41～58cm）で曽畑式土器出土。３区の地表下約35cm付近では土壙墓を検出，伸展葬の人骨が出土したことから，これらの実測図（平面図）を作成。小林久雄氏，熊本大学法文学部松本雅明氏ら来訪。

10月30日

Ａトレンチ１～３区に加え，新たにＡトレンチ６区の調査開始。Ａトレンチ１区の貝層（第２貝層，地表下約60cm）より遺存状態のよい曽畑式土器が出土。地表下約30～60cmで，マガキ，ハイガイ，スガイ，カガミガイなどを含む純貝層を検出。２区の地表下約40～60cmの礫層中では，曽畑式土器とともに黒曜石などの剥片が数多く出土。３区で検出した土壙墓の断面図作成。６区では，マガキが大半を占める純貝層より縄文後期の土器が出土。富樫卯三郎氏ら来訪。

10月31日

新たにＡトレンチ４・５・７区の調査開始。Ａトレンチ１区で曽畑式土器を単純に包含する純貝層（第２貝層）検出（地表下約50cm）。本貝層と貝層下土層（褐色土層）の境界付近で曽畑式土器が多量に出土。３区西半部の混土貝層（地表下約20～45cm）より，土師器・須恵器・青磁が出土。４区では，地表下15cm程より下部は基盤層まで混土貝層で，土師器や須恵器出土。５区貝層下褐色土層で轟式土器出土。６区東側はマガキが多い純貝層で，鐘崎式土器や獣骨が出土。宇土小学校６年生（約250名），

平岡勝昭氏ら来訪。

11月１日

Ａトレンチ１区南側に直交するＢトレンチ１区（長さ約3.5m，幅約２m）を設定し，調査開始。Ａトレンチ５区の貝層下褐色土層より押型文土器出土。６区貝層下土層より轟式土器出土。７区の純貝層より鐘崎式土器が出土したことから当該貝層が縄文後期の貝層であることが判明。宇土市長大和忠三氏，鶴田倉造氏ら来訪。

11月２日

Ｂトレンチ１区より北側にＢトレンチ２区・３区を設定し，調査開始。Ａトレンチ５区貝層より縄文後期の土器，貝層下土層上部より押型文，轟式土器出土。同７区でマガキが多い貝層より炭化物を採集。Ｂトレンチ１・２区の貝層（第１貝層）で鐘崎式，市来式などの縄文後期の土器が出土。第１貝層下層の貝層（第２貝層）で曽畑式土器，獣骨出土。花園小学校校長及び職員，松橋警察署長，熊本市立博物館牛島盛光氏ら来訪。

11月３日

調査地周辺の地形測量を実施。Ａトレンチ５区のマガキを主体とする純貝層（厚さ約20cm）で，縄文後期の土器出土。貝層下土層（褐色土層）では条痕文土器が出土。Ａトレンチ７区貝層中よりフグ下顎，アワビ貝製垂飾品出土。Ｂトレンチでは，１～３区の第２貝層直下から貝層下土層（褐色土層）にかけて曽畑式土器の大型破片が数多く出土し，褐色土層上部付近でも曽畑式土器が出土。玉名高等学校田辺哲夫氏，肥後考古学会三島格氏ら来訪。

11月４日

Ｃトレンチの発掘開始。Ａトレンチ５区の貝層下土層中の条痕文土器や押型文土器，曽畑式土器の取り上げ終了。同６区中央部の混貝土層より縄文後期の磨消縄文土器，茶褐色土層より轟式や曽畑式土器が出土。Ａトレンチ北壁断面図作成。Ｂトレンチ１区貝層下褐色土層より押型文土器片出土。Ｂトレンチ３区貝層下褐色土層より押型文土器出土。Ｃトレンチ第１貝層では，骨製尖頭器，縄文後期の土器出土。熊本県教育次長鈴木知男氏，宇土市教育委員長金森盛起氏ら来訪。

11月５日

Ａトレンチ７区貝層下褐色土層上部より条痕文土器，同層下半から黒褐色土層上面より山形押型文土器出土。Ｂトレンチ検出の第２貝層は１区東南部で消滅することが判明。同２区褐色土層（地表下約90～100cm）より押型文土器出土。

Ｂトレンチ１・２区とＡトレンチ１区の第２貝層で微細魚骨を採集。イナダ，マイワシ，クロダイなど数種類を同定。Ｃトレンチ第１貝層で縄文後期の磨消縄文土器が多数出土。調査地周辺の地形測量を実施。Ａトレンチ２～４区北壁・同２区南北壁・同７区北壁，Ｂトレンチ１～３区西壁の土層断面図を作成。Ａ・Ｂトレンチ調査終了箇所の埋め戻し作業開始。小林久雄氏，山鹿高等学校原口長之氏ら来訪。

11月６日

Ｃトレンチ第２貝層最下部から貝層下黒色土層直上にて曽畑式土器の大型破片出土。貝層下の土層上部からも曽畑式土器が出土し，その下部では条痕文土器や細隆起線文土器，押型文土器が出土。全トレンチの埋め戻し作業完了。

第５章　検出遺構

第１節　検出遺構の概要（第21図）

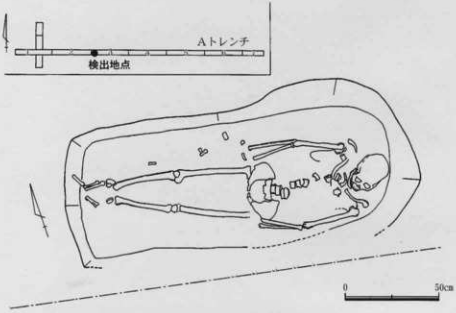
本調査で検出された遺構は，土壙墓１基のみである。

検出地点はＡトレンチ３区西側で，茶褐色土層上面において検出された。主軸を西北西－東南東方向にとり，検出規模は長径約188cm，短径約90cmあまり，検出面からの深さは約24cmである。調査日誌によれば，埋土に腐植土が堆積していたと記されている。土壙墓底部より頭部を東に向けた仰臥伸展葬の熟年男性人骨が１体出土した。

なお，第３章第５節で示したように，1994年に宇土市教育委員会が実施した発掘調査で，当該土壙墓から約５ｍ南側で土壙墓１基を検出した。墓坑内からは胸部付近を中心に赤色顔料の散布が見られた20～30代前半の仰臥伸展葬の女性人骨が１体出土し，付近から出土した土師器からおおむね古墳時代前期～中期の所産であることが確認された。この２つの土壙墓と人骨の出土状況が酷似することから，現在では，慶応大学調査で出土した人骨についても同様に古墳時代の所産と想定されている。

第２節　出土人骨について

当該人骨の特徴については，付編１－３の小片報告を参照。



第21図　Ａトレンチ３区検出土壙墓（1/20）

第6章　出土遺物

第1節　出土遺物の概要

本調査で出土し，慶応大学資料として管理されてきた人工遺物の総数は計約5,700点（自然遺物を除く），コンテナ数80箱であり，ほぼ縄文土器で占められる。しかし，調査日誌には，古墳時代や中世の遺物も出土したことが記載されていることから，当該調査では基本的には縄文土器だけが選別されて持ち帰られた可能性が高い。

縄文時代早期から後期までの幅広い時期の土器が出土しており，早期末から前期の轟式土器や曽畑式土器，後期の鐘崎式土器や北久根山式土器，市来式土器などがあるが，曽畑式土器の出土量はその他の型式の土器にくらべ突出している。これらについては，器面調整や施文技法，文様などにより本章第2節のとおりに分類した。

また，土器以外では，石器や貝製品が出土している。石器は石鏃，石匙，削器，磨製石斧などで，貝製品は二枚貝の貝類遺体を利用した貝輪である。

これら出土遺物については，調査地点によって堆積土の様相や貝層の形成時期などが異なることから以下の地点に分けて報告する。

・Aトレンチ1区（Aトレンチ1区とBトレンチ1区との連結部含む）
・Aトレンチ2～5区
・Aトレンチ6・7区
・Bトレンチ1～3区
・Cトレンチ

なお，出土品のなかには，出土したトレンチは判明するが層位が不明な土器，出土地点そのものが不明な土器などがある。そのなかには残存状況が良好なものも含まれているため，これについてもあわせて記述する。

第2節　土器・土製品

（1）出土土器の分類（第22・23図）

出土した縄文土器は大きくⅠ～Ⅵ類に分類され，さらに細分を行った。以下では分類した土器群について概観し，さらに細かな特徴については後述する出土層位ごとに掲載した個々の土器について具体的に詳述することにしたい。

Ⅰ類　押型文土器群

Ⅰa類：原体の円周に鋸歯状の三角波状文を彫刻し，山形押型文を施文。

Ⅰb類：交差する格子目状の刻みを施した原体を回転施文した格子目押型文を施文。

Ⅱ類　轟式土器群

深鉢形を呈し，地文にハイガイなどのフネガイ科の貝殻腹縁を用いた貝殻条痕を施すものや，その系譜上に位置づけられる土器群。これらは施文技法や文様などからⅡa～Ⅱd類に分けられ，Ⅱb類はさらに細分できる。

Ⅱａ類：内外の器壁に強い条痕を施す。胎土にやや大きめの砂粒が混じり，他のⅡ類の土器にくらべてやや器壁が厚い。轟A式に相当する。

Ⅱｂ類：器外面に隆起文帯が施されるもの。隆起文帯の太さや施文技法より細分が可能である。轟B式に相当する。

Ⅱｂ１類：縦位の微隆起帯文を器外面全体に多数貼り付ける。

Ⅱｂ２類：横位の隆起帯文を成形し，数条貼り付ける。

Ⅱｂ３類：口縁部を中心に縦位や横位，曲線状の太い隆起帯文を数条貼り付ける。

Ⅱｃ類：地文の浅い貝殻条痕が残り，２本単位のヘラ状工具で蛇行する直線を斜位や横位に施文するもの。轟C式に相当する。

Ⅱｄ類：口縁部外面に横位の沈線が施され，地文の浅い条痕が残る。轟D式に該当する。

Ⅲ類　曽畑式土器群

丸底を呈し，外面全面及び口縁部内面に沈線文や刺突列点文，押引文などを幾何学的に組み合わせ，文様帯を形成する土器群で，曽畑式土器に相当。器種は深鉢を主体とする。ここでは，口縁部の特徴と文様帯の規則性を考慮してⅢａ～Ⅲｄ類に分類した。また，曽畑貝塚低湿地遺跡出土曽畑式土器も考慮したうえで，口縁部外面の文様や文様帯の有無などから細分した。

Ⅲａ類：口縁部が直口ないし外側にやや傾くもの。

Ⅲａ１類：刺突文のみで文様帯を構成するもの。

Ⅲａ２類：横位の沈線文のみで文様帯を構成するもの。

Ⅲａ３類：刺突文と横位の沈線文を組み合わせて文様帯を構成するもの。

Ⅲａ４類：横位の沈線文と山形文などの文様を組み合わせて文様帯を構成するもの。

Ⅲａ５類：明確な文様帯が存在しないもの。

Ⅲｂ類：胴部から口縁部にかけて外開き状に広がり，そのままの傾きで口縁端部にいたるもの。口縁部そのものは外反しないもの。

Ⅲｂ１類：刺突文のみで文様帯を構成するもの。

Ⅲｂ２類：横位の沈線文のみで文様帯を構成するもの。

Ⅲｂ３類：刺突文と横位の沈線文を組み合わせて文様帯を構成するもの。

Ⅲｂ４類：横位の沈線文と山形文などの文様を組み合わせて文様帯を構成するもの。

Ⅲｂ５類：明確な文様帯が存在しないもの。

Ⅲｃ類：口縁部がゆるやかに外反するもの。波状口縁のものもある。

Ⅲｃ１類：刺突文のみで文様帯を構成するもの。

Ⅲｃ２類：横位の沈線文のみで文様帯を構成するもの。

Ⅲｃ３類：刺突文と横位の沈線文で文様帯を構成するもの。

Ⅲｃ４類：横位の沈線文と山形文などの文様を組み合わせて文様帯を構成するもの。

Ⅲｃ５類：明確な文様帯が存在しないもの。

Ⅲｄ類：口縁部がゆるやかに外反するとともに，口縁端部が「くの字」状に強く外反するもの。波状口縁のものもある。

Ⅲｄ１類：刺突文のみで文様帯を構成するもの。

Ⅲｄ２類：横位の沈線文のみで文様帯を構成するもの。

Ⅲｄ３類：刺突文と横位の沈線文を組み合わせて文様帯を構成するもの。

Ⅲｄ４類：横位の沈線文と山形文などの文様を組み合わせて文様帯を構成するもの。

Ⅲｄ５類：明確な文様帯が存在しないもの。

なお，本土器群は出土した土器の大半を占めており，全体的な形状や文様構成などがわかる良好な資料が少なくないことから，これらを対象に第９章第２節で器形や文様の特徴などについて詳述する。

Ⅳ類　市来式土器群

口縁部が断面三角形状に肥厚する土器群で，波状口縁のものが多い。本口縁部外面に短沈線や爪形文，貝殻文を施す。深鉢がほとんどで，口縁部は外反する。表面に貝殻条痕が残るものもある。

Ⅳａ類：口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚させ，沈線文などの文様を施す。

Ⅳｂ類：粘土帯を貼り付けずに肥厚させ，沈線文や刺突文を施す。

Ⅴ類　磨消縄文土器群

器面に縄文を施した後，一部を磨り消して文様を表現する磨消縄文の土器群である。Ⅴａ類とⅤｂ類に分類した。

Ⅴａ類：口縁部が強く外反し，胴部から頸部を中心に左右対称に斜線や平行する沈線文を施文するとともに，沈線による渦巻文で胴部を飾る。文様帯は口縁部，頸部，胴部に区分される。器種には鉢や浅鉢，深鉢（口縁端部に刻目文などを施文）があり，鐘崎式土器に相当するものを含む。

Ⅴｂ類：器形は口縁部が外反し，胴部が丸く膨らみをもつ器形をなす。深鉢を主体とする。口縁部は肥厚し，その部分に短直線文などを施文する。北久根山式土器に相当するものを含む。

その他，無文土器など特に文様を施さない一群を**Ⅵ類**とする。

（２）Ａトレンチ１区出土の縄文土器・土製品

①表土層及び撹乱層出土土器（第24図）

１・２はⅡｂ類の土器。１は外面に細かな粘土紐を縦位に貼り付けたⅡｂ１類，２は横位の隆起帯文をもつⅡｂ２類である。３～７はⅢ類の土器で３はⅢｂ１類，４・５はⅢｂ５類とみられる口縁部，６・７は胴部。３は口縁端部と口縁部内外面に刺突列点文を施す。６は綾杉沈線文，７は刺突列点文と横位の平行沈線文を施す。８はⅤｂ類の鉢で，９は深鉢の底部。10はⅣ類の台付皿か鉢の脚部であろう。

②第１貝層出土土器・土製品（第25図）

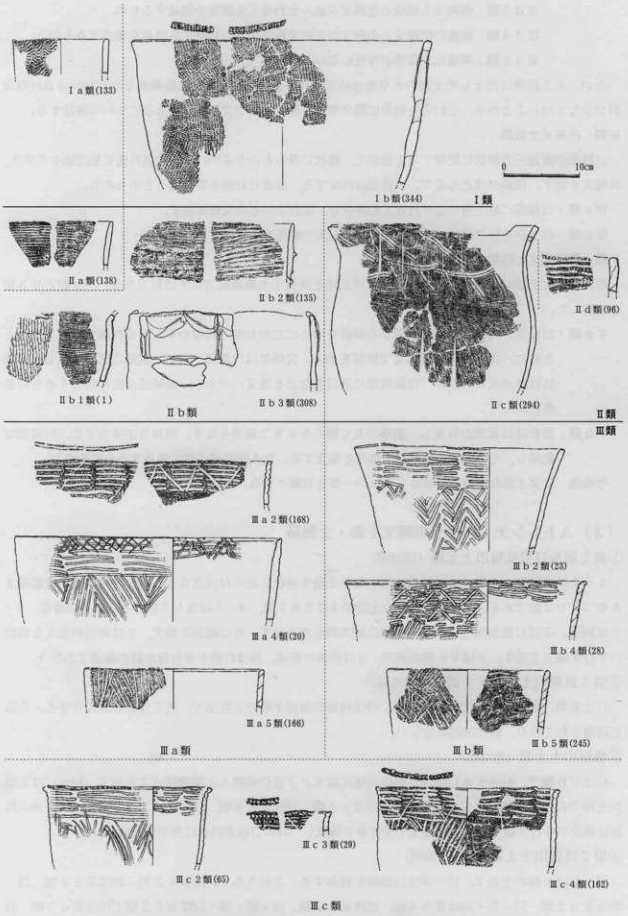
11はⅢ類の胴部で綾杉沈線文を施す。12は円形の用途不明の土製品で，約５分の２が残存する。全体が研磨されており，特に凹部は著しい。

③礫層出土土器（第26図）

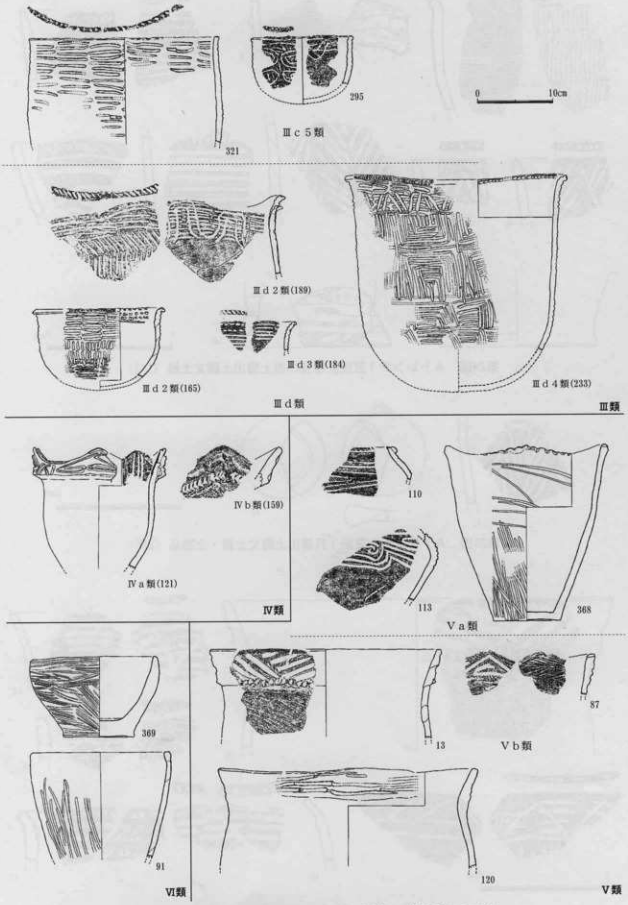
13はⅤｂ類で，肥厚する口縁部に斜位の短沈線文と下部の突帯上に刺突列点文を施す。14～17はⅢ類の土器で口縁部が残存しており，14・15はⅢｃ４類，16はⅢａ４類，17はⅢｃ２類である。14～16の外面は横位の平行沈線文と山形沈線文で文様帯を構成し，17の口縁部内面は押引文を施す。

④第２貝層出土土器（第27～29図）

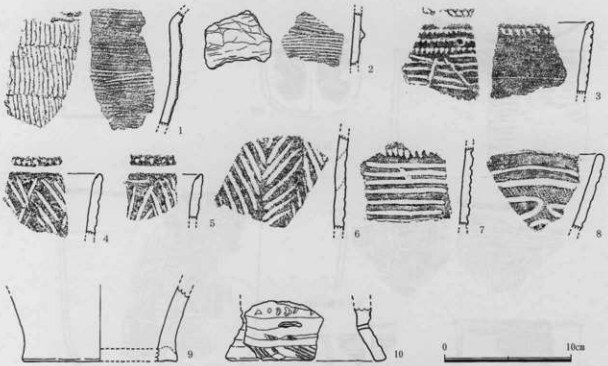
18～48はⅢ類の土器で，18～36は口縁部が残存する。このうち，18はⅢａ２類，20はⅢａ４類，23・25はⅢｂ２類，24・28・30はⅢｂ４類，22はⅢｂ２類，19・21・26・27はⅢｃ２類，29はⅢｃ３類，31～33，35はⅢｃ４類，34・36はⅢｄ４類である。



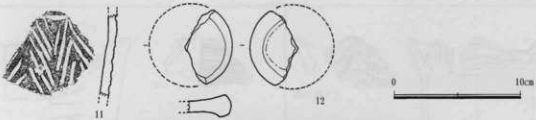
第22図　出土縄文土器分類図１（1/5，数字は遺物番号を示す）



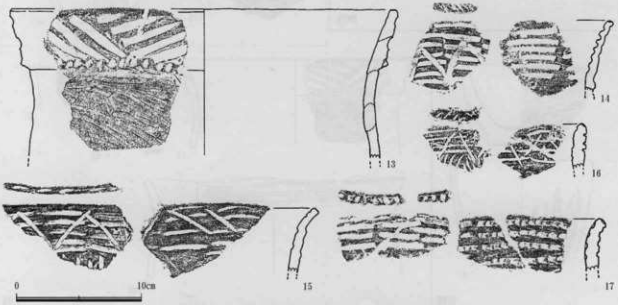
第23図　出土縄文土器分類図２（1/5，数字は遺物番号を示す）



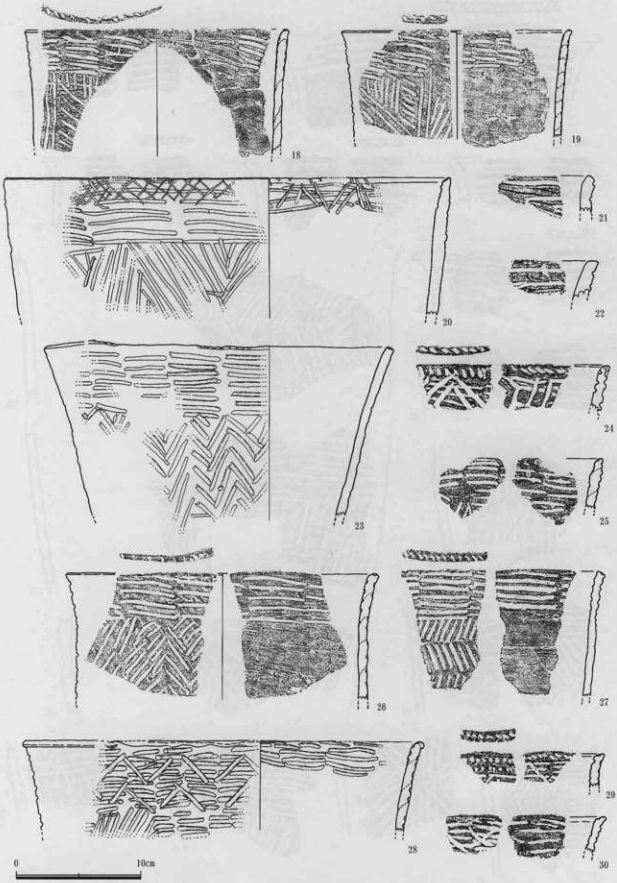
第24図　Ａトレンチ１区撹乱層及び表土層出土縄文土器（1/3）



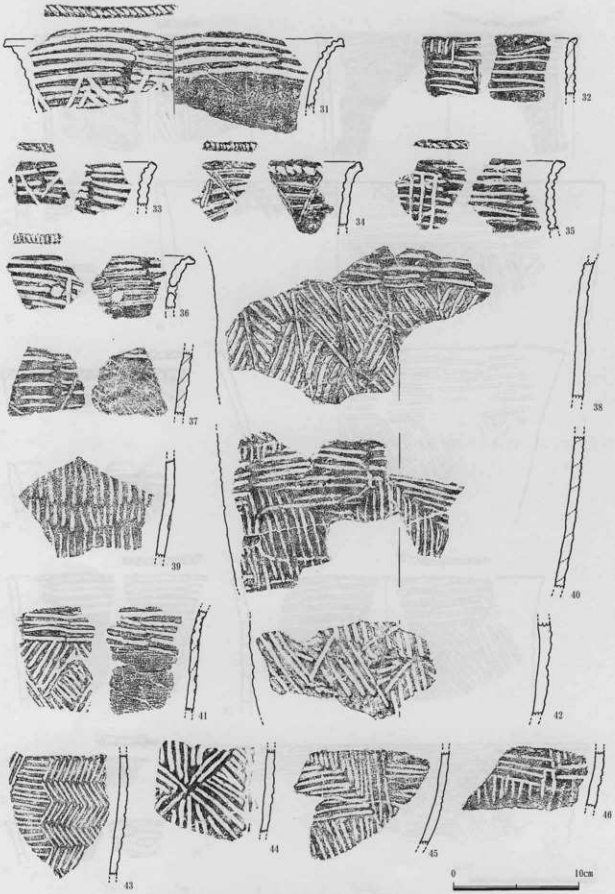
第25図　Ａトレンチ１区第１貝層出土縄文土器・土製品（1/3）



第26図　Ａトレンチ１区礫層出土縄文土器（1/3）



第27図　Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器１（1/3）



第28図　Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器２（1/3）

18・19はやや小型の深鉢で口縁部内外面に平行短沈線文，胴部に縦位や斜位の平行沈線文で文様帯を構成する。20は大型の深鉢で，口縁端部に刻目文，口縁部内外面に平行沈線文を施した後，外面はX字状沈線文，内面には山形沈線文を施す。21・22は外面のみに平行沈線文を施す。23・26は中型の深鉢で，口縁部外面に平行短沈線文，胴部に綾杉沈線文で文様帯を構成するが，23は内面には施文しない。27は口縁端部に刺突列点文，内外面に横位の平行短沈線文，胴部に羽状文で文様帯を構成する。28は大型の深鉢で，口縁部内外面に短沈線文を施した後，外面に山形沈線文を施す。29は口縁端部と口縁部内外面に刺突列点文を施文する。31は中型の深鉢で口縁部内外面に横位の平行沈線文，胴部外面には山形沈線文を施す。32はやや細い施文具を用い，縦位や横位の平行沈線文を施す。

37～48は口縁部下部や胴部，底部にかけての土器である。38・40はやや大型の深鉢の胴部で，38は口縁部に近い部分に横位の平行沈線文，その下部にほぼ一定間隔の縦位の沈線文，その間を斜位の平行沈線文で充填する。40は縦位と横位の平行沈線文に加えて曲線文を施す。41は口縁下部から胴部にかけて残存し，口縁部に横位の平行沈線文，胴部は斜位の平行沈線文を充填することにより文様帯を構成する。43は比較的整った羽状文や横位の平行沈線文を施す。47の胴部は充填三角文，底部は横位の平行沈線文で文様帯を構成する。48も底部は平行沈線文を施す。

⑤第2貝層最下部出土土器（第30・31図）

49～55はⅢ類の土器で，49～51，54は口縁部が残存する。51はⅢａ４類，49はⅢｃ５類，50・54はⅢｃ４類である。

49は大型の深鉢で，口縁部文様帯がなく口縁部から胴部にかけてやや乱れた横位の平行沈線文のみを施文する。51の口縁部外面は横位の平行沈線文を施した後，山形文を施文し，胴部は縦位の平行沈線文で文様帯を構成する。54の口縁部外面の文様も51と同様であり，胴部文様帯は縦位や横位，斜位の平行沈線文の組み合わせである。

52・53・55は胴部片で，縦位や横位の平行沈線文，綾杉文などを施す。

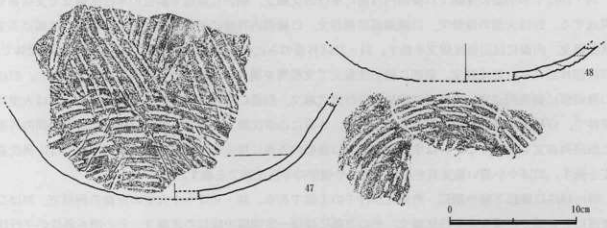
⑥褐色土層出土土器（第32図）

56～61はⅢ類の土器で，56・58はⅢｃ２類，57はⅢｄ２類である。58は口縁部内面に刺突列点文と横位の沈線文を施す。59～61は胴部片で，59は胴部上部に横位と縦位の平行沈線文，同下部は縦位のみの平行沈線文を施す。60は横位の平行沈線文内を斜位の平行沈線文で充填する。

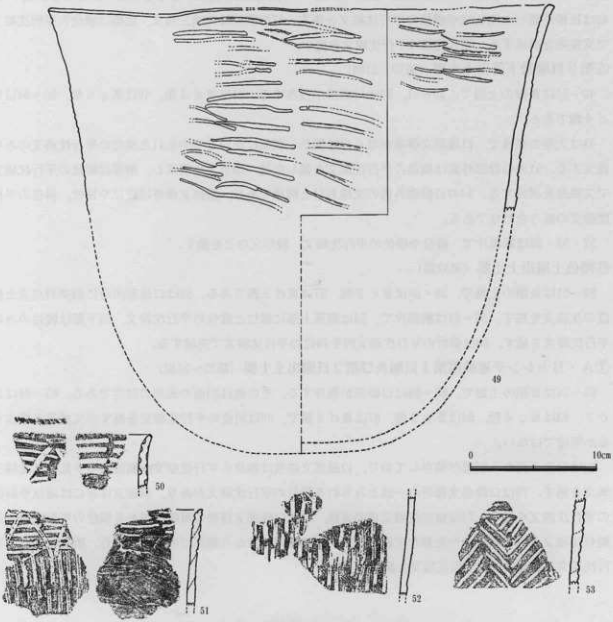
⑦Ａ・Ｂトレンチ連結部第1貝層及び第2貝層出土土器（第33～35図）

62～79はⅢ類の土器で，63～68は口縁部が残存する。その他は胴部や底部の破片である。65・68はⅢｃ２，63はⅢｃ４類，64はⅢｂ２類，67はⅢｄ４類で，66は斜位の平行沈線文を施すが文様帯を構成するか明確ではない。

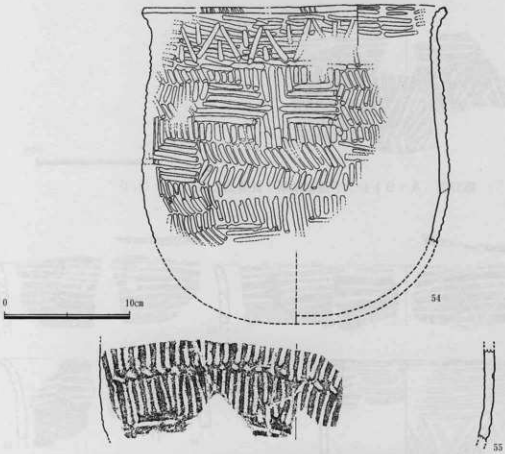
62は口縁下部から胴部が残存しており，口縁部文様帯は横位の平行沈線文，胴部はやや乱れた充填三角文を施す。70は口縁部文様帯の一部とみられる横位の平行沈線文があり，胴部文様帯には縦位や斜位の平行沈線文を施す。74は綾杉沈線文状の文様，77は口縁部文様帯の可能性がある横位の平行沈線文と綾杉沈線文とみられるやや粗雑な文様を施す。76は胴部下半から底部が残存しており，胴部は横位の平行沈線文，底部には格子目沈線文を施す。



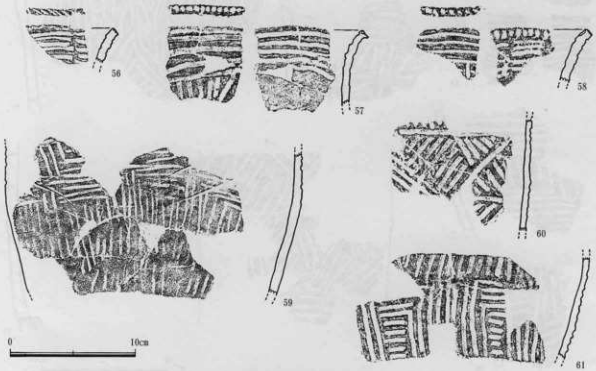
第29図　Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器３（1/3）



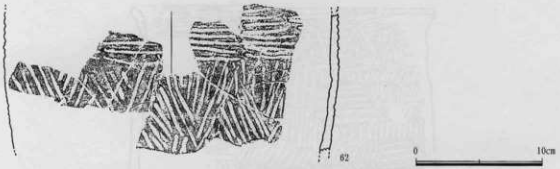
第30図　Ａトレンチ１区第２貝層最下部出土縄文土器１（1/3）



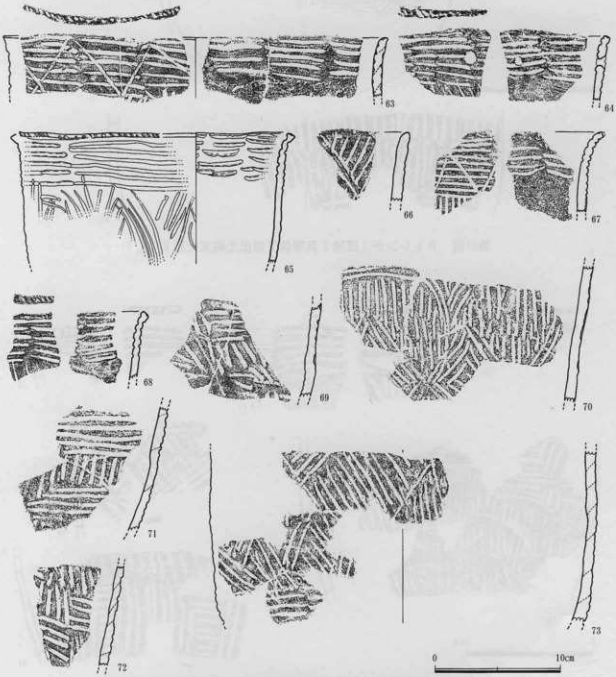
第31図　Aトレンチ1区第2貝層最下層出土縄文土器2 (1/3)



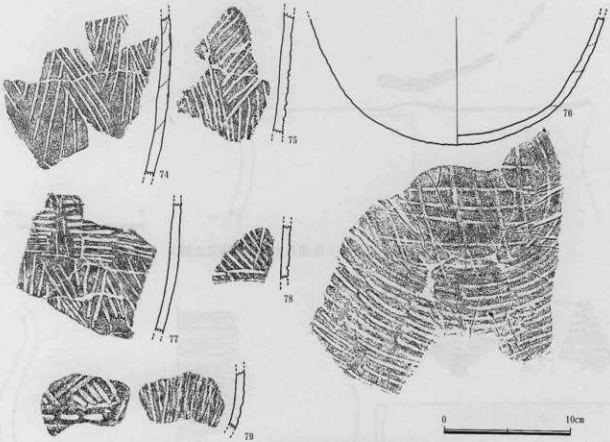
第32図　Aトレンチ1区褐色土層出土縄文土器 (1/3)



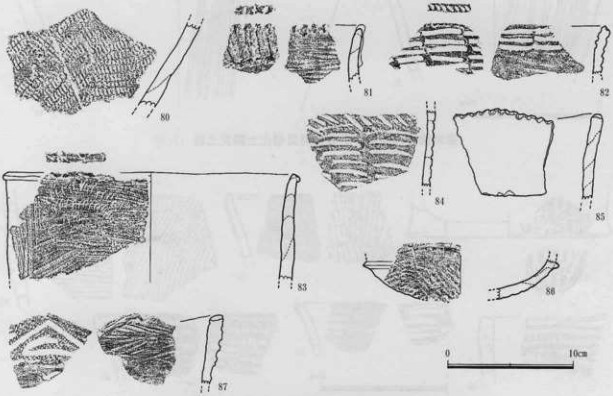
第33図　Ａ・Ｂトレンチ連結部第１貝層出土縄文土器（1/3）



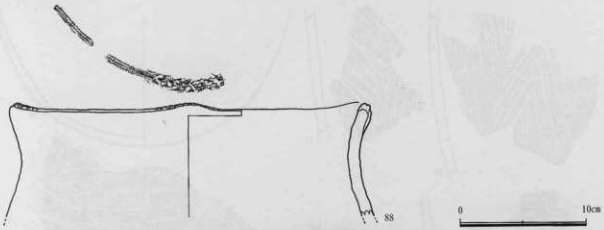
第34図　Ａ・Ｂトレンチ連結部第２貝層出土縄文土器１（1/3）



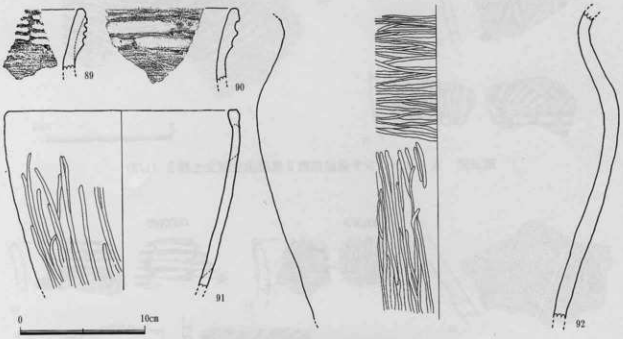
第35図　A・Bトレンチ連結部第2貝層出土縄文土器2 (1/3)



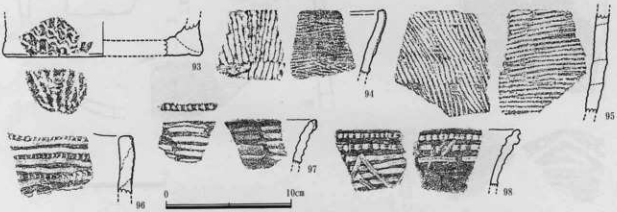
第36図　Aトレンチ2～5区混貝土層出土縄文土器1 (1/3)



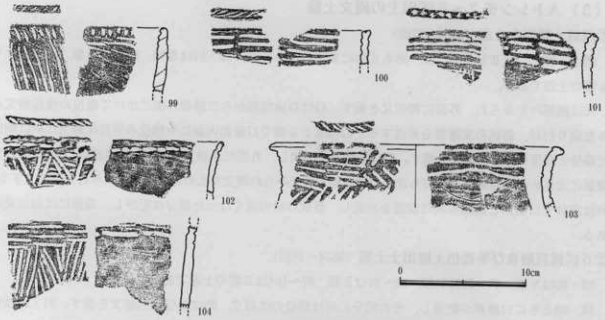
第37図　Ａトレンチ２～５区混貝土層出土縄文土器２（1/3）



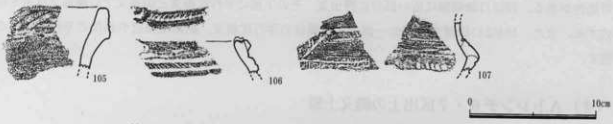
第38図　Ａトレンチ５区純貝層出土縄文土器（1/3）



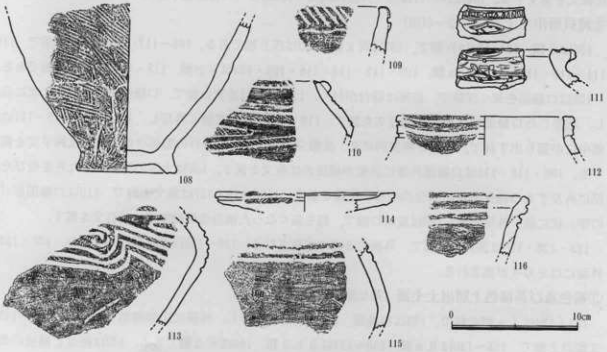
第39図　Ａトレンチ２～５区茶褐色土層出土遺物１（1/3）



第40図　Aトレンチ2～5区茶褐色土層出土遺物2 (1/3)



第41図　Aトレンチ6・7区混貝土層出土縄文土器 (1/3)



第42図　Aトレンチ6・7区純貝層出土縄文土器1 (1/3)

（３）Ａトレンチ２～５区出土の縄文土器

①混貝土層出土土器（第36・37図）

80はⅠ類，81はⅡｂ１類，83・86もⅡ類に属するとみられ，82・84はⅢ類，87はⅤｂ類，85・88はⅤａ類の土器である。

80は胴部片とみられ，外面に押型文を施す。81は口縁端部から口縁部外面にかけて縦位の隆起帯文を多数貼り付け，帯状の文様帯を形成する。82はⅢｃ２類で口縁部内面にも横位の平行沈線文，84は胴部で横位と斜位の平行沈線文を施す。83は条痕をナデ消し，外面に爪形文を施す。85は波状口縁とみられ，端部に大きめの刻目を施す。87も波状口縁を呈するとみられ縄文や太めの沈線文，刻み目文を施文する。88は深鉢で口縁部と胴部の間に頸部を形成し，波状口縁の高くなった部分は肥厚し，端部には刻目文がある。

②５区純貝層及び茶褐色土層出土土器（第38～40図）

89・90はⅤ類，91・92はⅥ類，93～96はⅡ類，97～104はⅢ類の土器である。

89，90ともに口縁部が肥厚し，その部分に89は横位の沈線文，90は横位の凹線文を施す。91・92は無文土器で，外面にミガキを施す。94はⅡｂ１類，95はⅡａ類，96はⅡｄ類である。97～103はⅢ類の口縁部で，100はⅢａ２類，97・101はⅢｃ２類，98・102はⅢｃ４類，103はⅢｄ４類で，99はⅢａ５類の可能性がある。98は口縁端部に近い部分に押引文，その下部に平行沈線文と山形文で口縁部文様帯を形成する。また，104は口縁部文様帯の一部である横位の平行沈線文，胴部は縦位や斜位の平行沈線文を施す。

（４）Ａトレンチ６・７区出土の縄文土器

①混貝土層出土土器（第41図）

105～107はⅤ類の土器で，105はⅤｂ類，106・107はⅤａ類である。105は口縁部が肥厚し，斜位の短沈線文を施文する。106は鉢の口縁部で外面に縄文や沈線文，107は胴部が屈曲し，縄文や沈線文を施す。

②純貝層出土土器（第42～44図）

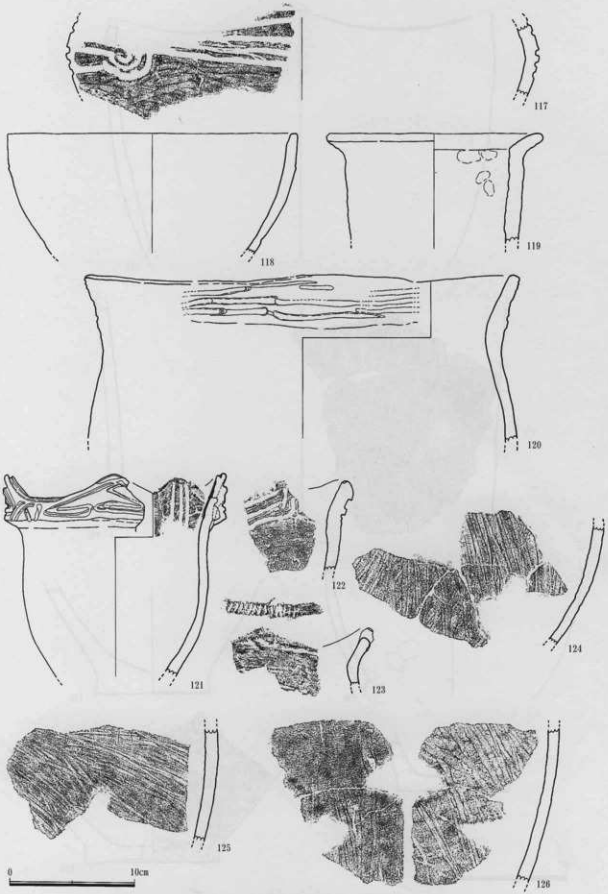
108はⅡ類，121・122はⅣ類で，121はⅣａ類，122はⅣｂ類である。109～117・120・123はⅤ類で，110・111・113・115・117はⅤａ類，109・112・114・116・120・123はⅤｂ類，118・119・127はⅥ類である。

108は口縁部を欠く深鉢で，底部は脚台が付く。121・122は波状口縁で，口縁部が「くの字」状に屈曲し，肥厚した口縁部に沈線文や刻目文を施す。110・111は頸部で強く外反し，110・113・115・117は胴部中位が張り出す鉢で，縄文や刺突列点文，沈線文を施す。113・117の胴部中位には入組鉤手文を施文する。109・112・116は口縁部外面に斜位や横位の沈線文を施す。120は大型の深鉢で，丸みを帯びた胴部に外反する口縁部外面に横位の凹線状沈線を施す。118・119・127は無文土器で，119は口縁部が「くの字」状に強く外反する。123は波状口縁で，最も高くなった部分の口縁端部に刻目文を施す。

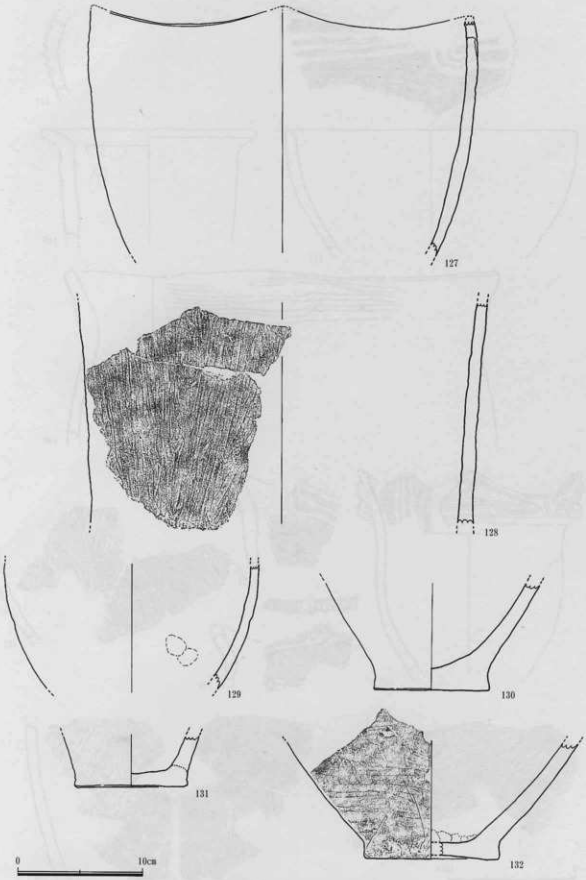
125・126・128は深鉢の胴部で，外面にミガキが施される。130～132は深鉢の底部であり，130・132の外面にはミガキが施される。

③褐色及び茶褐色土層出土土器（第45図）

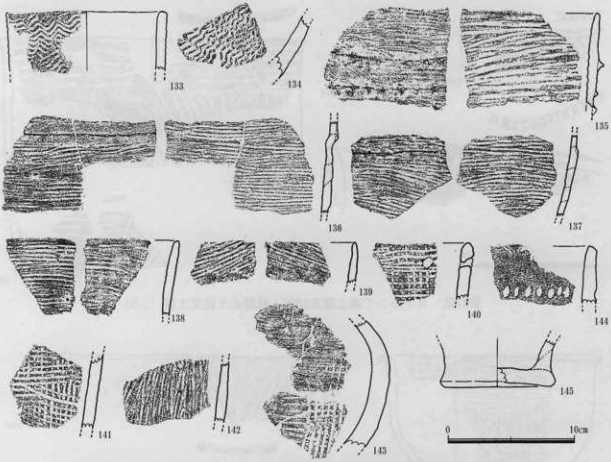
133・134はⅠａ類の鉢で，133は口縁部，134は胴部が残存し，外面に山形押型文を施す。135～145はⅡ類の土器で，138～140はⅡａ類，135～137はⅡｂ２類，144はⅡｄ類である。140は縦位と横位の条痕を施し，口縁部に穿孔がある。135は３条，136・137は１条の隆起帯文を施す。144は口縁部外面に横位



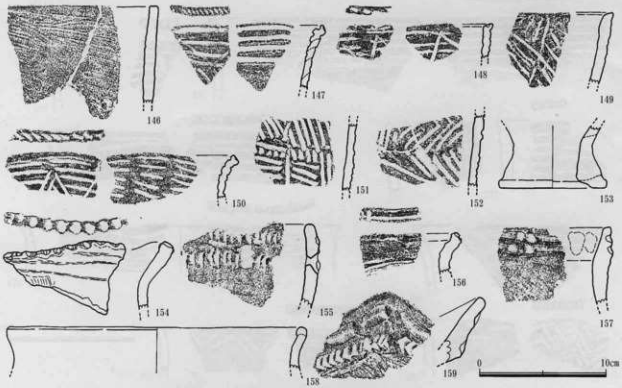
第43図　Aトレンチ6・7区純貝層出土縄文土器2 (1/3)



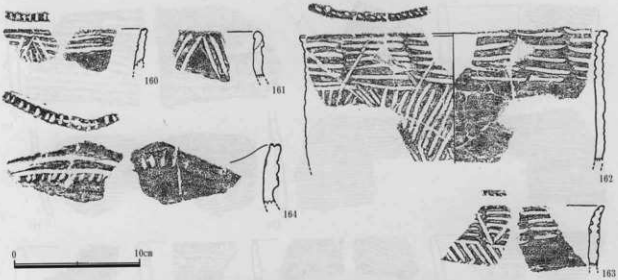
第44図　Ａトレンチ６・７区純貝層出土縄文土器３（1/3）



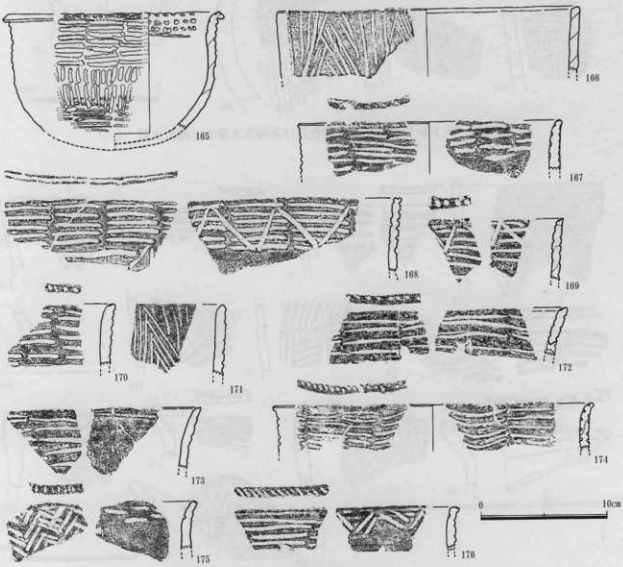
第45図　Ａトレンチ６・７区褐色及び茶褐色土層出土縄文土器（1/3）



第46図　Ａトレンチ出土層位不明縄文土器（1/3）



第47図　Bトレンチ表土層及び第1貝層出土縄文土器（1/3）



第48図　Bトレンチ第2貝層出土縄文土器1（1/3）

の爪形文を施文する。143は鉢の胴部とみられ，145は底部である。

（5）Aトレンチ出土層位不明の縄文土器（第46図）

146はⅡ類の深鉢で，内外面に条痕後，ナデを施す。147～152はⅢ類の深鉢で，147～150は口縁部，151・152は胴部である。148はⅢａ４類，147・150はⅢｃ４類で，149はⅢａ５類の可能性がある。153は台付鉢とみられ，154は波状口縁で口縁部が強く外反するⅤａ類の土器とみられる。155は外面に刻目文を施す鉢で，穿孔が１ヶ所ある。156は口縁端部に沈線文と刺突文，157はⅤｂ類で，肥厚する口縁部外面に横位の沈線文と刺突文を施す。158はⅥ類の口縁部が外反する無文の深鉢，159はⅣｂ類の深鉢で，波状口縁を呈する。口縁部が断面三角形状に肥厚し，その外面に沈線文や刺突文を施す。

（6）Bトレンチ１～３区出土の縄文土器

①表土層及び第１貝層出土土器（第47図）

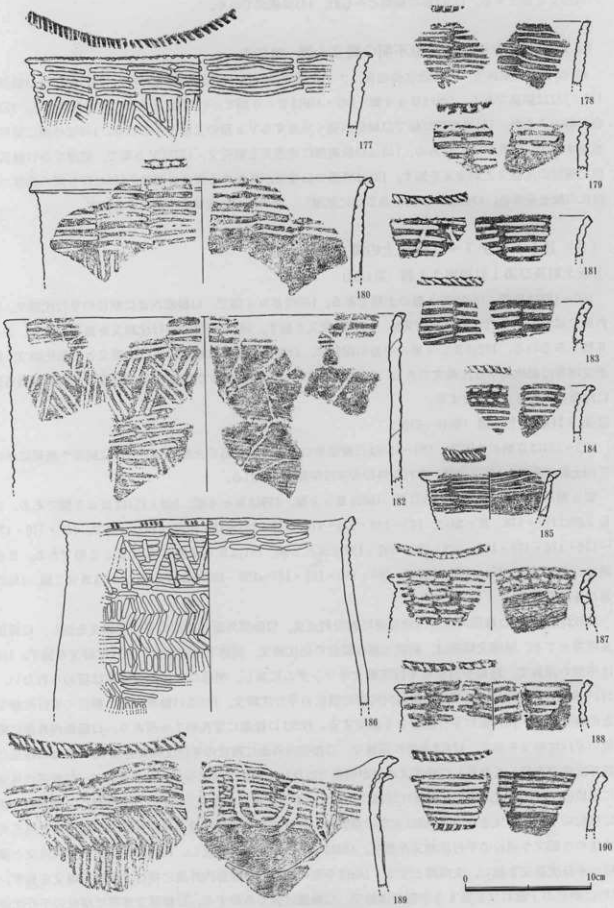
160～163はⅢ類，164はⅣａ類の土器である。160はⅢｂ４類で，口縁部内面に横位の平行沈線文，同外面には横位の平行沈線文を施文後，山形沈線文を施す。161は斜位の平行沈線文を施しており，Ⅲａ５類とみられる。162はⅢｃ４類の中型の深鉢で，口縁部文様帯は横位の平行沈線文と山形沈線文，胴部文様帯は斜位の平行沈線文である。163も同様にⅢｃ４類の深鉢である。164は肥厚する口縁部内外面に沈線文や刻目文を施文する。

②第２貝層出土土器（第48～51図）

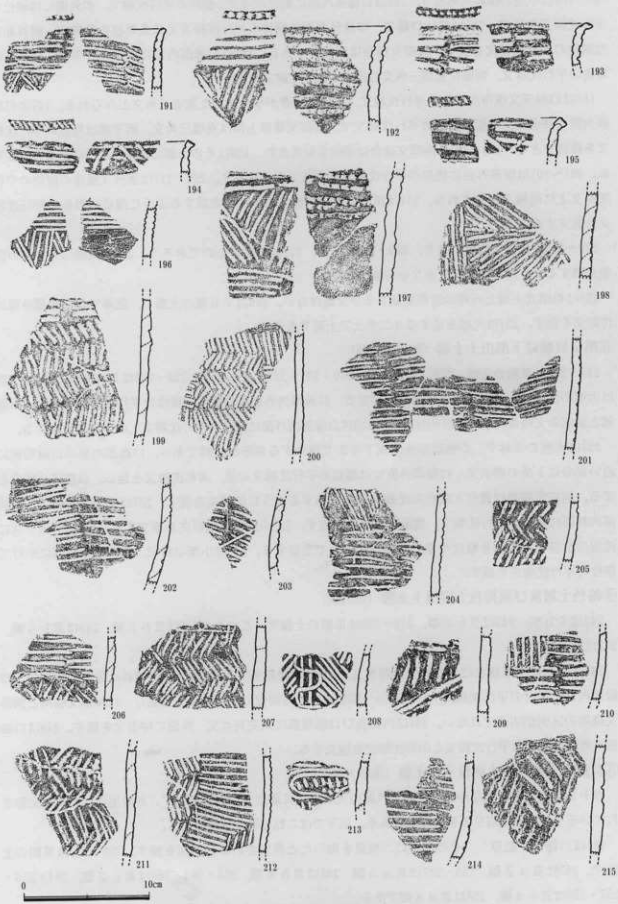
165～224はⅢ類の土器で，165～195は口縁部や口縁部から胴部の土器，196～224は胴部や底部にかけての土器である。165は浅鉢，それ以外の大半は深鉢とみられる。

Ⅲａ類は，166・168・169・171で，168はⅢａ２類，169はⅢａ４類，166・171はⅢａ５類である。Ⅲｂ２類は177・178，Ⅲｃ類は，167・170・172～176・179・181～183・190～192，194で，167・170・172～174・176・179・182・183・190～192・194はⅢｃ２類，181はⅢｃ４類，175はⅢｃ５類である。Ⅲｄ類は，165・180・184～189・193で，165・180・185・187～189・193はⅢｄ２類，184はⅢｄ３類，186はⅢｄ４類である。

165は浅鉢で，口縁部内面と口縁端部に刺突列点文，口縁部外面に横位の平行沈線文を施し，口縁部文様帯とする。胴部文様帯は，胴部上部は縦位の短沈線文，胴部下部は横位の平行沈線文を施す。166は中型の深鉢で，縦位や斜位の平行沈線文をランダムに施し，明確な口縁部文様帯は認められない。171も同様とみられる。167は口縁部内外面に横位の平行沈線文，168は口縁部内面に横位の平行沈線文と山形沈線文，同外面に平行沈線文を施文する。172は口縁部に穿孔が１ヶ所あり，口縁部内外面に横位の平行沈線文を施す。174は中型の深鉢で，口縁部内外面に横位の平行沈線文を施す。175は口縁部に綾杉沈線文を施しており，口縁部文様帯が明確ではない。177・180はやや大型の深鉢で，口縁部内外面に横位の平行沈線文，胴部文様帯には縦位や斜位の平行沈線文を施す。178・179も同様に口縁部内外面に横位の平行沈線文を施す。182は大型の深鉢で，口縁部内外面に横位の平行沈線文，胴部に充填三角文状の沈線文や横位の平行沈線文を施す。184は口縁部が大きく外反し，口縁部外面に刺突列点文と横位の平行沈線文を施し，文様帯とする。185は小型の鉢で，口縁部内外面に横位の平行沈線文を施す。186は胴部が下膨れ状を呈する中型の深鉢で，口縁部は強く外反する。口縁部文様帯は横位の平行沈線文を施文後，山形沈線文を施しており，胴部文様帯は羽状文や横位や縦位の平行沈線文で構成する。



第49図　Bトレンチ第2貝層出土縄文土器2 (1/3)



第50図　Bトレンチ第2貝層出土縄文土器3 (1/3)

187・188は小型の深鉢であろう。187は口縁部内面に刺突列点文と横位の平行沈線文，同外面には横位の平行沈線文を施す。189は波状口縁で，口縁部内面は横位の平行沈線文と２条単位の曲線文，同外面には横位の平行沈線文を施す。胴部文様帯は羽状文である。192は口縁部内面に横位の押引文，同外面に横位の平行沈線文，胴部に充填三角文と推定される沈線文を施す。

196は口縁部文様帯が横位の平行沈線文，胴部文様帯がやや崩れた充填三角文とみられる。197の口縁部内面は押引文，外面は横位の平行沈線文で，胴部文様帯上部は充填三角文，同下部は横位の平行沈線文を確認できる。199・200の胴部文様帯は羽状文が含まれ，199はその上部に横位の平行沈線文を施文する。201～207は胴部外面に横位の平行沈線文や羽状文などを施す。208・217は胴部文様帯の縦位の平行沈線文上に曲線文が施される。218は横位の平行沈線文の内部を充填するように縦位や斜位の平行沈線文を施文する。

220～223は深鉢の底部であり，220・221は中型，222は小型のものであろう。222の底部は十字文の間を充填するように平行沈線文をクモの巣状に施す。

225は曽畑式土器と同様の器形を呈するが文様はない。226はＶｂ類の土器で，肥厚する口縁部外面に沈線文を施す。227は丸底を呈するミニチュア土器である。

③第２貝層最下部出土土器（第52・53図）

228～241はⅢ類の土器。228はⅢａ５類，230・231・237はⅢｃ２類，229・233はⅢｄ４類である。228は大型の深鉢で，口縁部に１ヶ所穿孔がある。口縁部内外面及び胴部に横位の平行沈線文を施し，口縁部と胴部の文様帯に明確な区別はない。229は口縁部内外面に横位の平行沈線文と山形文を施文する。

233は大型の深鉢で，口縁部から胴部下半まで残存する良好な資料であり，口縁部内面の口縁端部に近い部分に１条の押引文，口縁部外面には横位の平行沈線文の後，山形沈線文を施し，口縁部文様帯とする。胴部文様帯は横位と縦位の沈線文内を充填するように沈線文を施す。237は中型の深鉢で，口縁部内外面に横位の平行沈線文，胴部に綾杉文を施す。238も胴部に綾杉文を施文する。239は斜格子状に沈線で区画した内部を縦位や横位の平行沈線文で充填する。241は小型の鉢で，胴部から底部にかけて横位の平行沈線文を施す。

④褐色土層及び黒褐色土層出土土器（第54図）

242はⅠｂ類，243はⅡｂ２類，244～250はⅢ類の土器で，このうち245はⅢｂ５類，249はⅢｂ４類，247はⅢｄ類である。

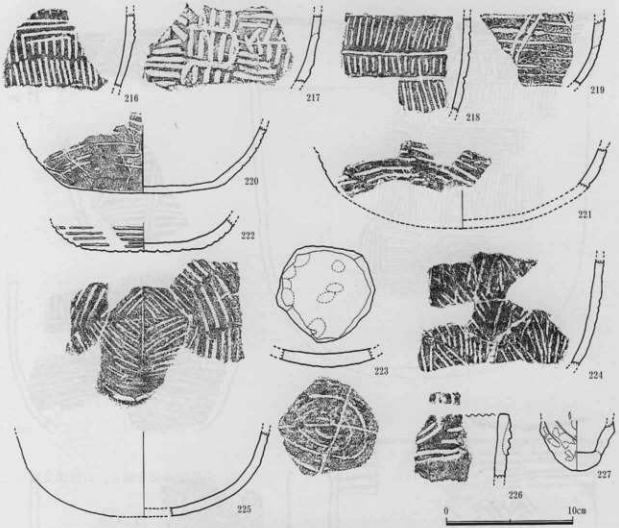
242は外面に回転施文による格子目押型文，243は微隆起帯文を横位に施す。245は中型の深鉢で，口縁部内面に横位の平行沈線文，口縁部から胴部外面には斜位の平行沈線文を施し，口縁部文様帯と胴部文様帯の区別が明確ではない。247は内面及び口縁端部に刺突列点文，外面に押引文を施す。249は口縁部内外面に横位の平行沈線文と山形沈線文を施文する。

⑤貝層出土及び出土層位不明土器（第55・56図）

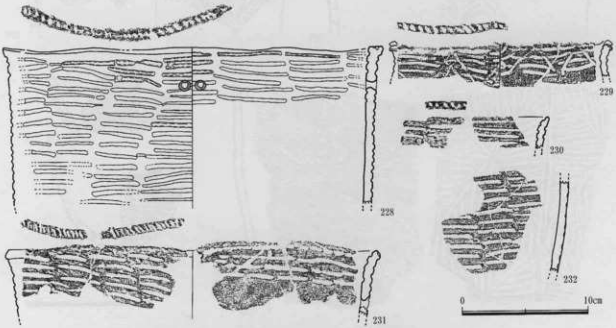
Ｂトレンチ出土品のなかには，第１貝層出土か第２貝層出土か区別されず「貝層出土」とのみ記録されている土器や出土層位不明の土器がある。以下ではこれらについて述べる。

251は口縁部が肥厚し，その部分に二枚貝を用いたと推定される刺突文を施す。252～270はⅢ類の土器で，253はⅢａ２類，252・267はⅢａ５類，268はⅢｂ４類，255・264・266はⅢｃ２類，254・256・257・259はⅢｃ４類，258はⅢｄ４類である。

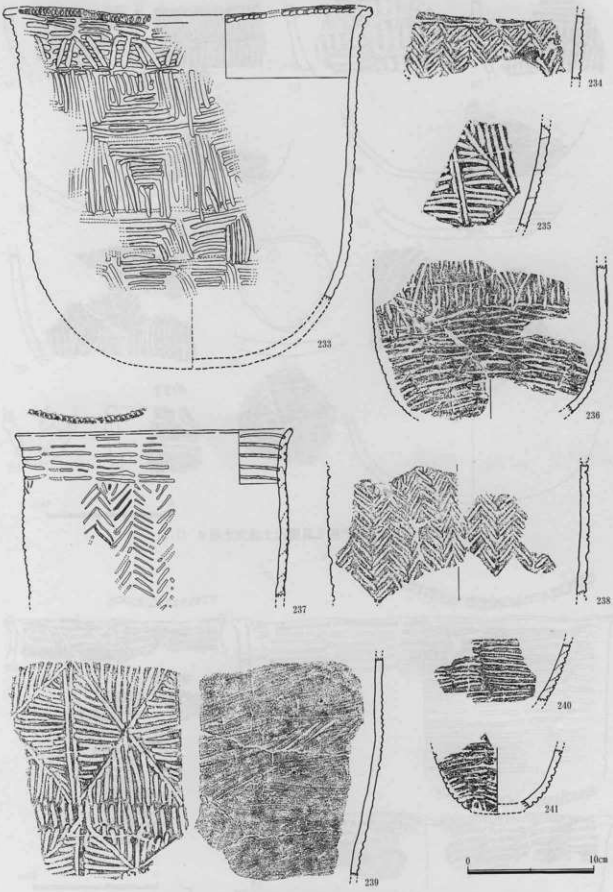
252の口縁部は縦位の平行沈線文を施し，胴部文様帯との区別はない。256は口縁部に１ヶ所穿孔を施



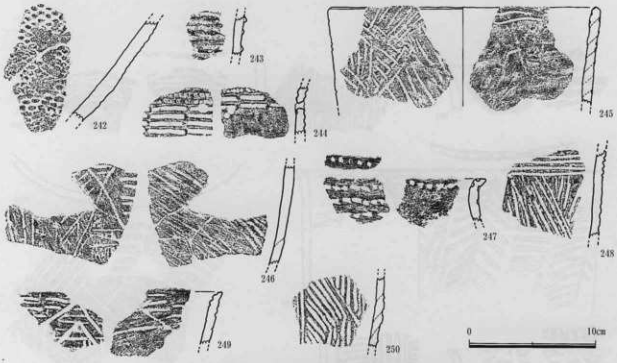
第51図　Ｂトレンチ第２貝層出土縄文土器４（1/3）



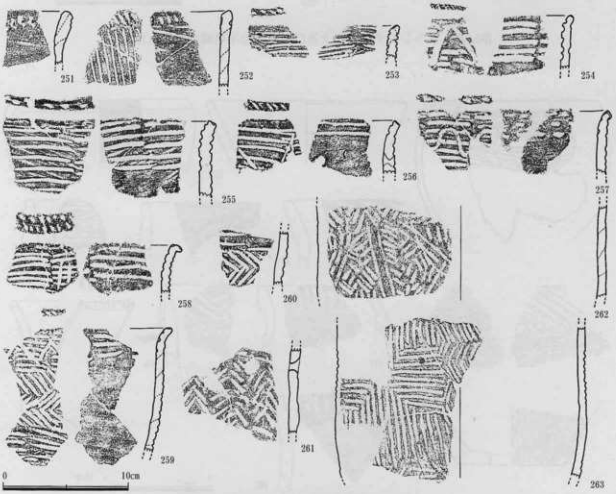
第52図　Ｂトレンチ第２貝層最下部出土縄文土器１（1/3）



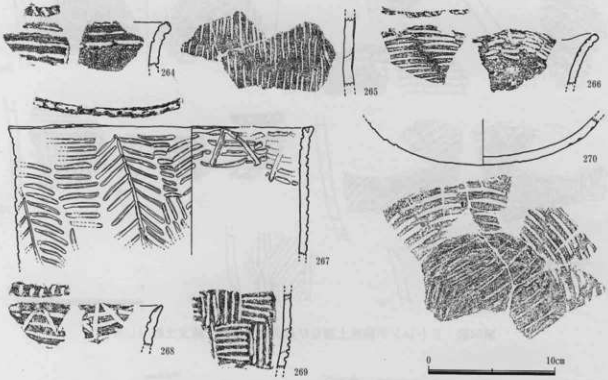
第53図　Ｂトレンチ第２貝層最下部出土縄文土器２（1/3）



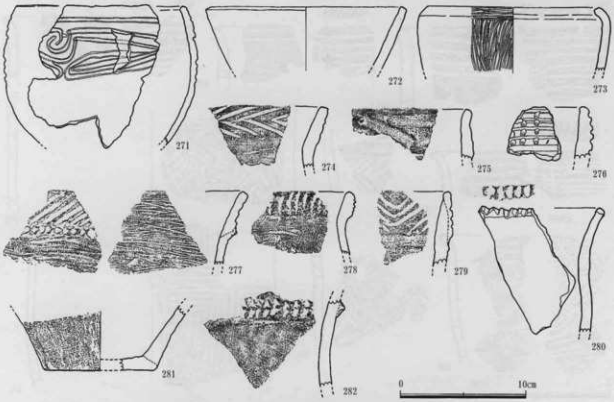
第54図　Bトレンチ褐色土層及び黒褐色土層出土縄文土器（1/3）



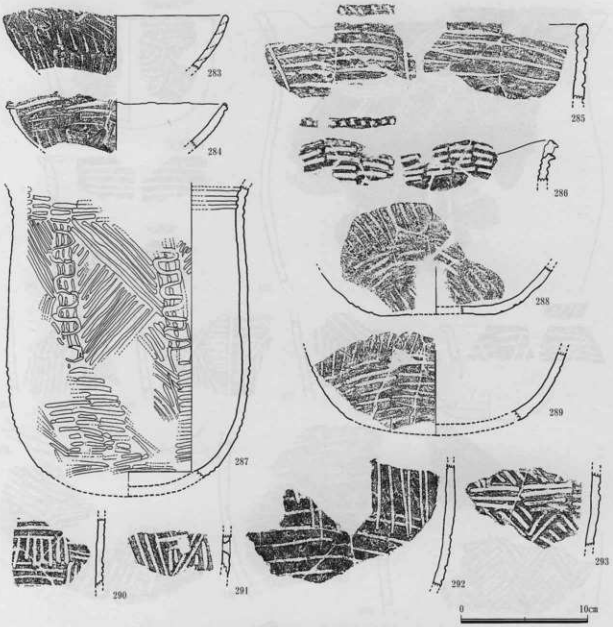
第55図　Bトレンチ貝層出土縄文土器（1/3）



第56図　Bトレンチ貝層出土及び出土層位不明縄文土器（1/3）



第57図　Cトレンチ第1貝層出土縄文土器（1/3）



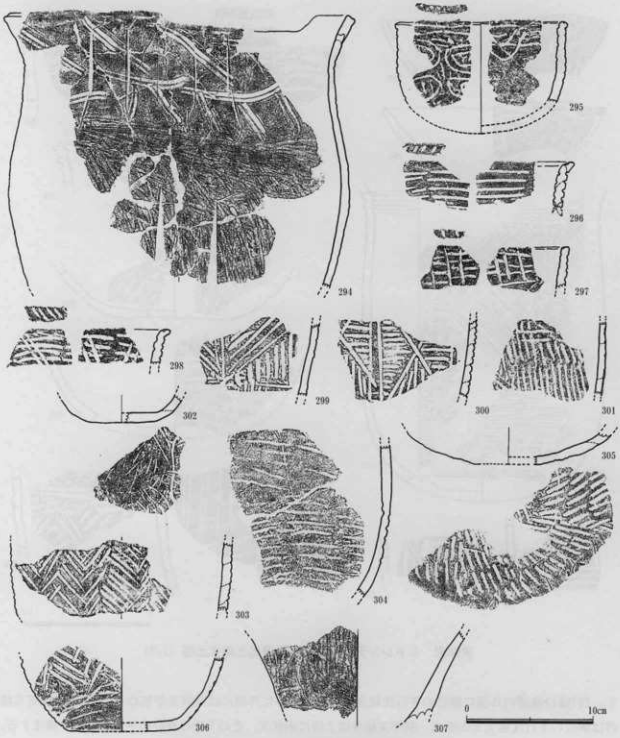
第58図　Ｃトレンチ礫層・第２貝層出土縄文土器（1/3）

す。257は口縁部内外面に横位の平行沈線文を施し，さらに外面には曲線文が加わる。259の口縁部文様帯は横位の平行沈線文と山形文，胴部文様帯は上位に羽状文，その下部に横位の平行沈線文で構成する。262・263は中型深鉢の胴部で，263の胴部文様帯は羽状文や十字沈線文の空間部分を充填するように縦位や横位の沈線文を施す。266は波状口縁で，口縁部内外面に横位の平行沈線文を施す。267は中型の深鉢で，口縁部文様帯と胴部文様帯に区別がなく，綾杉文と平行沈線文を交互に施文する。270は底部で平行沈線文を施す。

（７）Ｃトレンチ出土の縄文土器

①第１貝層出土土器（第57図）

271はＶｂ類の浅鉢で，器形はボウル状を呈し，胴部上半部に鉤手沈線文を施す。272・273はⅥ類の土



第59図　Cトレンチ第2貝層出土縄文土器（1/3）

器。272は無文の浅鉢で，ラッパ状に開き胴部からそのままの傾斜で口縁部にいたる。273は無文の鉢で，口縁部が内湾し，外面に丁寧なミガキを施す。

274～279はⅤb類の土器で，口縁部はいずれも肥厚する。274は口縁部に羽状文，276は沈線文と刺突列点文が施す。277は斜位の平行沈線文，その下部に突帯状の粘土紐を貼り付け，刺突列点文を施す。280はⅤa類で，口縁部は外反し，端部に刻目文を施す。281は深鉢の底部である。

②礫層・第2貝層出土土器（第58図）

283～293はⅢ類の土器で，283・284は浅鉢，それ以外は深鉢である。283・284は外面に横位や縦位の平行沈線文を施す。285はⅢａ４類，286はⅢｄ２類。287は中型の深鉢で，口縁端部と底部を欠損するが，全体の文様構成が判明する良好な資料である。口縁部内外面に横位の平行沈線文，胴部文様帯の上半分は一定間隔に縦位の平行沈線文とその上に曲線文を施文し，内部を斜位の沈線文で充填する。下部は主に横位の平行沈線文を施す。288・289は胴部から底部にかけての土器片で，丸底を呈し，平行沈線文を施文する。290～293は胴部片で，平行沈線文を施す。

③第２貝層出土土器（第59図）

294はⅡｃ類の深鉢。丸みを帯びた胴部と外反する口縁部との間に頸部を形成し，条痕後に２本単位のヘラ状工具で横位や斜位の沈線文を施文する。

295～306はⅢ類の土器で，295は浅鉢，それ以外は深鉢とみられる。295は口縁部内外面，胴部に横位の平行沈線文や曲線文を施す。295はⅢｃ５類，Ⅲｃ４５296はⅢｃ２類，298はⅢｃ４類，297はⅢｂ４類である。299～306は胴部から底部の土器片で，300は胴部に縦位の沈線とＸ字文を施文し，内部を縦位と横位の平行沈線文で充填する。305はクモの巣状に短沈線文を施す。306は平底を呈し，胴部に綾杉文，底部に横方向の平行沈線文を施文する。307は深鉢の胴部から底部にかけての土器片である。

④黒色土層以下出土土器（第60図）

308・309はⅡｂ３類の深鉢。308は口縁部に弧状の隆起帯文，口縁部から胴部にかけて縦位，胴部に横位の隆起帯文を施す。

310～316はⅢ類の深鉢で，310・311はⅢｃ２類である。310は大型の深鉢で，口縁部内外面に横位の平行沈線文，胴部に縦位と横位の平行沈線文で文様帯を構成する。315も大型の深鉢で，横位の平行沈線文間に充填三角文を施す。

⑤Ｃトレンチ（推定）貝層直下出土土器（第61～63図）

317～343はⅢ類の土器。319・324はⅢｂ２類，323はⅢｃ２類，317・320・322はⅢｃ４類，321はⅢｃ５類，318はⅢｄ２類である。317は口縁部内面に横位の平行沈線文，外面には横位の平行沈線文と山形沈線文を施す。320は口縁部に穿孔を１ヶ所施す。321は中型の深鉢で，口縁部と胴部の文様帯に区別がなく，横位の平行沈線文を施文する。323も同様の文様構成とみられる。

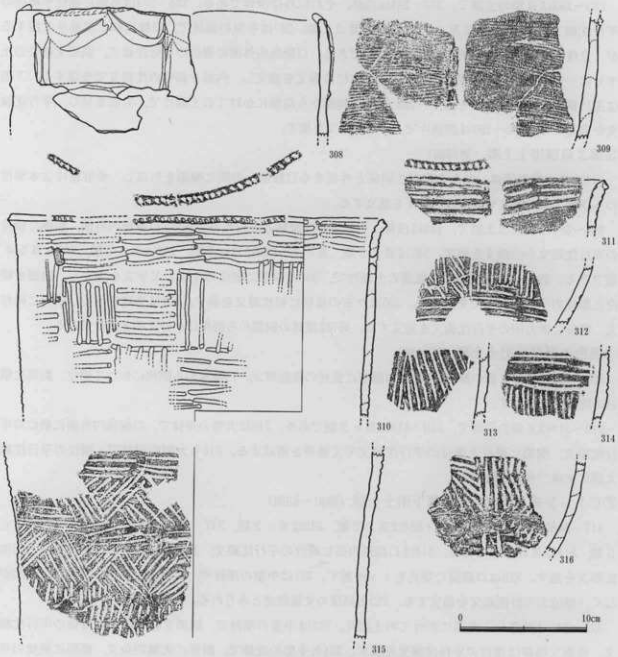
325～343は胴部から底部にかけての土器片。328は中型の深鉢で，胴部文様帯は主に縦位の平行沈線文，底部文様帯は横位の平行沈線文を施す。331も中型の深鉢で，胴部に充填四角文，底部に縦位の平行沈線文を施す。332は穿孔を１ヶ所有し，充填四角文とみられる沈線を施す。340・341は小型の深鉢で，340は底部に横位の平行沈線文を施す。343は横位の沈線文の間を縦位の平行沈線文で充填する。

（８）出土トレンチ不明の縄文土器（第64～67図）

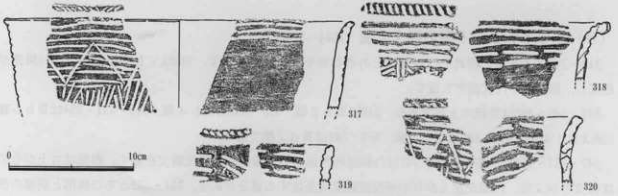
344～346はⅠｂ類の深鉢。口縁端部と外面に格子目押型文を施す。348はⅤｂ類の土器で，口縁部が肥厚し，横位の平行沈線文を施す。

347・349～363はⅢ類の土器である。347はⅢｂ２類，350・355はⅢｂ４類，349・351・354はⅢｂ５類，356はⅢｃ４類，352・360はⅢｃ５類，353・361はⅢｄ２類である。

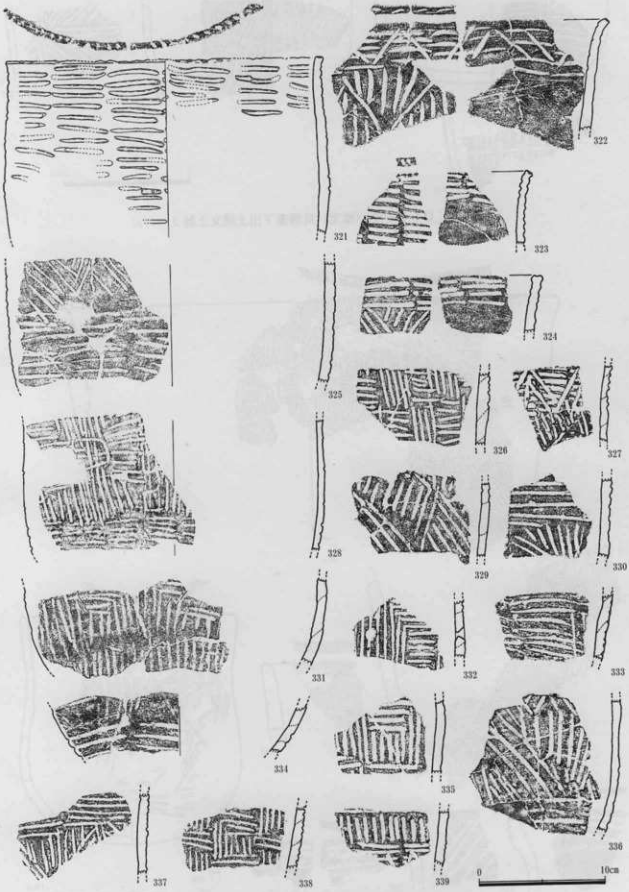
347・351・352は小型の深鉢。347は口縁部内外面ともに横位の平行沈線文を施す。胴部は右上がりの沈線文を施文後，内部を左上がりの平行沈線文で充填する部分がある。351・352とも口縁部と胴部の区別なく外面に横位の平行沈線文を施す。353・360・361は大型の深鉢。353は口縁部文様帯に平行沈線文，



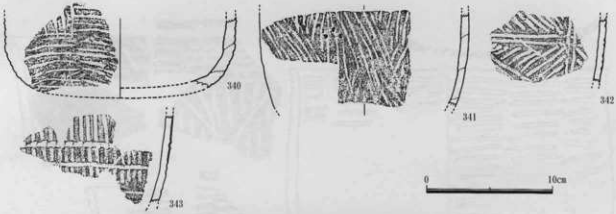
第60図　Cトレンチ黒色土層以下出土縄文土器（1/3）



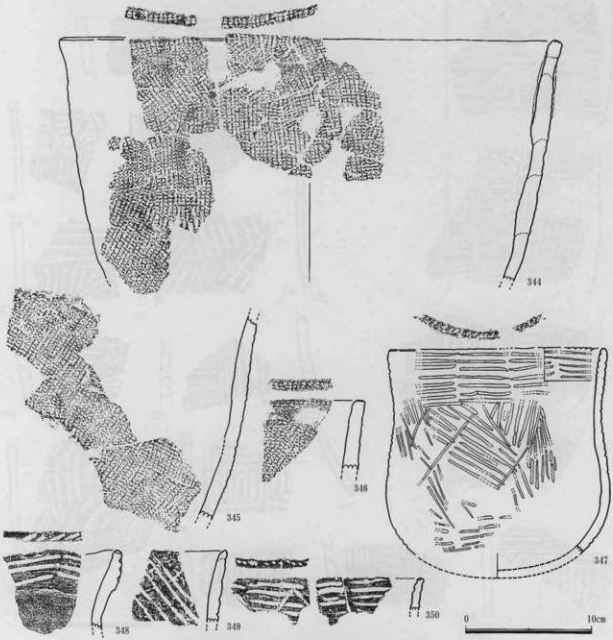
第61図　Cトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器1（1/3）



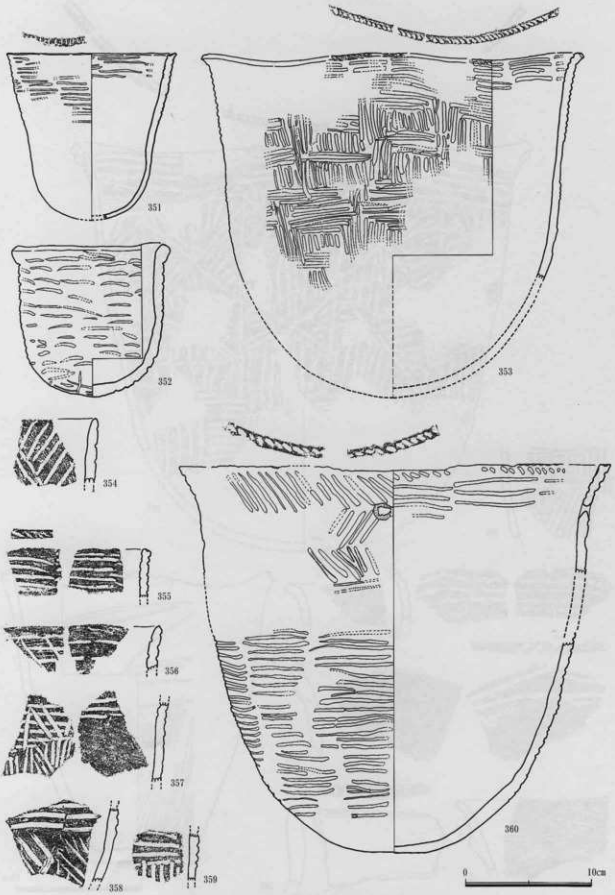
第62図　Cトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器2（1/3）



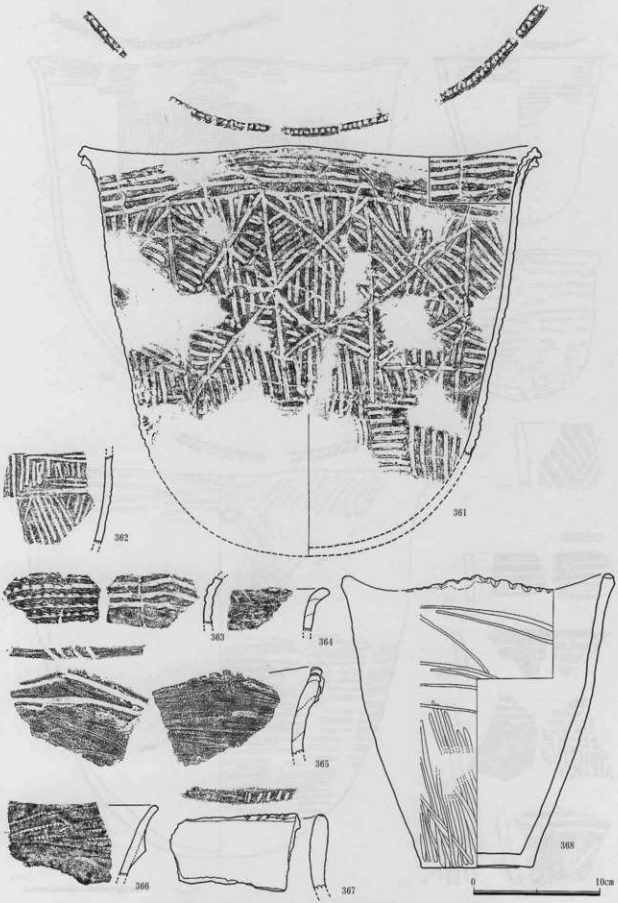
第63図　Ｃトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器３（1/3）



第64図　出土トレンチ不明縄文土器１（1/3）



第65図　出土トレンチ不明縄文土器2 (1/3)



第66図　出土トレンチ不明縄文土器３（1/3）

胴部文様帯に充填四角文を施文する。360は口縁部外面から胴部上面にかけて羽状文を施し，それ以下は横位の平行沈線文を施す。361は口縁部内外面に平行沈線文，胴部上半は縦位にほぼ等間隔の沈線を施文後，Ｘ字文で区画し，内部を平行沈線文で充填する。胴部下半は縦位と横位の沈線文を施す。

365はⅣｂ類，366はⅣａ類，367・368はＶａ類，369・370はⅥ類の土器である。365は波状口縁を呈し，口縁部を肥厚させる。366は口縁部に粘土帯を貼り付け，断面が「くの字」状を呈し，外面に刺突文を施す。368は深鉢で波状口縁を呈し，口縁端部に刻み目を施し，胴部から底部にかけてやや粗いミガキを施す。369は鉢で，器壁が厚く，外面にハケメを施す。370は無文の深鉢で，内面に丁寧なミガキを施す。372・373はＶ類で，372は外面に鉤手文を施文し，口縁部に穿孔が１ヶ所ある。373は口縁部と胴部の境が屈曲しており，外面に磨消縄文を施す。374はＶａ類の胴部片であり，鉤手文を施す。

第３節　石器・石製品・貝製品

（１）出土した石器・石製品・貝製品の概要

曽畑貝塚から出土した石器は，石鏃，石匙，削器，石錘，磨製石斧，石製垂飾，円盤状石器，棒状石器，研磨痕のある石器などである。石材については，石鏃は黒曜石が多く，石匙や削器は安山岩や粘板岩が多い。それ以外の石器には，安山岩や蛇紋岩，砂質や泥質のホルンフェルスなどを石材として用いている。また，石器や石製品以外に斧足類（二枚貝）製の貝輪片が出土した。

（２）Ａトレンチ出土の石器・石製品（第68・69図）

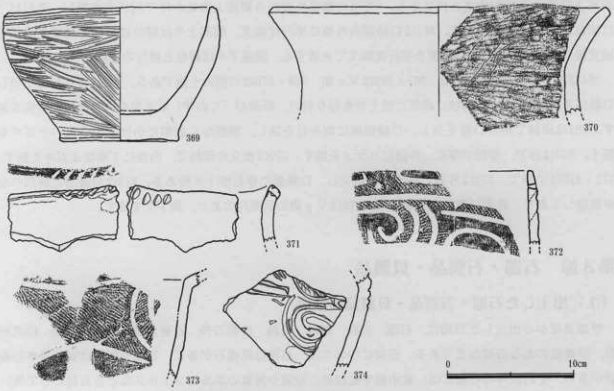
375～378は石鏃である。石材は376が流紋岩，それ以外は黒曜石を用いる。375・376は先端部を欠損した有茎石鏃で，376は大型品である。377も有茎石鏃で，茎先端部が欠損するが，ほぼ完形品である。石材は黒曜石を用いる。378は黒曜石の無茎石鏃で，基部の一部を欠損する。379は安山岩の削器である。380～384は磨製石斧。380は珪岩製の小型品で，刃部が頭部にくらべて幅広く，台形状を呈する。381は蛇紋岩製の小型品で，刃部はやや丸みを帯び，体部は扁平で，丁寧な研磨が施されている。382は刃部から体部中央付近が残存するもので，石材は玢岩の可能性がある。383は刃部を欠損するもの，384は刃部及び頭部を欠く。

385・386は円盤状石器。385は扁平な円盤状を呈し，周囲を打ち欠いており，石材は泥岩ホルンフェルスとみられる。386もほぼ同様の形状を呈するが，片面に浅い窪みがある。石材は安山岩である。387は石製垂飾で，穿孔部分から欠損しており，表面は丁寧に研磨されている。388は用途不明の研磨痕がある石器。粘板岩製で，端部は丸みを帯びている。389も同様に用途不明の玢岩製とみられる棒状石器で，表面は丁寧に研磨されている。

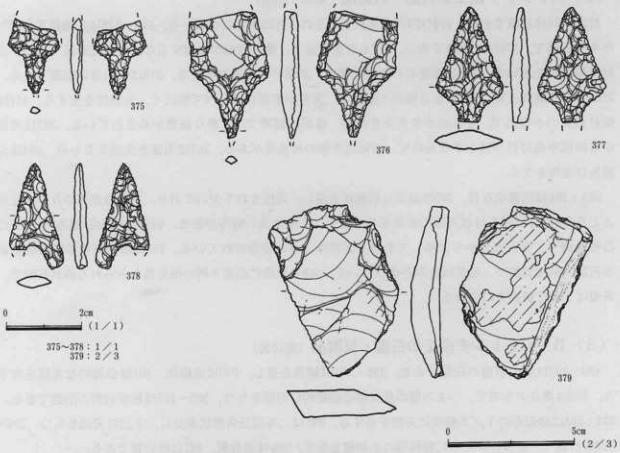
（３）Ｂ・Ｃトレンチ出土の石器・貝製品（第70図）

390～392は安山岩製の石匙である。390・391は縦長を呈し，390は直線的，391は曲線的な刃部を有する。392は横長のもので，つまみ部の反対側に曲線的な刃部をもつ。393～395は粘板岩製の削器である。393・394は縁辺部の１／２程度に刃部を有する。395は二等辺三角形状を呈し，１辺に刃部をもつ。396・397は石錘で，紐掛けのために礫両端に小剥離を施す。396は泥岩製，397は砂岩製である。

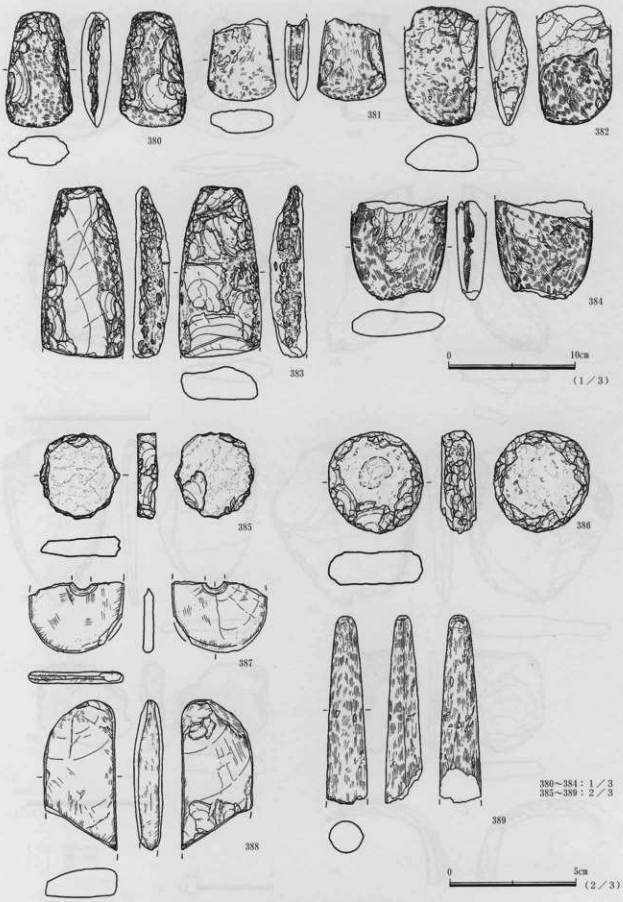
398は貝輪で，斧足類（二枚貝）の縁辺部を利用して製作されており，表面は丁寧に研磨を施す。



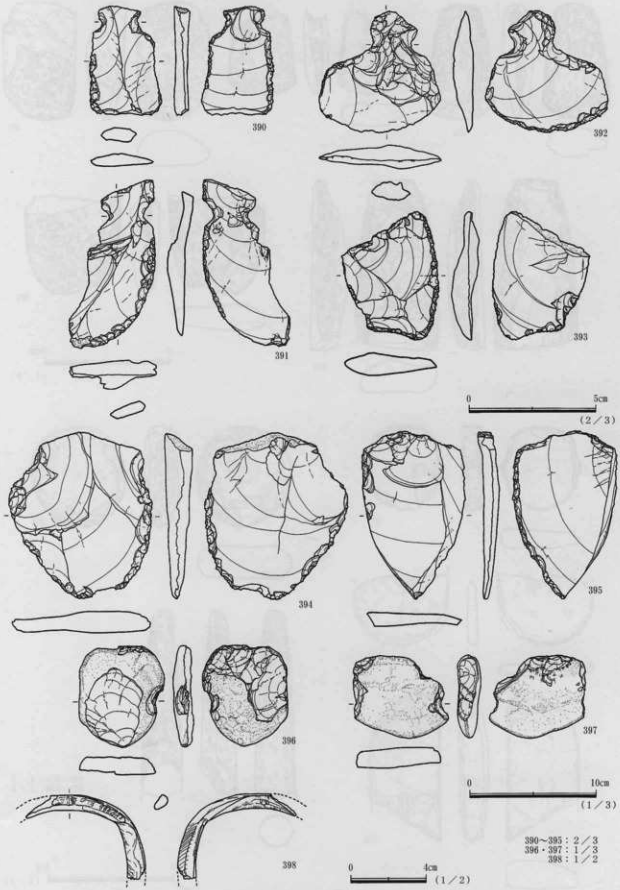
第67図　出土トレンチ不明縄文土器４（1/3）



第68図　Ａトレンチ出土石器（2/3，1/1）



第69図　Aトレンチ出土石器・石製品（1/3，2/3）



第70図　Ｂ・Ｃトレンチ出土石器・貝製品 (1/3, 1/2, 2/3)

第1表　縄文土器・土製品観察表（カッコ内の数字は復元値）

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
1	289	A1-1	撹乱層	Ⅱb1 深鉢		口縁～胴部	条痕→ナデ／ナデ	／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／褐灰(10YR4/1)	角閃石・砂粒・長石・石英	良好		9.1	
2	68	A1-1	撹乱層	Ⅱb2 深鉢		胴部	条痕／条痕→ナデ	／隆起帯文／－	黒褐(7.5YR3/1)／灰褐(7.5YR4/2)	粗砂粒（1mm）	良好		3.6	
3	41	A1-1	撹乱層	Ⅲb1 深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	刺突列点文／刺突列点文，沈線文／刺突列点文	灰黄褐(10YR5/2)／にぶい褐(7.5YR6/3)	長石・角閃石	良好		5.7	
4	159	A1-3	表土層	Ⅲb5 深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	／沈線文／刺突列点文	にぶい褐(7.5YR5/3)／にぶい褐(7.5YR5/3)	石英・長石・角閃石・砂粒	良好		4.9	外器面に煤付着
5	160	A1-3	表土層	Ⅲb5 深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	／沈線文／刺突列点文	にぶい褐(7.5YR6/3)／褐灰(7.5YR4/1)	石英・長石・角閃石・砂粒	良好		3.7	4と同一個体か
6	338	A1-2	表土層	Ⅲ 深鉢		胴部	ナデ／ナデ	／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR5/1)	長石・角閃石	良好		7.6	
7	152	A1-1	撹乱層	Ⅲ 深鉢		胴部	ナデ／ナデ	／刺突列点文，沈線文／－	灰褐(7.5YR6/2)／褐灰(7.5YR4/1)	石英・長石・角閃石・砂粒	良好		6.4	
8	176	A1-1	撹乱層	Ⅴb 鉢		口縁部	ミガキ／ミガキ	／縄文，沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/2)／浅黄橙(10YR8/3)	石英・長石・角閃石	良好		6.3	
9	44	A1	表土層		深鉢	胴～底部	ナデ／ナデ	－／－／－	にぶい赤褐(5YR5/4)／にぶい赤褐(5YR5/4)	長石・角閃石	良好	(12.4)	6.0	
10	266	A1-1	撹乱層	Ⅳ 台付鉢？		脚部	ケズリ，ナデ／ナデ	／縄文，刺突列点文，凹線文／－	黒褐(7.5YR5/1)／にぶい橙(7.5YR7/3)	長石・角閃石（微細粒）	良好	(12.8)	4.6	一部に赤色顔料有
11	164	A1-3	第1貝層	Ⅲ 深鉢		胴部	条痕→ナデ／ナデ	／沈線文／－	橙(5YR6/6)／橙(7.5YR6/6)	石英・角閃石・砂粒	良好		6.8	
12	371	A1-3	第1貝層		円形土製品	－	ナデ	－／－／－	灰黄褐(10YR5/2)／にぶい黄褐(10YR5/3)	粗砂粒（1mm）	良好	(6.7)	1.7	用途不明
13	53	A1-3	撹乱	Ⅴb 深鉢		口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ミガキ	／沈線文，刺突列点文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／褐灰(10YR4/1)	角閃石・雲母・細砂～礫粒（1～2mm）	良好	(31.0)	11.7	外器面に煤付着
14	64	A1-5	撹乱	Ⅲc4 深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/3)	石英・角閃石（微細粒）	良好		5.7	
15	157	A1-3	撹乱	Ⅲc4 深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／沈線文	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい橙(10YR6/4)	礫粒（3mm）・石英（微細粒）・長石・角閃石	良好		5.2	
16	175	A1-5	撹乱	Ⅲa4 深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい橙(7.5YR6/4)／にぶい橙(5YR6/4)	石英	良好		3.6	
17	281	A1-4	撹乱	Ⅲc2 深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	押引文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR6/3)，褐色(10YR4/1)／にぶい黄橙(10YR7/4)	長石・角閃石・石英・雲石を微かに含む	良好		4.0	
18	16	A1-4	第2貝層	Ⅲa2 深鉢		口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい橙(7.5YR7/4)	角閃石	良好	(21.0)	9.9	
19	22	A1-4	第2貝層	Ⅲc2 深鉢		口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR7/4)／にぶい橙(5.5YR7/4)・にぶい黄橙(10YR7/3)	粗砂粒（1mm）	良好	(18.2)	8.5	
20	147	A1-4	第2貝層	Ⅲa4 深鉢		口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい橙(7.5YR7/4)／灰褐(7.5YR5/2)	石英・長石・角閃石・雲母	良好	(35.7)	10.9	
21	181	A1-2	第2貝層	Ⅲc2 深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	／沈線文／－	褐灰(7.5YR4/1)／にぶい橙(5YR6/3)	石英・長石・角閃石	良好		2.9	
22	178	A1-2	第2貝層	Ⅲb2 深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	／沈線文／－	にぶい赤褐(5YR5/4)／褐灰(5YR5/1)	石英・長石	良好		3.1	
23	144	A1-4	第2貝層	Ⅲb2 深鉢		口縁～胴部	ナデ／ナデ	／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR7/4)／にぶい黄橙(10YR6/3)	長石・角閃石・砂粒	良好	(27.6)	13.2	
24	166	A1-3	第2貝層	Ⅲb4 深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	沈線文，刺突列点文／沈線文，刺突列点文／刺突列点文	にぶい橙(7.5YR7/4)／橙(5YR7/6)	石英・砂粒	良好		3.6	
25	272	A1-3	第2貝層	Ⅲb2 深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	灰褐(7.5YR5/2)／灰褐(7.5YR5/2)	砂粒・長石・角閃石	良好		4.0	

第2表　縄文土器観察表 1

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
26	26	A1-4	第2貝層	Ⅲc2	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	橙(5YR7/6)／橙(5YR7/6)	石英・長石・雲母～礫粒（1～4mm）	良好	(24.8)	9.9	
27	103	A1-2	第2貝層	Ⅲc2	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	灰黄褐(10YR5/2)／褐灰(10YR4/1)	長石・角閃石	良好		10.0	内器面に煤付着
28	12	A1-3	第2貝層	Ⅲb4	深鉢	口縁部	条痕→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	橙(5YR6/6)／にぶい橙(5YR6/4)	石英・長石・角閃石・礫粒（3～5mm）	良好	(31.4)	7.1	外器面に煤付着
29	165	A1-2	第2貝層	Ⅲc3	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線，刺突列点文／沈線文，刺突列点文／刺突列点文	にぶい褐(7.5YR6/3)／褐灰(7.5YR5/1)	長石・石英	良好		2.7	
30	335	A1-3	第2貝層	Ⅲb4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	橙(5YR6/6)／にぶい橙(5YR6/4)	長石・角閃石	良好		2.8	
31	253	A1-5	第2貝層	Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい赤褐(5YR4/3)／にぶい赤褐(5YR4/3)	滑石をきわめて多量に含む	良好	(26.9)	5.7	
32	316	A1-4	第2貝層	Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文，刺突列点文／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／にぶい橙(7.5YR6/4)	粗砂粒（1mm）・角閃石			4.5	
33	264	A1-4	第2貝層	Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	灰黄褐(10YR5/2)／にぶい黄橙(10YR6/3)	長石・角閃石・石英	良好		3.6	外器面に煤付着
34	295	A1-2	第2貝層	Ⅲd4	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文，刺突連点文／沈線文／刻目文	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR6/1)	長石（微細粒）	良好		5.1	
35	186	A1-2	第2貝層	Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR6/3)	長石・粗砂粒（1mm）	良好		5.6	器形の歪みが著しい
36	271	A1-3	第2貝層	Ⅲd4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	灰褐(7.5YR4/2)／褐(7.5YR4/3)	石英・長石・角閃石・滑石	良好		4.2	穿孔有（1箇所）
37	163	A1-3	第2貝層	Ⅲ	深鉢	頸～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/2)／にぶい黄橙(10YR7/3)	長石・石英・角閃石			5.2	
38	244	A1-4	第2貝層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	条痕→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	にぶい橙(5YR6/4)／にぶい橙(5YR6/4)	石英・砂粒・長石	良好	(29.2)	11.1	
39	279	A1-5	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい橙(7.5YR7/4)	長石・角閃石・砂粒・滑石を微かに含む	良好		7.9	
40	247	A1-3	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい褐(7.5YR6/3)／褐灰(7.5YR5/1)	長石・角閃石	良好		12.1	
41	18	A1-3	第2貝層	Ⅲ	深鉢	頸部～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	にぶい褐(7.5YR5/4)／灰褐(5YR4/2)	礫粒（2～3mm）・長石・角閃石・石英	良好		8.0	
42	105	A1-3	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい褐(7.5YR5/3)／灰褐(7.5YR5/2)	石英・長石・角閃石・砂粒	良好	(24.2)	7.5	
43	129	A1-4	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/4)	長石・角閃石（微細粒）	良好		9.6	
44	113	A1-2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい褐(7.5YR6/3)／褐灰(7.5YR4/1)	長石（微細粒）	良好		6.8	
45	171	A1-3-4	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	条痕→ナデ／条痕→ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(5YR6/4)／にぶい橙(5YR6/4)	石英・長石（微細粒）	良好		7.8	
46	130	A1-3	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(10YR6/4)／にぶい橙(10YR6/4)	石英・長石・角閃石	良好		4.7	外器面に煤付着
47	241	A1-4	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴～底部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい褐(7.5YR6/3)／にぶい橙(5YR6/4)	石英・砂粒・長石	良好	(18.3)	7.3	
48	245	A1-3-4	第2貝層	Ⅲ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい橙(7.5YR7/3)	石英・砂粒・角閃石・長石	良好	(12.5)	2.6	
49	223	A1-5	第2貝層直下層	Ⅲc5	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	灰褐(7.5YR6/2)／灰褐(5YR4/2)	石英・長石・角閃石	良好	(40.2)	16.4	外器面に煤付着
50	174	A1-3-4	第2貝層直下層	Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰褐(7.5YR5/2)	石英・砂粒	良好		4.3	

第3表　縄文土器観察表2

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
51	110	A1-4	第2黒褐層下部	Ⅲa4	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・砂粒・角閃石	良好		7.6	
52	278	A1-5	第2黒褐層下部	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい橙(7.5YR7/4)	石英・角閃石	良好		8.0	外器面に煤付着
53	220	A1-4	第2黒褐層下部	Ⅲ	深鉢	頸～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR7/4)／にぶい橙(7.5YR7/4)	砂粒・石英・長石・角閃石	良好		7.0	
54	308	A1-4	第2黒褐層下部	Ⅲc4	深鉢	口縁～胴部	条痕→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/4)	角閃石・長石・石英・砂粒	良好	(24.1)	19.8	
55	248	A1-5	第2黒褐層下部	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文，刺突連点文／－	にぶい褐(7.5YR6/3)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石	良好	(31.4)	7.3	
56	48	A1-3	褐色土層	Ⅲc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	灰黄褐(10YR5/2)／褐灰(10YR4/1)	長石？（微細粒）	良好		2.8	
57	162	A1-3	褐色土層	Ⅲd2	深鉢	口縁～頸部	条痕→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR7/2)／にぶい黄橙(10YR7/2)	長石・角閃石	良好		6.1	器形の歪みが著しい
58	180	A1-1	褐色土層	Ⅲc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文，刺突列点文／沈線文／刺突列点文	にぶい橙(7.5YR7/4)／橙(5YR6/6)	石英・角閃石	良好		4.2	
59	140	A1-3	褐色土層	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／橙(5YR6/6)	石英・長石・角閃石	良好	(23.6)	11.8	外器面に煤付着
60	326	A1-3	褐色土層	Ⅲ	深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	浅黄橙(10YR8/3)／灰黄褐(10YR6/2)	石英・角閃石	良好		8.9	
61	127	A1-3	褐色土層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	浅黄橙(10YR8/3)／褐灰(10YR4/1)	石英・長石・角閃石・砂粒	良好		8.2	
62	141	A1-和連組部	第1貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／褐灰(10YR5/1)	長石・角閃石・石英・砂粒	良好	(26.6)	11.2	
63	81	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲc4	深鉢	口縁～頸部	条痕→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	灰黄褐(10YR6/2)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・角閃石	良好		4.8	外器面に煤付着
64	298	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲb2	深鉢	口縁～頸部	ケズリ，条痕→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	灰黄褐(10YR5/2)／褐灰(10YR4/1)	石英・長石・角閃石	良好		5.1	穿孔有（1箇所）
65	240	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲc2	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	褐灰(10YR6/1)／褐灰(10YR4/1)	角閃石・長石・砂粒・雲母を僅かに含む	良好	(22.6)	10.2	
66	304	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	橙(5YR7/6)／褐灰(7.5YR5/1)	石英・砂粒・角閃石	良好		5.5	外器面に煤付着
67	82	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲd4	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／にぶい黄橙(10YR7/3)	角閃石・長石・砂粒・雲母	良好		6.4	
68	195	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	灰黄褐(10YR6/2)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石（微細粒）	良好		5.5	
69	17	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰褐(7.5YR5/2)	角閃石	良好		7.5	
70	13	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい褐(7.5YR5/3)／にぶい褐(7.5YR5/3)	石英・細砂～礫粒（1～3mm）・角閃石	良好		10.7	
71	227	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲ	深鉢	頸～胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石	良好		10.0	
72	92	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR5/2)／褐灰(10YR4/1)	長石・角閃石	良好		8.0	
73	246	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／灰褐(7.5YR5/2)	石英・長石・角閃石・砂粒	良好	(30.4)	13.4	外器面に煤付着
74	28	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／灰褐(5YR5/2)	石英・長石・角閃石	良好		12.7	外器面に煤付着，底面に作業台痕跡
75	114	A1-和連組部	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい褐(7.5YR6/3)／褐灰(7.5YR4/1)	長石・角閃石・石英	良好		9.8	

第4表　縄文土器観察表3

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
76	239	XI-81連続区	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴～底部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/4)／にぶい黄橙(10YR7/4)	長石・角閃石	良好	(12.7)	10.1	
77	134	XI-81連続区	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい橙(7.5YR7/4)	長石	良好		10.7	
78	346	XI-81連続区	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい褐(7.5YR5/3)／にぶい褐(7.5YR6/3)	粗砂粒（1mm）・雲母	良好		4.3	
79	352	XI-81連続区	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR5/2)	粗砂粒（1mm）・長石・角閃石	良好		4.6	
80	11	A4	混貝土層	Ⅰ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	ナデ／押型文／－	橙(5YR6/6)／にぶい橙(7.5YR6/4)	角閃石・石英・細砂～礫粒（1～3mm）	良好		6.7	
81	273	A5	混貝土層	Ⅱb1	深鉢	口縁部	条痕→ナデ／ナデ	－／粘土紐貼付文／粘土紐貼付文	にぶい黄橙(10YR6/4)／にぶい黄橙(10YR6/4)	長石・角閃石・砂粒	良好		4.7	
82	277	A2	混貝土層	Ⅲc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突連点文	にぶい橙(7.5YR7/4)／にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	良好		3.7	
83	313	A3	混貝土層下	Ⅱ	深鉢	口縁～胴部	条痕→ナデ／条痕→ナデ	－／爪形文／爪形文	にぶい黄褐(10YR5/3)／にぶい褐(7.5YR5/3)	角閃石・粗砂粒（1mm）	良好	(23.4)	8.5	
84	60	A2	混貝土層	Ⅲ	深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/4)／にぶい橙(7.5YR6/4)	石英・長石・角閃石（微細粒）	良好		6.1	
85	55	A5	混貝土層	Ⅴa	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／－／刻目文	褐灰(10YR4/1)／褐灰(10YR5/1)	角閃石・石英・砂粒	良好		6.8	
86	314	A3	混貝土層	Ⅱ	浅鉢	胴部下半	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／灰褐(7.5YR5/2)	粗砂粒（1～2mm）・石英・雲母	良好		3.2	
87	52	A3	混貝土層下	Ⅴb	深鉢	口縁部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文，縄文／刻目文	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/3)	角閃石・粗砂粒（1mm）	良好		5.5	
88	368	A2	混貝土層	Ⅴa	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ・ミガキ	－／－／縄文	黄灰(2.5Y5/1)／褐灰(10YR4/1)	長石・石英・角閃石	良好	(28.5)	8.8	
89	161	A5	純貝層	Ⅴ	深鉢	口縁～頸部	条痕→ナデ／条痕→ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR5/2)／褐灰(10YR5/1)	角閃石・長石	良好		5.0	
90	47	A5	純貝層	Ⅴ	深鉢	口縁～頸部	ミガキ／ナデ→ミガキ	－／凹線文／－	暗灰黄(2.5Y5/2)／褐灰(10YR4/1)	長石・角閃石	良好		6.0	
91	145	A5	純貝層	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	ナズリ→ナデ/ナズリ→ナデ，ミガキ	－／－／－	灰黄褐(10YR5/2)／にぶい褐(7.5YR6/3)	礫粒（5mm）	良好	(18.1)	14.1	
92	256	A5	純貝層	Ⅵ	深鉢	頸～胴部	ケズリ→ミガキ，ケズリ/ケズリ→ミガキ	－／－／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい赤褐(5YR5/4)	角閃石・滑石・長石・砂粒	良好	(28.6)	24.5	
93	211	A4	茶褐色土層	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ／ケズリ，ナデ	－／押形文／－	灰黄褐(10YR5/2)／にぶい橙(7.5YR7/4)	長石・角閃石・石英	良好	(15.8)	3.1	
94	330	A2	茶褐色土層	Ⅱb1	深鉢	口縁部	条痕→ナデ／ナデ	－／粘土紐貼付文／－	橙(2.5YR6/6)／橙(5YR6/6)	粗砂粒（1mm）・滑石を多く含む	良好		5.2	
95	208	A2	茶褐色土層	Ⅱa	深鉢	胴部	条痕/条痕	－／－／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／にぶい褐(7.5YR5/3)	長石・角閃石（微細粒）	良好		8.0	
96	8	A3-2-3	茶褐色土層	Ⅱd	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／沈線文，刻目文／刻目文	にぶい赤褐(5YR5/4)／灰褐(5YR4/2)	雲母・長石・角閃石	良好		4.6	外器面に煤付着
97	62	A2	茶褐色土層	Ⅲc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	灰黄褐(10YR5/2)／褐灰(10YR4/1)	角閃石（微細粒）	良好		3.6	
98	59	A2	茶褐色土層	Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文，連続刺突文／沈線文，連続刺突文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR6/3)	石英・長石・角閃石	良好		4.5	
99	63	A2	茶褐色土層	Ⅲa5	深鉢	口縁部	条痕→ナデ／ナデ	沈線文，刺突連点文／沈線文／刻目文	灰黄褐(10YR5/2)／にぶい黄橙(10YR6/3)	石英・角閃石・礫粒（4mm）	良好		5.4	
100	172	A2	茶褐色土層	Ⅲa2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい橙(7.5YR7/4)／にぶい橙(7.5YR7/4)	長石・角閃石（微細粒）・石英	良好		2.8	

第5表　縄文土器観察表4

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
101	169	A2	茶褐色土層	Ⅲ c2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	褐灰（10YR5/1）／にぶい黄橙（10YR7/3）	長石・角閃石	良好		4.4	
102	167	A2	茶褐色土層	Ⅲ c4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	押引文／沈線文／刺突列点文	にぶい橙（5YR6/4）／灰褐（5YR5/2）	滑石を多量に含む・長石・砂粒	良好		4.2	
103	280	A2	茶褐色土層	Ⅲ d4	深鉢	口縁部	条痕→ナデ／ナデ	押引文／沈線文／刻目文	にぶい黄橙（10YR7/3）／灰黄褐（10YR5/2）	長石・角閃石・滑石を僅かに含む	良好	(23.8)	4.9	
104	170	A2	茶褐色土層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	にぶい黄橙（10YR7/2）／にぶい黄橙（10YR7/3）	長石・角閃石	良好		6.5	外器面一部に煤付着
105	49	A6	混貝土層	Ⅴ b	深鉢	口縁～頸部	条痕→ナデ／条痕→ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙（10YR6/3）／にぶい褐（7.5YR6/3）	長石・角閃石・雲母・砂粒	良好		5.5	
106	268	A6	混貝土層	Ⅴ a	鉢	口縁部	ミガキ／ミガキ	－／沈線文，縄文，刺突連点文，沈線文	灰黄褐（10YR7/2）／にぶい褐（7.5YR5/3）	角閃石・長石・砂粒	良好		3.0	
107	267	A6	混貝土層	Ⅴ a	鉢	胴部	ケズリ→ミガキ／ミガキ	－／沈線文，縄文，刺突沈線文／－	にぶい褐（7.5YR5/3）／灰褐（7.5YR4/2）	長石・角閃石	良好		4.0	
108	30	A7	純貝層	Ⅱ	深鉢	胴～底部	条痕→ナデ／条痕	－／－／－	にぶい橙（7.5YR6/4）／にぶい橙（5YR6/3）	滑石を多量に含む・石英・長石・雲母（微細粒）・礫粒（3～4mm）	良好	(8.0)	12.1	
109	89	A7	純貝層西側	Ⅴ b	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰褐（7.5YR6/2）／にぶい褐（7.5YR6/3）	角閃石（微細粒）	良好		3.8	
110	359	A7	純貝層	Ⅴ a	鉢	口縁部	ケズリ→ナデ，ミガキ/ナデ，ミガキ	－／沈線文，縄文／刺突列点文	灰褐（7.5YR5/2）／にぶい黄橙（10YR6/3）	角閃石・雲母・長石	良好		4.6	
111	353	A6	純貝層上部	Ⅴ a	鉢	口縁部	ミガキ/ナデ→ミガキ	－／沈線文，縄文／刺突列点文	橙（5YR6/6）／にぶい赤橙（5YR5/4）	粗砂粒（1mm）	良好		3.0	
112	70	A7	純貝層	Ⅴ b	深鉢	口縁部	ナデ→ミガキ/ナデ	－／沈線文／－	褐灰（10YR6/1）／にぶい黄橙（10YR6/3）	石英・角閃石・粗砂粒（1～2mm）	良好	(14.0)	3.1	一部に被熱剥離痕有
113	369	A7	純貝層	Ⅴ a	鉢	胴部	ミガキ／ミガキ	－／縄文，沈線文／－	黒褐（7.5YR3/1）／黒褐（7.5YR3/2）	粗砂粒（1mm）・角閃石	良好		8.8	
114	85	A7	純貝層	Ⅴ b（高）坏		口縁～胴部	ナデ→ミガキ/ケズリ→ナデ	－／－／沈線文，縄文	灰黄褐（10YR6/2）／にぶい黄橙（10YR7/3）	砂粒	良好	(14.4)	1.5	口縁部に赤色顔料有
115	356	A7	純貝層西側	Ⅴ a	鉢	胴部上半	ミガキ/ナデ，ミガキ	－／沈線文／－	褐灰（10YR4/1）／灰黄褐（10YR5/2）	粗砂粒（2mm）・角閃石	良好		6.8	
116	29	A7	純貝層	Ⅴ b	深鉢	口縁～頸部	ケズリ→ナデ/ナデ	－／沈線文／－	褐灰（10YR4/1）／にぶい橙（7.5YR6/4）	角閃石・雲母	良好		4.8	内器面に煤付着
117	357	A6	純貝層上部	Ⅴ a	鉢	胴部	ケズリ→ナデ/ナデ→ミガキ	－／沈線文／－	にぶい黄褐（10YR5/3）／褐灰（10YR4/1）	粗砂粒（1mm）・角閃石	良好		5.2	
118	361	A6	純貝層	Ⅵ	深鉢	口縁部	ケズリ→ナデ/ケズリ→ナデ	－／－／－	褐灰（7.5YR4/1）／灰褐（7.5YR5/2）	長石・角閃石	良好	(22.9)	9.6	
119	354	A6	純貝層上部	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ，コビキエ→ナデ/ナデ	－／－／－	褐灰（10YR4/1）／にぶい橙（2.5YR6/4）	礫粒（7mm）・粗砂～礫粒（1～3mm）・長石・角閃石	良好	(17.2)	8.7	
120	365	A7	純貝層	Ⅴ b	深鉢	口縁～胴部	ナデ，コビキサエ/ナデ	－／沈線文／－	灰褐（7.5YR5/2）／褐灰（7.5YR5/1）	長石・雲母	良好	(34.3)	13.3	
121	366	A7	純貝層	Ⅳ a	深鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ/ナデ，ミガキ	沈線文／沈線文／沈線文	灰褐（7.5YR5/2）／にぶい褐（7.5YR5/3）	粗砂粒（1～2mm）・長石・角閃石	良好	(17.5)	16.0	
122	73	A7	純貝層西側	Ⅳ b	深鉢	口縁～頸部	ミガキ，ナデ/ミガキ，ナデ	－／沈線文／刻目文	褐灰（10YR4/1）／褐灰（10YR5/1）	粗砂粒（2mm）・雲母（微細粒）	良好		7.3	
123	270	A6	純貝層上部	Ⅴ b	鉢	口縁部	ナデ/ナデ	－／沈線文／刻目文	褐灰（7.5YR4/1）／褐灰（7.5YR5/1）	長石・角閃石	良好		4.5	
124	319	A7	純貝層	Ⅵ？	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ/ナデ→ミガキ	－／－／－	灰黄褐（10YR6/2）／灰黄褐（10YR6/2）	粗砂～礫粒（1～3mm）・石英	良好		9.6	
125	328	A7	純貝層	Ⅵ？	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ/ケズリ→ナデ→ミガキ	－／－／－	灰褐（7.5YR5/2）／褐灰（7.5YR6/1）	粗砂粒（1mm）・石英・角閃石	良好		6.9	

第6表　縄文土器観察表5

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
126	329	A7	純貝層	Ⅵ？	深鉢	胴部	ナデ/ハケ，ミガキ/ナデ→ミガキ	－/－/－	褐灰(7.5YR5/1)／褐灰(7.5YR5/1)	長石・角閃石・石英・粗砂粒（1mm）	良好		12.2	
127	367	A7	純貝層	Ⅵ	深鉢	口縁～胴部	ケズリ/ケズリ→ナデ	－/－/－	灰黄褐(10YR5/2)／灰黄褐(10YR6/2)	粗砂～礫粒（1～4mm）・雲母・角閃石	良好	(30.8)	18.3	
128	318	A7	純貝層	Ⅵ？	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ/ナデ→ミガキ	－/－/－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR6/2)	角閃石・石英	良好		17.5	
129	358	A7	純貝層		深鉢	胴部下半	ケズリ，ナデ，コビキサエ/ナデ	－/－/－	灰褐(7.5YR5/2)／にぶい褐(7.5YR5/3)	角閃石・長石・粗砂粒（1mm）	良好	(20.3)	9.8	
130	363	A6	純貝層		深鉢	底部	ナデ/ケズリ→ナデ，ミガキ	－/－/－	褐灰(7.5YR5/1)／灰褐(7.5YR6/2)	粗砂粒（1～2mm）・石英・角閃石	良好	(9.0)	8.4	
131	71	A7	純貝層		深鉢	底部	ナデ/ナデ	－/－/－	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい黄橙(10YR6/3)	雲母・長石（微細粒）	良好	(9.0)	4.0	
132	136	A7	純貝層		深鉢	胴～底部	ケズリ→ナデ，コビキサエ/ケズリ→ミガキ	－/－/－	灰黄(2.5Y7/2)／灰褐(7.5YR6/2)	長石（微細粒）	良好	(10.6)	9.2	
133	5	A7	褐色土層	Ⅰa	深鉢	口縁部	ナデ/ナデ	－/押型文/－	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい黄橙(10YR7/3)	石英・長石・角閃石・礫粒（3mm）	良好	(12.8)	4.7	
134	101	A6	茶褐色土層	Ⅰa	鉢	胴部下半	ナデ/ナデ	－/押型文/－	にぶい黄橙(10YR7/4)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・角閃石・礫粒（2～3mm）	良好		5.1	
135	209	A6	茶褐色土層上層	Ⅱb2	深鉢	口縁～頸部	条痕/条痕	－/隆起帯文/－	にぶい赤褐(5YR5/4)／褐灰(5YR4/1)	長石・石英・角閃石	良好		7.6	
136	9	A6	茶褐色土層	Ⅱb2	深鉢	頸部～胴部	条痕/条痕	－/隆起帯文/－	にぶい橙(7.5YR6/4)／にぶい褐(7.5YR5/3)	雲母・長石・粗砂粒（1mm）・角閃石・石英	良好		7.3	
137	202	A6	茶褐色土層	Ⅱb2	深鉢	頸～胴部	条痕/条痕	－/隆起帯文/－	にぶい褐(7.5YR5/4)／橙(5YR6/6)	滑石を多量に含む・角閃石	良好		6.5	
138	158	A6	茶褐色土層	Ⅱa	深鉢	口縁部	条痕→ナデ/条痕	－/－/－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・角閃石・粗砂粒（1mm）	良好		6.0	
139	323	A6	茶褐色土層下部	Ⅱa	深鉢	口縁部	条痕→ナデ/条痕→ナデ	－/－/－	にぶい黄橙(10YR6/4)／にぶい橙(7.5YR6/4)	粗砂粒（1mm）・滑石を僅かに含む	良好		3.2	
140	210	A7西端	褐色土層	Ⅱa	深鉢	口縁部	条痕→ナデ/条痕	－/－/－	褐灰(7.5YR4/1)／にぶい橙(7.5YR6/2)	角閃石（微細粒）	良好		4.7	穿孔有（1箇所）
141	327	A7西端	褐色土層下層	Ⅱ	深鉢	胴部	ナデ/条痕	－/－/－	にぶい黄橙(10YR7/2)／にぶい橙(7.5YR7/4)	長石・石英・角閃石	良好		6.1	
142	331	A6	茶褐色土層下部	Ⅱ	深鉢	胴部	ナデ/条痕→ナデ	－/－/－	にぶい黄橙(10YR6/4)／にぶい橙(7.5YR6/4)	角閃石・石英・粗砂粒（2mm）	良好		4.8	
143	238	A7	褐色土層	Ⅱ	鉢	肩～胴部	ケズリ→ナデ/条痕，ミガキ	－/－/－	にぶい褐(7.5YR5/3)／にぶい褐(7.5YR6/3)	角閃石・長石・砂粒・滑石を僅かに含む	良好		9.9	
144	87	A6	茶褐色土層	Ⅱd	深鉢	口縁部	ナデ/ナデ	－/爪形文/－	にぶい黄橙(10YR6/3)／褐灰(10YR5/1)	長石・角閃石・砂粒	良好		4.5	
145	40	A7	褐色土層	Ⅱ	深鉢	底部	ナデ/条痕→ナデ	－/－/－	黄灰(2.5Y4/1)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・雲母（微細粒）・細砂～礫粒（1～3mm）	良好	(9.0)	3.8	
146	315	A7東側	不明	Ⅱ	深鉢	口縁部	条痕→ナデ/条痕→ナデ	－/－/－	にぶい黄橙(10YR7/2)／灰黄褐(10YR6/2)	礫粒（4mm）・雲母	良好		7.7	
147	54	A1-3	不明	Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ/ナデ	沈線文/沈線文/刻目文	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/3)	角閃石			5.1	外器面及び内器面に煤付着
148	274	A1-3	不明	Ⅲa4	深鉢	口縁部	ナデ/ナデ	沈線文/沈線文/刻目文	黄灰(2.5Y5/1)／黄灰(2.5Y5/1)	石英・長石・砂粒	良好		2.7	
149	276	A1	不明	Ⅲa5	深鉢	口縁部	ナデ/ナデ	－/沈線文/－	橙(5YR6/6)／にぶい橙(7.5YR6/4)	石英・長石・砂粒・角閃石	良好		5.7	外器面に煤付着
150	275	A1	不明	Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ/ナデ	沈線文/沈線文/刺突連点文	にぶい褐(7.5YR5/3)／にぶい橙(7.5YR5/4)	長石・角閃石・砂粒・滑石	良好		3.5	

第7表 縄文土器観察表6

検図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
151	285	A1-2	不明	Ⅱ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR5/2)	石英・角閃石・雲母	良好		5.4	外器面に煤付着
152	347	A1-2	不明	Ⅱ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR5/2)	粗砂粒（1 mm）・角閃石	良好		5.8	
153	51	A7東側	不明		台付鉢？	脚部	ナデ／ナデ	－／－／－	にぶい褐(7.5YR5/3)／にぶい橙(7.5YR6/4)	雲母（微細粒）	良好	(8.4)	5.0	
154	58	A2	不明	Ⅴa7	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ケズリ→ナデ	－／－／刺突列点文	灰褐(7.5YR5/2)／灰褐(7.5YR5/2)	角閃石・砂粒・長石・石英・雲母	良好		5.8	
155	292	A1-2	不明		鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ケズリ→ナデ	－／－／爪形文／－	にぶい赤褐(5YR4/3)／灰褐(5YR4/2)	長石・角閃石・石英・砂粒	良好		6.7	外器面に煤付着，穿孔有（1箇所）
156	88	A7	不明		深鉢	口縁～頸部	ナデ，ミガキ／ナデ	－／沈線文／沈線文，刺突文	褐灰(10YR4/1)／にぶい黄橙(10YR5/3)	長石（微細粒）	良好		3.3	
157	284	A1-2	不明	Ⅴb	深鉢	口縁～頸部	ナデ，ユビオサエ／ナデ	－／刺突文，沈線文／－	にぶい橙(5YR6/4)／にぶい赤褐(5YR5/4)	石英・角閃石・滑石	良好		6.1	
158	61	A2	不明	Ⅵ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／－／－	褐灰(7.5YR5/1)／褐灰(10YR4/1)	角閃石・細砂～礫粒（1～3 mm）	良好	(23.8)	3.5	
159	269	A7東側	不明	Ⅳb	深鉢	口縁部	ナデ／ケズリ→ナデ	－／沈線文，刺突列点文／－	にぶい褐(7.5YR5/4)／にぶい赤褐(5YR5/4)	石英・長石・滑石	良好		5.2	
160	84	B	表土層	Ⅱb4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい黄橙(10YR6/3)／褐灰(10YR4/1)	長石（微細粒）・石英	良好		3.3	外器面に煤付着？
161	90	B3	第1貝層	Ⅱa5	深鉢	口縁部	ミガキ／ナデ	－／沈線文／－	褐灰(10YR4/1)／にぶい黄橙(10YR6/3)	砂粒・角閃石（微細粒）	良好		3.6	
162	242	B1	第1貝層	Ⅱc4	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突連点文	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR4/1)	石英・砂粒・角閃石	良好	(24.4)	10.3	
163	24	B3	第1貝層	Ⅱc4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突連点文	灰褐(5YR4/2)／褐灰(5YR4/1)	滑石を多量に含む	良好		4.9	
164	297	B3	第1貝層	Ⅳa	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	刻目文／沈線文，刻目文／沈線文，刻目文	灰黄褐(10YR5/2)／にぶい褐(7.5YR5/3)	長石・砂粒	良好		4.5	外器面に煤付着
165	251	B2	第2貝層	Ⅱd2	浅鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文，刺突連点文／沈線文／刺突連点文	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/2)	長石・角閃石	良好	(17.5)	9.3	
166	108	B1	第2貝層	Ⅱa5	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(5YR6/4)／褐灰(7.5YR5/1)	石英・長石・角閃石・滑石を僅かに含む	良好	(24.0)	5.3	
167	80	B1	第2貝層	Ⅱc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい黄橙(10YR6/3)	長石・角閃石（微細粒）	良好		4.0	
168	79	B1	第2貝層	Ⅱa2	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／沈線文	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR6/2)	角閃石・長石（微細粒）	良好		5.9	
169	257	B1	第2貝層	Ⅱa4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄(2.5Y6/3)／黄灰(2.5Y4/1)	長石・雲母・滑石	良好		5.0	
170	86	B2	第2貝層	Ⅱc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／沈線文／刻目文	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR6/2)	角閃石・長石・石英・砂粒	良好		5.0	
171	78	B1	第2貝層	Ⅱa5	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい褐(7.5YR5/3)／褐灰(7.5YR4/1)	角閃石・長石・石英	良好		5.7	外器面に煤付着
172	192	B1	第2貝層	Ⅱc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	褐灰(10YR4/1)／にぶい橙(7.5YR7/4)	石英・角閃石	良好		4.1	穿孔有（1箇所）
173	302	B1	第2貝層	Ⅱc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/4)／灰黄褐(10YR5/2)	石英・長石・角閃石・砂粒	良好		4.9	外器面に煤付着
174	3	B1	第2貝層	Ⅱc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい橙(7.5YR6/4)／にぶい橙(7.5YR6/4)	石英・滑石・粗砂粒（1～2 mm）	良好	(25.4)	3.6	
175	305	B2	第2貝層	Ⅱc5	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	灰黄褐(10YR6/2)／にぶい橙(7.5YR6/4)	長石・石英・角閃石・砂粒	良好		3.9	

第８表　縄文土器観察表７

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
176	193	B2	第２只層	Ⅲ c2	深鉢	口縁～頸部	ナデ→条痕／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	灰褐(7.5YR5/2)／褐灰(7.5YR5/1)	長石・角閃石（微細粒）	良好		3.5	穿孔有（１箇所）
177	138	B2	第２只層	Ⅲ b2	深鉢	口縁～頸部	ケズリ，ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR5/1)	長石（微細粒）	良好	(27.6)	6.1	
178	183	B3	第２只層	Ⅲ b2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい黄橙(10YR7/4)／にぶい黄橙(10YR7/4)	角閃石・石英・長石	良好		5.1	
179	182	B2	第２只層	Ⅲ c2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	灰黄褐(10YR5/2)／褐灰(10YR4/1)	長石	良好		3.9	
180	214	B2	第２只層	Ⅲ d2	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突連点文	にぶい黄橙(10YR6/3)／褐灰(10YR5/1)	長石・角閃石・石英	良好	(27.3)	7.9	
181	126	B3	第２只層	Ⅲ c4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい橙(5YR6/4)／にぶい赤褐(5YR5/3)	滑石を多量に含む	良好		3.4	
182	233	B1	第２只層	Ⅲ c2	深鉢	口縁～胴部	条痕→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	浅黄橙(10YR8/3)／褐灰(10YR5/1)	長石・石英・角閃石・滑石を含む	良好	(31.9)	13.6	
183	197	B2	第２只層	Ⅲ c2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	褐灰(10YR5/1)／褐灰(10YR4/1)	長石・石英・角閃石（微細粒）	良好		3.4	
184	77	B1	第２只層	Ⅲ d3	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／刺突列点文，沈線文／刻目文	灰黄褐(10YR5/2)／灰黄褐(10YR5/2)	滑石を多量に含む	良好		3.8	
185	38	B1	第２只層	Ⅲ d2	鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい褐(7.5YR5/4)	長石（微細粒）	良好	(11.2)	3.6	
186	36	B1	第２只層	Ⅲ d4	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	浅黄(2.5Y8/3)／にぶい黄橙(10YR7/4)	粗砂粒（１～２mm）	良好	(23.0)	15.0	
187	222	B2	第２只層	Ⅲ d2	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	刺突連点文，沈線文／沈線文／刺突連点文	褐灰(7.5YR4/1)／褐灰(7.5YR4/1)	長石・角閃石・砂粒	良好	(16.4)	4.3	穿孔有（１箇所）
188	259	B2	第２只層	Ⅲ d2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	灰黄(2.5Y7/2)／にぶい黄橙(10YR6/3)	長石・角閃石・砂粒	良好	(15.7)	2.9	
189	212	B2	第２只層	Ⅲ d2	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい黄橙(10YR7/4)／にぶい黄橙(10YR6/3)	長石・角閃石・砂粒	良好		10.5	
190	154	B2	第２只層	Ⅲ c2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい橙(7.5YR7/3)	長石・角閃石	良好		4.8	
191	213	B1	第２只層	Ⅲ c2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突連点文	にぶい褐(7.5YR6/2)／黒褐(7.5YR3/2)	角閃石・長石・滑石を微かに含む	良好		4.8	
192	232	B2	第２只層	Ⅲ c2	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	押引文／沈線文／刻目文	にぶい黄橙(10YR7/2)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・砂粒・角閃石	良好		8.0	
193	303	B1	第２只層	Ⅲ d2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文，押引文／沈線文／刺突連点文	橙(7.5YR7/6)／にぶい橙(7.5YR6/4)	長石・石英・滑石	良好		3.3	
194	300	B2	第２只層	Ⅲ c2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR4/1)	長石・角閃石	良好		2.6	
195	334	B2	第２只層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・角閃石	良好		3.1	
196	98	B2	第２只層	Ⅲ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／褐灰(10YR5/1)	粗砂粒（１mm）・角閃石	良好		4.2	
197	104	B2	第２只層	Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	押引文／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／にぶい黄橙(10YR7/2)	長石・角閃石・砂粒	良好		10.1	
198	23	B2	第２只層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰褐(7.5YR6/2)	長石・石英・雲母？	良好		7.1	
199	106	B1	第２只層	Ⅲ	深鉢	頸～胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石	良好		11.1	
200	229	B2	第２只層	Ⅲ	深鉢	頸～胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR5/1)	長石・石英・角閃石・砂粒	良好		9.8	

第9表　縄文土器観察表8

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
201	31	B1	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい褐(7.5YR5/3)	長石・石英・粗砂粒（1～2mm・角閃石・赤石を微かに含む	良好		8.8	
202	27	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	褐灰(7.5YR4/1)／にぶい褐(7.5YR6/3)	長石・石英・雲母・礫粒（4mm）・滑石	良好		8.1	
203	325	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい赤褐(5YR5/3)／にぶい橙(5YR6/4)	滑石を多量に含む	良好		5.8	
204	111	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／にぶい褐(7.5YR6/3)	長石・石英・角閃石・雲母	良好		8.5	
205	120	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石・石英・砂粒	良好		5.0	
206	93	B1	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR5/2)	石英・角閃石・長石・雲母・砂粒	良好		5.5	
207	207	B1	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR5/2)／にぶい褐(7.5YR5/3)	滑石を多量に含む	良好		6.8	
208	322	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい褐(7.5YR6/3)／褐灰(7.5YR5/1)	滑石を多量に含む	良好		4.2	
209	350	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR5/2)／灰褐(7.5YR6/2)	長石・角閃石・石英	良好		6.2	
210	339	B1	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい黄橙(10YR6/4)	粗砂～礫粒（1～3mm）・角閃石	良好		5.9	
211	332	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/3)	粗砂粒（1mm）・石英・角閃石	良好		8.5	
212	345	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／褐灰(10YR5/1)	粗砂粒（1～2mm）・角閃石	良好		7.8	
213	342	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／にぶい橙(7.5YR7/4)	礫粒（6mm）・粗砂粒（1mm）・角閃石・雲母	良好		4.3	
214	14	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	褐灰(7.5YR4/1)／にぶい褐(7.5YR6/3)	角閃石・雲母・礫粒（2～3mm）・滑石を微かに含む	良好		8.0	
215	355	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・角閃石・雲母	良好		8.8	
216	119	B1	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／にぶい橙(5YR6/4)	石英・長石・滑石	良好		6.1	
217	118	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい褐(7.5YR6/3)／灰褐(7.5YR6/2)	長石・砂粒・角閃石	良好		5.5	
218	128	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR5/2)	長石	良好		7.6	外器面に煤付着
219	203	B1	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(5YR6/4)／にぶい赤褐(5YR5/4)	滑石を多量に含む	良好		5.1	
220	148	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴～底部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	橙(5YR6/6)／にぶい赤褐(2.5YR5/4)	長石（微細粒）・礫粒（6mm）	良好	(13.1)	5.3	外器面一部に煤付着
221	321	B1	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰褐(7.5YR5/2)	石英・角閃石	良好		3.1	
222	252	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	底部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	褐灰(7.5YR4/1)／にぶい橙(7.5YR6/4)	長石・角閃石	良好	9.8	2.7	
223	217	B1	第2貝層	Ⅲ	深鉢	底部	ナデ、ユビオサエ／ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR4/1)	長石・角閃石・滑石を微かに含む	良好		1.4	
224	125	B2	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰褐(7.5YR6/2)／褐灰(7.5YR5/1)	石英・長石・雲母	良好		8.5	外器面に煤付着
225	250	B2	第2貝層		深鉢	底部	ケズリ→ナデ／ケズリ→ナデ	－／－／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／灰褐(7.5YR6/2)	石英・長石・角閃石・滑石	良好	(11.6)	6.4	外器面に煤付着

第10表　縄文土器観察表 9

挿図番号	実測番号	調査地点	層	位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
226	156	82	第２貝層	Ⅴb	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／沈線文／刺目文	灰褐(7.5YR6/2)／にぶい褐(7.5YR6/3)	黒褐（微細粒）	良好		5.2		
227	99	B1	第２貝層		深鉢	底部	ナデ／ナデ	－／－／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい黄橙(10YR7/3)	石英・角閃石・長石・砂粒	良好	3.2	4.0		
228	146	B1	第２貝層下部	Ⅲ	a5	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR7/4)／にぶい黄橙(10YR6/3)	長石・角閃石・砂粒	良好	(32.2)	12.4	穿孔有（1箇所）
229	83	B1	第２貝層下部	Ⅲ	d4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	灰黄褐(10YR6/2)／灰黄褐(10YR6/2)	長石	良好	(17.6)	2.8	
230	317	B1	第２貝層下部	Ⅲ	c2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい褐(7.5YR6/3)／にぶい橙(7.5YR7/3)	長石・石英・角閃石	良好		2.4	
231	299	B1	第２貝層下部	Ⅲ	c2	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	押引文，沈線文／沈線文／刺目文	にぶい黄橙(10YR7/2)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・角閃石	良好	(29.8)	5.3	穿孔有（1箇所）
232	19	B1	第２貝層下部	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/4)	角閃石（微細粒）	良好		7.3	
233	137	B1	第２貝層下部	Ⅲ	d4	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	押引文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR5/2)	砂粒・長石・角閃石	良好	(29.3)	23.3	
234	123	B1	第２貝層下部	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰褐(7.5YR5/2)／灰褐(7.5YR6/2)	石英・長石・砂粒	良好		5.3	
235	131	B1	第２貝層下部	Ⅲ		深鉢	胴部下半	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	橙(5YR6/6)／灰褐(5YR5/2)	石英（微細粒）・砂粒	良好		8.3	
236	255	B1	第２貝層下部	Ⅲ		深鉢	胴部下半	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	褐灰(5YR4/1)／にぶい橙(7.5YR6/4)	石英・長石・角閃石	良好	(18.4)	11.8	
237	29	B1	第２貝層下部	Ⅲ	c2	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい褐(7.5YR6/3)／にぶい橙(7.5YR7/4)	長石（微細粒）	良好	(22.1)	13.3	
238	235	B1	第２貝層下部	Ⅲ		深鉢	頸～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい赤褐(5YR5/3)／褐灰(5YR4/1)	石英・角閃石・長石	良好	(20.6)	10.2	
239	1	B1	第２貝層下部	Ⅲ		深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	明赤褐(5YR5/6)／にぶい橙(7.5YR6/4)	角閃石・石英・粗砂粒（1㎜未満）	良好		17.4	外器面に煤付着
240	95	B1	第２貝層下部	Ⅲ		深鉢	胴部下半	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR7/4)／褐灰(7.5YR4/1)	石英・長石・角閃石	良好		4.6	
241	97	B1	第２貝層下部	Ⅲ		深鉢	胴～底部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR7/6)／にぶい橙(7.5YR6/4)	石英・長石	良好	(5.8)	4.7	
242	10	B3	褐色土層	Ⅰb		深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／押型文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい橙(7.5YR7/4)	石英・角閃石	良好		8.1	
243	291	B3	褐色土層以下	Ⅱb2		深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／隆起帯文／－	にぶい褐(7.5YR5/4)／灰褐(7.5YR4/2)	石英・砂粒・長石	良好		3.4	
244	306	B2	褐色土層以下	Ⅲ		深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	沈線文，押引文／沈線文，押引文	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/3)	長石・角閃石・石英	良好		3.9	穿孔（1箇所）
245	75	B3	褐色土層以下	Ⅲ	b5	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・雲母（2～3㎜）・長石・角閃石（微細粒）	良好	(21.6)	7.7	外器面に煤付着
246	320	B3	褐色土層以下	Ⅲ		深鉢	胴部下半	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	橙(7.5YR7/6)／にぶい橙(7.5YR7/6)・灰褐(7.5YR6/2)	長石・石英・角閃石	良好		7.9	
247	198	B2	褐色土層	Ⅲ	d	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	刺突列点文／押引文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR6/3)	長石・角閃石・砂粒	良好		3.4	
248	344	B1	黒褐色土層	Ⅲ		深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	橙(5YR6/6)／橙(7.5YR7/6)	長石・石英・角閃石	良好		7.1	
249	293	B3	褐色土層以下	Ⅲ	b4	深鉢	口縁部	ケズリ→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・砂粒・滑石	良好		4.3	
250	94	B3	褐色土層以下	Ⅲ		深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR7/4)／にぶい褐(7.5YR6/3)	石英・角閃石	良好		5.7	

第11表 縄文土器観察表10

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
251	74	B3	貝層	Ⅴb7	深鉢	口縁部	条痕→ナデ／ナデ	－／刺突文／－	灰黄褐(10YR5/2)／褐灰(10YR4/1)	砂粒・石英・雲母・角閃石（微細粒）	良好		4.3	
252	76	B3	貝層	Ⅲa5	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文，刺突連点文／沈線文，刺突列点文／－	褐灰(10YR4/1)／にぶい黄橙(10YR6/3)	角閃石・雲母・砂～礫粒（1～4mm）・滑石	良好		6.1	
253	96	B1	貝層	Ⅲa2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	橙(5YR6/6)／橙(7.5YR7/6)	石英・長石・角閃石	良好		2.7	
254	189	B3	貝層	Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/2)	長石・石英	良好		4.4	
255	185	B3	貝層	Ⅲc2	深鉢	口縁～頸部	ケズリ→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石	良好		6.1	
256	121	B3	貝層	Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	にぶい橙(7.5YR6/4)／橙(5YR6/6)	長石・砂粒・滑石を多量に含む	良好		4.3	穿孔有（1箇所，両面穿孔）
257	307	B3	貝層	Ⅲc4	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	にぶい橙(7.5YR6/4)／褐灰(7.5YR4/1)	角閃石	不良		5.0	
258	188	B3	貝層	Ⅲd4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい橙(7.5YR7/4)／にぶい橙(7.5YR7/4)	長石・角閃石・石英・砂粒	良好		3.9	
259	201	B3	貝層	Ⅲc4	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	黒褐(7.5YR3/2)／灰褐(7.5YR4/2)	滑石を多量に含む	良好		8.9	200と同一個体の可能性有
260	122	B3	貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰褐(7.5YR6/2)／灰褐(7.5YR5/2)	滑石を多量に含む	良好		4.3	
261	7	B3	貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR5/1)	長石・角閃石・石英	良好		6.7	穿孔有（1箇所）
262	225	B3	貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/2)／褐灰(10YR5/1)	長石・角閃石（微細粒）	ﾍﾗ状	(22.8)	7.2	
263	228	B3	貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／褐灰(10YR5/1)	長石・石英・角閃石・砂粒	良好	(19.8)	12.2	
264	296	B3	貝層	Ⅲc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	灰黄(2.5Y7/2)／灰黄(2.5Y6/2)	長石・石英・角閃石・雲母	良好		3.5	
265	91	B3	貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい橙(7.5YR7/3)	角閃石・石英・粗砂粒（2mm）	良好		5.5	
266	204	B1	不明	Ⅲc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	にぶい赤褐(5YR4/3)／灰褐(7.5YR4/2)	滑石を多量に含む	良好		4.3	
267	139	B1	不明	Ⅲa5	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい橙(2.5YR6/4)／褐灰(5YR5/1)	長石・雲母・石英・角閃石	良好	(24.3)	10.3	
268	294	B1	不明	Ⅲb4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR5/1)	長石・角閃石	良好		3.4	
269	349	B1	不明	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・石英・角閃石	良好		5.9	
270	33	B1	不明	Ⅲ	深鉢	胴部下半～底部	ケズリ→ナデ／条痕→ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/3)	長石・角閃石（微細粒）・滑石を含む	良好	(13.4)	3.7	
271	56	C	第1貝層	Ⅴb	浅鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文，刺突文／－	褐灰(10YR4/1)／にぶい黄橙(10YR6/3)	長石・砂粒・角閃石	ﾍﾗ状	(13.6)	11.0	外器面に赤色顔料有
272	256	C	第1貝層	Ⅵ	浅鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／－／－	灰黄褐(10YR6/2)／にぶい黄橙(10YR7/3)	角閃石・長石	良好	(15.0)	5.0	
273	290	C	第1貝層	Ⅵ	鉢	口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ミガキ	－／－／－	灰褐(7.5YR5/2)／にぶい赤褐(2.5YR5/4)	角閃石・長石・砂粒・雲母	良好	(13.4)	5.2	
274	150	C	第1貝層	Ⅴb	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／黄灰(2.5Y4/1)	長石・角閃石（微細粒）	良好		5.0	
275	168	C	第1貝層	Ⅴb	深鉢	口縁部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／凹線／－	褐灰(10YR5/1)／褐灰(10YR4/1)	長石・雲母	良好		4.0	

第12表　縄文土器観察表11

挿図番号	実測番号	調査地点	層	位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
276	45	C	第1貝層	Vb	深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	－／沈線文，刺突文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・砂粒	良好		4.1	
277	57	C	第1貝層	Vb	深鉢		口縁～頸部	条痕→ナデ／条痕→ナデ	－／沈線文，刺目突帯文／－	にぶい褐(7.5YR5/3)／にぶい褐(7.5YR5/3)	石英？・砂粒	良好		5.8	
278	46	C	第1貝層	Vb	深鉢		口縁～頸部	ミガキ／ナデ，ミガキ	－／刺突文／－	褐灰(10YR4/1)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・砂粒	良好		5.0	
279	72	C	第1貝層	Vb	深鉢		口縁～頸部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい黄橙(10YR6/3)	長石・石英・雲母・角閃石・粗砂粒（1mm）	良好		6.0	
280	265	C	第1貝層	Va	深鉢		口縁～胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／－／刺目文	灰黄褐(10YR6/2)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・角閃石	良好		9.9	
281	43	C	第1貝層		深鉢		胴～底部	ナデ／ケズリ，ナデ	－／－／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR5/2)	雲母・石英・長石・粗砂粒（1mm）	良好	(8.9)	5.2	
282	282	C	第1貝層		深鉢		胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／刺目突帯文／－	灰黄褐(10YR6/2)／灰黄褐(10YR6/2)	角閃石・長石・砂粒	良好		7.0	
283	32	C	表層・第2層	Ⅱ	浅鉢		口縁～胴部	条痕→ナデ／条痕→ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい褐(7.5YR5/3)	角閃石・長石（微細粒）	良好	(17.8)	4.3	外器面に煤付着
284	109	C	表層・第2層	Ⅲ	浅鉢		口縁～胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／沈線文	にぶい黄橙(10YR7/4)／灰黄褐(10YR6/2)	角閃石・長石	良好	(17.7)	3.7	
285	230	C	表層・第2層	Ⅲa4	深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	灰黄褐(10YR6/2)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石（微細粒）	良好		6.0	
286	336	C	表層・第2層	Ⅲd2	深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい橙(5YR6/4)／にぶい赤橙(5YR5/4)	長石？	良好		3.2	
287	377	C	表層・第2層	Ⅲ	深鉢		頸～底部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい黄橙(10YR5/3)	長石・角閃石	良好		23.0	
288	35	C	表層・第2層	Ⅲ	深鉢		底部	条痕→ナデ／条痕→ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR6/2)	長石？	良好	(6.5)	3.8	
289	226	C	表層・第2層	Ⅲ	深鉢		胴部下半	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石・砂粒・滑石	良好		5.5	
290	340	C	表層・第2層	Ⅲ	深鉢		胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR7/2)	粗砂粒（2mm）・長石・角閃石	良好		5.6	
291	324	C	表層・第2層	Ⅲ	深鉢		胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰褐(7.5YR4/2)／黒褐(7.5YR3/1)	滑石を多量に含む	良好		3.4	穿孔有（1箇所）
292	124	C	表層・第2層	Ⅲ	深鉢		胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい橙(7.5YR6/4)	石英・砂粒	良好		9.7	外器面に煤付着
293	177	C	表層・第2層	Ⅲ	深鉢		胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/2)／にぶい黄橙(10YR7/2)	長石・角閃石・石英	良好		6.4	
294	37	C	第2貝層	Ⅱc	深鉢		口縁～胴部	条痕→ナデ／条痕→ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／にぶい橙(5YR6/4)	長石・角閃石・雲母・粗砂粒（1mm未満）	良好	(28.0)	21.6	
295	351	C	第2貝層	Ⅲc5	浅鉢		口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR7/4)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・角閃石・石英	良好	(13.7)	6.4	
296	66	C	第2貝層	Ⅲc2	深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	褐灰(10YR4/1)／褐灰(10YR4/1)	石英・角閃石（微細粒）	良好		3.7	穿孔有（1箇所）
297	187	C	第2貝層	Ⅲb4	深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	灰黄褐(10YR6/2)／にぶい黄橙(10YR7/3)	長石・角閃石（微細粒）	良好		3.4	
298	287	C	第2貝層	Ⅲc4	深鉢		口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	にぶい黄橙(10YR7/2)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・石英・角閃石・砂粒	良好		2.8	
299	200	C	第2貝層	Ⅲ	深鉢		胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	黒褐(7.5YR3/2)／灰褐(7.5YR4/2)	滑石を多量に含む	良好		6.0	
300	205	C	第2貝層	Ⅲ	深鉢		胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(5YR6/4)／にぶい赤橙(5YR5/3)	滑石を多量に含む	良好		6.3	

第13表 縄文土器観察表12

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
301	218	C	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい赤褐(5YR5/4)／褐灰(5YR4/2)	長石・角閃石	良好		5.7	外器面に煤付着
302	216	C	第2貝層	Ⅲ	深鉢	底部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/4)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・砂粒・角閃石・滑石	良好	(7.0)	2.2	外器面に煤付着
303	143	C	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石・砂粒	良好		5.7	外器面一部に煤付着
304	360	C	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／褐灰(10YR5/1)	長石・石英・粗砂粒（1mm）・角閃石	良好		12.0	
305	234	C	第2貝層	Ⅲ	深鉢	底部	条痕→ナデ／条痕→ナデ	－／沈線文／－	にぶい赤褐(5YR5/4)／橙(5YR7/8)	石英・角閃石・長石・砂粒	良好		2.5	
306	34	C	第2貝層	Ⅲ	深鉢	胴部下半～底部	条痕→ナデ／条痕→ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石（微細粒）	良好	(9.2)	5.8	
307	254	C	第2貝層		深鉢	胴部下半	ナデ／ケズリ→ナデ	－／－／－	にぶい褐(7.5YR6/3)／にぶい橙(5YR6/4)	石英・長石・角閃石	良好		7.1	
308	215	C	黒色土層IIF	Ⅱb3	深鉢	口縁～胴部	条痕→ナデ／条痕→ナデ	－／隆起帯文／－	にぶい赤褐(5YR5/4)／にぶい赤褐(5YR4/3)	長石・石英・雲母	良好	(24.8)	9.7	
309	364	C	黒色土層IIF	Ⅱb3	深鉢	胴部	条痕→ナデ／条痕→ナデ	－／隆起帯文／－	にぶい橙(5YR6/4)／にぶい橙(5YR6/3)	雲母・石英・長石・粗砂粒（1mm）	良好		9.8	
310	237	C	黒色土層IIF	Ⅲc2	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	にぶい黄橙(10YR7/2)／灰黄褐(10YR5/2)	角閃石・長石・石英・砂粒	良好	(30.2)	15.8	
311	2	C	黒色土層IIF	Ⅲc2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰褐(7.5YR6/2)	石英・長石・角閃石・雲母	良好		3.9	
312	15	C	黒色土層IIF	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	橙(5YR6/8)／にぶい橙(5YR6/4)	石英・長石・角閃石	良好		5.3	
313	343	C	黒色土層IIF	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／橙(5YR6/8)	粗砂～礫粒（1～5mm）・長石・角閃石	良好		5.5	
314	348	C	黒色土層IIF	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／灰黄褐(10YR6/2)	粗砂粒（1mm）・角閃石・石英	良好		5.4	
315	236	C	黒色土層IIF	Ⅲ	深鉢	胴部下半	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／にぶい橙(7.5YR7/3)	角閃石・長石・雲母	良好	(27.8)	14.9	
316	132	C	黒色土層IIF	Ⅲ	深鉢	胴部下半	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	褐灰(10YR4/1)／灰褐(7.5YR5/2)	石英・長石・雲母	良好		7.6	
317	4	C（推定）	貝層直下	Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／文沈線／刺目文	褐灰(7.5YR4/1)／灰褐(5YR5/2)	滑石を多量に含む・角閃石	良好	(27.8)	7.0	
318	100	C（推定）	貝層直下	Ⅲd2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	にぶい赤褐(5YR4/4)／にぶい赤褐(5YR5/4)	長石・角閃石・石英・雲母	良好		4.6	
319	283	C（推定）	貝層直下	Ⅲb2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突連点文	にぶい橙(7.5YR7/4)／にぶい橙(7.5YR7/4)	砂粒・石英・長石	良好		3.0	外器面に煤付着
320	21	C（推定）	貝層直下	Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR7/2)／灰褐(7.5YR5/2)	長石・砂粒・角閃石	良好		5.3	
321	135	C（推定）	貝層直下	Ⅲc5	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR6/3)／褐灰(10YR4/1)	長石・石英・礫粒（2～5mm）	良好	(25.1)	14.1	
322	112	C（推定）	貝層直下	Ⅲc4	深鉢	口縁～胴部	条痕→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR7/4)／にぶい橙(7.5YR7/4)	長石・石英・角閃石・砂粒	良好		8.9	
323	288	C（推定）	貝層直下	Ⅲc2	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺目文	灰黄(2.5Y6/2)／黄灰(2.5Y5/1)	長石（微細粒）・滑石を僅かに含む	良好		5.8	
324	219	C（推定）	貝層直下	Ⅲb2	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／沈線文	褐灰(10YR4/1)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石	良好		4.5	
325	224	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(7.5YR4/1)	長石・石英・砂粒・滑石を僅かに含む	良好	(26.2)	9.5	

第14表　縄文土器観察表13

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
326	115	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR5/1)	長石・砂粒	良好		5.8	
327	116	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	褐灰(7.5YR4/1)／灰褐(7.5YR5/2)	長石・砂粒	良好		6.3	
328	107	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／にぶい褐(7.5YR5/3)	石英・長石・角閃石	良好	(23.8)	10.4	
329	117	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR4/1)	砂粒・長石・角閃石	良好		6.0	
330	179	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	橙(5YR6/6)／にぶい橙(5YR6/4)	長石・角閃石・石英・礫粒（5mm）	良好		6.5	
331	231	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部下半	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい赤褐(5YR4/3)／橙(5YR7/6)	長石・石英・角閃石	良好	(23.4)	7.0	
332	206	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい赤褐(5YR5/4)／にぶい赤褐(5YR5/4)	滑石を多量に含む	良好		4.6	穿孔有（1箇所）
333	260	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石・砂粒	良好		5.4	
334	249	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴～底部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	浅黄橙(7.5YR8/3)／にぶい橙(7.5YR7/3)	長石・角閃石	良好	(17.4)	3.8	外器面に煤付着
335	221	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR5/2)	長石・角閃石（微細粒）	良好		6.9	
336	133	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部下半	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰褐(7.5YR6/2)／褐灰(7.5YR4/1)	長石・砂粒	良好		10.6	
337	261	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	ケズリ→ナデ／ナデ→沈線	－／沈線文／－	浅黄(2.5Y7/3)／浅黄(2.5Y7/3)	長石・砂粒・角閃石・滑石を僅かに含む	良好		6.3	
338	337	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ→沈線	－／沈線文／－	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR4/1)	粗砂～礫粒（1～3mm）・石英・角閃石	良好		4.9	
339	341	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ→沈線	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR6/2)	粗砂粒（1mm）・長石・角閃石	良好		4.5	
340	263	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴～底部	ﾅﾃﾘ→ﾅﾃ，ｺﾋｷｻｴ/ﾅﾃ	－／沈線文／－	黄灰(2.5Y4/1)／にぶい黄橙(10YR7/3)	長石・砂粒（微細粒）	良好	(14.7)	5.6	外器面に煤付着
341	142	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部下半	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	明赤褐(5YR5/6)／褐灰(5YR4/1)	砂粒・角閃石	良好		7.6	
342	20	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	灰褐(5YR4/2)／にぶい赤褐(5YR5/3)	長石・角閃石・粗砂粒（1mm）	良好		5.0	
343	25	C（推定）	貝層直下	Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文，刺突連点文／－	にぶい橙(7.5YR7/4)／にぶい褐(7.5YR6/3)	石英・長石・滑石を僅かに含む	良好		6.9	
344	243	不明		Ⅰb	深鉢	口縁～胴部	条痕，ナデ／ナデ	－／押型文／押型文	にぶい赤褐(5YR5/4)／にぶい褐(7.5YR5/3)	長石・砂粒・角閃石・滑石	良好	(39.8)	19.0	
345	102	不明		Ⅰb	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／押型文／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／にぶい橙(7.5YR7/4)	長石・角閃石・石英	良好		16.3	
346	6	不明		Ⅰb	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／押型文／押型文	浅黄橙(7.5YR8/4)／浅黄橙(7.5YR8/3)	角閃石・粗砂粒（2mm）	良好		5.5	
347	372	不明		Ⅲb2	深鉢	口縁～胴部	条痕→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	灰黄褐(10YR6/2)／明褐灰(7.5YR7/2)	角閃石	良好	(17.2)	16.3	第2貝層出土？
348	65	不明		Ⅴb	深鉢	口縁～頸部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／刻目文	にぶい橙(7.5YR7/4)／褐灰(10YR4/1)	砂粒・角閃石（微細粒）	良好		6.4	
349	190	不明		Ⅲb5	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	橙(5YR7/6)／にぶい褐(7.5YR6/3)	石英・長石・角閃石	良好		5.7	
350	191	不明		Ⅲb4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR4/1)	長石・雲母？（微細粒）	良好		3.5	

第15表　縄文土器観察表14

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	分類	器種	残存部位	器面調整（内面／外面）	文様（内面／外面／口縁端部）	色調（内面／外面）	胎土	焼成	口径／底径（cm）	残存高（cm）	備考
351	375	不明		Ⅲb5	深鉢	口縁～底部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい橙(7.5YR6/4)／にぶい橙(7.5YR6/4)	角閃石	良好	(13.2)	13.2	第2貝層出土？
352	378	不明		Ⅲc5	深鉢	口縁～底部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/2)／にぶい黄褐(10YR5/3)	角閃石	良好	12.6	12.1	第2貝層出土？
353	376	不明		Ⅲd2	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刻目文	にぶい赤褐(5YR4/4)／暗赤褐(5YR3/3)	角閃石	良好	(30.3)	17.9	第2貝層出土？
354	258	不明		Ⅲb5	深鉢	口縁部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／灰褐(7.5Y5/2)	石英・長石・角閃石	良好		5.2	
355	194	不明		Ⅲb4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	褐灰(10YR5/1)／褐灰(10YR5/1)	角閃石（微細粒）	良好		3.8	
356	301	不明		Ⅲc4	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	にぶい橙(5YR7/4)／にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・長石・角閃石・滑石	良好		3.2	
357	155	不明		Ⅲ	深鉢	口縁～胴部	ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/4)／にぶい黄橙(10YR7/3)	角閃石・長石・砂粒・石英	良好		6.4	
358	151	不明		Ⅲ	深鉢	胴部	条痕→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／にぶい黄橙(10YR6/3)	石英・角閃石	良好		5.8	
359	173	不明		Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい橙(7.5YR6/4)／にぶい褐(7.5YR6/3)	石英・長石	良好		3.9	
360	379	不明		Ⅲc5	深鉢	口縁～底部	ナデ／ナデ	沈線文，刺突列点文／沈線文／刺突列点文	にぶい黄橙(10YR6/3)／灰黄褐(10YR5/2)	角閃石	良好	30.7	34.0	第2貝層出土？
361	380	不明		Ⅲd2	深鉢	口縁部～底部	条痕→ナデ／ナデ	沈線文／沈線文／刺突列点文	灰黄(2.5YR6/2)／灰黄褐(10YR5/2)	角閃石，長石，石英	良好	(36.6)	24.5	第2貝層出土？
362	184	不明		Ⅲ	深鉢	胴部	ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい赤褐(5YR5/3)／灰褐(5YR5/2)	石英・角閃石	良好		7.4	
363	199	不明		Ⅲ	深鉢	口縁～頸部	ナデ／ナデ	沈線文／押引文／－	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR5/1)	長石・角閃石・砂粒	良好		4.0	
364	196	不明		Ⅲ？	深鉢	口縁部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石	良好		3.4	
365	69	不明		Ⅳb	深鉢	口縁～頸部	条痕→ナデ，ミガキ／ケズリ→ナデ，ミガキ	－／沈線文／刻目文	赤褐(5YR4/6)／にぶい赤褐(5YR5/4)	長石・角閃石・雲母（微細粒）	良好		7.1	
366	149	不明		Ⅳa	深鉢	口縁部	ケズリ→ナデ／ナデ	－／刺突文／－	にぶい橙(5YR6/4)／にぶい赤褐(5YR5/3)	長石（微細粒）	良好		5.7	
367	262	不明		Ⅴa	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	－／－／刻目文	灰黄(2.5Y6/2)／黄灰(2.5Y5/1)	角閃石・長石・石英	良好		5.9	
368	374	不明		Ⅴa	深鉢	口縁～底部	ナデ／ミガキ	－／－／刻目文	灰黄褐(10YR6/2)／にぶい褐(7.5YR5/3)	角閃石	良好	(21.5)	23.2	
369	373	不明		Ⅵ	鉢	口縁～底部	ケズリ→ナデ／ケズリ→ナデ	－／－／－	灰褐(7.5YR6/2)／にぶい褐(7.5YR6/3)	角閃石	良好	(16.9)	10.6	
370	153	不明		Ⅵ	深鉢	口縁～頸部	ミガキ／ナデ	－／－／－	灰黄褐(10YR6/2)／褐灰(10YR5/1)	長石・角閃石・砂粒	良好	(27.0)	8.5	
371	67	不明		Ⅴa	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ	刻目文／－／刻目文，刺突文	灰黄褐(10YR6/2)／灰黄褐(10YR6/2)	雲母・石英	良好		4.6	
372	370	不明		Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ，ミガキ／ミガキ	－／縄文，沈線文／－	にぶい褐(7.5YR5/3)／にぶい褐(7.5YR5/4)	長石・角閃石	良好		5.8	穿孔有（1箇所）
373	362	不明		Ⅴ	深鉢	口縁部	ナデ／ナデ，ミガキ	－／縄文，沈線文／－	にぶい黄橙(10YR7/3)／灰黄褐(10YR6/2)	長石・角閃石	良好		8.5	
374	42	不明		Ⅴa	深鉢	胴部	ミガキ，ナデ／ミガキ	－／沈線文／－	灰褐(5YR4/2)／褐灰(7.5YR4/1)	長石・粗砂粒（1mm）	良好		7.4	外部表面黒色・裏面一部に赤色顔料有

第16表　石器・石製品・貝製品観察表

挿図番号	実測番号	調査地点	層位	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
375	20014-0003	A1-3	表土	石鏃	黒曜石	1.93	1.33	0.25	0.57	
376	20014-0001	A1-3	表土	石鏃	流紋岩	3.30	2.07	0.55	3.19	
377	20014-0002	A1-3	表土	石鏃	黒曜石	3.03	1.72	0.49	2.15	
378	20014-0004	A5	純貝層	石鏃	黒曜石	2.76	1.41	0.38	0.99	
379	20014-0011	A1-B2連結部	表土	削器	安山岩	6.80	5.20	1.42	38.15	
380	20014-0014	A2	茶褐色土層	磨製石斧	珪岩	9.07	5.20	2.28	144.09	
381	20014-0015	A2	茶褐色土層	磨製石斧	蛇紋岩	6.44	5.32	1.86	106.87	
382	20014-0016	A1-B1連結部	貝層	磨製石斧	粘岩？	9.27	5.73	3.16	228.00	
383	20014-0018	A5	混貝土層	磨製石斧	砂岩ホルンフェルス	13.44	6.48	2.92	375.00	
384	20014-0017	A2	茶褐色土層	磨製石斧	千枚岩	7.78	7.42	2.30	200.04	
385	20014-0021	A1-3	表土	円盤状石器	泥岩ホルンフェルス	3.27	3.12	0.74	12.73	
386	20014-0020	A1-3	表土	円盤状石器	安山岩	3.97	3.70	1.36	31.02	
387	20014-0019	A1-2	表土	石製垂飾	千枚岩	1.86	2.46	0.30	2.24	
388	20014-0023	A1-1	攪乱層	研磨痕のある石器	粘板岩	5.95	2.87	1.12	30.17	
389	20014-0022	A1-3	表土	棒状石器	粘岩？	7.43	1.62	1.43	22.50	
390	20014-0006	C	第2貝層	石匙	安山岩	4.24	2.84	0.56	8.49	
391	20014-0005	C	第2貝層	石匙	安山岩	6.68	3.44	1.10	11.94	
392	20014-0007	C	第2貝層	石匙	安山岩	4.78	4.78	0.88	15.07	
393	20014-0010	C	第2貝層	削器	粘板岩	5.05	3.84	1.09	16.12	
394	20014-0008	B3	貝層	削器	粘板岩	6.57	5.71	1.06	35.01	
395	20014-0009	B3	貝層下	削器	粘板岩	6.62	4.08	0.76	17.80	
396	20014-0013	B2	第2貝層	石錘	泥岩	8.00	6.78	1.60	106.96	
397	20014-0012	C	表土	石錘	砂岩	6.53	7.46	1.82	110.10	
398	20014-0024	C	第1貝層	貝輪	斧足類(フネガイ目フネガイ科)	4.44	6.26	0.70	7.19	

第７章　動物遺存体

第１節　出土した動物遺存体の概要

1959年発掘調査では，堆積土各層で数多くの貝類遺体や脊椎動物遺体が出土したが，定量的な貝層のブロックサンプリングや水洗選別は行われておらず，発掘時に任意的に取り上げられた現地採集資料である。以下では，採集された動物遺存体について，貝類遺体と脊椎動物遺体に分けて同定結果を示す。

第２節　貝類遺体

（1）出土した貝類遺体

調査時に採集され，慶応大学資料として保管している貝類遺体の種類は以下のとおりである。

① 斧足類（二枚貝）

サルボウ（*Scapharca kagoshimensis*，フネガイ目フネガイ科）
ハイガイ（*Tegillarca granosa*，フネガイ目フネガイ科）
アカガイ（*Scapharca broughtonii*，フネガイ目フネガイ科）
マガキ（*Crassotrea gigs*，カキ目イタボガキ科）
イタボガキ（*Ostrea denselamellosa*，カキ目イタボガキ科）
イワガキ（*Crassostrea nippona*，カキ目イタボガキ科）
アサリ（*Ruditapes philippinarum*，マルスダレガイ目マルスダレガイ科）
ハマグリ（*Metrix lusoria*，マルスダレガイ目マルスダレガイ科）
オキシジミ（*Cyclina sinensis*，マルスダレガイ目マルスダレガイ科）
カガミガイ（*Phacosoma japonicum*，マルスダレガイ目マルスダレガイ科）
ヤマトシジミ（*Corbicula japonica*，マルスダレガイ目シジミ科）
マシジミ（*Corbicula leana*，マルスダレガイ目シジミ科）
シオフキ（*Mactra veneriformis*，マルスダレガイ目バカガイ科）
アゲマキ（*Sinonovacula constricta*，マルスダレガイ目マテガイ科）
マテガイ（*Solen strictus*，マルスダレガイ目マテガイ科）
ウネナシトマヤガイ（*Trapezium liratum*，マルスダレガイ目フナガタガイ科）
サギガイ（*Macoma sectior*，マルスダレガイ目ニッコウガイ科）
オオノガイ（*Mya arenaria oonogai*，オオノガイ目オオノガイ科）

② 腹足類（巻貝）

スガイ（*Turbo cornatus coreensis*，古腹足目サザエ科）
ダンベイキサゴ（*Umbonium giganteum*，古腹足目ニシキウズガイ科）
イシダタミ（*Monodonta labio form confusa*，古腹足目ニシキウズガイ科）
アワビ（*Monodonta labio form confusa*，古腹足目ニシキウズガイ科）
ヘタナリ（*Cerithidea cingulata*，盤足目フトヘタナリ科）
フトヘタナリ（*Cerithidea rhizophorarum*，盤足目フトヘタナリ科）
ツメタガイ（*Glossaulax didyma*，盤足目タマガイ科）
ウミニナ（*Batillaria multiformis*，盤足目ウミニナ科）

イボウミニナ（*Batillaria zonalis*，盤足目ウミニナ科）
カワアイ（*Cerithidea djadjariensis*，盤足目フトヘタナリ科）
イボニシ（*Thais clavigera*，新腹足目アッキガイ科）
バイ（*Babylonia japonica*，新腹足目エゾバイ科）
アカニシ（*Rapana venosa*，新腹足目アッキガイ科）
トヨツガイ（*Coralliophila radula*，新腹足目アッキガイ科）
テングニシ（*Hemifusus tuba*，新腹足目テングニシ科）
ツクシマイマイ（*Euhadra herklotsi*，有肺目オナジマイマイ科）

（２）貝層出土の貝類遺体について

1959年11月３日付け江坂輝彌氏による調査日誌には，採取状況は不明であるが，Ａトレンチ第７区純貝層及びＣトレンチ第２貝層採取の貝類遺体数に関する記述がある。

前者（計949点）は，マガキ（670点，約70.6％）が最も多く，オキシジミ（68点，約7.2％），アサリ（同），スガイ（66点，約7.0％），ハイガイ（29点，約3.1％），イボウミニナ（13点，約1.4％）の順に多い。その他では，イワガキ，ヘナタリ，ヤマトシジミなどがあるが，その割合は１％以下である。

また，後者（計479点）も同様に，マガキ（296点，約61.8％）が最も多く，ハイガイ（51点，約10.6％），カガミガイ（48点，約10.0％），ハマグリ（19点，約4.0％），マテガイ（15点，約3.1％），スガイ（14点，約2.9％），イワガキ（７点，約1.5％），オキシジミ（５点，約1.0％），オオノガイ（同），イボウミニナ（同）の順に多い。その他，イタボガキやサルボウ，マシジミ，ツメタガイなどが１～２点採取されているが，その割合は１％以下である。

第３節　脊椎動物遺体

（１）出土した脊椎動物遺体の概要

同定作業を実施した資料50点の脊椎動物遺体は，魚類（硬骨魚綱）及び哺乳類である。実際に同定を行ったのは採集資料の一部であるが，第１貝層や第２貝層などの貝層出土資料を優先的に選定し，同定作業を実施した。

（２）脊椎動物遺体の種類と特徴について

①魚類（硬骨魚綱）　クロダイ属（*Acanthopagrus*）
　　スズキ（*Lateolabrax japonicus*）
②哺　乳　類　　クジラ類（*Cetacea*）
　　ムササビ（*Lateolabrax*）
　　ウマ（*Equus caballus*）？
　　イノシシ（*Sus scrofa*）
　　ニホンジカ（*Cervus nippon*）
　　ウシ（*Bon taurus*）

クロダイ属，スズキは汽水域にも進入する内湾（島原湾）を代表する魚種である。クジラ類は，内湾

第17表　曽畑貝塚出土脊椎動物遺体一覧表

No.	遺物No.	調査区	層　位	大分類	小分類	部　位	左右	備　考
1	31	BT1	第２貝層	硬骨魚綱	クロダイ属	前上顎骨	左	
2	47	A1区3～4連絡	貝層	硬骨魚綱	クロダイ属	歯骨	左	
3	36	BT1	第１貝層30～40	硬骨魚綱	スズキ	歯骨	右	
4	39	A1区5	貝層最下部	硬骨魚綱	スズキ？	椎骨	－	腹椎
5	32	BT1	第２貝層	硬骨魚綱	不明	鰭棘	－	棘条部
6	48	A1区3～4連絡	貝層	硬骨魚綱	不明	鰭棘	－	担鰭骨
7	49	A1区3～4連絡	貝層	硬骨魚綱	不明	鰭棘	－	棘条部
8	50	A1区3～4連絡	貝層	硬骨魚綱	不明	鰭棘	－	棘条部
9	12	CT	第１貝層	哺乳類	クジラ類	椎骨	－	椎体未癒合破片
10	13	CT	第１貝層	哺乳類	クジラ類	椎骨	－	椎体板未癒合破片
11	14	CT	第１貝層	哺乳類	クジラ類	椎骨	－	椎体板未癒合破片
12	15	CT	第１貝層	哺乳類	クジラ類	椎骨	－	椎体板未癒合破片
13	42	A6	Ⅴ～Ⅶ	哺乳類	ムササビ	大腿骨	右	
14	43	A6	Ⅴ～Ⅶ	哺乳類	ウマ？	大腿骨	右	
15	5	CT	第１貝層	哺乳類？	不明	不明	－	
16	7	CT	第１貝層	哺乳類？	不明	不明	－	
17	6	CT	第１貝層	哺乳類	イノシシ／シカ？	椎骨	－	胸椎？
18	46	A1区3～4連絡	貝層	哺乳類	イノシシ／シカ	椎骨	－	腰椎
19	25	CT	貝層最下部	哺乳類	イノシシ	下顎骨	左右	結合部，左第二前臼歯萌出中
20	19	CT	貝層最下部	哺乳類	イノシシ	肩甲骨	右	近位部イヌなどの咬痕
21	27	BT2	貝層第２層	哺乳類	イノシシ	肩甲骨	左	近位部カットマーク？
22	29	BT2	貝層第２層	哺乳類	イノシシ	肩甲骨	右	
23	45	A1区4	貝層40～50	哺乳類	イノシシ	肩甲骨	右	遠位前縁に叩切痕
24	18	CT	貝層最下部	哺乳類	イノシシ	上腕骨	右	遠位端滑車部に傷
25	4	CT	第１貝層	哺乳類	イノシシ？	肋骨	左	
26	26	BT2	貝層第２層	哺乳類	イノシシ	橈骨	左	
27	3	CT	第１貝層	哺乳類	イノシシ	指骨	－	腹側に穴，刺突？
28	33	BT1	礫層	哺乳類	イノシシ	大腿骨	左	遠位部後位にカットマーク多数
29	30	BT2	貝層第２層	哺乳類	イノシシ	距骨	右	
30	24	CT	貝層最下部	哺乳類	イノシシ	足根骨	右	
31	21	CT	貝層最下部	哺乳類	イノシシ	遊離歯	右	下顎第一切歯（咬耗あまり進行せず）
32	22	CT	貝層最下部	哺乳類	イノシシ	遊離歯	左	下顎第一切歯（咬耗あまり進行せず）
33	28	BT2	貝層第２層	哺乳類	イノシシ	遊離歯	左	下顎犬歯
34	8	CT	第１貝層	哺乳類	イノシシ	椎骨	－	胸椎，椎体板未癒合
35	9	CT	第１貝層	哺乳類	シカ	椎骨	－	胸椎，椎体板未癒合
36	2	CT	第１貝層	哺乳類	シカ	肋骨	左	近位内側にカットマーク多数
37	11	CT	第１貝層	哺乳類	シカ	肋骨	右	
38	44	A1区4	貝層40～50	哺乳類	シカ	上腕骨	右	被熱
39	20	CT	貝層最下部	哺乳類	シカ	橈骨	左	骨幹部で螺旋状剥離の痕跡
40	23	CT	貝層最下部	哺乳類	シカ	尺骨	左	
41	40	A5	純貝層	哺乳類	シカ	踵骨	右	
42	38	A1区5	貝層50～60	哺乳類	シカ	遊離骨	右	下顎第一／二後臼歯
43	17	CT	第１貝層	哺乳類	ウシ	椎骨	－	腰椎
44	10	CT	第１貝層	哺乳類	ウシ？	椎骨	－	尾椎
45	41	A1区3	30～40	哺乳類	ウシ	肋骨	右	
46	16	CT	第１貝層	哺乳類	ウシ	上腕骨	右	
47	1	CT	第１貝層	哺乳類	ウシ	手根骨	左	
48	35	BT1	第１貝層30～40	哺乳類	ウシ	中節骨／中足骨		
49	34	BT1	第１貝層30～40	哺乳類	ウシ	中節骨	－	
50	37	BT1	第１貝層30～40	哺乳類	ウシ	遊離骨		上顎第二前臼歯

に回遊して来たクジラ類の猟が行われたか，座礁したクジラ類が分配されたと考えられる。

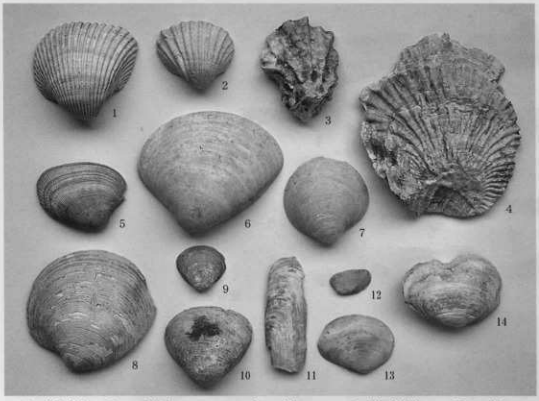
イノシシとニホンジカでは遊離歯を除いて，破片数，最少個体数ともにイノシシの方が多く出土している。イノシシ，ニホンジカの両方とも頭部，中軸骨，四肢骨が出土していることから，解体は遺跡周辺において行われたと考えられる。また，火を受けている骨があり，その場で調理した事も考えられる。

一方，ウマとウシは，日本における普及がウマは４世紀末から５世紀にかけて，ウシは５世紀後半から６世紀にかけてと考えられている。今回調査を行った動物遺体が出土した曽畑貝塚は，近隣に所在する轟貝塚とともに縄文時代の貝塚であることから，ウマ，ウシについては後世の混入と考えられる。

なお，古墳時代の遺物も周辺から出土していることから，ウマ，ウシについては当該期に属する可能性がある。

引用・参考文献

松井　章編　2006『動物考古学の手引き』2001－2005年度　奈良文化財研究所埋蔵文化財センター
松井　章　2008『動物考古学　*Fundamentals of Zooarchaeology in Japan*』京都大学学術出版会



1 サルボウ　2 ハイガイ　3 マガキ　4 イタボガキ　5 アサリ
6 ハマグリ　7 オキシジミ　8 カガミガイ　9 ヤマトシジミ　10 シオフキ
11 アゲマキ　12 ウネナシトマヤガイ　13 サギガイ　14 オオノガイ

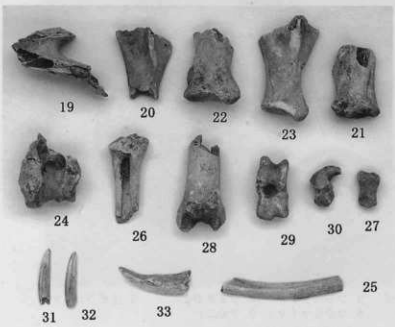
斧足類（二枚貝）

1 スガイ　2 ダンベイキサゴ　3 フトヘタナリ　4 ツメタガイ　5 イボウミニナ
6 イボニシ　7 バイ　8 ツクシマイマイ　9 アカニシ

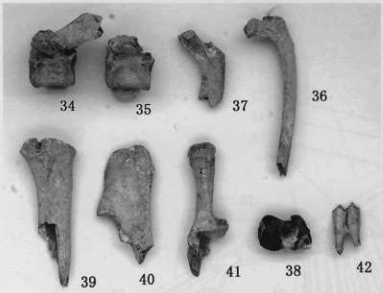
腹足類（巻貝）

硬骨魚綱

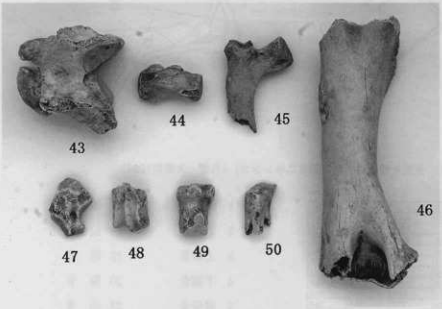
哺乳類１



哺乳類２



哺乳類3



哺乳類4

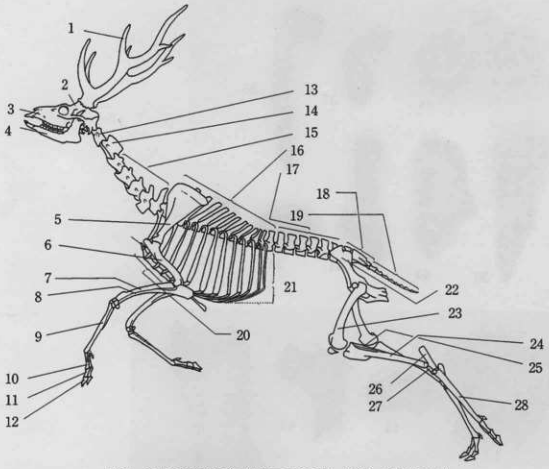


図１　主要な骨格の名称（図はニホンジカ）（八谷・大泰司1994）

動物種別計測値一覧　　単位：mm

名称	計測部位	ニホンジカ	イノシシ	ツキノワグマ♂	カモシカ
頭蓋骨	頭蓋全長（GL）	290.3	294.9	257.1	209.7
	頭蓋最大幅（ZB）	132.7	136.2	170.8	91.3
下顎骨	下顎骨全長（id-Goc）	186.6	241.7	179.2	166.9
	下顎枝高（Cr-Gov）	101.0	108.7	86.9	86.1
肩甲骨	最大長（HS）	161.5	191.5	132.7	160.8
	関位最小幅（GLP）	39.5	33.9	39.1	35.1
上腕骨	最大長（GL）	180.8	196.0	204.5	196.4
	近位端最大幅（Bp）	46.3	50.0	40.0	43.2
	遠位端最大幅（Bd）	38.5	41.7	55.6	39.4
	滑車幅（BT）	37.4	29.9	37.1	37.0
橈　骨	最大長（GL）	187.0	142.3	179.3	182.2
	近位端最大幅（Bp）	35.7	27.6	23.7	37.1
	遠位端最大幅（Bd）	32.4	32.0	32.0	33.6
尺　骨	最大長（GL）	229.6	198.1	209.4	226.4
	幅（DPA）	32.6	36.1	26.9	27.6
中手骨	最大長（GL）	186.8	84.1 (63.3)	－	136.6
	近位端最大幅（Bp）	25.1	20.2 (15.0)	－	30.6
	遠位端最大幅（Bd）	27.4	16.4 (15.3)	－	35.2
寛　骨	寛骨長（GL）	217.8	221.7	192.1	216.4
	寛骨臼最大幅（LA）	32.4	31.8	31.4	31.6
大腿骨	最大長（GL）	223.6	209.9	215.1	219.1
	近位端最大幅（Bp）	55.0	52.7	53.4	47.3
	遠位端最大幅（Bd）	49.9	45.5	44.9	45.1
脛　骨	最大長（GL）	265.3	188.7	176.4	254.8
	近位端最大幅（Bp）	50.4	48.3	46.4	49.1
	遠位端最大幅（Bd）	33.7	27.6	34.4	34.1
腓　骨	最大長（GL）	－	174.7	158.7	－
中足骨	最大長（GL）	214.8	69.6 (76.3)	－	146.8
	近位端最大幅（Bp）	24.2	14.8 (13.5)	－	25.6
	遠位端最大幅（Bd）	26.7	15.3 (15.9)	－	32.9
距　骨	外側最大幅（GLl）	35.8	40.2	26.3	36.6
	内側最大幅（GLm）	34.4	35.3	－	34.7
	遠位端最大幅（Bd）	23.4	23.8	－	19.4
踵　骨	最大長（GL）	80.8	75.4	45.9	66.6
	最大幅（GB）	25.4	22.6	31.3	24.1

1　（枝）角
2　頭蓋骨
3　上顎骨
4　下顎骨
5　肩甲骨
6　上腕骨
7　橈　骨
8　尺　骨
9　中手骨
10　基節骨
11　中節骨
12　末節骨
13　環　椎
14　軸　椎
15　頸　椎
16　胸　椎
17　腰　椎
18　仙　椎
19　尾　椎
20　胸　骨
21　肋　骨
22　寛　骨
23　大腿骨
24　脛　骨
25　腓　骨
26　踵　骨
27　距　骨
28　中足骨

第71図　大型哺乳類骨格名称（松井編2006より転載）

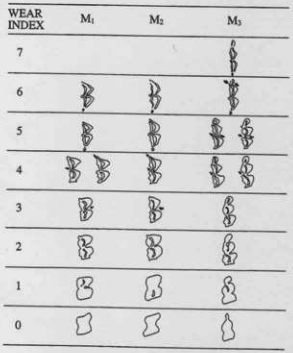


図２　ニホンジカ各後臼歯摩滅指数
右下顎咬合面（摩滅面）黒矢印は分断を、白矢印は連続していることを示す。（大泰司1980）

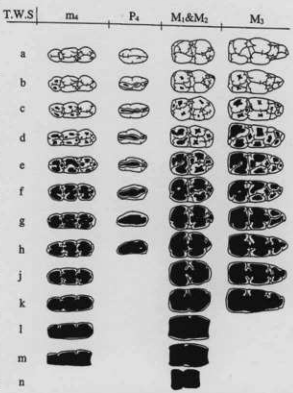


図３　イノシシ下顎歯摩滅指数（Bull and Payne 1982）

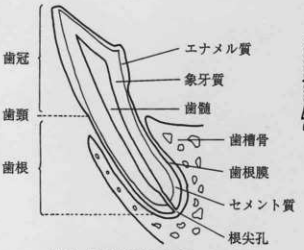


図４　歯の部分名称（図はニホンジカ）
（八谷・大泰司1994）

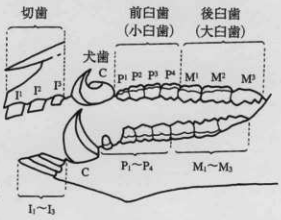


図５　歯の名称と略号（図はイノシシ）
（原図　八谷・大泰司1994）

第72図　ニホンジカ及びイノシシの歯に関する資料（松井編2006より転載）

第８章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定の概要

曽畑貝塚の貝層埋積年代などを明らかにするため，調査段階で採取され，保管されていた貝層出土炭化物３点を対象に，加速器質量分析法（AMS 法）にて炭素年代測定を実施した。分析試料は以下とおりである。

・**試料**Ａ…炭化物（採取地点：Ａトレンチ７区純貝層，重量約10ｇ）
・**試料**Ｂ…　〃　（　　〃　　）
・**試料**Ｃ…　〃　（採取地点：Ａトレンチ７区純貝層，重量約３ｇ）

放射性炭素年代は，試料中の放射性炭素濃度と半減期から単純に算出された年代である。また，放射性炭素 δ^{13}C 補正年代は，放射性炭素年代を δ^{13}C 値により補正して算出された年代である。暦年代に較正にはこれを利用し，年代値は years before present（0 YBP ＝1950 A.D.）で表示する。半減期として，国際的に慣例となっている5568年を適用し，年代値の誤差は ± １ σ 表示（68％確率）である。標準試料として NIST シュウ酸を使用し，δ^{13}C 値は国際標準試料 PDB の同位体比（^{13}C／^{12}C）からの千分偏差（‰）で表した。

第２節　測定結果（第18表）

測定結果は第18表のとおりである。試料Ａ：3610±30YBP，試料Ｂ：3570±30YBP，試料Ｃ：3550±30YBP と，３つの試料とも3550±30～3610±30YBP の範囲内にあり，比較的近い値が得られた。

調査の結果，Ａトレンチ６区から７区の純貝層からは，鐘崎式土器や市来式土器などの縄文後期中葉に位置づけられる縄文土器が出土している。これまで各地で報告されているこれらの土器型式の炭素年代測定結果（前迫2008，水ノ江2008）とも，おおむね合致する結果が得られたといえよう。

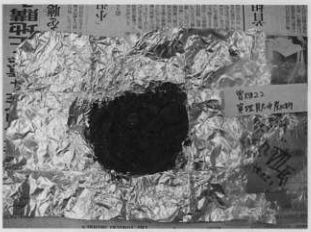
第18表　放射性炭素年代測定結果

測定項目	単位	測定結果		
		試料A（試料番号 09R0912）	試料B（試料番号 09R0913）	試料C（試料番号 09R0914）
放射性炭素 δ^{13}C 補正年代	YBP	3610±30	3570±30	3550±30
δ^{13}C 値	‰	−27.5	−27.5	−26.0

参考文献

前迫　亮一　2008「市来式土器」『総覧 縄文土器』小林達雄先生古稀記念企画 『総覧 縄文土器』刊行委員会
水ノ江和同　2008「九州磨消縄文系土器」『総覧 縄文土器』小林達雄先生古稀記念企画 『総覧 縄文土器』刊行委員会

試料A



試料B

試料C

放射性炭素年代測定分析試料

第9章　総　括

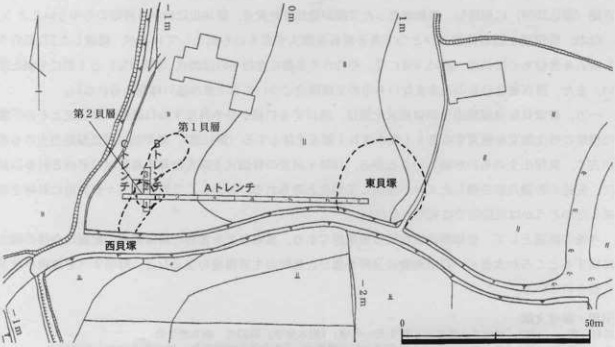
第1節　曽畑貝塚の形成過程について

1959年実施の江坂輝彌氏を中心とする発掘調査の結果，調査区西側と東側で貝層が検出され，前者は西貝塚，後者は東貝塚として区別され，西貝塚では形成時期が異なる2層の貝層（第1貝層及び第2貝層）が検出された。

西貝塚下層の貝層（第2貝層）については，江坂輝彌氏より貝類遺体の採取が行われ，マガキが約70.6％と高い割合で出土し，続いてオキシジミ（約7.2％），アサリ（同），スガイ（約7.0％），ハイガイ（約3.1％）の順に多く，その他にはイボウミニナ，イワガキ，ヘタナリ，ヤマトシジミなどが確認された。また，脊椎動物遺体として，クロダイ属やイノシシなどの動物遺体が出土した。本層からは曽畑式土器がまとまって出土していることから，縄文時代前期に形成された貝層と判断され，その広がりは直径10m程度と推定される。

上層の貝層（第1貝層）では，ハイガイやマガキを主体としており，クジラ類やイノシシ，シカなどの脊椎動物遺体が出土した。本層からは鐘崎式土器などの縄文後期の磨消縄文系土器が出土していることから，後期に形成された貝層とみられ，その広がりは南北約25m，東西約8mとみられる。

一方，直径20m程度と推定される東貝塚の純貝層でも，江坂輝彌氏により貝類遺体の採取が行われ，西貝塚第2貝層と同様にマガキが約61.8％と最も高く，ハイガイ（約10.6％），カガミガイ（約10.0％），ハマグリ（約4.0％），マテガイ（約3.1％）の順に多く，その他はスガイ，イワガキ，オキシジミ，オオノガイなどが確認された。本層からは鐘崎式土器や市来式土器などの縄文時代後期の土器が出土しており，本層から出土した炭化物3点の炭素年代測定では，3550±30～3610±30YBPという比較的近い値が得られており，出土した縄文土器の年代的位置付けとも合致する結果が得られたといえよう。



第73図　曽畑貝塚検出貝層の推定範囲（1/1,000）

なお，西貝塚下層貝層（第２貝層）や東貝塚純貝層の下層には，縄文時代前期に堆積したとみられる（茶）褐色土層が堆積している。当該土層からは，押型文土器や轟式土器のほか，曽畑式土器が出土している。これらの曽畑式土器は，曽畑期に形成されたとみられる西貝塚下層貝層出土の曽畑式土器とは文様構成に大きな違いは認められない。

第２節　曽畑貝塚の出土遺物について－曽畑式土器を中心に－

発掘調査では，縄文時代早期から後期にかけての土器や石器・石製品，貝製品などが出土した。出土遺物の中心は縄文土器であり，押型文土器（Ⅰ類），轟式土器（Ⅱ類），曽畑式土器（Ⅲ類），市来式土器（Ⅳ類），鐘崎式土器（Ⅴａ類），北久根山式土器（Ⅴｂ類）などが出土したが，曽畑式土器の出土量はその他の型式の縄文土器にくらべて突出している。

曽畑式土器の口縁部形態が判明するもの（計132点）のうち，口縁部がゆるやかに外反するⅢｃ類が67点（約50.8％）と多数を占め，強く外反するⅢｄ類（22点，約16.7％）を含めると６割以上を占める。

文様については，Ⅲｃ２類やⅢｄ２類など口縁部外面に横位の平行沈線文のみを施すもの，Ⅲｃ４類やⅢｄ４類など横位の平行沈線文に加えて山形三角文などを組み合わせて文様帯を組み合わせるものが多く，前者では60点（約45.5％），後者は48点（約36.4％）と多数を占め，刺突文を施すものは３点（約2.3％）とごく少数である。胴部の文様帯は，横位や縦位，斜位の平行沈線文を組み合わせた文様，縦位の沈線とＸ字文の内部を平行沈線文で充填するもの，綾杉沈線文や縦位の曲線文を施すものなどがあり，底部は平行沈線文を施すものが多い。また，口縁部，胴部，底部を区別するはっきりとした区画線を施文するものはみられない。

このように，口縁部文様帯に刺突文を欠いて口縁部が外反するものが多く，文様帯にくずれがみられるなどの特徴があり，これらを総合的に勘案すれば，杉村彰一氏の分類（第１～３類）の第２類（杉村1962），水ノ江和同氏の分類によるⅡ式ｂ類（水ノ江1987），堂込秀人氏による編年（Ⅰ～Ⅵ期）のⅢ～Ⅳ期（堂込2008）に相当し，装飾的だった文様が整然さを欠き，粗雑化に向かう段階のものといえよう。

なお，曽畑式土器の特徴のひとつである滑石を混入するものも出土しているが，掲載した271点のうち滑石を含むものは43点（約15.9％）で，そのうち多量に含むものは20点（約7.4％）と１割にも満たない。また，滑石を含むものと含まないものの文様構成についても大きな違いは認められない。

一方，曽畑貝塚低湿地出土の曽畑式土器は，直口する口縁かやや外反する口縁部に刺突文とその下部に横位の短沈線文を施文するⅢａ１類やⅢｂ１類を主体とする（第12図）。編年的には低湿地出土のものが古く，貝塚出土のものが新しいことから，1959年調査の曽畑式土器を包含する貝塚が形成される以前に，先述の貯蔵穴群を残した人々が生活していたとみられる。しかし，これらの人々が別地に貝塚を形成したかどうかは現段階では判然としない。

今後の課題として，曽畑期の居住域は未確認であり，墓域などを含めた集落構造の把握は今後の調査に期するところが大きく，自然遺物の分析を通じた当時の生活環境の復元など，解明すべき課題が数多く残されている。

引用・参考文献

杉村　彰一　1962「曽畑式土器文化に関する一考察」『熊本史学』第23号　熊本史学会
水ノ江和同　1987「西北九州における曽畑式土器の諸様相」『考古学と地域文化』同志社大学考古学研究室
堂込　秀人　2008「曽畑式土器」『総覧 縄文土器』小林達雄先生古稀記念企画『総覧 縄文土器』刊行委員会

付 編 1

1　江坂　輝彌・可兒　弘明・笹津　備洋　「曽畑貝塚発掘調査の成果」
2　渡辺　誠・可兒　弘明　「発掘経過」
3　小片　保　「曽畑貝塚人骨所見」
4　可兒　弘明　「曽畑貝塚出土ハイガイの開殻痕について」
5　乙益　重隆　「熊本県内の曽畑式土器出土遺跡」
6　熊本日日新聞社　「曽畑貝塚発掘調査関連報道記事」

1　曽畑貝塚発掘調査の成果

江坂　輝彌
可兒　弘明
笹津　備洋

1959年10月28日より，11月６日までの10日間に亘って曽畑貝塚を発掘調査した。その成果の要点について報告する。

発掘調査は先づ東西に長さ66m，巾1.5mのＡトレンチを発掘。西より長さ10mごとに１区より７区までに区分した（７区は長さ６m）。ところで曽畑式土器を出土する貝塚は台地の西端部にのみで，１区から２区の西端に認められた。２区の東半部から，３，４，５区と６区の西半部までは貝層がなく，畑地の耕土層中に微細な貝殻片を混えるのみであった。この地区にも嘗ては縄文時代後期の土器を含む貝層が存在したものと考えられた。恐らく明治時代の後半か，大正年代に入って，この地の貝層が貝殻を焼いて石灰をつくる原料として採掘されたものであろう。

６区の東半から７区には縄文時代後期の鐘ヶ崎式，市来式などに近似の土器を出土するマガキを主とする貝層が見られた。

今回の発掘調査は曽畑式土器文化の文化内容，その編年的位置などの究明が主目的であり，Ａトレンチ１区の東よりに，Ａトレンチと直角に南北方向に，長さ12m，巾２mのＢトレンチを発掘し，さらにＢトレンチ２区の西側にＣトレンチを発掘して，台上西端に所在の曽畑式土器を出土する貝層を徹底的に調査した。この地区にも上層には後期の土器を出土する貝層があり，その下に礫を含む黒褐色土層の間層を挟んで，曽畑式土器を出土する貝層が存在した。この貝層の下には褐色土層が堆積し，貝層直下のこの層の上面からは比較的多量に，曽畑式土器の復原可能な大破片が出土した。またこの層の上半部からは表裏に淡い貝殻条痕文が施文され，その上にみみず張れ状の細隆起線でかざられた土器片が出土した。さらにこの層の下部から，その下に堆積する黒色土層の上部に発掘をすすめると，山形，格子目，楕円などの廻転押捺文土器片が発見された。

曽畑式土器のほとんどは平底に近い丸底であったが，その下層から発見された条痕文土器や，廻転押捺文土器は平底をなす深鉢形の土器であった。

なお本貝塚の詳細な調査報告は近く公刊の予定である。

2　発掘経過

渡辺　誠
可兒　弘明

Aトレンチ第1区

曽畑貝塚を東西に縦断するAトレンチの西端10×1.5mが第1区である。本発掘に於て所謂曽畑式土器を包含する貝層はこの地区に於て発見され，これによってBトレンチ，Cトレンチが設定されて，曽畑式土器包含貝層が，ほぼ完掘に近いまでに発掘される端緒となった。

第1区では西より1～5までの2m平方の区を細分して発掘を行った。土地の人の言によれば台地の先端即ち西端は貝塚の南を東西に通ずる道路開鑿の際に盛土したものとのことであったが，発掘の結果第1区1及び同2の西寄りの部分がこれに当るものと認められた。即ち破砕された貝を混えた土層が水平に堆積し，且つ出土遺物は曽畑式土器から中世の瓦陶器に至るものまでが雑然として混在し，二次的堆積であることを示している。然し貝層下土層はこのような撹乱を受けた痕跡はなかった。

又第1区3と同4の間から2区にかけて南壁寄りに巾2mほどの塵芥穴があり内部のものから見て中世に作られたものと思われる。第1区4及び同5では次第に貝層が浅くなり，且つその厚さを減じて，消滅に近づき，次の第2区の西端で完全に姿を消す。

結局第1区を通観すると第1区1は二次堆積であり，第1区5は貝層の上端となり，第1区2より同4までが貝塚の主体部をなすことが明らかとなった。この部分では次の様な層序を確認することが出来た。

第一層　表土（耕土層）
第二層　第1貝層
第三層　礫層（間に土を含む）
第四層　第2貝層
第五層　貝層下土層
第六層　基盤（赤灰色粘質土層）

第1区5では第一層から第三層までは明確に分離出来ない（第三層は部分的に存在する）。

以上の所見から第四層（第2貝層）は第2区西端を頂点として，西に向って緩やかに下降する傾斜面に形成された貝塚でその末端は第1区2の西寄りの部分である。この上の第三層（礫層）はいかにして形成されたものか現在の所明らかになし得ないが，内部に相当量の遺物を包含する点から見て人為的な堆積と考えられる。更にこの上を覆う第二層（第1貝層）は，第四層と同じく第2区西端を頂点として西へ向って傾斜する貝塚でその末端は第三層，第四層を包み込むように急に下降して，第五層に直接達している。この様な形の堆積がどうして行われたかは不明であるが，第二層の堆積が開始されるまで第三層が露出していたであろうことは推測出来る。結局，曽畑遺跡に於ては，その台地の先端に第二層（第1貝層）及び第四層（第2貝層）からなる各々独立した二つの貝塚が存在することが推定出来た。これによって，この貝塚の東西の広がりを確認する為にBトレンチが設定されたのである。

次に各層に於ける遺物の出土状態及び種類について述べよう。

第一層（耕土）

第一層は耕作による撹乱を受けているので中世遺物，土師器，弥生・縄文文化後期土器，曽畑式土器

等が少量づつ混在していた。この層から磨製有孔小円板１が発見された。

第二層（第１貝層）

ハイガイ，カキを主とする純貝層で，縄文文化後期土器を包含する。土器の出土状態は貝層最下部即ち第三層直上にまとまって発見されたが，この区では完好なものは出土しなかった。獣骨ではシカが最も多い。

第三層（礫層）

茶褐色土の中にぎっしりと長径８cm内外・短径５cm内外の礫がつまった層で所々に落込みがある。この層中からは曽畑式土器片が出土するが，復原し得るようなまとまったものはない。

第四層（第２貝層）

ハイガイ，カキを主とし，カガミガイがやや多く見られる純貝層であるが，第三層に於て見られたと同じ礫が非常に多量に含まれている。全体的に曽畑式土器が包含されているが特に貝層最下部即ち第五層直上に於て復原可能な土器片群の出土が著しかった。発掘中に滑石含有の有無，文様構成，口縁の波状口縁と平縁との差異によって層位的差異が認められるのではないかということが注意されたが，第三層，第四層を通じて発掘所見としては，これらの差異を層位的差異として分離することは不可能であった。石器は半磨製石斧１，石鏃１で非常に少ない。骨器も未成品１が出土したのみである。自然遺物はシカの他タイ，サバ等の魚骨があり，３の北壁寄りに小魚骨の群集部があった。

第五層（黒褐色土層）

第五層上部即ち貝層下10cm位までは曽畑式土器が出土する。これより約15cm内外掘り下げた所から指頭細隆起線文，条痕文土器が出土した。これらは第１区４，同５に於いて確認されたが，第１区１，同２では曽畑式土器と混在し，且つＢトレンチで確認された。更に層位の異なると見られる押型文土器も混在して発見された。猶この層の上部から人骨片が出土した。

第六層（赤灰色粘土層）

径15cm内外の軽石を多量に含む粘土層で，全くの無遺物層である。

このトレンチでは貝塚の規模と層序の状態で確認する為10cmのレベルによって掘り下げた為，傾斜によって層序と矛盾した結果の出た部分が出た。この為，精密な層位掘りはＣトレンチを設定して行うこととなった。

Ａトレンチ第２～５区

東西に長いＡトレンチの中央部を占める第２・３・４・５区は，二次的に破砕された混貝土層が数十cmの厚さで一様に堆積しているだけで，西貝塚の東端としての第２区，第３区発見の人骨，第５区における混貝土層下部に残存した純貝層，押型文を出土する貝層下土層等の他は，プライマリーな状態で遺跡及び遺物に対する所見を求めることは出来なかった。貝層が広範囲に亘って破砕された原因は，土地の方々の言葉によると明治年代に焼灰をとるためにかなり大規模な抜取りが行われたためだそうである。貝は微細な破片となり，魚骨，獣骨，土器片等が殆んど小片のものばかりであったことは，これらが人為的，二次的な破壊によるものであることを裏書きするものと思われた。

第２区

この区では西に向って地表面が傾斜しており，表土層，混貝土層，純貝層，礫層，茶褐色土層，基層の礫交り赤色土層の順に堆積している。

1．表土層

厚さおよそ10cmの茶褐色層で，曽畑式や土師器，青磁等の小破片を混在している。

2．混貝土層

この層は先に述べたところの破砕された貝層であって，貝はみな細片となっているが，マガキ・ハマグリ・ハイガイ・アサリ・オキシジミ・アカニシ・スガイ・ヘナタリ等が識別出来た。その他獣骨若干と馬の歯が数個出土した。石器は磨製石斧３点とスクレイパー１点が出土した。この層の上部には縄文後期の土器片を含むが，下部は曽畑式及び轟式のみである。

3．純貝層

この層は１区よりの混貝土層下に小範囲に存在するもので，礫層をその一部が覆っている。混貝土層が破砕をまぬがれたものらしい。厚さはおよそ30cmである。

4．礫層

この礫層は第１区の礫層の東端にあたるもので，１区との境からおよそ３mのあたりまで伸びてきている。この層は厚さ約30cmで，滑石を含まない曽畑式が発見された。

5．茶褐色土層

厚さ約50cmの貝層下土層であり，その上部で曽畑式，轟式の小片が若干発見された。またこの層から勾玉が１個発見されたことは注目されることである。

6．礫交り赤色土層

地山であり，遺物は全然包含しない。西に向う傾斜は地表面より著るしい。

第３区

1．表土層

厚さ約20cmの茶褐色土層で耕作土であり，特記すべきことはない。

2．混貝土層

この層は西半では厚さ20～30cmであるが，東半では厚さを増し約80cmになるところもある。貝は細片となっているがハイガイ・マガキ・オキシジミが最も多く，ハマグリ・ヘナタリ・フトヘナタリ等も少しあった。土器は沈線文等を有する縄文中期のものや土師器等が混在していた。西端においてこの層の落込みがトレンチに沿って２×１mの大きさで発見され，更にこの土壙中より東に頭をおいて伸展葬の埋葬人骨が発見された。このあたりでは混貝土層の厚さは約20cm，落込みの深さは30cmである。人骨の周辺は薄く腐蝕土層におおわれている。頭蓋骨附近にはマガキ・ハイガイ・オキシジミ等がそれぞれ若干かたまって存在していた。人骨は副葬品その他の明瞭な伴出遺物がなく，所属時期の確定は極めて慎重を要する。土壙内部より発見された土器片はおよそ10片ほどあるが，頭蓋骨に接して条痕文土器のやや大きい破片が発見された。その他もほとんど条痕文で，曽畑式は１片きりない。人骨よりやや上位に弥生式の破片が１片出土している。この層が二次的な破壊をうけているために前後関係をにわかには決し得ないが，人骨はこの層に先行すると見て良いかと思われる。

3．貝層下土層

この層は厚さ約50cmの茶褐色土層で，この区の西半にのみ分布する。そして第４区東半以東に分布する茶褐色土層に対比するものである。

4．礫交り赤褐色土層

この層が地山であり，通常混貝土層及び純貝層とはその間に茶褐色土層をはさんで直接に接すること

はない。ただこの区の東半から第４区の一部にかけては茶褐色土層の堆積は見られず直接に混貝土層に接している。

第４区

この区では表土層，混貝土層，同下土層，基層の順で堆積し，地表面は東から西へ向って緩やかに傾斜していた。

１．表土層

茶褐色の耕作土で約20cmの薄い層であり，土師器，須恵器の細片が僅に含まれていた。

２．混貝土層

表土層の下に堆積し厚さは一定しないが，およそ40cmであり東半がやや厚い，貝は非常に細かく粉砕されている。わずかにハイガイ・マガキ・スガイ・イボニシ・フトヘナタリ等が識別し得た。貝以外の自然遺物は殆ど検出できなかった。人工遺物においても無文の縄文土器片１片と土師器，須恵器の細片若干と青磁の小片を２片発見したのみである。第３区寄りの北壁に沿ってこの層の下にピット様の落込みがあり，混貝土層がそのまま充填していた。貝層が破砕されたときに局部的に穿たれた穴らしい。長径は東西約150cm，巾は55cmで深さは50cmである。この中からは須恵器破片，曽畑式破片，条痕文土器，無文土器の破片とが極く少量発見された。

３．貝層下土層

茶褐色を呈する土層で，西から東へ向ってゆるやかに傾斜している。前述のピットの東側に堆積が始まり，西側には見られない。ピット附近では厚さ約５cmの薄い層であるが東するにしたがって厚み増し約50cmになる。

４．礫混り赤褐色土層

第３層の下に広く分布する基層である。

第５区

この区では表土層，混貝土層，褐色土層，桃褐色粘土層の順に，わずかに西に向って傾斜しながら堆積していた。東端では混貝土層と褐色土層との間に純貝層が存在する。

１．表土層

厚さおよそ10～20cmの耕作土層である。遺物は出土しなかった。

２．混貝土層

この層は先に述べたごとく破砕された貝層であり，撹乱をうけて遺物はみな細片となり特に見るべきものもない。識別し得た貝類は主にハイガイで，他にハマグリ・カキ・アサリ・オキシジミ・アカニシ・レイシ・スガイ等であった。また人の頭蓋骨の細片も発見された。土器は縄文中・後期のものや土師，須恵器，青磁の破片もあった。最下層において曽畑式や格子目押型文及び磨製石斧が発見された。層の厚さは30～40cmである。

３．純貝層

この区の東端に小範囲に分布するものであって，主要分布範囲はトレンチ外北方にあるらしく，末端がこの区らしい。そして断続しながら第６，７区の純貝層に連結するようである。厚さは約20cmで，貝はマガキが最も多くオキシジミやハイガイも多い。稀にチョウセンハマグリ・ヤマトシジミ・レイシ・スガイ・ウミニナも見られた。無文の縄文後期の大破片と無柄の石鏃及び人骨細片を発見した。

４．褐色土層

この層は厚さおよそ40cmで，その上部に押型文等を約30片出土した。そのうち半数は押型文に伴うとされている太い条痕を特徴とする土器であり，他に山形押型文，次いで格子目押型文が多い。そしてこれに伴うらしい平底で木葉痕のある厚手の底部が1箇出土したのは注目される。他に曽畑式，細隆起線の轟式が各1片発見された。

5．桃褐色粘土層

地山の層であるが他の区のような小礫の混在はなかった。遺物は出土しなかった。

（渡辺）

Aトレンチ第6区

第6区と第7区は，Aトレンチのもっとも東端に設定したもので，遺跡の載る舌状台地のちょうど鞍部に当っているため，第1区とは比高で100cm，第3区とくらべても60cmほど高い。ここでは西より伸びてくる混貝土層とは別に，縄文後期の純貝層が堆積している。ボーリングならびに試掘の結果によると，この貝層はA6，7区から北方および東方にも延び，また南は谷となって遮断されているが，台縁にやはり純貝層の露頭がみられる。これより推定して，この貝層は径20mのサークルをなしているものと思われる。われわれはこれを「東貝塚」と仮称し，曽畑期に築成されたA1区およびBトレンチの第1貝層と区別することにした。

前文したように，東貝塚は縄文後期のものであるが，その表土層には須恵器の破片を包含し，その下土層には縄文前期，早期の土器破片が見出されており，この地区が相当長期間にわたりエクメネとなっていたことを示している。そのため，A6区，7区における堆積状態は大いに編年的興味をひくとともに，貝層の有無によるこの間の自然環境の変化なども当然注意される。

A6区では，表土層・混貝土層・純貝層・貝層下土層・基盤の順で堆積し，各層はそれぞれ北より南へ急傾斜している。これは既述のようにA6区が丘陵の鞍部にあたっているためであろう。A6区の北壁における堆積状態は第19図のとおりである。

第1層（表土層）

茶褐色の腐蝕土であって約20cmのうすい層であり，唐イモ畑として耕作されている。この層には，原史時代の須恵器片が若干包含されていたほか特記するほどのことはない。

第2層（混貝土層）

第1層の下に20～30cmの厚さをもって堆積している。貝殻をまじえているが，混土率が著しく高く，混土貝層というより混貝土層というべき状態であった。貝殻は種類の鑑別が困難なほど微粉となっているが，そのうちハイガイ・ハマグリ・アサリ・マガキ・マテガイ・テングニシだけは確認される。第2層の土器はその90%までが後期鐘ヶ崎式であるが，その包含量はきわめて少ない。

第3層（純貝層）

A6区のほぼ中央から，レンズ状に純貝層が入り，そのままA7区に向ってのびている。貝層はその西端ではきわめてうすく5～10cmであり，東するに従ってその厚さを増し，6区東端では25～30cmとなる。貝層はマガキが主体となり，イワガキ・ハイガイ・マテガイなどのほか第7区に記載すると同じ多種類がみられ，ほかにウマ・シカ，水禽類の鳥骨，魚骨なども採集された。文化遺物としては後期鐘ヶ崎式土器の破片がかなりあり，また7区に接したあたりになると前期轟式の土器破片をも少量みうけた。

第4層（貝層下土層）

貝層下には茶褐色土がかなり厚く堆積し，ここからも土器破片と石器とが出土している。6区西半の発掘によると，この層の比較的上部にあたる地表より70cmの辺りまでは，貝殻条痕文を内外両面に施した轟式土器の破片が黒耀石片とともに比較的多くでるが，地表より70cmの辺りで曽畑式の土器片が唯1点であるが出土した。また－100cmから本層の終わりまでは曽畑式土器のほか，山形押捺文および粗く太い条痕を施した厚手土器の破片がそれぞれ数個ずつ出土し，チャート製の石掻器も1点発掘された。

6区西半つまり7区よりでは，本層の上半部に木炭の小塊がところどころ含まれており，これとともに黒耀石片が10コ以上あり，また文化遺物としては，平行沈線文様の曽畑式土器片，列点文およびみみずばれに似た隆起帯を並列した土器破片，山形押捺文土器片，粗く太い条痕文を青海波状に施した厚手土器片などが混在していた。いずれも小破片であり，出土量もわずかである上，包含層が北から南へ傾斜している関係もあって，各土器の詳細や，相互の層序関係については明言しがたい。注目してよいことは，この層の下部から貝殻条痕文を横走させた轟式土器の破片がかなり発掘されたことであり，わずかの連続山型文土器片，前述した厚手条痕文土器片をともないながらも本層の下底まで深く入っていた。第4層は6区西端，東端いずれにおいても地表から130cmに至って終り，砂礫粘土層へつづいている。

第5層（基盤）

桃褐色を呈する砂礫粘土層であり，砂礫とくに軽石の混入度が高いため相当堅密である。この層には文化遺物が全くみあたらず，この地域の基盤をなしている。（可兒）

Aトレンチ第7区

Aトレンチ最東端の本区は，N－S1.5×E－W6.0mで，その堆積状態の大要は第6区と大差ないが，純貝層はずっと厚くなっている。

第1層（表土層）

第6区に同じである。

第2層（混貝土層）

前述のように破砕貝層であって西より伸びてきているが，第6区にくらべてさらに薄くなり，ところによっては5cmにとどまっている。種類の鑑別できるものはマガキ・アサリ・ハイガイ・オキシジミ・フトヘナタリぐらいのものであるが，なかでもマガキが多い。これに混って後期の土器片が少量みいだせるだけである。この層では，6－7区境界から東へ2mよったところにポケット状の落込みがみられた。これを第1ピットと仮によぶが，ピットは南するに従い深く落込み，その傾斜はN－S15°ぐらいある。ピットの東側は焼灰がなだれこんでいる。ピット内には鐘ヶ崎式土器の破片と無文の土器破片があった。

第3層（純貝層）

混貝土層につづく純貝層はかなり厚くなり，第1ピットの個所をのぞき50～70cmの厚みで堆積している。貝層はマガキが圧倒的に多かったが，他にイワガキ・ハイガイ・マテガイ・ハマグリ・アサリ・シオフキ・オオノガイ・アワビ・ウネナシトマヤガイ等の二枚貝，アカニシ・テングニシ・イボニシ・フトヘナタリ・イボウミニナ・スガイなどの巻貝のほか，陸産巻貝のカタツムリもみられた。堆積状態良好のところをえらんでリンゴ箱一杯の貝殻を採取し，その比率をしらべた結果は別項のとおりである。またトラフグの下顎骨のほか，種類の同定しがたい小魚骨や魚鱗がかなりあり，さらに貝層のいたるところに炭化物が散布していた。文化遺物としては無文浅鉢の完形品のほか器形を復原しうる後期の土器

が2点あり，また破片も豊富に出土したが，すべて市来式および鐘ヶ崎式にぞくするもので，本層の堆積期を縄文後期として疑いない。また貝層の東端からは，アワビ殻製の垂飾品，サルボオ殻製の貝輪もみつかっている。

この層にもまた2ヶ所にピットがある。一つは第1ピットの下に当り，約50cmの深さで貝層がV字状に落込み，その下端は軽石をまじえた褐色土層にまでくいこんでいる。これを第2ピットとよんでおくが，この中には無文土器の破片と，貝殻縁を施文工具に用いた後期市来式の土器破片がみつかっている。いま一つのピットはごく浅いもので，これを第3ピットと仮称しておく。

第4層（下土層上部）

純貝層の下は，細礫まじりの褐色土層にうつるが，この層は東端でも西端でも地表より80cmからはじまる。そして地表より80～100cmにわたり轟式土器の破片が黒耀石の石屑とともに出土した。ついで地表より120cm辺にも土器破片の包含をみるが，西寄りでは厚手条痕文土器片が石鏃とともに，また東寄りでは山形連続文の土器破片がそれぞれ少量出土している。なおこの層では微量の貝殻を稀にみることがあった。

第5層（下土層下部）

砂礫をまじえた褐色土層は地表より145cmで終り，ついで細砂礫混入の砂層に変る。この層およびそれ以下には，文化遺物は全く包含していない。またカキ・ハイガイが稀にみられたが，なぜ貝殻を包含するかは明白でない。

第6層（基盤）

第6区の第5層に同じ。第7区ではトレンチ西端では地表から180cmからはじまるが，東端では210cmまで掘下げてもこれに達しない。これは，基盤が南から北へ30°傾斜すると同様に，西から東へも傾いているためであろう。これから考えて，基盤は第7区東端のあたりから東へ傾斜し，谷を形成していることが想定される。（可兒）

Bトレンチ第1区

Aトレンチ第1区に於いて確認された西貝塚の規模を確かめるべく更に南北にBトレンチが設定された。BトレンチはA1区4に直交して設定され第1区3.5×2mはAトレンチの南側に当る。Bトレンチに於ける層位はAトレンチに於けるものとほぼ同一と考えられたが，傾斜，断絶等を確認する為，更に10cmのレベルを以て掘下げることとした。その結果Aトレンチと同じく，次の6層の存在が認められた。

第1層　表土（耕作土）

第2層　貝層（第1貝層）

第3層　礫層

第4層　貝層（第2貝層）

第5層　貝層下土層（黒褐色土層）

第6層　基盤（赤灰色粘土層）

各層とも南へ向って下降する傾斜を示し，その末端は，道路によって切断された崖に露出している。然し各層間には各々傾向の差があり，この点について次に詳述する。

第1層　表土　－30cm

第１層は耕作土であって，その下部は次の貝層に耕作が及んだ為，少量の破砕貝殻片を含んでいる。後期土器片数片が出土した。

第２層　第１貝層（北－30～35cm，南－30～55cm）

第２層は大部分純貝層であるが，Ａトレンチ寄りの一部は破砕貝層である。南へ寄る程貝層の厚みを増し，貝層も良好となる。出土する土器は縄文文化後期の土器で，貝層下部に纏ったものが多いが，復原可能なものはない。貝層はマガキを主とし，獣骨はシカが多いが，馬の指骨の出土は注意されてよい。魚骨はスズキ，クロダイが顕著である。

第３層　礫層（北－35～45cm，南－55～65cm）

第３層は褐色土にぎっしりと礫のつまった礫層で南から約１ｍ付近で非常に厚みを増す。土器は曽畑式土器が出土し，石器は砂岩製打製石器１点が出土した。

第４層　第２貝層（北－35～65cm，南－65～80cm）

第４層は純貝層と言えるが，第３層に見られたとほぼ同様な礫が相当多量に包含されている。この礫の中にはカキが付着したものがしばしば発見されるが，このことは貝層中の礫の堆積の原因について，示唆する所大である。又この貝層はトレンチの東南隅で消滅し，貝塚の一端が確認された。土器は曽畑式土器が出土し，殊に貝層最下部，次の第５層に接して復原可能な土器片の群集が見られた。骨角器，石器類の出土は見られない。

自然遺物については，貝類はマガキ・ハイガイ・ハマグリ・マテガイ・カガミガイ・ヤマトシジミ・サルボウ・オウノガイ・アカニシ・ツメタガイ等が見られ，マガキが主体をなす。獣骨はイノシシ・シカが多い。

第５層　貝層下土層（北65～110cm，南80～120cm以上）

南端で基盤が急激に下降し，この第５層の下部も確認し得なかった。第５層は非常に希薄な包含状態ながらも，遺物包含層と言うことが出来る。上部10cmは第４層に続き曽畑式土器の包含層で，獣骨も包含されている。更に次の10cmでは，曽畑式土器，細隆起線文土器，楕円押型文土器等が混在している。第５層最下部では格子目押型文土器，条痕文土器が出土した。骨角器は最上部から骨製針１点が出土したのみである。Ａトレンチと同じく第５層は多量の軽石を包んでいる。

第６層は赤灰色粘土層で無遺物層であり，基盤と考えられる。

Ｂトレンチ第１区発掘の結果，第１貝層は更に南へ下降しながら厚みを増して行くことが確認され，又第２貝層は第１区東南部でその縁辺の一部が現れたので，これ以上南に余り延びる可能性はなく，Ａトレンチ南側に於ては，ほぼ半径４ｍの半円形をなす貝層が存在するであろうことが推察された。貝層下土層に於ける各種土器の層序関係については，遺物の出土量が余りに少く，明確な結論を得ることが出来なかった。

猶自然遺物中の貝類に関して，第１貝層の貝類は種類の如何を問わず第２貝層の貝類より小であることが注意された。

Ｃトレンチ

Ａトレンチ第１区３，４の北側，Ｂトレンチ第２区の西側にＣトレンチ（3.5×2.5m）を設定した。本トレンチ設定の目的はＡトレンチ発掘によって明瞭となった層序に従って完全な層位掘りを実施するにあった。

発掘の結果，次の７層の層序を確認出来た。

第１層　表土（耕作土）

第２層　貝層（第１貝層）

第３層　礫層

第４層　貝層（第２貝層）

第５層　黒色土層

第６層　黒褐色土層

第７層　赤灰色粘土層

第１層　表土（南－23，北－40cm）

第１層は耕作土で全体に貝殻の微細な破片を含み，遺物は縄文後期土器片，曽畑式土器細片の他，歴史時代以降のものまで混在していた。

第２層　第１貝層（北－23～－45cm，南－40～－55cm）

第２層は縄文文化後期土器を包含する貝層で，西へ向って下降し，発掘区の中央部はやや凹みをなして厚さを減じる。西南隅は最も良好な純貝層である。包含される土器は完全に縄文文化後期の土器で，磨消縄文，塗丹土器が注意に上った。その他磨製石器小破片，貝輪片等が出土した。

自然遺物について貝類はマガキ・ハイガイ・アサリ・オキシジミ・ハマグリ・シオフキ・サルボウ・ヤマトシジミ・アカニシ・フトヘナタリ・スガイ・イボウミニナ等でありマガキを主体とする。獣骨はシカ・ウミガメ・小動物・ウシ？等が出土し，魚骨も採集された。又人骨が発見され，頭蓋骨片，下肢骨などである。

第３層　礫層（南－45～55cm，北－50～80cm）

第３層は褐色土層に多量の礫を含む層で，礫は第２層下部からその存在が認められるが第３層に至って圧倒的に多くなる。曽畑式土器片を多量に包含している。

第４層　第２貝層（南－55～72cm）

第４層は相当多量の礫を含む貝層で，西壁寄りでは南から北へ約２m進んだ所で，貝層は消滅する。即ち本トレンチの西北部には第２貝層は存在せず，礫層がつづいている。

第２貝層は完全な曽畑式土器の包含層で，復原可能の土器片，相当程度復原し得る大破片等が出土した。又石器は，石匕（縦型３，横型１）半磨製石斧１等が出土し，曽畑式土器に伴う石器がやや明らかにされた。又貝輪片１（サルボウ）が出土した。

第５層　黒色土層（南－72～92cm，北－80～102cm）

第５層はＡトレンチ及びＢトレンチ第１区では分離し得なかった層で，この発掘区では土の色が明瞭に異なったので，分離することが出来た。この層の上部では貝層に引つづき曽畑式土器が出土するが，下部では，条痕文土器，細隆起線文土器，楕円押型文土器の破片が出土し，層位の異なることが確認出来た。

第６層　黒褐色土層（南－92～127cm　北－102～132cm）

第６層は軽石を多量に含む土層で本発掘区では時間の都合上完全に発掘し得ず，又遺物も発見し得なかった。

第７層　赤灰色粘土層

第７層は基盤である。

このトレンチの発掘の結果，各層序に包含される土器の種類はほぼ確認された。又第２貝層即ち曽畑式文化の時期に形成された貝塚は径約10mの小貝塚であることが明らかとなった。この結果この第２貝層を含む貝塚を西貝塚と呼ぶこととした。この貝塚は清野博士発掘地点とは別個の貝塚であり，又この台地上に他にもこの時期の小貝塚が存在するであろうことを推測せしめるものである。

3　曽畑貝塚人骨所見

小片　保

慶応義塾大学講師江坂輝彌氏により提示された，曽畑貝塚より発掘せられた1体の人骨の性別，年令及びこの人骨の属すべき時期等を推定する機会を得た。以下この人骨所見を述べ，それに就いての知見を論ずる事とする。

1　埋葬様式（第1図）

本人骨の保存状態は，貝塚人骨の通例として，可成り良好ではあるが，扁平骨は破損され，長骨骨端部の崩壊しているものもある。

本人骨は典型的な仰臥伸展位をとる。各骨の位置よりして，軟部未だに健なる間に埋葬せられた事は確かである。下顎骨を含む頭蓋は少し左側にずれている。これは土圧によって少しく移動したものである。埋葬時に，頭部に空間を作って埋めたという確証はない。

上肢は体軸と略々平行に置かれ，胴骨上に乗っていない。下肢を見ると，足関節の部分が左右極めて接近して置かれている。それに続く足根骨，中足骨及び趾骨が足底側に向って屈曲しており，この部分が左右接近している処を見ると，足関節以下の左右揃えて緊縛されて埋葬された様にも思われる。この様な例は稀に経験する処である。鎖骨肩峰端，従って肩甲骨関節窩の部分が，左右側共に自然の位置より近位方向に移動している。この事は，土壙が狭く掘られ，この空間を，より有効に利用する為に，人為的の作業が行われたと思われる。この様な経験は，古墳時代箱式棺中に埋葬する時，通常の肩峰幅では到底納棺不能な程狭い空間に，極めて巧妙に埋葬している例を屢々経験しているが，時代こそ違え，本人骨も同様と考えて差支えない。

前述の如く，洗骨その他の人骨に対する人為的工作はない。赤色物の塗布，散布その他は見られない。

2　人骨所見

I）頭蓋（第1表）

頭蓋縫合の内，主要なる3縫合の癒着状況を見ると，内板は冠状，人字縫合の癒着殆んど完了しているが，矢状縫合のそれは余り進んでいない。外板では部分的に癒着が見られ，冠状縫合では Pars temporalis の部分完了，その他は部分的，矢状縫合では Pars obelica の部分完了，その他部分的に開始，人字縫合では Pars lambdoidea の部分に開始している。その他観察可能な縫合では癒着が開始されず，あるとしても極めて小範囲に止まる。次に歯牙の咬耗状態を見るに，各歯によってその程度が著しく異なり，Broca 氏の第1度より第4度に及ぶ。鉗子咬合型を示し，特に前歯に於いて咬耗度が高く，水平咬耗である。上顎左右第3大臼歯は生前歯槽膿漏によって脱落せるものと思われ，下顎のそれは生前脱落か，先天性欠除か判断に苦しむ。但し，埋状歯牙でない事はレントゲン写真で明確である。歯石も少しく見られる。右上顎第1大臼歯に高度の齲歯を認める。

A．上面観（第2図）

本頭蓋は短頭型（Brachykran）を示すが，中頭型に近い。頬骨弓の外側方への膨隆が強く，従って Phaenozygie である。Sergi 氏の類五角形に属するものと思われるが，或はこの様な簡単なものでなく，類七角形と言ってよいかも知れぬ。頭頂結節の発達よく，外側方に張り出す。頭頂孔は，Pars obelica の部

分で，少しく右に偏して１個見る。矢状溝状圧痕はかなり著明。

B．側面観（第３図）

高頭型（Hypsikran）を呈し，前頭矢状曲線は前方に膨隆強し。眉間隆起は僅かに見られる程度である。頭頂矢状曲線では，前半に於いて強く屈曲する。後頭のそれでは，上，下鱗共に膨隆が弱い。併し，両者間の屈曲が強い。上側頭線の発達極めて強く，鈍な堤状に後進するが，後頭骨に至らず消失する。左右側に Osepiptericum を見る。側頭担面は平坦，中側頭動脈溝が左右側に見られる。頬骨弓は長く，波形をなさぬ。外耳孔楕円形で，外聴道骨瘤は見られぬ。乳様突起よく発達し，表面の粗糙強く，尖端は細く下垂す。根部の外側方への膨隆強し。

C．底面観（第４図）

脳頭蓋基底は広い。大後頭孔は亜円形を呈し，後縁正中面上に長さ２㎜の突起状の骨増殖を認む。後頭顆は大きく，その関節面上に一稜を作り，前後の２面に分かれる。第３後頭顆はない。顆窩は広く且つ深い。顆管は左側が大きい。乳突切痕，後頭動脈溝は深い。乳突孔は左側に見る。後頭骨底部は広く，咽頭結節は軽度に見られる。旁乳様突起を左右側に認める。口蓋は広型（Brachystaphylin）を呈し，楕円の一部に近い。横口蓋縫合は少しく前方に弯曲し，門歯縫合を欠く。矢状口蓋隆起は殆どない。口蓋棘強く，口蓋溝を内外共に認める。後鼻棘は強く突出す。

外後頭稜は左側に偏し，この稜の右側で，大後頭孔後縁より後方15㎜の処に，長さ８㎜，幅４㎜の鈍長方形の穿孔があり，その周縁には仮骨形成す。この穿孔をめぐり，13㎜，17㎜の軸を有する。その長軸が穿孔の長軸に殆ど一致する略々楕円形の陥凹あり，穿孔に向って次第に薄くなる。この部分の内板は，外板の楕円形稜に殆ど一致して薄くなり，穿孔線に続く。これは，先天的の骨欠損か，又は何等かの病的変化によるものと思われ，しかも外後頭稜の屈曲と共に，可成り以前から存在するものと思われる。位置的に見て，生前の人工的穿顱術とは考え難い。勿論死後の加工ではあり得ない。

D．後面観

尖頭型（Akrokran）に極めて近い中頭型（Metriokran）の最高値をとる。但し，幅耳 Bregma 高示数では中頭型（Metriokran）の最低値をとる。これは一見矛盾しているが，Basion と Porion との距離が大なる為に生じた差異である。全輪廓は家根状を呈し，側頭骨輪廓線は平坦に近く，頭頂骨のそれは外側方へ膨隆している。後頭骨は中等広，後頭担面は平である。外後頭隆起は Broca 氏の第３度で，それに続く最上，上項線の発達はよくない。下項線は右側に僅かに見られ，左側には明らかでない。乳突後突起も，インカ骨もない。

E．顔面観（第５図）

脳頭蓋に比して顔面頭蓋が大きい。頬骨弓幅が著しく大なる為，Kollmann 氏顔示数小さく，顔面低型（Euryprosop）を示す。同氏上顔示数は上顔面中型（Mesēn）ではあるが，低型（Euryēn）に極めて近い値をとっている。Virchow 氏顔示数を見ると，過低型（Hyperchamaeprosop），同氏上顔示数は低型（Chamaeprosopo）である。この様に，本人骨は極めて横に広い顔面像を呈していることがわかる。次に側面角を論ずると，全側面角では顎中型（Mesognath）で，鼻性側面観では鼻直型（Orthognath），歯槽側面角では歯槽前反型（Prognath）である。この様に，上顎部の前方への突出は目立たぬ。上顎歯槽突起の突出は，矢状面に於いて，歯牙と共に前方へ張り出すゆるやかな弧をえがき，従って歯牙は殆ど垂直に釘植しており，鉗子咬合の形態をとる。

前頭結節は可成り強く膨隆し，Metopismus を欠く。Bregma 隆起は弱い。前頭矢状隆起は軽度に見られ

る。眉間及び眉弓の発達は余り強いとは言えず，眉間は両眉弓をつなぐ面より少しく陥没している。前頭切痕は左右側に１個宛見る。鼻中型（Mesorrhin）で，鼻骨の穹隆は大きい。前頭鼻骨縫合は殆ど左鼻骨にて形成され，従って，鼻骨間縫合は上部で左側に偏している。梨状口下縁の形態は Bonin 及び二井両氏の第Ⅳ型に属す。前鼻棘の発達は弱い。鼻中隔は左側に弯曲する。眼窩口は鈍四角形を示し，眼窩上縁の上下の傾きが少さい。中型（Mesoconch）であるが，少しく左右が異なる。下眼窩縫合は右側に於いて癒着完了せず。頬骨は極めて大且つ広く，上顎歯槽広（Brachystaphylin）を示し，歯槽突起大で，犬歯槽隆起は極めて強い。

F．下顎骨（第６図）

本骨は大きく，骨体は厚く，且つ高いが，筋附着の粗糙は余り強くない。頤部の突起は強いが，頤隆起の突起は甚しくない。頤結節は左右非対称に存在するが，弱い。頤孔は，第２小臼歯と第１大臼歯の間に，上下の略々中央部に存在するが，右側に１個，左側に２個ある。右側では大孔の周囲に２個の小孔，左側では大孔の後方に１個の小孔が見られる。各筋窩及び腺窩は浅い。顎舌骨筋線は強く内側に張り出し，左側の方が少しく高度である。下顎枝は広く，大きい。下顎角は外方に突出弱く，且つ外弯を見ない。咬筋粗面及び翼状筋粗面には数条の高まりを見るが，その程度は弱い。下顎小舌は両側にある。下顎孔は両側共に１孔宛ある。筋突起大且つ尖端が鈍で，下顎頚も太い。下顎頭大で，上面の関節面の頂上に長軸に沿った一稜を作る。下顎切痕の幅及び深さには特別の事はなく，形は左右側で異なる。歯槽突起及び下顎底の形態は抛物型に近い。下顎隆起は見られぬ。本下顎骨は男性の特徴を示している。

G．頭蓋輪廓図

計測値や観察項目のみ論じても，形態その物を具体的に記載する事は困難である。それ故多くの輪廓図によって特徴を論じ，比較に応用する必要がある。

１）正中矢状輪廓図（第７図）

Nasion の陥没は軽度，従ってそれに続く眉間も余り突出していない。眉間上窩は現れず，前頭結節の高さで緩く屈曲し，後方では比較的平坦に経過し，Bregma に至る。次で矢状縫合の部分では前半が急屈曲を行うが，この部分の頭蓋の最高点を示す。その前後は平坦に近く，Lambda を越えて下方に行くと，後頭鱗では，Inion で強い屈曲を示し，上，下鱗共に直線的である。頭蓋底部も直線的であって，要するに，脳頭蓋は概ね７面に近いと考えてよい。

次に顔面頭蓋では，全体として Prosthion を頂点とする三角形を示す。その一辺は Nasion と Rhinion，Subnasale と Prosthion を結ぶ線，他の一辺は口蓋を通る一線で，これは Prosthion に至って終わる。最後の一辺は，後頭骨の底部と楔状骨との交点と Nasion を結んだ線によって形成されており，この角の内最も鋭なるは Prosthion の部分である。

２）地平輪廓図（第８図）

先ず，Glabella 上地平周径の形態を論じ，次に顔面部に至り，耳眼面と垂直に Nasion を通る面，頬骨上顎縫合の上端，同じく下端を通る面，最後に，前鼻棘を通る面を並写し，これにより諸特徴を検討する。

ａ）Glabella 上地平周径面

前頭部は決して一面では無く，Glabella を頂点として左右に二面を作る。但し，Glabella は小さき陥凹を作っている。眉弓は，本線が下部を通る為に現れて来ない。後方へ行き側頭窩に落ちる。最小前頭幅は小さい。側頭骨鱗部は稍々平坦で，その後方で屈曲し，再び概ね平坦な頭頂骨に移る。後頭鱗は平坦

で中央部に寧ろ陥凹を作る。即ち，Sergi 氏の類五角形（Pentagonoides）に酷似するが，寧ろ類七角形と言った方がよいかも知れない。頭蓋は左右非対称のもの多く，これは先天的のものもあるが，土圧による変形であることも多い。この様な事は発掘人骨には多く見られるものである。

b）Nasion を通る面

Nasion は少しく突出し，眼窩を超えて頬骨前頭突起が現れるが，これは，左側の突出がより強く，且つ右側より外側方に位置していることがわかる。極めて左右非対称である。これは先天的のものか，土圧によるものか不明。

c）頬骨上顎縫合の上端を通る面

前方には上顎骨鼻切痕縁が左右側で最も突出している。側方へは傾斜して移行するが，頬骨に至り前外側方に強く張り出し，頬骨弓に至り，その外側方への弧状の膨隆は強い。頬骨弓は左右非対称であり，変形を来している。頬骨弓幅は極めて大である事を知る。

d）頬骨上顎縫合の下端を通る面

この線全体は少しく後方に移り，比較的平坦に過ぎるが，後方へ行くに従って前方へ出て来る。

e）前鼻棘の尖端を通る面

前鼻棘は少しく破損しているが，この部分が最も前方に出ている。上顎骨歯槽突起は側方に張り出し，後方へ行くと袋状に萎む。

以上の如く，本頭蓋の各線は正中矢状面に近い処では，頬骨上顎縫合の上端を通るものが最も前方乃至外側方に張り出しており，次で前鼻棘尖端，Nasion の順となり，Glabella が最も後退している。この様に顔面部の形態は図形をもって示すと興味ある特徴を示すことがわかる。

f）下顎骨底面図（第９図）

下顎底を紙上に置き，西，西氏描字法を用いて外，内面を画けば，所謂“角頤”を呈し，その後方は弓状をなして進み，下顎角附近に至る。本図を見ると，顎舌骨筋線が強く内側に隆起している事がわかり，左右非対称なるも本下顎骨の特徴を示す。

以上を総括するに，本頭蓋は熟年期の男性人骨らしく，然も老年期に近いと考えて差支えないようである。中頭型に近い短頭型である。頭蓋高型を示し，口蓋は広く，歯槽突起の発達よく，言わば原始的であろう。最小前頭幅は小さいにも不拘，それに反して顔面の横径極めて大，特に頬骨弓幅に於て著しく，本人骨の特徴をなしている。眼窩は鈍四角形を呈し，下顎骨は可成り強大，顎舌骨筋線は強く張り出している。歯牙の咬合型は鉗子状で，用耗強く，疾病による脱落を見る。

Ⅱ）胴骨

椎骨を見ると，いずれも強大で，男性の特徴を有す。腰椎下部の椎体前面に軽度の変形性脊椎症を認め，又，下部椎体そのものの変形も来している。即ち，第３より第５に至る腰椎体前縁に突起状の骨増殖があり，且つ肩平椎体症の症候も見られる。これ等は老人性の疾病として現代日本人に度々見られるものである。その他肋骨，胸骨は強大であるのみで著しい特徴は見られない（第10図）。

Ⅲ）上肢骨

a）肩甲骨（第11図，第２表）

発掘人骨の通例として，保存不良である。併し，極めて強大である事は確かである。筋附着部の粗糙

が強く，特に肩甲棘，肩峰の発達が著しく良好である。即ち，棘上窩，棘下窩の深い事は，この部に附着する筋の強大なるを知り，上肢の運動の激しさを知る。肋骨面も弯入強く，肩甲下筋の頑丈さの証拠となる。関節窩もそれにつれて長且つ広く，梨子状を呈す。烏啄突起も大である。

注目すべきは，左側肩峰が骨端線より失われていることである。肩峰は20才前後で癒合することになっているが，本人骨は到底この年令とは思えず，或は外傷によるか，他の原因か，いずれにせよ興味ある症候である。

b）鎖骨（第12図，第３表）

保存はよい。中央断面は丸みを帯びる。胸骨端大きく，関節面は三角形を呈す。肩峰端も大きい。弯曲示数大である。左右側概ね対称型を示す。肩甲骨と共に上肢の運動の激しさを知る。

右側のそれの下面に見る肋鎖靭帯圧痕が，左側に比し面積が大きく，その胸骨端に近く長径９㎜，短径最大３㎜の，周縁鈍なる不規則な骨瘻を見る。これ骨髄腔に迄達し，周縁には仮骨の形成が著明である。恐らく，陳旧性の骨炎症によって生じたものであろう。

c）上腕骨（第13図，第４表）

余り長くはないが，上，下端は特に強大で，内側上顆の突出が強い。右側が左側より長い。小結節の発達良好。これ肩甲下筋の終止部に当り，運動激しき為と考えられる。結節間溝深し。広背筋及び大胸筋の附着する大結節稜の強さは特筆すべきである。その下の三角筋粗面も粗糙強く，且つ広大である。特にこれは右側に著しい。上腕骨の扁平も認められる。滑車上孔はない。橈骨神経溝は左側に深く，上腕骨捻転強く，骨頭は略々円形。

d）橈骨（第14図，第５表）

長大。上，下端の発達よし。中央の扁平弱いが，骨間縁は鋭利なるも突出は強くない。掌面少しく陥凹するが，背側面は平坦。橈骨粗面は広く且つ粗であり，掌面に向く。関節環状面の高低が目立つ。

e）尺骨（第14図，第６表）

橈骨に伴い長大。上，下端は大きい。中央部の扁平著明ではない。骨間縁の突出は微弱。肘頭尖端は鋭である。尺骨粗面は強くは陥没しない。滑車切痕は大きい。掌面平坦なるも背側面は二溝を作る。茎状突起は頑丈，尺骨頭関節面は腎臓形を呈す。

Ⅳ）下肢骨

a）骨盤（第15，第16図，第７表）

発掘人骨は孰れも保存不良であり，本例も同様である。特に仙骨は破片となっているが，骨盤全体の形態を知ることは出来る。寛骨の高さは特別の事はないが，横に広い。骨盤口横径は大ならざるも腸骨幅が特に大きい。従って閉鎖孔幅が大きい。腸骨翼状傾斜角の計測法は，R.Martin 氏の教科書（1928）によって定められている。この方法には少しく疑問があるが，腸骨翼の開き方を示している。本人骨ではこの角が著しく大きく，極めて特殊な形態をとる事が注目される。これは腸骨翼が側方に強く倒れている事を示し，これに附着する筋の強大さを物語っている。下恥骨角の小なるは直ちに男性骨盤である。その他，多くの示数の特殊さは，腸骨翼の傾斜が大なる事によって生ずる当然の結果である。腸骨の下後腸骨棘が下方に垂れている事から，大坐骨切痕が楕円の一部に近い形をとり，狭い。恥骨結合面の隆起，陥没は老年に近い事を物語る。髂臼は大で深い。

b）大腿骨（第17図，第８表）

骨端部が破損されているが，極めて頑丈で，且つ上，下端の発達は良好。弯曲は著しく弱く，直線的である。筋附着部の粗糙強く，軽度の第三転子の形成を見る。骨体中央部は丸く，骨体上，下端の扁平は著しい。上部では超広型（Hyperplatymēr）であり，頸部短く，頸骨体角は可成り大きい。粗線の発達極めて悪く，柱状をなさぬ。

c）膝蓋骨（第18図，第９表）

本骨も強大。前面の縦溝の発達がよい。底部及び尖部が少しく突出している。中央隆線は左右側共に著明ならず，丘状を呈す。外側関節面が広い。高，広膝蓋骨（Hohe undbreite Patella）を示す。

d）脛骨（第18図，第10表）

頑丈である。上，下端は極めて発達良好。然るに扁平脛骨の特徴をもっていない。中脛（Mesoknem）である。ただ，後面上部に軽い一稜を作るが，中央部迄で消失する。即ち，上部では横断面菱形となる。骨幹は前方に弯曲している。ヒラメ筋線は陥没していない。右側前縁下部が一様に緻密質の肥厚を見，この部分の前縁が鈍となる。これ何か外力が加わった為のものかもしれない。総て筋附着部の粗糙強く，脛骨粗面広大，外側に特別の一稜を作る。遠位関節面に続き前面にかけて，蹲踞面を見る。内果の発達よし。

e）腓骨（第18図）

近位部が消失して詳細不明なるも強大。略々中央最大径は大きく，特に右側が大きい。脛骨側への弯曲が見られ，前後方向にはない。骨間縁は鋭なるも突出弱し。前縁は鈍，且つ突出は強い。外側面に深溝を作る。腓骨頭及び外果は発達強い。扁平である事は下腿の運動の激しさを想像せしめる。

f）距骨

これは踵骨と共に強大で，著明なる蹲踞面を有し，脛骨下端と相呼応している。

V）身長の推定

Pearson 氏身長推定式によれば161.56cmとなり，縄文人男性にしては可成り長身である。

総括

本人骨の属すべき時期，性別及び推定年令を決定すべき主題に関して種々の検査を行ったのであるが，洪積世人類の如き独特な形態を有するものは別として，我国縄文人では，現代日本人の有する特徴を具備せるものも多くあり，再度その困難さを痛感した。特に縄文式時代の数千年の経過中のどの時期に属するかを知る事は，１体の人骨標本をもってしては殆ど不可能であろう。

現代迄の縄文人の研究は，各時代一括されて論じられている。亦，地方差的の研究もなされず，所謂“縄文人”として見做されている。考古学的精査のなされずにいる為に，これ等人骨がどの時期に属するか皆目わからない。１遺跡でも縄文式時代が多くの層位に分かれている事が知られるし，それに属する各期の人骨がある筈である。それ等を一括して，統計的数値により論ずる事は固く戒めらるべきである。本論文にも多くの参考文献を挙げて見たが，あるものを除いては使用出来ないものが多い。思えば人類学者の重大な誤謬であった。仮に比較し得たとしても，集団の平均値と１体の人骨とでは全く意味が異なる事は充分に知られるべきである。飜って，計測値のみで生物を云々するのは極めて危険で，その特徴を表し得たと考えるのは早計である。その意味に於いて，本論文では，頭蓋の図形を画く試みを行った。

本人骨は我国縄文人の特質と言われている形態を有している部位もあるが，現代的要素を有している所もある。仰臥伸展位をとっているが，狭い土壙に押し込められた感がある。併し，各骨は自然の位置にあり，洗骨の風習によったと思われる節はない。足部が禁縛一括されたと思われるが確証は認められない。熟年期の終り頃の男性骨であろう。この年令の推定も，研究そのものは現代人で行われているもので，或は頭蓋縫合の癒着度とか，歯牙の咬耗度とか，恥骨結合面とかの性状で決定しているので，縄文人の生活様式によって遅速があるかも知れず，これ又この決定は想像の域を脱し得ないだろう。加うるに個体差の問題があり，極めて困難なる多くの点を蔵している。男性である事は決定的である。

頭蓋は短頭型に属しており，中頭型に近い。高さは可成り高い。横に広い顔貌を呈している。上顎歯槽突起は甚だ頑丈で，前方へ張り出す弧状を呈している。従って鉗子咬合である。これは縄文人に極めて多い形質である。歯牙は水平に用耗されているし，その程度は著しく強い。咬合線の波状は見られない。可成り固いものを噛んでいた事は明らかなようだ。この歯牙の咬耗度と齲歯，それに生前脱落を見ると可成りの年令であると思うが，左側肩甲骨肩峰が未だ癒着せざる所のみを見れば若年期のものと考える以外はなく，年令推定の困難性を知る。下顎骨も大きく，体高も低くない。筆者は，愛媛県上黒岩洞窟，大分県河原田洞窟の，確実に縄文早期人骨を見ているが，この上，下顎歯槽突起又は部と本人骨は全く様相を異にしている事を確かめている。であるから早期人骨とは考えられない。それ以後に属する事は間違いなさそうである。下顎左第１門歯が生前脱落している。これは歯槽は既に閉鎖しており，恰も抜歯の風習による抜去の如く見ゆるが，歯槽突起の萎縮状態より病的に脱落したものである。

各骨は頑丈，長大で，男性骨を思わせる。肩甲骨，鎖骨，上腕骨は頑強で，上肢の運動を激しく行った事がわかる。又，下肢骨も強大である。併し柱状大腿骨をなさず，脛骨の扁平は著明ではない。縄文人に多い蹲踞面が脛骨，距骨に見られる。骨盤も広大で，筋附着が強かった事を知る。腸骨翼状傾斜角の大なる事が特徴である。下肢の運動激しさを物語る。

次に本人骨は病的変化を多く有している。即ち，頭蓋に於いて，大後頭孔後縁右側近くに，右鎖骨に骨穿孔があること，左肩甲骨肩峰が癒着していないし，右脛骨前縁に丘状の骨肥厚がある事等である。これは食物及びその他の環境によったものかもわからぬが，炎症もあった事であろうし，外傷も考えられる。

以上の如く一体の人骨に就いて論じたので，極めて不得要領の点が多い。現在我国人類学はこの位の事しかわからぬ。時代の決定は，考古学者に頼らざれば一歩も進み得ないし，現在迄の人類学者の業績は殆ど全部ほぐして各層位に分けて，その各々の人骨の記載を行わなければならぬであろう。日本人の形質は歴史時代に入ってからも顕著に変動しつつ，あると言う。この問題に関してもより一層の研究が必要であろう。況や，幾千年の間といわれる縄文式時代には変動があるに違いなく，それでは，どの古き特徴がどの様に受け継がれるか，どの様に変動を受けるかを決定する必要があろう。この意味に於いて人類学は一大転換期にあると思うし，転換せねばならぬ時期の様にも思われる。

稿を終えるに臨み，本人骨を研究に提供され，且つ種々の示唆を賜わった江坂輝彌氏に深甚なる謝意を表す。

参考文献

1．阿部英世，1955，現代九州人大腿骨の人類学的研究，人類学研究，第２巻，301頁
2．荒瀬進，1933，現代朝鮮人大腿骨の人類学的研究（第１報告），人類学雑誌，第48巻，第１附録，１頁

3．同上，同上，同上（第２報告）同上，同上，同上，68頁
4．福田佐，1961，関東地方人腓骨の人類学的研究　計測篇，東京慈恵医科大学雑誌，第76巻，１頁
5．林幹雄，1957，山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人骨骨盤の人類学的研究，人類学研究，第４巻，375頁
6．平井隆，田幡丈夫，1928，現代日本人々骨の人類学的研究　第３章下肢骨に就いて，人類学雑誌，第43巻，第４附録
7．平田和生，1958，鹿児島県大島郡与論島々民の下肢骨の研究，人類学研究，第５巻，263頁
8．鋳鍋勝登，1955，九州人下腿骨の人類学的研究，人類学研究，第２巻，１頁
9．石沢命達，1931，吉胡貝塚人骨の人類学的研究第３下肢骨，人類学雑誌，第46巻，第１附録
10．今道四方爾，1934，太田貝塚人々骨の人類学的研究　第２部下肢骨の研究，人類学雑誌，第49巻，第１附録
11．伊藤泰照，1954，九州人骨盤の人類学的研究，人類学研究，第１巻，420頁
12．城一郎，1938，古墳時代日本人々骨の人類学的研究，第１，２，３部，人類学輯報，第１輯，１，173，245頁
13．金関丈夫，永井昌文，牛島陽一，財津博之，1959，山口県神玉村土井ヶ浜発掘の人骨に就いて，解剖学雑誌，第30巻，９頁
14．金高勘次，1928，吉胡貝塚人々骨の人類学的研究　第１部頭蓋骨の研究，人類学雑誌，第43巻，第６附録
15．加藤守男，原田遼二，1960，関東地方人膝蓋骨の人類学的研究，東京慈恵医科大学解剖学教室業績集，第21輯，883頁
16．清野謙次，宮本博人，1926，津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第２部頭蓋骨の研究，人類学雑誌，第41巻，95頁，151頁
17．清野謙次，平井隆，1928，津雲貝塚人々骨の人類学的研究　第３部上肢骨の研究，人類学雑誌，第43巻，第３附録
18．同上，同上，同上第４部下肢骨の研究，同上，第４附録
19．三橋公平，山口敏，1961，大岬（宗谷）出土人骨の人類学的研究１，下顎骨，札幌医学雑誌，第19巻，268頁
20．宮本博人，1924，現代日本人々骨の人類学的研究　第１部頭蓋骨の研究，人類学雑誌，第39巻，307頁
21．同上，1925，同上第２部上肢骨の研究，同上，第40巻，219頁
22．同上，1927，同上第３部骨盤の研究，同上，第42巻，192頁，241頁
23．溝口静男，1957，現代九州日本人前腕骨の人類学的研究，人類学研究，第４巻，237頁
24．森田茂，1950，関東地方人頭蓋骨の人類学的研究，東京慈恵医科大学解剖学教室業績集，第３輯，１頁
25．中野哲太郎，1958，鹿児島県大島郡喜界ヶ島々民頭骨の研究，人類学研究，第５巻，189頁
26．二井一馬，1930，日本人鼻の研究補遺（其４）梨子状口下縁に就いて，十全会雑誌，第35巻，622頁
27．西成甫，西謙一郎，1928，顔形成に関する知見補遺，解剖学雑誌，第１巻，36頁
28．大場信次，1950，日本人大腿骨の人類学的研究（計測篇），東京慈恵医科大学解剖学教室業績集，第３輯，１頁
29．同上，同上，同上（形態篇）同上，同上，１頁
30．同上，同上，関東地方人大腿骨の人類学的研究，同上，同上，１頁
31．小片保，大賀美利雄，梅田康之，1955，顔部特異なる古墳人下顎骨，鳥取大学解剖学教室業績集，第２輯，155頁
32．大堀正俊，1958，山口県土井ヶ浜発掘弥生式前期人骨の下顎骨に就いて，人類学研究，第５巻，87頁
33．大山秀高，1959，鹿児島県大島郡与論島々民頭骨の研究，人類学研究，第３巻，396頁
34．専頭時義，1957，現代九州日本人上腕骨の人類学的研究，第４巻，273頁
35．芥沢長介，1961，石器時代の日本，236頁，築地書館，東京
36．鈴木信夫，1961，関東地方人脛骨の人類学的研究，東京慈恵医科大学雑誌，第75巻，2638頁
37．鈴木尚他，1956，鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨，５頁，日本人類学会編
38．田畑晋作，1958，山口県土井ヶ浜弥生前期遺跡発掘人骨の脊椎骨，人類学研究，第５巻，393頁
39．田畑丈夫，1928，津雲貝塚人々骨の人類学的研究　第５部骨盤骨の研究，人類学雑誌，第43巻，第７附録
40．同上，1929，吉胡貝塚人々骨の人類学的研究　第２部骨盤骨の研究，人類学雑誌，第44巻，第４附録

41. 恒松洋二郎，1957，現代九州人脊椎の人類学的研究，人類学研究，第４巻，302頁
42. 牛島洋一，1954，佐賀県東背振郡三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究，人類学研究，第１巻，273頁
43. 米須清一，1952，日本人寛骨の人類学的研究，東京慈恵医科大学解剖学教室業績集，第６輯，１頁
44. 財津博之，1929，山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生式前期人骨の四肢長骨に就いて，人類学研究，第３巻，320頁

編者註

人骨は新潟大学医学部において保管されている。なお，1994年７月から８月にかけて個人住宅建設に伴う緊急発掘調査において，古墳時代の土壙墓が検出され，伸展葬の女性人骨（20代から30代前半）が出土した。当該土壙墓は出土状況が1959年調査の土壙墓と極めて類似していることから，下記の文献で指摘されているように小片氏報告人骨は古墳時代のものである可能性が高い。

高木哲二・木下洋介　2002「曽畑遺跡（貝塚）」『新宇土市史』資料編２　宇土市

曽畑貝塚人骨所見　附表

第1表　頭蓋骨計測値

番　号	計測項目及び示数	数　値
1	頭蓋最大長	179
5	頭蓋底長	106
7	大後頭孔長	32
8	頭蓋最大幅	145
9	最小前頭幅	89
11	両耳幅	136
12	最大後頭幅	106
17	バジオンブレグマ高	142
20	耳ブレグマ高	117
23	グラベラ上地平周径	515
24	横弧長	331
25	正中矢状弧長	377
26	正中矢状前頭弧長	125
27	正中矢状頭頂弧長	139
28	正中矢状後頭弧長	116
29（1）	後頭骨正中矢状上鱗弧長	61
29（2）	後頭骨正中矢状下鱗弧長	55
29	正中矢状前頭弧長	113
30	正中矢状頭頂弧長	119
31	正中矢状後頭弧長	94
31（1）	後頭骨正中矢状上鱗弧長	58
31（2）	後頭骨正中矢状下鱗弧長	55
32（1）	前頭鼻前角	63
32（5）	前頭骨弯曲角	141
33（1）	ラムダイニオン角	86
33（4）	後頭頭曲角	123
34	大後頭傾斜角	-10
28	頭蓋容量	1460
8／1	頭蓋長幅示数	81.01
17／1	頭蓋長厚示数	79.33
17／8	頭蓋幅高示数	97.93
20／1	長耳ブレグマ高示数	65.36
20／8	幅耳ブレグマ高示数	80.69
16／7	大後頭孔示数	90.61
9／10	横前頭示数	80.18
9／8	横前頭頭頂示数	61.38
27／26	矢状前頭頭頂示数	111.01
28／26	矢状前頭後頭示数	94.31
28／27	矢状頭頂後頭示数	83.45
29／26	矢状前頭示数	91.87
30／27	矢状頭頂示数	85.61
31／28	矢状後頭示数	81.03
31(1)／28(1)	後頭骨上鱗弯曲示数	95.08
40	顔長	100
43	上顔幅	106
44	両眼幅	99
45	頬骨弓幅	145
46	中顔幅	110
47	顔高	119
48	上顔高	73
49（a）	眼間幅	20
50	前眼窩間幅	17
51	眼窩幅	42
		42
52	眼窩高	34
		35
54	鼻幅	27
55	鼻高	53
57	鼻骨最小幅	8
57（1）	鼻骨最大幅	15
60	上顎歯槽長	58
61	上顎歯槽幅	70
62	口蓋長	45
63	口蓋幅	40
63（2）	前口蓋幅	32
65	下顎小頤幅	129
66	下顎角幅	103
68	下顎骨長	104
69	頤高	30
69（1）	下顎骨体高	34
69（3）	下顎骨体高	15
		15
70	下顎骨体厚	60
		61
70（3）	下顎骨体厚	
		14
71	下顎枝幅	37
		35

番　号	計測項目及び示数	数　値
71（1）	下顎切痕幅	
		32
72	全側面角	83
73	鼻側面角	88
74	歯槽側面角	76
79	下顎枝角	121
47／45	コルマン氏横示数	82.07
47／46	ウイルヒョウ氏横示数	107.31
48／45	コルマン氏上顔示数	50.37
48／46	ウイルヒョウ氏上顔示数	66.36
52／51	眼窩示数	80.95
		83.33
50／44	眼窩間示数	17.17
54／55	鼻示数	49.00
61／60	上顎歯槽示数	120.69
63／62	口蓋示数	88.89
66／65	下顎骨幅示数	79.84
		81.67
71／70	下顎枝示数	57.39
45／8	横頭蓋顔面示数	100.00
9／43	前頭両眼窩示数	83.96
9／45	頬骨弓前頭示数	61.38
66／45	頬骨弓下顎示数	71.03
57／57(1)	横鼻骨示数	53.33
69(3)／69(1)	下顎骨体高厚示数	44.12
70(3)／71(1)	下顎切痕示数	43.75

註：番号は R.Martin 氏の教科書（1928）による。数値は mm、度、及び示数は無名数。角項の数値の上段は右側、下段は左側を表す。尚、記入な側は破損の為に計測不能なるもの。

第2表　肩甲骨計測値

番　号	計測項目及び示数	数　値
2	形態学的長	104
3	関窩縁長	135
		135
8	鉤基底長	85
9	肩峰最大幅	27
10	肩峰長	46
11	烏喙突起最大長	49
12	関節窩長	38
14	関節窩深	5
16	関窩縁幅	54
17	関窩縁関節角	136
19	鉤鎖下角	79
21	鉤関節角	83
13／12	関節窩長幅示数	78.97
14／12	関節窩弯曲示数	13.16

第3表　鎖骨計測値

番　号	計測項目及び示数	数　値
1	最大長	149
		151
2	骨体弯曲高	13
3	骨体弯曲低長	
		108
4	中央乗直径	12
		12
6／1	長厚示数	26.85
		26.49
4／5	断面示数	92.31
		92.31

第4表　上腕骨計測値

番　号	計測項目及び示数	数　値
1	最大長	308
		305
2	全長	303
		302
3	上端幅	52
		52
4	下端幅	66
		66
5	中央最大幅	23
		23
6	中央最小幅	17
		17
7 a	中央周	69
		69
8	頭周	141
		143
9	頭最大横径	42
		42
10	滑車幅	22
		22
11	小頭幅	18
		18
12 a	滑車及び小頭幅	40
		41
13	滑車深	27
		27
14	肘頭窩幅	24
		24
15	肘頭窩深	10
		10
16	鞍骨体角	84
		84
17	頭骨体角	44
		44
18	上腕骨捻転	156
		156
18 a	捻転角	152
		152
6／5	骨体断面示数	73.91
		73.91
7／1	長厚示数	20.13
		20.13
9／10	頭断面示数	89.36
		87.50
11／4 a	滑車上顆示数	33.33
		33.33

第5表　橈骨計測値

番　号	計測項目及び示数	数　値
1	最大長	243
		243
1 a	小頭粗面間距離	33
		33
2	生理的長	231
		231
3	最小周	43
		43
4	骨体横径	16
		16
4 a	骨体中央横径	16
		16
4（1）	小頭横径	25
		25
4（2）	頭横径	13
		13
5	骨体矢状径	12
		12
5 a	骨体矢状径	12
		12
5（1）	小頭矢状径	26
		26
5（2）	頭矢状径	15
		15
5（3）	小頭周	80
		80
5（4）	頭周	45
		45
5（5）	骨体中央周	44
		44

番 号	計測項目及び示数	数 値
5 (8)	下端頂	36
		36
6	骨体弯曲	1.64
		2.15
7	脚骨体角	166
		165
7 b	矢状脚体角	170
		169
8	粗面位置角	49
		50
3/2	長厚示数	18.61
		18.61
5/4	骨体断面示数	75.00
		73.00

第6表　尺骨計測値

番 号	計測項目及び示数	数 値
1	最大長	263
		263
2	生理的長	233
		234
2 (1)	肘頭小頭長	258
		259
3	尺骨周	38
		38
4	前後骨体弯曲	2.38
		2.38
5 (1)	上関節高	40
		41
5 (2)	上鞍関節面高	29
		30
6	肘頭幅	29
		30
6 (1)	上尺骨幅	23
		23
7 (1)	肘頭鳥喙突起間距離	27
		28
9	鳥喙突起橈骨側関節半の前幅	7
		8
11	尺骨前後径	15
		15
13	尺骨上横径	21
		22
15	尺骨関節角	85
		84
15 a	関節骨体角	22
		25
15 b	骨体上端屈曲角	166
		167
3/2	長厚示数	16.31
		16.24
7/6	肘頭高示数	134.78
		130.43
8/6	肘頭高示数	95.65
		95.65
5/2	肘頭頂高示数	1.29
		1.71
9/10	鳥喙突起橈骨側関節半示数	70.00
		72.73
11/12	骨体断面示数	93.75
		93.75
13/14	扁平示数	87.50
		91.67

第7表　骨盤計測値

番 号	計測項目及び示数	数 値
1	骨盤高	201
		201
2	最大骨盤幅	284
4	寛骨深	171
5	前上棘幅	242
5 (1)	前下棘幅	119
6	後上棘幅	75
7	寛骨臼幅	113
		131
9	腸骨高	132
		102
10	腸骨翼高	103
		10
11	腸骨深	10
12	腸骨幅	160

番 号	計測項目及び示数	数 値
13	腸骨翼幅	90
		90
14	寛骨臼坐骨縫合幅	
		119
15	坐骨高	81
		79
17	坐骨長	88
		96
18	坐骨結合高	34
19	坐骨結合区域幅	37
20	閉鎖孔長	50
22	寛骨臼最大径	55
		57
24	骨盤上口横径	123
25	骨盤上口斜径	116
27	骨盤下口横径	101
28	小骨盤側高	99
		118
29	小骨盤前高	117
		120
30	小骨盤直高	122
33	下恥骨角	70
1/2	骨盤幅高示数	70.77
		70.77
2/1	骨盤高幅示数	141.29
		141.29
21/20	閉鎖孔長幅示数	74.00
24/2	骨盤横示数	43.31
12/10	腸骨示数	105.53
17/4	坐寛骨示数	52.63
4/1	寛骨示数	84.58
		40.58
13/1	坐寛骨示数	39.30

第8表　大腿骨計測値

番 号	計測項目及び示数	数 値
1	最大長	429
		428
2	所謂自然位に於ける大腿骨全長	427
		426
3	最大轉子長	422
		421
4	所謂自然位に於ける轉子長	416
		415
5	骨骨長	345
		345
6	骨体中央矢状径	29
		28
7	骨体中央横径	29
		30
9	骨体上横径	36
		35
10	骨体上矢状径	26
		26
11	最小骨体下矢状径	30
		30
13	上幅	92
		91
13 (1)	下端長	27
		27
14 a	後顆及び頭長	58
		58
14 b	前顆軸方向に於ける頭長	33
		33
14 c	頭長	34
		34
15	頭垂直径	33
		33
17	頭周	105
		105
18	頭垂直径	48
		48
19	頭横乃至頭矢状径	47
		47
20	頭周	150
		150

番 号	計測項目及び示数	数 値
21	上顆幅	83
		83
21 a	内顆前投影幅	44
		44
21 b	外顆前投影幅	38
		38
23	外顆最大長	67
		66
24	内顆最大長	64
		63
24 a	内顆投影的深	63
		62
25	外顆後高	36
		35
26	内顆後高	42
		41
27	骨体弯曲	2.19
		1.94
28	絞轉角	20
		20
29	膕骨体角	125
		126
30	顆骨体角	85
		85
8/2	長厚示数 (a)	21.55
		21.60
8/5	長厚示数 (b)	26.67
		26.67
6+7/2	頑丈示数	13.58
		13.62
6/7	骨体中央断面示数	100.00
		93.33
10/9	上骨体断面示数	72.22
		74.29
11/6	下半骨体矢状示数	103.45
		107.14
12/7	下半骨体横示数	124.14
		120.00
11/12	膝蓋示数	83.33
		83.33
16/15	頭横断示数	96.97
		96.97
19/18	頭横断示数	97.92
		97.92
10+18/2	頭頑丈示数	22.30
		22.25
14/2	頭長示数	15.69
		15.73
22/1	顆示数	79.52
		79.52
7/21	上顆骨体幅示数	34.94
		36.14
21/3	上顆骨体長示数	24.06
		24.06
25/22	外顆高幅示数	54.55
		53.03

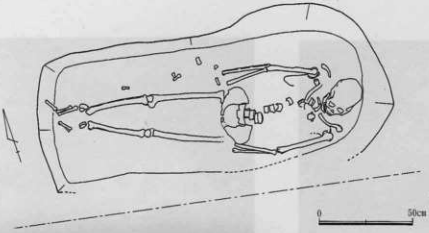
第9表　膝蓋骨計測値

番 号	計測項目及び示数	数 値
1	最大値	43
		44
2	最大幅	47
		47
3	最大厚	20
		20
4	関節面高	32
		32
5	内側関節面幅	20
		21
6	外側関節面幅	29
		30
1/米	膝蓋骨高示数	5.51
		5.50
2/米米	膝蓋骨幅示数	56.63
		56.63
1/2	膝蓋骨高幅示数	91.49
		93.62

米　大腿骨長＋脛骨長
米米　大腿骨上顆幅 (No. 21)

第10表　脛骨計測値

番　号	計測項目及び示数	数　値
1	脛骨全長	344
		346
1a	脛骨最大長	351
		354
1b	脛骨長	343
		342
2	顆面間長	328
		329
3	最大上端幅	80
		79
3a	上内関節面幅	40
		39
3b	上外関節面幅	35
		34
4	脛骨粗面の高さに於ける最大矢状径	51
		50
4a	上内関節面深	50
		49
4b	上外関節面深	41
		40
5	脛骨粗面の高さに於ける最小横径	48
		47
6	最大下端幅	54
		54
7	下端矢状径	46
		46
8	中央最大径	30
		29
8a	栄養孔部矢状径	33
		34
9	中央横径	21
		20
9b	栄養孔部横径	23
		23
10	骨体周	81
		79
10a	栄養孔の高さに於ける骨体周	91
		91
11	脛骨弯曲	1.87
		1.87
12	後捻角	12
		12
13	傾斜角	7
		7
14	脛骨捻轉	17
		17
9／8	中央断面示数	70.00
		68.97
9a／8a	脛示数	69.70
		67.65
10b／1	長厚示数	22.41
		21.90

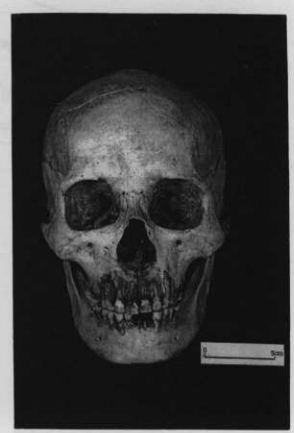


第1図　曽畑貝塚出土人骨
(S＝1／20)

第2図　頭蓋上面観

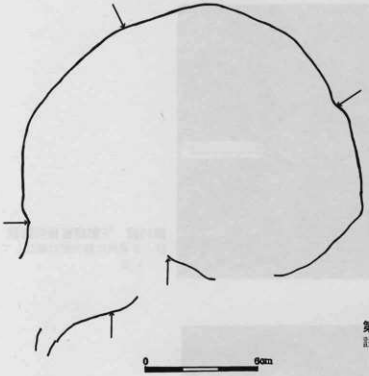
第3図　頭蓋左側面観

第４図　頭蓋底面観
註：矢印は後頭骨の穿孔部位を示す

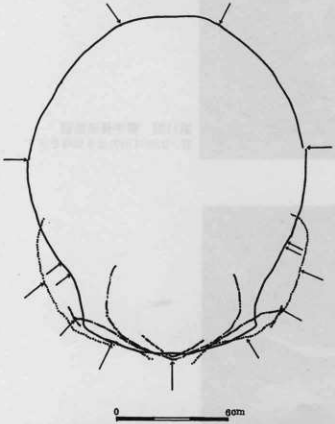


第５図　頭蓋顔面観

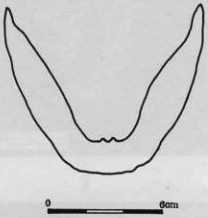
第６図　下顎骨上面観



第 7 図　正中矢状匡廓線図
註：→骨結合部を示す。以下同様

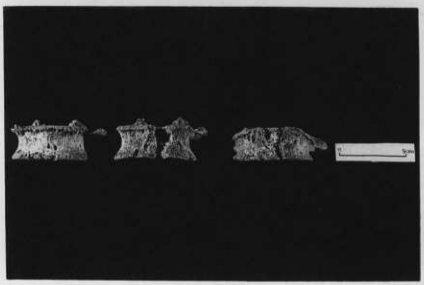


第 8 図　グラベラ地平周径の面及び耳眼面に固定せる場合の顔面各部の地平面



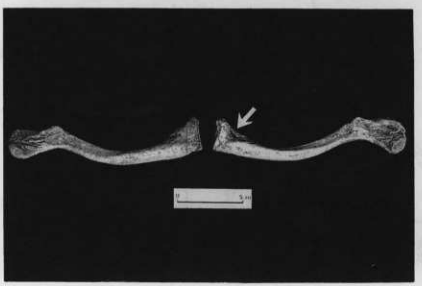
第 9 図　下顎骨底面図
註：内側面は歯槽突起の最内膨隆の外廓線も現れている。

註
———— グラベラ上頭蓋地平周径の位置
— — — — ナジオン上の位置
- - - - - - - - 頬骨上顎縫合上端の位置
—·—·-- 頬骨上顎縫合下端の位置
—·-·-·-- 前鼻棘の位置



第10図　下部腰椎骨前面観
註：3者共に棘突起は破損している

第11図　肩甲骨後面観
註：矢印は消失せる肩峰を示す



第12図　鎖骨下面観
註：矢印は緻密質の穿孔を示す

第13図　上膊骨前面観

第14図　尺骨及び橈骨前面観

第15図　骨盤前面観

第16図　骨盤上面観

第17図　大腿骨前面観

第18図　脛骨、腓骨及び膝蓋骨前面観
註：左側腓骨は外側面を示す

4　曽畑貝塚出土ハイガイの開殻痕について

可兒　弘明

（1）

採集経済時代の人々が積極的に捕採した水産資源のなかで，貝類は

a　簡単な道具あるいは素手で誰にでも容易に，しかも豊富にとることができる

b　蛋白質に富み，脂肪とくにグリコーゲンを多分し，灰分・各ビタミンをも相当量ふくみ熱量も高い

c　美味であるばかりでなく，一般に生活力が強いので水からあげて後も長時間にわたり生きているので，保存に都合がよい

の諸点からすぐれた地位を占めていた。曽畑貝塚におびただしい貝類の廃殻が集積[註1]している事実も，当時にあって貝類が重要な価値を占めていたことを考慮すれば，容易に理解される。もとより貝肉は副食物の域を脱しえなかったろうことは明らかであるが，全体的にみて当時の人々が現代人よりも，はるかに貝肉を好んで賞味していたであろうことも否定できないのであり，調理についてもまたそれ相応にさまざまな工夫がなされていたと思われる。

貝塚の貝類は殻つきのまま漁場から持ち帰ったものであるから，殻から貝肉をとり出す必要があった筈である。その方法としては

イ　殻ごと直火にかけて処理する

ロ　殻ごと煮沸用土器に投じて熱湯で煮る

ハ　一度剥身にしてから生食あるいは干物につくり，または熱処理する

の三大別が考えられる。第一に，曽畑貝塚の廃殻のなかには火にあたって殻が変質しているものがあったので，直火による処理法がとられていたことがわかる。第二に，二枚貝の殻の内側に，貝の液汁がこびりついているものもみられたので，殻ごと煮沸する方法もこれまた曽畑で行われていたことがわかる。そして第三の剥身であるが，これについてハイガイの廃殻中に注意すべき資料が得られているので，以下これについて二，三所見を述べてみよう。

（2）

曽畑貝塚から発掘したハイガイのなかに，破損した空殻が相当あって，調査中よりとくに留意して採集したのであるが，その破損の仕方は大別して二つに分れる。

第1例：写真1，2[註1]に示した[註2]ように，貝殻の前端あるいは後端のいずれか一ヶ所に破損を生じている。ある標本では腹縁にかけて大きく欠損している場合があり，また別の標本ではごくわずかな範囲にとどまって，その大きさは一定していない。しかし，破損個所が右殻の場合でも左殻の場合でも，殻をとじている閉殻筋（貝柱）の直上にあたる貝殻の前端かあるいは後端であることは注意を要する。

これらはA トレンチ第4区の貝層の全体から，また第6区と第7区では縄文後期の土器とともに発見されている。もちろん破損の全くみとめられないハイガイと混在して堆積しているので，普遍的にみられるわけではないが，標本として採集したものだけでも50コ以上をかぞえ，1コ，2コという稀小例ではないから，偶然の結果できた破損とは思えない。貝殻に破損を生じた背後には，なんらかの一定した目的があり，その完遂の為に貝殻を破損する必要があったことは明白である。

第Ⅱ例：写真３[注2]に示すものは，Ａトレンチ第１区出土のハイガイであり，大型のものであるが，左右両殻がそろっている。この前端部にもやはり人工の破損がなされているが，第Ⅰ例の形跡と異って薄い破口をみるにすぎない。縄文早期曽畑式の土器層に発見されたが，この例は本標品が唯一つ得られただけである。

こうした破損状態で貝殻が出土した例は，すでに他地方の貝塚で二，三知られていて，直良博士は，貝肉を生のままとり出すために生ずる破損であろうと考察されている。博士は

（１）京都府竹野郡の丹後函石浜貝塚においてアカガイの前後両端部とくに後端部を破口して開殻している例

（２）千葉県東葛飾郡東金野井貝塚（縄文式）で，これに近いあけ方をしたオキシジミ・シジミの廃殻例

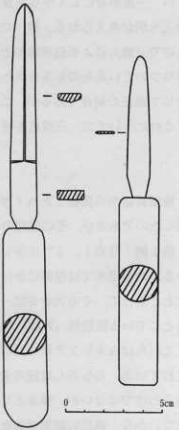
（３）北九州で，福岡県遠賀郡遠賀町城之越貝塚（弥生式）の，ハイガイ・ハマグリの殻頂に近い蝶つがいのほぼ中央のところに鉈をつけて開殻している例

をあげられ，前端ないしは後端部から石器の端をさしこんで貝殻をこじあけたり，あるいは蝶つがいの個所に細めな石器の刃先きをあててこじあけ，生肉をとり出したものと考えられたのである。そこで曽畑においても，縄文早期と後期[注3]の両時代に，ハイガイの生肉をとり出し，いわゆる剥身を賞味する食習慣があったと一応考えられるのである。

（３）

しかしながら，開殻に使用した石器あるいは骨角器は一体どのようなものであったかとなると，曽畑貝塚から出土した石器・骨角器のなかに，開殻に適当するものがみあたらない。そこで，実験的に，いかなる材質からいかなる形態の道具をつくり，どのような方法で開殻すれば，出土資料と同じような破損を生ずるかを検討する必要を感じ，これをすすめていくうちに，上文したような開殻痕を歴然と殻にのこすような生肉のとり出し方は拙い技術であり，これをもって当時一般の開殻法に及ぼそうとする推察はにわかに下しえないと考えるに至った。

まづ手はじめに現在漁家あるいは魚介商が貝の剥身をつくる方法と道具を調べてみよう。第１図は「カイムキ」とよばれる道具で，左側は都内の魚商がアカガイ剥きに使い，右側は千葉県九十九里海岸方面で漁者がアカガイ・ハマグリ・シジミ剥きに用いる。いずれも木柄に先端の細まった鉄べらをさしこんである。鉄べらの部分は，前者では長さ12cm，巾1.4cm，肉も厚いが，後者はこれにくらべ短かく，長さ7.5cm，巾1.2cm，肉もうすい。こうして大小の差はあるが，鉄べらの形は相似していて貝殻剥きにはこの種のものが適していることがわかる。



第１図　貝剥き（現用品）

貝肉をとり出す方法であるが，この道具の先端を，殻頂に近い蝶つがいのほぼ中央にあて，二，三度ねじると，貝はぢきに閉殻をゆるめる。次いでやはりこの道具を貝殻の前端部からさしこみ前の閉

殻筋を断ち，外套膜をはがしながらへら先を後端部に移して後の閉殻筋を切ると，生肉つまり剥身と称するものがとれる。この場合，後端部からはじめても結果は全くかわらない。かんたんきわまりない作業で，未経験の素人でもすぐにこつがのみこめる。この方法によると貝殻を全く傷つけないので，殻に開殻の痕跡はのこらない。また鉄べらのかわりに竹あるいは木製べら，細棒を用いて，これと同じ順序で開殻していっても同じように殻に破損を生じないことがわかる。

つぎに，やはりこの種の道具で，直良博士の推察されたように直接貝殻の前端あるいは後端からこじあけて開殻する方法を試みてみると，これでは貝の閉殻力がつよくて作業能率が非常に悪いことがわかる。しかも貝殻にできる傷は，へらに当たった部分にごくわずかな剥落ができるだけであり，その痕跡はちょうど曽畑貝塚で唯一つしかみつからなかった第Ⅱ例の破損状態によく似かよっているが，第Ⅰ例のごとき大きな欠損個所は生じないことがたしかめられた。

直良博士のあげられた東金井・函石浜の破口状態は詳しく知りえないが，この結果から考えてみると，二枚貝の開殻はやはり蝶つがいをゆるめる方法が有効であり，これには石小刀・石鍾あるいは植物質の細棒へら類で目的がはたせる[註4]。この場合（東京付近ではハイガイの入手が困難のため，アカガイ・ハマグリ・シジミで試験した）殻は全然損傷しないことに注意しなくてはならない。同じような道具で前端あるいは後端からこじあけると，能率が悪いばかりでなく，できる疵も，へらの当った貝殻の縁がわずかに剥落する程度にとどまるのである。植物質のへら類や石匕で第Ⅱ例の痕跡が貝殻にできることはたしかめられるが，こうした迂遠な方法が当時に一般化していたとは思えないのである。第Ⅱ例の廃殻が唯一個しかみつかっていないことも，それをうらがきしている。

それでは，第Ⅰ例の破損はなにによって生じたのであろうか。前にも述べたように，閉殻筋のところをねらって破殺しているのであるから，剥身つくりの結果であることは明白だが，その方法は決してへら類や石匕によるこじあけとみるべきではない。むしろその欠け具合からいっても，自然石とか槌石のような鈍器，あるいは石斧などによる打撃痕跡であり，その破口部から植物質のへら類，細棒などを入れて閉殻筋をはがしていたように推察しうるのである。この方法は大変幼稚であり，貝殻の取り扱いをのみこんだ人だったら，このような手口で開殻しなかったろうと思われ，あるいは年少者の遊び半分の仕ごとであったのかもしれない。第Ⅰ例の資料のなかに，殻長3cm位のちいさいハイガイも多く，剥身に適した嘗の大型ハイガイばかりがそろっていないことや，他貝塚にこうした報告例がすくなくないことからしても，この方法もまた一般化していなかったと考える。

（4）

以上のべたように，曽畑貝塚の縄文早期および後期の土器とともに出土したハイガイの殻にみられる破損状態のうち，第Ⅰ例は鈍器により貝殻の前端あるいは後端を破口して生肉をとりだした痕跡であり，第Ⅱ例は同じ個所を植物質のへら類でこじあけて生肉をとりだした痕跡と思われ，すでに直良博士の紹介された三遺跡のうち，函石浜や東金野井の出土例とともに，わが先史時代に，二枚貝を開殻し生の貝肉をとっていたことを物語るものと思われる。

しかしながら曽畑貝塚の資料によって検討すると，第Ⅰ例，第Ⅱ例の破損状態から推定される開殻法は，いずれも貝類の取扱いに習熟していない幼稚な，迂遠で非能率的なもので，かかる方法がとうてい一般化していたとは思えない。つまり開殻痕をとどめるような貝肉のとり出し方は，非常に幼稚なのであり，わが先史時代とくに縄文文化は，水産物の捕獲とその処理法には高度の生活技術を示しているの

で，二枚貝の生肉をうるためには，やはり今日と同じく蝶つがいをゆるめていく方法で，貝殻を損傷することなしに開殻していたのではなかろうか。貝塚の貝殻のなかで，火で殻が変質したり，明らかに煮沸の形跡があるもの以外は，たとえ開殻痕がなくとも剥身されたものが相当ふくまれているのではないかと私考する。また開殻に使用する道具は，必ずしも石器とは限らず，植物質のへら類で十分なことはくりかえし述べたとおりである。

なおまた生の貝肉を得てからのことは全く想像の域を出ないのであるが，煮たり，干物にして長期保存にしたり，串焼きにした以外に，やはり生のままで賞味することが多かったろうと思われる。魚貝類を生食する慣習は，食生活の上から文化圏を設定していく際に有効なファクターとなしうるので，貝類の開殻法とそれにともなう生食の問題には，大きな文化史的興味がともなっていることも忘れてはならない。

註

1　金子浩昌「石器時代の漁撈活動」（「千葉県石器時代遺跡地名表」所収）昭和34年，P.81

2　曽畑貝塚では，Aトレンチ6区および7区から，ハイガイのほかに巻貝（フトヘナタリ）が殻頂を破損して多量に出土した。しかしこの貝の殻頂は，ことごとく蝕損しているのが自然である（「日本動物図鑑」）。

3　直良信夫「古代日本人の食生活」（大八洲古文化叢刊），昭和22年，P.192

4　薄刃の石小刀は開殻の目的には全く有効でない。

※1　慶応大学から宇土市教育委員会へ移管された資料中に当該写真は含まれていなかった。

※2　同上

5 熊本県内の曽畑式土器出土遺跡

乙益 重隆

九州における曽畑式土器を出土する遺跡は熊本県地方に最も多く集中している。中でも九州中央山地の西麓一帯には，丘陵部の尖端や谷をめぐって有力な遺跡が少なからず分布している。しかるにこうした一連の遺跡は，従来ほとんど組織的な調査が行なわれたことなく，ただ表面採取資料によって判定されているにすぎない。そしてこれらの遺跡では，単純に曽畑式土器だけを出土することがなく，必ず他の各種遺物と混在しながら採取されるのが通例である。従ってここにのべる35箇所にわたる遺跡・遺物の概要は，きわめて杜撰なものであるが，今後の研究を進める上の手がかりとなることを期待して，あえて紹介することにした。

1 玉名郡天水町字竹崎竹崎貝塚

竹崎貝塚は鹿児島本線「肥後伊倉駅」の南方約2.3キロ，水田中に孤立した丘の西側斜面にある。この丘は元来離島であったが，自然の干陸と人工的な干拓によって周辺が水田化し，今では陸地につながってしまった。この貝塚は昭和28年8月田辺哲夫氏によって試掘され，その時貝層内より乳頭状の四脚をもった深鉢形の土器が出土した。しかもその器面には九州では珍らしい斜行縄文や半截竹管による爪型文などがほどこされ，中には頸部に刻み目凸帯をめぐらしたものもみられた。同様な例は最近福岡県宗像神社沖ノ島や，阿蘇郡西原村別辻・下益城郡城南町阿高貝塚などにも出土し，田辺氏はとくにこれら一連の土器を竹崎式と名ずけた。[1] その他にも竹崎では層序関係がわからないが，若干の轟式・曽畑式・阿高式の破片が検出され，幾つかの文化期が重複していることがわかる。とくに曽畑式土器は細片にすぎないが，器形も文様も曽畑貝塚のものと大差なかった。

2 同郡同町字尾田尾田貝塚

この貝塚は竹崎の東方約1.5キロ，尾田川の谷口に位する鹹水産の貝塚で，昭和37年8月田辺哲夫・田添夏喜氏らによって発掘調査が行なわれた。幸いその時の調査には和島誠一・麻生優氏をはじめ，乙益も参加の機会を得た。いずれ詳細については田辺氏の報告によるとして，ここにはその概要だけを紹介したい。

遺跡の中心は現在部落の中央にある地蔵堂附近と考えられるが，全体の規模はかなり広範囲にわたり，地点によって文化期を異にした遺物が出土する。中でも地蔵堂の境内では，南北（第1）と東西（第2）～二つのトレンチを掘って調べた結果，両者ともほぼ同様な結果を得た。すなわち第1トレンチの北側では，上層に阿高式とわずかな竹崎式を出土し，下層及び貝層下には轟式を出土した。同じトレンチの南側では，上層に阿高式と少量の竹崎式，下層に丸底の波状または山形口縁をなした轟式が出土し，最下層，つまり貝層下には曽畑式が群をなして発見された。もちろんこれらの貝層のうち上層部には所々撹乱された部位もあったが，轟式と曽畑式の層は殆んど旧態のままを存し，来離物をみなかった。第2トレンチも同様で，この地点は基盤が東西にわずかばかり傾斜していたが，上層に阿高式と竹崎式，中層に轟式，下層及び貝層下に曽畑式が出土した。

このように尾田貝塚における轟式と曽畑式との前後関係は，われわれがかつて宇土市曽畑貝塚で経験した例や，小林久雄氏が松橋町宮島貝塚で得られた結果と大いにくいちがうものがあり，如何ともしがたい。しかし尾田の轟式は，いわゆるみみずばれ細隆起線文や貝殻連点文・刺突連点文などもあるが，器形が波状または山形口縁の丸底に限られている点に留意される。故に目下の段階では，同じ轟式にも

長い生命と伝統があり，曽畑以前から曽畑以後にかけて存在し得たという解釈が成立するかもしれない。いずれにしてもこうした問題は近き将来に委ねなければならない。尚この貝塚では，他に地点を異にして御手洗A・B，御領式，黒川式なども採取されている。

3　菊池郡旭志村字岩本開拓地

阿蘇外輪山の秀峰鞍岳の西麓には，縄文早期をはじめ弥生を経て，土師・須恵にいたるまで，おびただしい遺跡が群集している。中でも岩本部落の北方智者峯（393.6米）の北麓に位する小川開拓地では，押型文・轟式・御領式などとともに曽畑式土器が採取されているが，遺跡の実態は明らかでない。

4　同郡同村字牟田平

本遺跡も鞍岳の西南麓をめぐる遺跡群の一つで，近世に構築された湯船ノ溜池の近くにあたる。中でも西につづく丘陵の高い部分を俗に牟田平と称し，古くから押型文・撚糸文土器が出土することによって知られる。その他坂本経堯氏によると轟式や擦消縄文のある土器にまじって，曽畑式土器がかなり検出されるという。

5　同郡同村字松ヶ平

本遺跡は矢護川にのぞむ小高い丘陵上にあり，やはり前にのべた鞍岳の西南麓をめぐる遺跡群の一つである。坂本経堯氏によると，ここでも縄文・弥生各種の土器にまじって曽畑式土器が検出されている。

6　菊池郡大津町字御願所七ノ尾

本遺跡は鞍岳西南麓の丘裾が，ひくく横たわった頂部附近にあり，撚糸文をはじめ押型文・阿高・西原・西平・御領など各形式の土器にまじって，曽畑式土器が発見されている。ことに坂本経堯氏は本遺跡から出土する「阿高式土器の太い凹線文間の高い部位に二歯或は三歯ある櫛歯をもつて連点」したものを，七ノ尾式とよんでおられる。

7　同郡西合志村字野々島

鞍岳山麓がゆるやかに西にのびた広大な台地は俗に合志原とよばれ，古くから先史遺跡の豊富な地域として知られる。本遺跡もその一つで，坂本経堯氏によると押型文・撚糸文土器のほかに，曽畑式土器が相当量検出されるという。

8　菊池市大字水源字古川

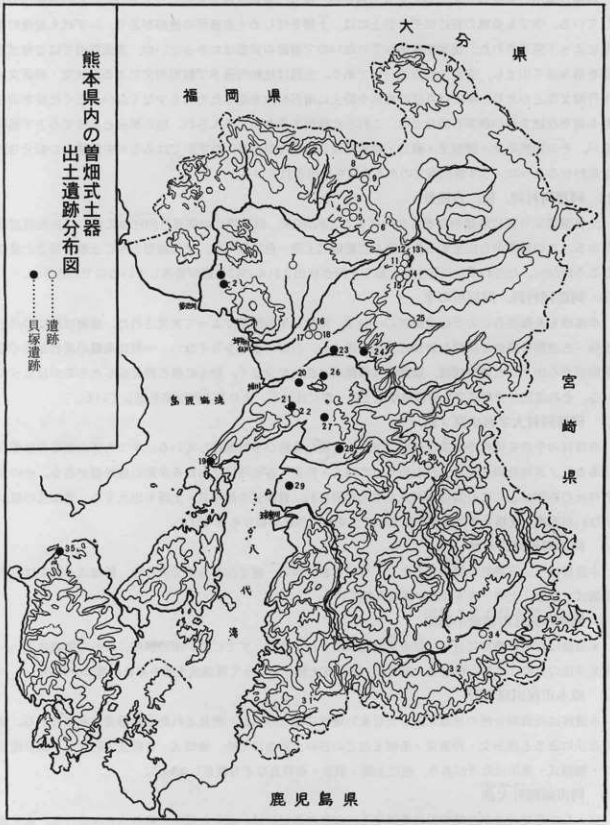
菊池川の水源は阿蘇外輪山麓のせまい渓谷より発している。その渓谷にのぞむ傾面には多くの遺跡が分布しているが，余り一般には知られていない。古川遺跡もその一つで，従来曽畑式土器を最も多く出土している。土器片はいずれも典型的な細型刻文からなり，胎土に滑石粉末を混じたものが少なくない。恐らくそれらに伴なったと思われる石鏃や，打製磨製の石器が採取されているが，開墾時の発見であるため遺跡の実態が明らかでない。

9　菊池市大字水源字伊野開拓地

本遺跡は古川遺跡より更に上流にさかのぼること約2キロ，菊池川水源渓谷にのぞむ山麓台地上にあり，広大な畑地の各所に点々と遺物の群集をみるという。坂本経堯氏の試掘成果によると押型文・撚糸文・轟式・曽畑式・阿高式・西平式・御領式・夜臼式その他弥生式土器など，およそ各時期にわたる遺物が出土し，打製磨製の石器も少なくなかった。ことにそれらの遺物は，地点を異にして一応のまとまりがみられ，伊野一帯の台地がいかに長期間にわたって縄文時代人の生活舞台となったかがうかがわれる。尚本遺跡では後期の縄文式土器群に混って，クジャク石の勾玉が出土している。

10　阿蘇郡南小国町大字満願寺字ヒゼンユ

阿蘇外輪山の北側斜面にあたる小国地方では，深い渓谷をめぐって多くの遺跡が分布するが，あまり開発が行きとどいていない。ここにのべるヒゼンユは，小国川の支流田ノ原川にのぞむ小規模な遺跡であるが，遺物の出土量と種類は少なからぬものがあった。坂本経堯氏の調査によると撚糸文・押型文などの古い土器をはじめ轟式・曽畑式・阿高式・鐘ヶ崎式・西平式・西原式・御領式・ワクド石式など多



彩をきわめ，石器も一通りのものがそろって出土したという。現地は住居趾と考えられるが，何分発掘面積がせまく，遺物の層序関係や共伴関係については明瞭でない。いずれその詳細については坂本氏の報告が公にされるはずである。

11　同郡西原村大字小森字桑鶴土橋

阿蘇外輪山の秀峯袂山の山麓に位する西原村一帯は，複雑な渓谷をめぐっておびただしい遺跡が分布している。中でも桑鶴の谷にのぞむ台上には，土橋をはじめ十余箇所の遺跡があり，いずれも戦後の開墾によって発見された。現地を発掘していないので遺跡の実態はわからないが，表面採取では曽畑式土器を最も多く出土し，有望な地点の一つである。土器は比較的薄手で細型刻文による羽状文・鋸歯文・平行線文などがあり，中には丸底の底部や胎土に滑石粉末を混じたものも少なくない。とくに縦形の石匙や扁平な蛇文岩の磨製石器などは，これらに伴出するものと考えられ，他の類品と比較する上で興味深い。その他撚糸文・押型文・轟式・御領式などの細片があり，わずかではあるが中国地方の船元B式を思わせるような，うず巻凸帯文のある土器も検出されている。

12　同郡同村同，同，古屋敷

土橋遺跡より更に桑鶴の谷をさかのぼること約600米，旧藩時代の間道日向往還に面して古屋敷遺跡がある。この遺跡から出土するのは殆んど曽畑式土器一色に限られ，文様器形ともに土橋の場合と変るところがない。ただわずかに弥生式土器や土師が検出されるのは遺跡が重複しているのであろう。

13　同郡同村同，同扇坂の下

本遺跡も桑鶴渓谷にのぞむ遺跡群の一つで，昭和34年の開墾によって発見された。遺物は前にのべた土橋・古屋敷の場合と同様な曽畑式土器を出土し，石器の量も少なくない。一般に桑鶴の渓谷をめぐる遺跡群から出土した曽畑式は，器面の文様構成に乱れが少なく，胎土に滑石粉を混じたものが目立っている。その点同じ曽畑式でも曽畑貝塚出土の一群に比べて，より基本的な姿を呈している。

14　同郡同村大字宮山宮ノ西

西原村の中央を流れる布田川流域には，小規模な遺跡が多数散在している。中でも宮山部落のはずれにある三ノ宮神社周辺では，丘をめぐって縄文・弥生・古墳時代にわたる多彩な遺跡群がある。そのうち神社の西側はとくに打製石器がたくさん採取され，曽畑式や西平式・土師も出土する。曽畑式の量は少ないが器形・文様ともに典型的なもので，中には底部の破片もみうけた。

15　同郡同村同ひろせ

本遺跡は三ノ宮神社の裏手にあたり，やはり宮ノ西の一連をなすものであろう。曽畑式土器をはじめ御領式・須恵・土師・管玉などが採取されている。

16　熊本市大江町渡鹿小破原

本遺跡は白川の南岸に近い，託麻原台地のはずれに位し，すでに長い間の耕作によって湮滅に近い。東光彦氏の採取によると押型文・御領式・弥生式土器にまじって曽畑式土器をみるが量は少ない。

17　熊本市保田窪本町

本遺跡は託麻原台地の地隙に面したせまい地域に限られるが，発見された土器形式は多彩である。東光彦氏によると撚糸文・押型文・条痕文などの古い土器をはじめ，曽畑式・竹崎式・阿高式・御手洗B式・御領式・黒川式などがあり，他に土師・須恵・布目瓦なども散布している。

18　同市画図町大曲

広大な託麻原台地が沖積平野に変換する江津湖の周辺には，点々と遺物の散布地をみかける。東光彦

氏によると大曲遺跡では曽畑式・阿高式・西平式土器が採取されているが，遺物の散布状態が散漫で，遺跡の性格も明らかでない。

19 宇土郡三角町大字波多字立畠際崎貝塚

本遺跡は三角湾にのぞむ波多部落台地の尖端部にいとなまれた貝塚で，豊富な貝を包含している。崖面に露出している貝層は，浅い部分で約10糎，深いところで1.50米以上もある。発掘調査していないので層序関係がわからないが，轟式・曽畑式・阿高式・出水式などが採取され，昭和29年には人骨も一体出土した。

20 宇土市曽畑貝塚

本文に詳述したので省略。

21 同市宮ノ荘轟貝塚

本遺跡は宇土山塊の丘据に構成された貝塚で，大正９年清野謙次博士らによって発掘調査が行われた。ついで昭和33年には小林久雄・松本雅明氏らによって発掘され，新しい知見がいろいろと加わった。貝塚の規模は広範囲にわたり，土器の種類はきわめて多種・多様である。しかも地点によって文化期の相異があるらしく，層序の状態も攪乱された所が多く一様ではない。従来検出されている土器には撚糸文・押型文・轟式・曽畑式・並木式・阿高式・出水式・鐘ヶ崎式・西平式・御領式などがあり，弥生式土器では下伊田式・城ノ越式・黒髪式がみられ，他に須恵や土師もある。松本雅明氏によると轟式は四類に大別され，曽畑式は殆んど検出されなかったという。恐らく出土地点を異にするのであろう。

22 同市馬場神山中坪

中坪遺跡は宇土半島の山地と，神馬部落の孤丘との間にはさまれた低い沖積地帯にあり，恐らく遺物は最寄りの周辺台地から転落したのであろう。水路の断面にみえる包含層によると，地表下約20糎に土師・須恵の層があり，地表下約1.20米に轟式と曽畑式の包含層がある。遺跡の性格が明らかでないが，轟式も曽畑式も典型的なものばかりで，全体に器面が磨損しているのは，洗い流されたためであろう。

23 上益城郡嘉島村大字上六嘉字カキワラ貝塚

この貝塚は熊本平野のかなり奥まった六嘉台地の西南縁に位し，現在の海岸線から15キロ以上も遠ざかった地点にある。貝塚は台地の断崖面にかかり，純鹹水産の貝より成る。そのために層序が乱れていて一概に信頼できないが，出水式と一部の御手洗Ｂ式を含む層から人骨８体がならんで発見された。出土遺物には押型文・撚糸文・曽畑式・出水式・鐘ヶ崎式・御手洗Ｂ式・武式・西平式・御領式などがあり，更に弥生式土器の黒髪式・須玖式や須恵・土師もあり，それらの出土状態は著しく乱れていた。しかし曽畑式の出土層はやや地点を異にし，貝層のはずれの比較的浅いところから，二箇体分の大きな破片を検出した。一箇分は幾何学的な鋸歯文と直線文のくりかえし文様から成り，他の一箇分は乱れた平行線文を描き，両者ともに一括出土した。

24 同郡御船町辺田見貝塚

この貝塚は緑川の支流御船川をさかのぼった谷口に近い，辺田見部落の南端にある。遺跡の規模は小さいが，表面採取によると出水式・鐘ヶ崎・御手洗Ａ式・市来式のほかに少量の曽畑式があり，その実態は明らかでない。

25 同郡同町大字七滝字間伏附近（俗称　御池原）

阿蘇外輪山の連峯が西南方に流れる裾野一帯は，俗に大矢野原とよばれ，広大な原野が起伏している。中でも御池原とよばれる高原（海抜約400米）には千無田・間伏など，有力な縄文式遺跡があり，おびた

だしい遺物が出土している。現地を踏査した東光彦氏によると，遺跡の範囲はいずれも広大にわたり，遺物も各時期にわたって多彩をきわめている。表面採取品によって分類すると押型文・撚糸文・条痕文・轟式・曽畑式・並木式・御手洗B式・市来式・西平式・御領式・黒川式などがあり，他に弥生式後期の土器や土師・須恵もみられた。とくに曽畑式には胎土に滑石粉を混じたものや，文様構成の整然としたものが多く今後の調査が期待される。

26　下益城郡城南町字阿高貝塚

熊本平野の南縁を劃する木原山（標高314.4米）の北麓には，有名な阿高貝塚と御領貝塚とが谷をへだてて対峙している。中でも阿高貝塚は大正5年以来数回にわたって発掘され，多くの遺物を出土した。しかるにその層序関係については明らかでなく，今では甫調査の必要にせまられている。従来発見されている土器の主体をなすのは阿高式であるが，他に押型文・撚糸文・曽畑式・並木式・竹崎式なども少量ながら出土している。

27　同郡松橋町大字豊福字両仲間宮島貝塚

この貝塚は八代平野の北縁にのぞむ，豊福台地のはずれにあり今は煙滅に近い。かつてこの貝塚を試掘した小林久雄氏は「表層及び次の混土貝塚上部には弥生式土器，それより貝層上部には連点文及び細型刻文の曽畑式土器を出土し，最下層には細帯隆起土器がある」報じておられ，曽畑式よりも轟式が古いのではないかという予測を下された。しかるに前にのべた尾田貝塚では，その逆の結果があらわれた。いずれにしても曽畑と轟は，時間的にきわめて近い前後関係にあったことだけは確かであろう。

28　八代郡竜北村字四ッ江貝塚

五箇荘山地の西麓砂川の谷口附近には，竜北村大野・同西平・同土穴瀬など，有力な貝塚が少なくない。四ッ江貝塚もその一つで，花岡興輝氏の採取品によると曽畑式・鐘ヶ崎式・御手洗A式・武式・西平式・三万田式・御領式などがある。中でも曽畑式は量的に少ないが文様・器形ともに典型的なものである。

29　八代市産島産島貝塚

産島はもと孤島であったが，近代の干拓によって陸つづきとなった。貝塚は島の東南側にあり，規模は小さい。江上敏勝氏によると少量ではあるが押型文土器と，明瞭な曽畑式土器が採取されている。しかし何分にも短時間の表面採取調査によるものであるだけに，遺跡の実態はわからない。

30　八代郡泉村下鶴泉村第四中学校内

五箇荘山地の山深い下鶴は，球磨郡五木村に接した僻陬の地である。現地は袋状をなした渓谷の傾斜面にあり，徳永隆憲氏によると中学校の敷地を拓いたさいに，おびただしい縄文式遺物を出土したという。土器は撚糸文・押型文・轟式・並木式・出水式などがあり，中には曽畑式とみられる一群が含まれている。とにかく九州山地の最も山深い五箇荘地方にも，こうした遺跡があることは注意しなければならない。

31　水俣市宝河内

水俣川の上流渓谷に面した宝河内の台地には，広い地域にわたっていろいろな時期の遺物が散布している。斉藤俊三氏の採取品によると押型文土器をはじめ，轟式・並木式・阿高式・御領式などがあり，中に明瞭な曽畑式土器片を見出した。

32　人吉市木地屋町鳴石

球磨川の支流胸川の上流渓谷には，未開発の遺跡が少なくない。現地踏査不充分なため詳細を記せないが，岡直温氏の採取品によると，木地屋部落に近い谷沿いの小平坦地から曽畑式土器が出ていること

がわかった。しかし破片から推定される文様は，一般に刻文が浅く沈線化した感があり，また直線文は弧線化する傾向がみられるので，或は曽畑式そのものというよりも，日勝山式ではないかという疑を存する。

33 同市願成寺町上ノ寺

本遺跡は人吉市の東北部を限る願成寺丘陵の一部にあり，近くには胴部に二段のふくらみをもった平底の押型文土器を出土した石清水遺跡がある。上ノ寺出土遺物の主体をなすものは手向山式であるから，ここにのべる曽畑式の破片も，手向山式にあらわれた曽畑式文様の踏襲かもしれない。一般に手向山式にあらわれる曽畑系の文様は，施文が浅くて荒く，著しい退化現象がみられる。

34 球磨郡免田町字黒田岡留神社東側

本遺跡は白髪岳山麓よりゆるやかな傾斜をもって北に流れる，扇状地の尖端部に位し，昭和22年の開墾によって発見された。出土遺物の主体をなすものは手向山式一色に限られる。したがって本遺跡では，たとえ曽畑系文様の土器片を含んでいても，その実態は手向山式とみるべきである。ことに本遺跡出土の曽畑系文様の土器片は，日勝山式にみられるような弧線が発達しており，中には文様間の空隙に，荒い縄文をうずめたものさえみられる。

ちなみに手向山式土器は鹿児島県大口市手向山出土を模式とするもので，肥薩国境を中心とする山岳地帯だけに，特異な分布を有する疑問の多い土器である。器形は口縁部がやや開き気味な深鉢状を呈し，胴部は折れて明瞭な菱線をなす。そして菱線上にはしばしば綾杉状の鎖つなぎ文様や，同心円の連続文などがあらわされ，底部は浅い上げ底になるものが多い。器面の文様は内外に早期の土器に特有な撚糸文を施したⅠ式をはじめ，楕円・山形・格子目の押型文を有するⅡ式，縄文を施したⅢ式などがあり，更に轟式の文様を踏襲したⅣ式，曽畑式を踏襲するⅤ式，日勝山式を踏襲したⅥ式などにわけられる。このように手向山式は，九州における早期の土器文様を，一定の器形に集成的に包括していることから，恐らくその時期は前期初頭頃の所産ではないかとみられている。ことに前述した人吉市石清水の押型文土器のごときも，やはり手向山式の一種とみなされ，現段階ではまだ未解決の問題が多分に残っている。

35 天草郡五和町大字二江字沖ノ原貝塚

本遺跡は天草下島の北端，通詞島に対峙する砂丘上にいとなまれた貝塚で，昭和33年坂本経堯氏を中心とする調査団によって発掘が行われた。遺跡の規模は広範囲にわたり，地点によって文化期を異にする。中でも汀線に近い貝塚では，各貝層に出水式を中心にその前後関係を示す有力な土器群が出土した。更に貝層下の砂層には轟式を主とする尖底土器や，典型的な曽畑式土器が出土したが，それらの前後関係を分離することはできなかった。その他地点を異にして御領式・黒川式・弥生式土器・須恵・土師などがあり，石器をも含めて集計すると莫大な量に上る。いずれにしてもその結果は，近刊される報告書にまちたい。

註

1　竹崎貝塚についてはまだ報告された文献がない。

2　小林久雄「肥後縄文土器編年の概要」考古学評論第1巻第1号（昭和10年）

3・4　坂本経堯「小国田ノ原―考古随想―」プリント私刊（昭和26年）

5・6・7・8　「山西村誌」（昭和34年）

9　松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告」『考古学雑誌』第47巻第3号（昭和36年）

10　橋孝文「宇土市轟大字馬場に発見せる曽畑式土器」ともし火５号，宇土高校社会部
11　乙益重隆「熊本県上益城郡カキワラ貝塚」日本考古学年報８（昭和30年度）
12・13　註２
14　小林久雄「九州の縄文土器」人類学先史学講座Ⅱ（昭和14年）
15　寺師見國「南九州の押型文土器」古代学第２巻第２号（昭和28年）

6　曽畑貝塚発掘調査関連報道記事

熊本日日新聞社

慶大、曾畑貝塚（宇土）を発掘

先史文化の解明へ

磁気測定など 28日から科学調査

日本の先史時代を通じ最も古い縄文時代の貝塚遺跡の発掘調査が慶大考古学研究室の手で近く行なわれることになり関係者の注目を集めている。

調査地点の慶大考古学研究室（各分担者）は一昨日から現地に入り調査計画案の立案作成から十三日早朝、熊本に帰ってきた。調査計画案によると、二日は二十七日から、二月八日から、二月八日まで調査期間に当る。調査団のメンバー（体調不良のため欠席した大谷敏夫名古屋大教授）は、考古学研究室の芹川哲生氏（助教授）、東京大人類学部の人類学教室、測量技師、歴史地理学部の考古学研究室、東京都立九大学土質研究室の教授、学生、市教育委員会、熊本大学考古学研究室、慶大考古学研究室の学生、熊本

曽畑貝塚の発掘始る

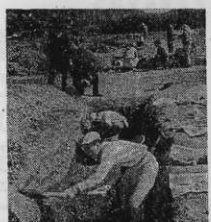
宇土　慶大の江坂氏ら迎え

宇土市岩古曽の曽畑貝塚の発掘は、慶大考古学研究室の江坂輝彌氏らによって来る廿一、二十八日から始まれた。当日は江坂氏のほか同川光矣（国学院大）、鈴木重雄（慶大）の三氏の中堅考古学者が参加、熊本考古学会（会長の宇土高校長金子鉦一氏）の会員十名が参加する。

発掘作業は、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百、百一、百二、百三、百四、百五、百六、百七、百八、百九、百十、百十一、百十二、百十三、百十四、百十五、百十六、百十七、百十八、百十九、百二十、百二十一、百二十二、百二十三、百二十四、百二十五、百二十六、百二十七、百二十八、百二十九、百三十、百三十一、百三十二、百三十三、百三十四、百三十五、百三十六、百三十七、百三十八、百三十九、百四十、百四十一、百四十二、百四十三、百四十四、百四十五、百四十六、百四十七、百四十八、百四十九、百五十、百五十一、百五十二、百五十三、百五十四、百五十五、百五十六、百五十七、百五十八、百五十九、百六十、百六十一、百六十二、百六十三、百六十四、百六十五、百六十六、百六十七、百六十八、百六十九、百七十、百七十一、百七十二、百七十三、百七十四、百七十五、百七十六、百七十七、百七十八、百七十九、百八十、百八十一、百八十二、百八十三、百八十四、百八十五、百八十六、百八十七、百八十八、百八十九、百九十、百九十一、百九十二、百九十三、百九十四、百九十五、百九十六、百九十七、百九十八、百九十九、二百、二百一、二百二、二百三、二百四、二百五、二百六、二百七、二百八、二百九、二百十、二百十一、二百十二、二百十三、二百十四、二百十五、二百十六、二百十七、二百十八、二百十九、二百二十、二百二十一、二百二十二、二百二十三、二百二十四、二百二十五、二百二十六、二百二十七、二百二十八、二百二十九、二百三十、二百三十一、二百三十二、二百三十三、二百三十四、二百三十五、二百三十六、二百三十七、二百三十八、二百三十九、二百四十、二百四十一、二百四十二、二百四十三、二百四十四、二百四十五、二百四十六、二百四十七、二百四十八、二百四十九、二百五十、二百五十一、二百五十二、二百五十三、二百五十四、二百五十五、二百五十六、二百五十七、二百五十八、二百五十九、二百六十、二百六十一、二百六十二、二百六十三、二百六十四、二百六十五、二百六十六、二百六十七、二百六十八、二百六十九、二百七十、二百七十一、二百七十二、二百七十三、二百七十四、二百七十五、二百七十六、二百七十七、二百七十八、二百七十九、二百八十、二百八十一、二百八十二、二百八十三、二百八十四、二百八十五、二百八十六、二百八十七、二百八十八、二百八十九、二百九十、二百九十一、二百九十二、二百九十三、二百九十四、二百九十五、二百九十六、二百九十七、二百九十八、二百九十九、三百、三百一、三百二、三百三、三百四、三百五、三百六、三百七、三百八、三百九、三百十、三百十一、三百十二、三百十三、三百十四、三百十五、三百十六、三百十七、三百十八、三百十九、三百二十、三百二十一、三百二十二、三百二十三、三百二十四、三百二十五、三百二十六、三百二十七、三百二十八、三百二十九、三百三十、三百三十一、三百三十二、三百三十三、三百三十四、三百三十五、三百三十六、三百三十七、三百三十八、三百三十九、三百四十、三百四十一、三百四十二、三百四十三、三百四十四、三百四十五、三百四十六、三百四十七、三百四十八、三百四十九、三百五十、三百五十一、三百五十二、三百五十三、三百五十四、三百五十五、三百五十六、三百五十七、三百五十八、三百五十九、三百六十、三百六十一、三百六十二、三百六十三、三百六十四、三百六十五、三百六十六、三百六十七、三百六十八、三百六十九、三百七十、三百七十一、三百七十二、三百七十三、三百七十四、三百七十五、三百七十六、三百七十七、三百七十八、三百七十九、三百八十、三百八十一、三百八十二、三百八十三、三百八十四、三百八十五、三百八十六、三百八十七、三百八十八、三百八十九、三百九十、三百九十一、三百九十二、三百九十三、三百九十四、三百九十五、三百九十六、三百九十七、三百九十八、三百九十九、四百、四百一、四百二、四百三、四百四、四百五、四百六、四百七、四百八、四百九、四百十、四百十一、四百十二、四百十三、四百十四、四百十五、四百十六、四百十七、四百十八、四百十九、四百二十、四百二十一、四百二十二、四百二十三、四百二十四、四百二十五、四百二十六、四百二十七、四百二十八、四百二十九、四百三十、四百三十一、四百三十二、四百三十三、四百三十四、四百三十五、四百三十六、四百三十七、四百三十八、四百三十九、四百四十、四百四十一、四百四十二、四百四十三、四百四十四、四百四十五、四百四十六、四百四十七、四百四十八、四百四十九、四百五十、四百五十一、四百五十二、四百五十三、四百五十四、四百五十五、四百五十六、四百五十七、四百五十八、四百五十九、四百六十、四百六十一、四百六十二、四百六十三、四百六十四、四百六十五、四百六十六、四百六十七、四百六十八、四百六十九、四百七十、四百七十一、四百七十二、四百七十三、四百七十四、四百七十五、四百七十六、四百七十七、四百七十八、四百七十九、四百八十、四百八十一、四百八十二、四百八十三、四百八十四、四百八十五、四百八十六、四百八十七、四百八十八、四百八十九、四百九十、四百九十一、四百九十二、四百九十三、四百九十四、四百九十五、四百九十六、四百九十七、四百九十八、四百九十九、五百、五百一、五百二、五百三、五百四、五百五、五百六、五百七、五百八、五百九、五百十、五百十一、五百十二、五百十三、五百十四、五百十五、五百十六、五百十七、五百十八、五百十九、五百二十、五百二十一、五百二十二、五百二十三、五百二十四、五百二十五、五百二十六、五百二十七、五百二十八、五百二十九、五百三十、五百三十一、五百三十二、五百三十三、五百三十四、五百三十五、五百三十六、五百三十七、五百三十八、五百三十九、五百四十、五百四十一、五百四十二、五百四十三、五百四十四、五百四十五、五百四十六、五百四十七、五百四十八、五百四十九、五百五十、五百五十一、五百五十二、五百五十三、五百五十四、五百五十五、五百五十六、五百五十七、五百五十八、五百五十九、五百六十、五百六十一、五百六十二、五百六十三、五百六十四、五百六十五、五百六十六、五百六十七、五百六十八、五百六十九、五百七十、五百七十一、五百七十二、五百七十三、五百七十四、五百七十五、五百七十六、五百七十七、五百七十八、五百七十九、五百八十、五百八十一、五百八十二、五百八十三、五百八十四、五百八十五、五百八十六、五百八十七、五百八十八、五百八十九、五百九十、五百九十一、五百九十二、五百九十三、五百九十四、五百九十五、五百九十六、五百九十七、五百九十八、五百九十九、六百、六百一、六百二、六百三、六百四、六百五、六百六、六百七、六百八、六百九、六百十、六百十一、六百十二、六百十三、六百十四、六百十五、六百十六、六百十七、六百十八、六百十九、六百二十、六百二十一、六百二十二、六百二十三、六百二十四、六百二十五、六百二十六、六百二十七、六百二十八、六百二十九、六百三十、六百三十一、六百三十二、六百三十三、六百三十四、六百三十五、六百三十六、六百三十七、六百三十八、六百三十九、六百四十、六百四十一、六百四十二、六百四十三、六百四十四、六百四十五、六百四十六、六百四十七、六百四十八、六百四十九、六百五十、六百五十一、六百五十二、六百五十三、六百五十四、六百五十五、六百五十六、六百五十七、六百五十八、六百五十九、六百六十、六百六十一、六百六十二、六百六十三、六百六十四、六百六十五、六百六十六、六百六十七、六百六十八、六百六十九、六百七十、六百七十一、六百七十二、六百七十三、六百七十四、六百七十五、六百七十六、六百七十七、六百七十八、六百七十九、六百八十、六百八十一、六百八十二、六百八十三、六百八十四、六百八十五、六百八十六、六百八十七、六百八十八、六百八十九、六百九十、六百九十一、六百九十二、六百九十三、六百九十四、六百九十五、六百九十六、六百九十七、六百九十八、六百九十九、七百、七百一、七百二、七百三、七百四、七百五、七百六、七百七、七百八、七百九、七百十、七百十一、七百十二、七百十三、七百十四、七百十五、七百十六、七百十七、七百十八、七百十九、七百二十、七百二十一、七百二十二、七百二十三、七百二十四、七百二十五、七百二十六、七百二十七、七百二十八、七百二十九、七百三十、七百三十一、七百三十二、七百三十三、七百三十四、七百三十五、七百三十六、七百三十七、七百三十八、七百三十九、七百四十、七百四十一、七百四十二、七百四十三、七百四十四、七百四十五、七百四十六、七百四十七、七百四十八、七百四十九、七百五十、七百五十一、七百五十二、七百五十三、七百五十四、七百五十五、七百五十六、七百五十七、七百五十八、七百五十九、七百六十、七百六十一、七百六十二、七百六十三、七百六十四、七百六十五、七百六十六、七百六十七、七百六十八、七百六十九、七百七十、七百七十一、七百七十二、七百七十三、七百七十四、七百七十五、七百七十六、七百七十七、七百七十八、七百七十九、七百八十、七百八十一、七百八十二、七百八十三、七百八十四、七百八十五、七百八十六、七百八十七、七百八十八、七百八十九、七百九十、七百九十一、七百九十二、七百九十三、七百九十四、七百九十五、七百九十六、七百九十七、七百九十八、七百九十九、八百、八百一、八百二、八百三、八百四、八百五、八百六、八百七、八百八、八百九、八百十、八百十一、八百十二、八百十三、八百十四、八百十五、八百十六、八百十七、八百十八、八百十九、八百二十、八百二十一、八百二十二、八百二十三、八百二十四、八百二十五、八百二十六、八百二十七、八百二十八、八百二十九、八百三十、八百三十一、八百三十二、八百三十三、八百三十四、八百三十五、八百三十六、八百三十七、八百三十八、八百三十九、八百四十、八百四十一、八百四十二、八百四十三、八百四十四、八百四十五、八百四十六、八百四十七、八百四十八、八百四十九、八百五十、八百五十一、八百五十二、八百五十三、八百五十四、八百五十五、八百五十六、八百五十七、八百五十八、八百五十九、八百六十、八百六十一、八百六十二、八百六十三、八百六十四、八百六十五、八百六十六、八百六十七、八百六十八、八百六十九、八百七十、八百七十一、八百七十二、八百七十三、八百七十四、八百七十五、八百七十六、八百七十七、八百七十八、八百七十九、八百八十、八百八十一、八百八十二、八百八十三、八百八十四、八百八十五、八百八十六、八百八十七、八百八十八、八百八十九、八百九十、八百九十一、八百九十二、八百九十三、八百九十四、八百九十五、八百九十六、八百九十七、八百九十八、八百九十九、九百、九百一、九百二、九百三、九百四、九百五、九百六、九百七、九百八、九百九、九百十、九百十一、九百十二、九百十三、九百十四、九百十五、九百十六、九百十七、九百十八、九百十九、九百二十、九百二十一、九百二十二、九百二十三、九百二十四、九百二十五、九百二十六、九百二十七、九百二十八、九百二十九、九百三十、九百三十一、九百三十二、九百三十三、九百三十四、九百三十五、九百三十六、九百三十七、九百三十八、九百三十九、九百四十、九百四十一、九百四十二、九百四十三、九百四十四、九百四十五、九百四十六、九百四十七、九百四十八、九百四十九、九百五十、九百五十一、九百五十二、九百五十三、九百五十四、九百五十五、九百五十六、九百五十七、九百五十八、九百五十九、九百六十、九百六十一、九百六十二、九百六十三、九百六十四、九百六十五、九百六十六、九百六十七、九百六十八、九百六十九、九百七十、九百七十一、九百七十二、九百七十三、九百七十四、九百七十五、九百七十六、九百七十七、九百七十八、九百七十九、九百八十、九百八十一、九百八十二、九百八十三、九百八十四、九百八十五、九百八十六、九百八十七、九百八十八、九百八十九、九百九十、九百九十一、九百九十二、九百九十三、九百九十四、九百九十五、九百九十六、九百九十七、九百九十八、九百九十九、千百、千百一、千百二、千百三、千百四、千百五、千百六、千百七、千百八、千百九、千百十、千百十一、千百十二、千百十三、千百十四、千百十五、千百十六、千百十七、千百十八、千百十九、千百二十、千百二十一、千百二十二、千百二十三、千百二十四、千百二十五、千百二十六、千百二十七、千百二十八、千百二十九、千百三十、千百三十一、千百三十二、千百三十三、千百三十四、千百三十五、千百三十六、千百三十七、千百三十八、千百三十九、千百四十、千百四十一、千百四十二、千百四十三、千百四十四、千百四十五、千百四十六、千百四十七、千百四十八、千百四十九、千百五十、千百五十一、千百五十二、千百五十三、千百五十四、千百五十五、千百五十六、千百五十七、千百五十八、千百五十九、千百六十、千百六十一、千百六十二、千百六十三、千百六十四、千百六十五、千百六十六、千百六十七、千百六十八、千百六十九、千百七十、千百七十一、千百七十二、千百七十三、千百七十四、千百七十五、千百七十六、千百七十七、千百七十八、千百七十九、千百八十、千百八十一、千百八十二、千百八十三、千百八十四、千百八十五、千百八十六、千百八十七、千百八十八、千百八十九、千百九十、千百九十一、千百九十二、千百九十三、千百九十四、千百九十五、千百九十六、千百九十七、千百九十八、千百九十九、二千、二千一、二千二、二千三、二千四、二千五、二千六、二千七、二千八、二千九、三千、三千一、三千二、三千三、三千四、三千五、三千六、三千七、三千八、三千九、四千、四千一、四千二、四千三、四千四、四千五、四千六、四千七、四千八、四千九、五千、五千一、五千二、五千三、五千四、五千五、五千六、五千七、五千八、五千九、六千、六千一、六千二、六千三、六千四、六千五、六千六、六千七、六千八、六千九、七千、七千一、七千二、七千三、七千四、七千五、七千六、七千七、七千八、七千九、八千、八千一、八千二、八千三、八千四、八千五、八千六、八千七、八千八、八千九、九千、九千一、九千二、九千三、九千四、九千五、九千六、九千七、九千八、九千九、百千、百千一、百千二、百千三、百千四、百千五、百千六、百千七、百千八、百千九、百千十、百千十一、百千十二、百千十三、百千十四、百千十五、百千十六、百千十七、百千十八、百千十九、百千二十、百千二十一、百千二十二、百千二十三、百千二十四、百千二十五、百千二十六、百千二十七、百千二十八、百千二十九、百千三十、百千三十一、百千三十二、百千三十三、百千三十四、百千三十五、百千三十六、百千三十七、百千三十八、百千三十九、百千四十、百千四十一、百千四十二、百千四十三、百千四十四、百千四十五、百千四十六、百千四十七、百千四十八、百千四十九、百千五十、百千五十一、百千五十二、百千五十三、百千五十四、百千五十五、百千五十六、百千五十七、百千五十八、百千五十九、百千六十、百千六十一、百千六十二、百千六十三、百千六十四、百千六十五、百千六十六、百千六十七、百千六十八、百千六十九、百千七十、百千七十一、百千七十二、百千七十三、百千七十四、百千七十五、百千七十六、百千七十七、百千七十八、百千七十九、百千八十、百千八十一、百千八十二、百千八十三、百千八十四、百千八十五、百千八十六、百千八十七、百千八十八、百千八十九、百千九十、百千九十一、百千九十二、百千九十三、百千九十四、百千九十五、百千九十六、百千九十七、百千九十八、百千九十九、千千、千千一、千千二、千千三、千千四、千千五、千千六、千千七、千千八、千千九、千千十、千千十一、千千十二、千千十三、千千十四、千千十五、千千十六、千千十七、千千十八、千千十九、千千二十、千千二十一、千千二十二、千千二十三、千千二十四、千千二十五、千千二十六、千千二十七、千千二十八、千千二十九、千千三十、千千三十一、千千三十二、千千三十三、千千三十四、千千三十五、千千三十六、千千三十七、千千三十八、千千三十九、千千四十、千千四十一、千千四十二、千千四十三、千千四十四、千千四十五、千千四十六、千千四十七、千千四十八、千千四十九、千千五十、千千五十一、千千五十二、千千五十三、千千五十四、千千五十五、千千五十六、千千五十七、千千五十八、千千五十九、千千六十、千千六十一、千千六十二、千千六十三、千千六十四、千千六十五、千千六十六、千千六十七、千千六十八、千千六十九、千千七十、千千七十一、千千七十二、千千七十三、千千七十四、千千七十五、千千七十六、千千七十七、千千七十八、千千七十九、千千八十、千千八十一、千千八十二、千千八十三、千千八十四、千千八十五、千千八十六、千千八十七、千千八十八、千千八十九、千千九十、千千九十一、千千九十二、千千九十三、千千九十四、千千九十五、千千九十六、千千九十七、千千九十八、千千九十九、万、万一、万二、万三、万四、万五、万六、万七、万八、万九、万十、万十一、万十二、万十三、万十四、万十五、万十六、万十七、万十八、万十九、万二十、万二十一、万二十二、万二十三、万二十四、万二十五、万二十六、万二十七、万二十八、万二十九、万三十、万三十一、万三十二、万三十三、万三十四、万三十五、万三十六、万三十七、万三十八、万三十九、万四十、万四十一、万四十二、万四十三、万四十四、万四十五、万四十六、万四十七、万四十八、万四十九、万五十、万五十一、万五十二、万五十三、万五十四、万五十五、万五十六、万五十七、万五十八、万五十九、万六十、万六十一、万六十二、万六十三、万六十四、万六十五、万六十六、万六十七、万六十八、万六十九、万七十、万七十一、万七十二、万七十三、万七十四、万七十五、万七十六、万七十七、万七十八、万七十九、万八十、万八十一、万八十二、万八十三、万八十四、万八十五、万八十六、万八十七、万八十八、万八十九、万九十、万九十一、万九十二、万九十三、万九十四、万九十五、万九十六、万九十七、万九十八、万九十九、十万、十万一、十万二、十万三、十万四、十万五、十万六、十万七、十万八、十万九、十万十、十万十一、十万十二、十万十三、十万十四、十万十五、十万十六、十万十七、十万十八、十万十九、十万二十、十万二十一、十万二十二、十万二十三、十万二十四、十万二十五、十万二十六、十万二十七、十万二十八、十万二十九、十万三十、十万三十一、十万三十二、十万三十三、十万三十四、十万三十五、十万三十六、十万三十七、十万三十八、十万三十九、十万四十、十万四十一、十万四十二、十万四十三、十万四十四、十万四十五、十万四十六、十万四十七、十万四十八、十万四十九、十万五十、十万五十一、十万五十二、十万五十三、十万五十四、十万五十五、十万五十六、十万五十七、十万五十八、十万五十九、十万六十、十万六十一、十万六十二、十万六十三、十万六十四、十万六十五、十万六十六、十万六十七、十万六十八、十万六十九、十万七十、十万七十一、十万七十二、十万七十三、十万七十四、十万七十五、十万七十六、十万七十七、十万七十八、十万七十九、十万八十、十万八十一、十万八十二、十万八十三、十万八十四、十万八十五、十万八十六、十万八十七、十万八十八、十万八十九、十万九十、十万九十一、十万九十二、十万九十三、十万九十四、十万九十五、十万九十六、十万九十七、十万九十八、十万九十九、百万、百万一、百万二、百万三、百万四、百万五、百万六、百万七、百万八、百万九、百万十、百万十一、百万十二、百万十三、百万十四、百万十五、百万十六、百万十七、百万十八、百万十九、百万二十、百万二十一、百万二十二、百万二十三、百万二十四、百万二十五、百万二十六、百万二十七、百万二十八、百万二十九、百万三十、百万三十一、百万三十二、百万三十三、百万三十四、百万三十五、百万三十六、百万三十七、百万三十八、百万三十九、百万四十、百万四十一、百万四十二、百万四十三、百万四十四、百万四十五、百万四十六、百万四十七、百万四十八、百万四十九、百万五十、百万五十一、百万五十二、百万五十三、百万五十四、百万五十五、百万五十六、百万五十七、百万五十八、百万五十九、百万六十、百万六十一、百万六十二、百万六十三、百万六十四、百万六十五、百万六十六、百万六十七、百万六十八、百万六十九、百万七十、百万七十一、百万七十二、百万七十三、百万七十四、百万七十五、百万七十六、百万七十七、百万七十八、百万七十九、百万八十、百万八十一、百万八十二、百万八十三、百万八十四、百万八十五、百万八十六、百万八十七、百万八十八、百万八十九、百万九十、百万九十一、百万九十二、百万九十三、百万九十四、百万九十五、百万九十六、百万九十七、百万九十八、百万九十九、千万、千万一、千万二、千万三、千万四、千万五、千万六、千万七、千万八、千万九、千万十、千万十一、千万十二、千万十三、千万十四、千万十五、千万十六、千万十七、千万十八、千万十九、千万二十、千万二十一、千万二十二、千万二十三、千万二十四、千万二十五、千万二十六、千万二十七、千万二十八、千万二十九、千万三十、千万三十一、千万三十二、千万三十三、千万三十四、千万三十五、千万三十六、千万三十七、千万三十八、千万三十九、千万四十、千万四十一、千万四十二、千万四十三、千万四十四、千万四十五、千万四十六、千万四十七、千万四十八、千万四十九、千万五十、千万五十一、千万五十二、千万五十三、千万五十四、千万五十五、千万五十六、千万五十七、千万五十八、千万五十九、千万六十、千万六十一、千万六十二、千万六十三、千万六十四、千万六十五、千万六十六、千万六十七、千万六十八、千万六十九、千万七十、千万七十一、千万七十二、千万七十三、千万七十四、千万七十五、千万七十六、千万七十七、千万七十八、千万七十九、千万八十、千万八十一、千万八十二、千万八十三、千万八十四、千万八十五、千万八十六、千万八十七、千万八十八、千万八十九、千万九十、千万九十一、千万九十二、千万九十三、千万九十四、千万九十五、千万九十六、千万九十七、千万九十八、千万九十九、万万、万万一、万万二、万万三、万万四、万万五、万万六、万万七、万万八、万万九、万万十、万万十一、万万十二、万万十三、万万十四、万万十五、万万十六、万万十七、万万十八、万万十九、万万二十、万万二十一、万万二十二、万万二十三、万万二十四、万万二十五、万万二十六、万万二十七、万万二十八、万万二十九、万万三十、万万三十一、万万三十二、万万三十三、万万三十四、万万三十五、万万三十六、万万三十七、万万三十八、万万三十九、万万四十、万万四十一、万万四十二、万万四十三、万万四十四、万万四十五、万万四十六、万万四十七、万万四十八、万万四十九、万万五十、万万五十一、万万五十二、万万五十三、万万五十四、万万五十五、万万五十六、万万五十七、万万五十八、万万五十九、万万六十、万万六十一、万万六十二、万万六十三、万万六十四、万万六十五、万万六十六、万万六十七、万万六十八、万万六十九、万万七十、万万七十一、万万七十二、万万七十三、万万七十四、万万七十五、万万七十六、万万七十七、万万七十八、万万七十九、万万八十、万万八十一、万万八十二、万万八十三、万万八十四、万万八十五、万万八十六、万万八十七、万万八十八、万万八十九、万万九十、万万九十一、万万九十二、万万九十三、万万九十四、万万九十五、万万九十六、万万九十七、万万九十八、万万九十九、億、億一、億二、億三、億四、億五、億六、億七、億八、億九、億十、億十一、億十二、億十三、億十四、億十五、億十六、億十七、億十八、億十九、億二十、億二十一、億二十二、億二十三、億二十四、億二十五、億二十六、億二十七、億二十八、億二十九、億三十、億三十一、億三十二、億三十三、億三十四、億三十五、億三十六、億三十七、億三十八、億三十九、億四十、億四十一、億四十二、億四十三、億四十四、億四十五、億四十六、億四十七、億四十八、億四十九、億五十、億五十一、億五十二、億五十三、億五十四、億五十五、億五十六、億五十七、億五十八、億五十九、億六十、億六十一、億六十二、億六十三、億六十四、億六十五、億六十六、億六十七、億六十八、億六十九、億七十、億七十一、億七十二、億七十三、億七十四、億七十五、億七十六、億七十七、億七十八、億七十九、億八十、億八十一、億八十二、億八十三、億八十四、億八十五、億八十六、億八十七、億八十八、億八十九、億九十、億九十一、億九十二、億九十三、億九十四、億九十五、億九十六、億九十七、億九十八、億九十九、千億、千億一、千億二、千億三、千億四、千億五、千億六、千億七、千億八、千億九、千億十、千億十一、千億十二、千億十三、千億十四、千億十五、千億十六、千億十七、千億十八、千億十九、千億二十、千億二十一、千億二十二、千億二十三、千億二十四、千億二十五、千億二十六、千億二十七、千億二十八、千億二十九、千億三十、千億三十一、千億三十二、千億三十三、千億三十四、千億三十五、千億三十六、千億三十七、千億三十八、千億三十九、千億四十、千億四十一、千億四十二、千億四十三、千億四十四、千億四十五、千億四十六、千億四十七、千億四十八、千億四十九、千億五十、千億五十一、千億五十二、千億五十三、千億五十四、千億五十五、千億五十六、千億五十七、千億五十八、千億五十九、千億六十、千億六十一、千億六十二、千億六十三、千億六十四、千億六十五、千億六十六、千億六十七、千億六十八、千億六十九、千億七十、千億七十一、千億七十二、千億七十三、千億七十四、千億七十五、千億七十六、千億七十七、千億七十八、千億七十九、千億八十、千億八十一、千億八十二、千億八十三、千億八十四、千億八十五、千億八十六、千億八十七、千億八十八、千億八十九、千億九十、千億九十一、千億九十二、千億九十三、千億九十四、千億九十五、千億九十六、千億九十七、千億九十八、千億九十九、万億、万億一、万億二、万億三、万億四、万億五、万億六、万億七、万億八、万億九、万億十、万億十一、万億十二、万億十三、万億十四、万億十五、万億十六、万億十七、万億十八、万億十九、万億二十、万億二十一、万億二十二、万億二十三、万億二十四、万億二十五、万億二十六、万億二十七、万億二十八、万億二十九、万億三十、万億三十一、万億三十二、万億三十三、万億三十四、万億三十五、万億三十六、万億三十七、万億三十八、万億三十九、万億四十、万億四十一、万億四十二、万億四十三、万億四十四、万億四十五、万億四十六、万億四十七、万億四十八、万億四十九、万億五十、万億五十一、万億五十二、万億五十三、万億五十四、万億五十五、万億五十六、万億五十七、万億五十八、万億五十九、万億六十、万億六十一、万億六十二、万億六十三、万億六十四、万億六十五、万億六十六、万億六十七、万億六十八、万億六十九、万億七十、万億七十一、万億七十二、万億七十三、万億七十四、万億七十五、万億七十六、万億七十七、万億七十八、万億七十九、万億八十、万億八十一、万億八十二、万億八十三、万億八十四、万億八十五、万億八十六、万億八十七、万億八十八、万億八十九、万億九十、万億九十一、万億九十二、万億九十三、万億九十四、万億九十五、万億九十六、万億九十七、万億九十八、万億九十九、億億、億億一、億億二、億億三、億億四、億億五、億億六、億億七、億億八、億億九、億億十、億億十一、億億十二、億億十三、億億十四、億億十五、億億十六、億億十七、億億十八、億億十九、億億二十、億億二十一、億億二十二、億億二十三、億億二十四、億億二十五、億億二十六、億億二十七、億億二十八、億億二十九、億億三十、億億三十一、億億三十二、億億三十三、億億三十四、億億三十五、億億三十六、億億三十七、億億三十八、億億三十九、億億四十、億億四十一、億億四十二、億億四十三、億億四十四、億億四十五、億億四十六、億億四十七、億億四十八、億億四十九、億億五十、億億五十一、億億五十二、億億五十三、億億五十四、億億五十五、億億五十六、億億五十七、億億五十八、億億五十九、億億六十、億億六十一、億億六十二、億億六十三、億億六十四、億億六十五、億億六十六、億億六十七、億億六十八、億億六十九、億億七十、億億七十一、億億七十二、億億七十三、億億七十四、億億七十五、億億七十六、億億七十七、億億七十八、億億七十九、億億八十、億億八十一、億億八十二、億億八十三、億億八十四、億億八十五、億億八十六、億億八十七、億億八十八、億億八十九、億億九十、億億九十一、億億九十二、億億九十三、億億九十四、億億九十五、億億九十六、億億九十七、億億九十八、億億九十九、千億億、千億億一、千億億二、千億億三、千億億四、千億億五、千億億六、千億億七、千億億八、千億億九、千億億十、千億億十一、千億億十二、千億億十三、千億億十四、千億億十五、千億億十六、千億億十七、千億億十八、千億億十九、千億億二十、千億億二十一、千億億二十二、千億億二十三、千億億二十四、千億億二十五、千億億二十六、千億億二十七、千億億二十八、千億億二十九、千億億三十、千億億三十一、千億億三十二、千億億三十三、千億億三十四、千億億三十五、千億億三十六、千億億三十七、千億億三十八、千億億三十九、千億億四十、千億億四十一、千億億四十二、千億億四十三、千億億四十四、千億億四十五、千億億四十六、千億億四十七、千億億四十八、千億億四十九、千億億五十、千億億五十一、千億億五十二、千億億五十三、千億億五十四、千億億五十五、千億億五十六、千億億五十七、千億億五十八、千億億五十九、千億億六十、千億億六十一、千億億六十二、千億億六十三、千億億六十四、千億億六十五、千億億六十六、千億億六十七、千億億六十八、千億億六十九、千億億七十、千億億七十一、千億億七十二、千億億七十三、千億億七十四、千億億七十五、千億億七十六、千億億七十七、千億億七十八、千億億七十九、千億億八十、千億億八十一、千億億八十二、千億億八十三、千億億八十四、千億億八十五、千億億八十六、千億億八十七、千億億八十八、千億億八十九、千億億九十、千億億九十一、千億億九十二、千億億九十三、千億億九十四、千億億九十五、千億億九十六、千億億九十七、千億億九十八、千億億九十九、万億億、万億億一、万億億二、万億億三、万億億四、万億億五、万億億六、万億億七、万億億八、万億億九、万億億十、万億億十一、万億億十二、万億億十三、万億億十四、万億億十五、万億億十六、万億億十七、万億億十八、万億億十九、万億億二十、万億億二十一、万億億二十二、万億億二十三、万億億二十四、万億億二十五、万億億二十六、万億億二十七、万億億二十八、万億億二十九、万億億三十、万億億三十一、万億億三十二、万億億三十三、万億億三十四、万億億三十五、万億億三十六、万億億三十七、万億億三十八、万億億三十九、万億億四十、万億億四十一、万億億四十二、万億億四十三、万億億四十四、万億億四十五、万億億四十六、万億億四十七、万億億四十八、万億億四十九、万億億五十、万億億五十一、万億億五十二、万億億五十三、万億億五十四、万億億五十五、万億億五十六、万億億五十七、万億億五十八、万億億五十九、万億億六十、万億億六十一、万億億六十二、万億億六十三、万億億六十四、万億億六十五、万億億六十六、万億億六十七、万億億六十八、万億億六十九、万億億七十、万億億七十一、万億億七十二、万億億七十三、万億億七十四、万億億七十五、万億億七十六、万億億七十七、万億億七十八、万億億七十九、万億億八十、万億億八十一、万億億八十二、万億億八十三、万億億八十四、万億億八十五、万億億八十六、万億億八十七、万億億八十八、万億億八十九、万億億九十、万億億九十一、万億億九十二、万億億九十三、万億億九十四、万億億九十五、万億億九十六、万億億九十七、万億億九十八、万億億九十九、千万億、千万億一、千万億二、千万億三、千万億四、千万億五、千万億六、千万億七、千万億八、千万億九、千万億十、千万億十一、千万億十二、千万億十三、千万億十四、千万億十五、千万億十六、千万億十七、千万億十八、千万億十九、千万億二十、千万億二十一、千万億二十二、千万億二十三、千万億二十四、千万億二十五、千万億二十六、千万億二十七、千万億二十八、千万億二十九、千万億三十、千万億三十一、千万億三十二、千万億三十三、千万億三十四、千万億三十五、千万億三十六、千万億三十七、千万億三十八、千万億三十九、千万億四十、千万億四十一、千万億四十二、千万億四十三、千万億四十四、千万億四十五、千万億四十六、千万億四十七、千万億四十八、千万億四十九、千万億五十、千万億五十一、千万億五十二、千万億五十三、千万億五十四、千万億五十五、千万億五十六、千万億五十七、千万億五十八、千万億五十九、千万億六十、千万億六十一、千万億六十二、千万億六十三、千万億六十四、千万億六十五、千万億六十六、千万億六十七、千万億六十八、千万億六十九、千万億七十、千万億七十一、千万億七十二、千万億七十三、千万億七十四、千万億七十五、千万億七十六、千万億七十七、千万億七十八、千万億七十九、千万億八十、千万億八十一、千万億八十二、千万億八十三、千万億八十四、千万億八十五、千万億八十六、千万億八十七、千万億八十八、千万億八十九、千万億九十、千万億九十一、千万億九十二、千万億九十三、千万億九十四、千万億九十五、千万億九十六、千万億九十七、千万億九十八、千万億九十九、万千億、万千億一、万千億二、万千億三、万千億四、万千億五、万千億六、万千億七、万千億八、万千億九、万千億十、万千億十一、万千億十二、万千億十三、万千億十四、万千億十五、万千億十六、万千億十七、万千億十八、万千億十九、万千億二十、万千億二十一、万千億二十二、万千億二十三、万千億二十四、万千億二十五、万千億二十六、万千億二十七、万千億二十八、万千億二十九、万千億三十、万千億三十一、万千億三十二、万千億三十三、万千億三十四、万千億三十五、万千億三十六、万千億三十七、万千億三十八、万千億三十九、万千億四十、万千億四十一、万千億四十二、万千億四十三、万千億四十四、万千億四十五、万千億四十六、万千億四十七、万千億四十八、万千億四十九、万千億五十、万千億五十一、万千億五十二、万千億五十三、万千億五十四、万千億五十五、万千億五十六、万千億五十七、万千億五十八、万千億五十九、万千億六十、万千億六十一、万千億六十二、万千億六十三、万千億六十四、万千億六十五、万千億六十六、万千億六十七、万千億六十八、万千億六十九、万千億七十、万千億七十一、万千億七十二、万千億七十三、万千億七十四、万千億七十五、万千億七十六、万千億七十七、万千億七十八、万千億七十九、万千億八十、万千億八十一、万千億八十二、万千億八十三、万千億八十四、万千億八十五、万千億八十六、万千億八十七、万千億八十八、万千億八十九、万千億九十、万千億九十一、万千億九十二、万千億九十三、万千億九十四、万千億九十五、万千億九十六、万千億九十七、万千億九十八、万千億九十九、億万億、億万億一、億万億二、億万億三、億万億四、億万億五、億万億六、億万億七、億万億八、億万億九、億万億十、億万億十一、億万億十二、億万億十三、億万億十四、億万億十五、億万億十六、億万億十七、億万億十八、億万億十九、億万億二十、億万億二十一、億万億二十二、億万億二十三、億万億二十四、億万億二十五、億万億二十六、億万億二十七、億万億二十八、億万億二十九、億万億三十、億万億三十一、億万億三十二、億万億三十三、億万億三十四、億万億三十五、億万億三十六、億万億三十七、億万億三十八、億万億三十九、億万億四十、億万億四十一、億万億四十二、億万億四十三、億万億四十四、億万億四十五、億万億四十六、億万億四十七、億万億四十八、億万億四十九、億万億五十、億万億五十一、億万億五十二、億万億五十三、億万億五十四、億万億五十五、億万億五十六、億万億五十七、億万億五十八、億万億五十九、億万億六十、億万億六十一、億万億六十二、億万億六十三、億万億六十四、億万億六十五、億万億六十六、億万億六十七、億万億六十八、億万億六十九、億万億七十、億万億七十一、億万億七十二、億万億七十三、億万億七十四、億万億七十五、億万億七十六、億万億七十七、億万億七十八、億万億七十九、億万億八十、億万億八十一、億万億八十二、億万億八十三、億万億八十四、億万億八十五、億万億八十六、億万億八十七、億万億八十八、億万億八十九、億万億九十、億万億九十一、億万億九十二、億万億九十三、億万億九十四、億万億九十五、億万億九十六、億万億九十七、億万億九十八、億万億九十九、千億万億、千億万億一、千億万億二、千億万億三、千億万億四、千億万億五、千億万億六、千億万億七、千億万億八、千億万億九、千億万億十、千億万億十一、千億万億十二、千億万億十三、千億万億十四、千億万億十五、千億万億十六、千億万億十七、千億万億十八、千億万億十九、千億万億二十、千億万億二十一、千億万億二十二、千億万億二十三、千億万億二十四、千億万億二十五、千億万億二十六、千億万億二十七、千億万億二十八、千億万億二十九、千億万億三十、千億万億三十一、千億万億三十二、千億万億三十三、千億万億三十四、千億万億三十五、千億万億三十六、千億万億三十七、千億万億三十八、千億万億三十九、千億万億四十、千億万億四十一、千億万億四

土器や石器が続出

発掘すすむ曽畑貝塚



曽畑貝塚の発掘作業

旦天人の根岸の文化財委員会千田一郎氏自治会長宮田一郎氏（写真）は二千一郎氏自治会長宮田一郎氏の案内で、一歩ずつ足元を確かめながら、曽畑貝塚の発掘作業を見ていきました。

岩石の発掘調査を協力すべく、曽畑貝塚の発掘作業を見て、世界の遺跡を視察してきた。

「彫刻的な、個性的な、美術的な女性像」の発掘作業が、「縄文」で、「明治」が見つかった右側をへ、「女」を、「土」を、「石」を、「土器」を、「石器」を、「土」を、「石」を、「土器」を、「石器」を、「土」を、「石」を、「土器」を、「石器

層位の追究すすむ

曽畑貝塚　雨の中で発掘調査

雨にぬれて曽畑貝塚の発掘作業

1959年（昭和34）11月2日付

骨針と腕輪を出土

きょう賑かな見学陣

1959年（昭和34）11月3日付

見学で賑わう曾畑貝塚

警官も考古学の勉強

雨中の発掘 珍しい装身具が出土

宇土市岩古曽の曽畑貝塚発掘調査は三日朝から小雨もよりの悪天候の中で続行され、多くの貴重な資料を得た。

写真は発掘調査で発見する貝製装身具

この日は、文化の日の休日とあって、本県考古学会等、熊本県庁、熊本市教育委員会、山鹿教育委員会、宇土市教育委員会の一行、約八〇人が現地に集まられ、また宇土、山鹿、山田、宇土の高等学校生徒、約三千人が発掘作業を手伝った。雨中の発掘は困難をきわめて、たいへんな目にあったそうだ。

出土された貝製品は、アワビ貝製装身具、ボタン状貝製品、貝製品、貝製品、

曽畑の年代測定へ

渡辺理博　現地で資料収集

東大考古学研究室の渡辺理博講師は、曽畑貝塚の年代測定を目的とする調査のため、二日から二泊三日の日程で来熊した。同講師は、曽畑貝塚の年代測定を目的とする東大考古学研究室の調査隊が、昨年、この貝塚の調査を行ない、曽畑貝塚の絶対年代を測定するとの計画を発表し、曽畑貝塚の年代測定の問題が、学界の注目を集めていたが、今回、同講師は、この貝塚の年代測定を目的とする調査のため、この貝塚を調査し、資料を収集した。

考古学界に知られている年代測定法は、放射性炭素（C14）法、カリウム・アルゴン法、フィッション・トラック法、ESR法、熱ルミネッセンス法、アミノ酸法、年輪法、年縞法、年層法、年代測定法、年代測定法などがあるが、これらの年代測定法は、それぞれ、適用範囲、適用対象、適用年代、精度、誤差、適用条件などが異なっている。

曽畑貝塚の年代測定を行なうためには、貝殻、骨、炭、土器、石器、土器の胎土、土器の表面、土器の内面、土器の外面、土器の底、土器の口縁、土器の胴、土器の把手、土器の文様、土器の焼成、土器の焼成温度、土器の焼成時間、土器の焼成方法、土器の焼成場所、土器の焼成者、土器の焼成年代、土器の焼成年月日、土器の焼成時刻、土器の焼成天候、土器の焼成気温、土器の焼成湿度、土器の焼成気圧、土器の焼成風向、土器の焼成風速、土器の焼成雨量、土器の焼成日照時間、土器の焼成日照量、土器の焼成日照角、土器の焼成日照方位、土器の焼成日照高度、土器の焼成日照時刻、土器の焼成日照天候、土器の焼成日照気温、土器の焼成日照湿度、土器の焼成日照気圧、土器の焼成日照風向、土器の焼成日照風速、土器の焼成日照雨量、土器の焼成日照日照時間、土器の焼成日照日照量、土器の焼成日照日照角、土器の焼成日照日照方位、土器の焼成日照日照高度、土器の焼成日照日照時刻、土器の焼成日照日照天候、土器の焼成日照日照気温、土器の焼成日照日照湿度、土器の焼成日照日照気圧、土器の焼成日照日照風向、土器の焼成日照日照風速、土器の焼成日照日照雨量、土器の焼成日照日照日照時間、土器の焼成日照日照日照量、土器の焼成日照日照日照角、土器の焼成日照日照日照方位、土器の焼成日照日照日照高度、土器の焼成日照日照日照時刻、土器の焼成日照日照日照天候、土器の焼成日照日照日照気温、土器の焼成日照日照日照湿度、土器の焼成日照日照日照気圧、土器の焼成日照日照日照風向、土器の焼成日照日照日照風速、土器の焼成日照日照日照雨量、土器の焼成日照日照日照日照時間、土器の焼成日照日照日照日照量、土器の焼成日照日照日照日照角、土器の焼成日照日照日照日照方位、土器の焼成日照日照日照日照高度、土器の焼成日照日照日照日照時刻、土器の焼成日照日照日照日照天候、土器の焼成日照日照日照日照気温、土器の焼成日照日照日照日照湿度、土器の焼成日照日照日照日照気圧、土器の焼成日照日照日照日照風向、土器の焼成日照日照日照日照風速、土器の焼成日照日照日照日照雨量、土器の焼成日照日照日照日照日照時間、土器の焼成日照日照日照日照日照量、土器の焼成日照日照日照日照日照角、土器の焼成日照日照日照日照日照方位、土器の焼成日照日照日照日照日照高度、土器の焼成日照日照日照日照日照時刻、土器の焼成日照日照日照日照日照天候、土器の焼成日照日照日照日照日照気温、土器の焼成日照日照日照日照日照湿度、土器の焼成日照日照日照日照日照気圧、土器の焼成日照日照日照日照日照風向、土器の焼成日照日照日照日照日照風速、土器の焼成日照日照日照日照日照雨量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照時間、土器の焼成日照日照日照日照日照日照量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照角、土器の焼成日照日照日照日照日照日照方位、土器の焼成日照日照日照日照日照日照高度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照時刻、土器の焼成日照日照日照日照日照日照天候、土器の焼成日照日照日照日照日照日照気温、土器の焼成日照日照日照日照日照日照湿度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照気圧、土器の焼成日照日照日照日照日照日照風向、土器の焼成日照日照日照日照日照日照風速、土器の焼成日照日照日照日照日照日照雨量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照時間、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照角、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照方位、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照高度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照時刻、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照天候、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照気温、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照湿度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照気圧、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照風向、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照風速、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照雨量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照時間、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照角、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照方位、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照高度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照時刻、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照天候、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照気温、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照湿度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照気圧、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照風向、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照風速、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照雨量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照時間、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照角、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照方位、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照高度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照時刻、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照天候、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照気温、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照湿度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照気圧、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照風向、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照風速、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照雨量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照時間、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照角、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照方位、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照高度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照時刻、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照天候、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照気温、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照湿度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照気圧、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照風向、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照風速、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照雨量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照時間、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照角、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照方位、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照高度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照時刻、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照天候、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照気温、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照湿度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照気圧、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照風向、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照風速、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照雨量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照時間、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照角、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照方位、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照高度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照時刻、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照天候、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照気温、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照湿度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照気圧、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照風向、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照風速、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照雨量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照時間、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照量、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照角、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照方位、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照高度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照時刻、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照天候、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照気温、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照湿度、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照気圧、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照風向、土器の焼成日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照日照風速、土器の焼成日照

国文化財指定へ折り紙

曽畑貝塚の発掘終る

縄文土器の編年実証

貴重な資料 ぼう大な出土品

日本の国宝文化財審査委員長ら一行が来宮され、国の文化財指定の問題は今後ますます進められることになった。

開発工事の一環として行なわれていた曽畑貝塚の発掘調査は、十月一八日から約一カ月間、東京大学教授、奈良国立文化財研究所、東京国立博物館、国宝審査委員長ら一行が来宮され、国の文化財指定の問題は今後ますます進められることになった。

この貝塚は、縄文時代の土器の編年を実証する貴重な資料として、また、ぼう大な出土品の数々は、国の文化財指定の問題に、大きな波紋を投じ、今後の発掘調査の進展と、指定の問題は、ますます注目されるであろう。

曽畑貝塚の発掘トレンチ。円内は江坂輝彌東京教育大学教授

宇土で歴史講演会

宇土市教育委員会主催（宇土市、熊本県教育委員会、宇土市教育委員会）は、宇土市文化財保護委員会、宇土市教育委員会、宇土市文化財保護委員会、宇土市教育委員会、宇土市文化財保護委員会、宇土市教育委員会

曽畑貝塚の発掘調査

熊大考古学研究室　江坂輝弥

(1)

曽畑式土器小型土器（口径11㎝＝Cトレンチ第2層出土）左からもれぞれ裏面・上面・伏せて撮影したもの

西九州の特異な文化

縄文のない櫛文土器

1959年（昭和34）11月25日付

曽畑貝塚の発掘調査

―関大考古学教室 江坂 輝弥

（2）

貴重な立地・規模

残っていた往時の文化

この曽畑土器文化は半島の文化の影響を強く受けた九州北西部一帯に広がる文化を形成し、縄文文化の発展に大きな役割を果たしたと考えられる。特に曽畑式土器の特徴ともいえる貝殻文の中でも、特に貝殻の大きな貝殻を用いて、貝殻の先端を利用して、貝殻の背面に沿って、貝殻の先端を利用して、貝殻の背面に沿って、貝殻の先端を利用して、貝殻の背面に沿って

曽畑貝塚の発掘調査

熊大考古学研究室　江坂輝弥

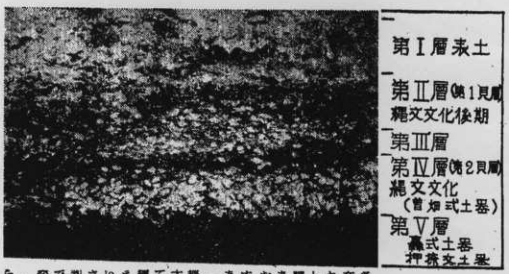
（3）

広い"堆積範囲"

各層から各期の土器

B トレンチ第三区における曽畑式土器の出土状態

1959年（昭和34）11月27日付



Aトレンチ1区北壁の断面写真

曽畑貝塚の発掘調査

熊大考古学教室 江坂輝弥

(4)

曽畑貝塚は上記のごとく各種の時代の遺跡が重複して存在する貝塚であるが、この中でもっとも古い時代に属するものが、この貝塚に特有な曽畑式土器である。曽畑式土器は第二期の縄文文化に属するものであった。

曽畑貝塚は昭和二四年、東大考古学教室山内清男氏によって西北九州地方の縄文文化中期に属するものであるとされたが、その後調査がはかどらず、その後調査がはかどらず、その後調査がはかどらず

付 編 2

1　若林　勝邦　1890「肥後旅行談」『東京人類学会雑誌』第５巻第49号 東京人類学会
2　杉村　彰一　1962「曾畑式土器文化に関する一考察」『熊本史学』第23号 熊本史学会
3　清野　謙次　1969「肥後国宇土郡花園村大字岩古曾字曾畑貝塚」『日本貝塚の研究』　岩波書店

1　肥後旅行談

若林　勝邦

余ガ今日述ベント欲スル肥後旅行談ハ三部分ヨリナレリ始ハ余ガ肥後ニ旅行セシ所以次ハ探究ノ報告終ハ自己ノ考ヘ得タル事實トス

余ガ帝國大學ノ命ヲ帶ビ肥後ニ旅行セシハ他ニアラザルナリ余ハ明治廿一年夏始メテ九州ノ陸地ヲ踐ムヤ豐前筑前筑後肥前ヲ旅行シ古墳或ハ塚穴ヲ實見シ人類學上ノ知識ヲ得ル少ナカラズ又石器時代ノ遺物ヲ散見セシガ故ニ其遺物ヲ熟視セシニコレ本邦新石器時代ノ遺物ヨリ少シク以前ノ時代ニ於テ製造セラレシガ如シ此事ハ本會ニ於テ嘗テ述ベシガ未ダ筆記セズ從テ雜誌上ニモ掲ゲザリシ其後青森縣ニ至リ龜ケ岡ヲ研究シ同縣下諸地方ヲモ旅行シ石器時代ノ遺物ヲ調査セリ而シテ此地方ノ遺物ハ本邦新石器時代ニ屬スルモノナリト思考セリ故ニ此北端ノ遺物研究ト西南端ノ遺物研究トヲ合セバ必ズ人類學上好結果アラン事ヲ知リ今回更ニ肥後ヘ旅行シ此地方ニ於ケル石器時代ノ事實調査ニ從事セリ且肥後ハ天艸ノ内海ニ望ミ九州西南端中央部ノ海岸ヲ有セルヲ以テ嘗テモールス氏ノ研究セシ大野村ノ貝塚（大森介墟篇ニ小野村トアルハ大野村ノ誤ナリ）ノ他ニ尚遺跡遺物數多アルベキヲ信ゼシニヨレリ又モールス氏ノ大野村貝塚ノ研究報告ハ終ニ世ニ出デザリシニヨリ此地方ノ状態ハ充分知ルヲ得ザリシガ爲メナリ次ニ探究ノ報告ヲ記スベシ

余ハ昨年十二月二十八日東京ヲ出立シ本年一月三日熊本ヘ到着セリ以後熊本縣管内ヲ巡回シ一月三十一日歸京セリ今回研究セシ重ナル貝塚ハ宇土郡岩古層村（舊名曾畑村）ニアルモノ八代郡吉野村ニアルモノ仝村字西ノ平ニアルモノナリ此吉野村ハ舊高塚村大野村（モールス氏ノ研究セシハ此地ナリ）ノ合併セシモノニテ貝塚モ兩村ニ跨レリモールス氏ハ大野村ノ貝塚ト呼ブモ實際ハ高塚大野兩村ノ貝塚ナリトス又字西ノ平ノ貝塚ハ舊高塚村ニ屬セリ新町村制ニヨリ吉野村ノ名ヲ以テ高塚大野ヲ總稱セシハ貝塚ノ所在地名ヲ指示スルニ於テ都合ヨキ大野村ノ名稱ニシテ隱ルヽハ惜ムベシ何トナレハ大野ト云ヘル地ハ多ク石器時代ノ遺跡ヲ發見シ研究スベキ點アレナバナリ余ガ又遺物ヲ採集シ得タル地ハ葦北郡大野村下益城郡大野村ノ貝塚託麻郡戸島村仝永嶺村合志郡二タ子原仝龜尾村山本郡内村仝清水村山鹿郡名塚村ナリトス先ヅ貝塚ヨリ述ブベシ

宇土郡ハ肥後ノ西部ニ位シ有明ノ海及ビ天艸ノ内海一部分ニ望ム中央平カニシテ東部丘陵多ク起伏セリ此丘陵中木原山ト稱スル丘アリ其麓ニシテ西南ノ地ニ貝塚アリ今畠トナル面積凡ソ七畝貝殼堆積又厚サ凡ソ三尺ト又昔ハ二三町ニ渉リシガ如シ近傍ノ畠ノ地底或ハ小逕ノ側面ニ貝殼アルヲ見ル現今ハ海岸ヲ距ル事近キハ一里遠キハ一里半ナリト云フ然レドモ此貝塚ノ西北ニアル宇土山ト云ヘル丘ハ土俗宇土島ト呼ブヲ見レバ昔時海水ノ此近傍ニ來リシ一證トスベシカ曾テ肥前島原ノ崩ルヽヤ海嘯宇土山ノ下ナル宇土驛ヲ浸スト此驛ハ貝塚ヲ距ル僅ニ十丁餘ナリ然レドモ貝塚ハ地高ク海水ノ侵入ヲ免カレタリト云フ地質局出版ニカヽル地質報文本年第一號ニヨレバ宇土驛ハ地質學上第四紀層中沖積層ニ屬シ木原山及ビ貝塚ハ第三紀層ニ屬セリ而シテ余ガ此貝塚ヨリ發掘シ得タル所ノ遺物ハ左ノ如シ

一　石器　　石斧一個

二　土器　　瓶類ノ緣，底，腹部數個

三　骨　　獸骨一個

四　貝殼　　牡蛎，蛤，さゝめ，あさり，志ゝがひ，數個

石斧ハ稍磨キ刃ヲ有ス，土器ハ緣，腹部ニ種々ノ模樣ヲ附ス刻ミ目ノ並行アリ斜線ノ交叉アリ表裏ニ書

ケル斜線アリ縄紋ヲ印セルアリ各趣ヲ異ニセリ底ニハ裏面ニ編物ノ痕ナシ土器中僅ニ一殘片ニ赤キ染料ヲ塗レルモノアリコヽニ記セル土器ハ云フ迄モナク皆貝塚土器ナリ以下同ジ獸骨ハ何ノ獸ナルヤ詳カナラズ

次ニ記スベキハ八代郡ノ吉野村ノ貝塚ナリ此八代郡ハ肥後西部ノ中央ニ位シ天神ノ内海ニ望ミ大古人民ノ居ヲ選ムニ最好ノ地ナリ此等ノ原因ニヨレルモノカ當郡吉野村ノ貝塚ハ面積廣ク凡二丁四方ニ渉レリ又貝殼ノ積モレル事厚サ凡四五尺ヨリ四間ノ間ニアリ此貝塚ノ下ハ八代街道ニシテ通行ノ際仰キ見レバ貝殼斜ニ積リ西南ノ丘腹一帙ヲ掩フ丘ノ最高ノ部分ハ土現ハルヽモ他ハ土ヲ見ル能ハザルナリ此街道ノ下ハ漸ク低ク最低地ハ街道ト二間餘ノ差アリ田畠相連リ壹里半ニシテ天神ノ内海岸ニ達ス此低キ地ハ昔海水ノ浸セシ所ナルガ現今ノ八代街道ノ下ヨリハ加藤清正ノ肥後ニ封ゼラレシ以來新ニ埋メ終ニ今日ノ如クナリシト云フ而シテ今日ノ八代街道ハ通ゼズ吉野村貝塚ノ東北ニ當レル種山ト稱スル山道ヲ經テ八代ニ至リシト云フ土俗船繫キ松ト稱スル松貝塚ノ傍ニアリ又貝塚ノアル丘ノ頂上ニ至レバ西方ニ天神郡ヲ望ミ北方ニ木原山ヲ見ル下益城郡大野村ノ如キハ眼下ニアリ余ガ此貝塚ヨリ發見シ得タル遺物ハ左ノ如シ

石器	石斧　三個
土器	瓶壺類ノ緣，底，腹部，柄手數個
骨	鹿骨，猪牙，齒，人骨，數個
貝殼	牡蛎，蛤，さゝめ，あげまき，たにし，河にな數個

石斧ハ稍磨キ刃ヲ存スルモノ二個アリ他ノ一個ハ細クシテ磨ケル事前ノ二個ニ比スレバ少シク巧ナリ巾廣キ部分ハ欠損セルモ巾狹キ一端ハ一方ノ面ヲ研ギ刃トナセリ土器ハ種々ノ模様ヲ附ス刻目ノ並行シテ屈曲スルアリ曲線ノ對スルアリ縱線ノ並行アリ縄紋ヲ印セルアリ緣ハ波形ヲナス柄手ハ耳形ヲナセリ底ノ裏面ニハ編物ノ痕アルヲ認メズ鹿角ハ又ノ部分猪牙ハ一個，下顎ニ生ゼル齒數個，人骨ハ脛骨一個ナリ貝殼ハ鹹水産ト淡水産ノ二種アリ

次ハ吉野村字西ノ平（舊高塚村字西ノ平）ノ貝塚ヲ發掘シ石斧貝塚土器，貝殼ヲ得タリ石斧ハ稍磨ガケリ此西ノ平貝塚ハ今畠トナル面積數十坪アリ吉野村貝塚ヲ距ル數町ナリトス

貝塚ノ記事ハ此處ニ止メ次ニ石器ヲ採集セシ地及ビ出處地ヲ述ベン

雲根志後篇ノ四鐵石ノ條ニ肥後葦北ヨリモ稱ニ出ル云々ト記シアルガ故ニ世ノ石鏃ノ事ヲ云フモノハ多ク此書ニヨリ肥後國葦北ニ出ヅト記スルモ葦北ハ郡名ニシテ全郡中ノ何處ナルヤ知ル能ハザリシガ今回全郡大野村ナルヲ知リ得タリ然カモ其地ニ至リ同村中字下ヶ原ナルヲ知リ得タリ此地ヨリ出デタル石鏃三個ノミナラズ石匕一個石斧四個石環一個ヲ得タリ石斧四個ノ中二個ハ打カキテ後稍磨キタルモノナリ他ノ二個ハ始メヨリ稍磨ケルヲ見ル石環ハ半パ欠ク，徑凡三寸トス此石環ノ類ハ神田孝平君ノ大古石器考第十三版十三圖ニモアリ徑凡二寸トス北海道ヨリ出シモノナリト記セリ又本誌第四十七號一四四頁ニ坪井正五郎君ハパリー万國博覽會ニテ一見サレシ三個ノ蛇ノ目形ノ磨製石器ヲ記サレシガ圖ニヨレバ其形状類似セリ其中二個ハ徑四寸計リ一個ハ徑二寸五六分ト云フ余ノコヽニ記セル石環ハ内孔ノ徑八分大古石器考ニアル石環ハ内孔凡五分ナリ次ニ下益城郡大野村貝塚ニ至リ蛤，しゝがひ，貝塚土器，破片ヲ得タリ次ニ託麻郡戸島村ニ至リ龜製石斧四個ヲ得隣村永嶺村ニ至リ稍磨ケル石斧ノ一片ヲ得次ニ山本郡内村ニ至リ同村畠ヨリ深迫氏ノ採集セシ磨製石斧一個ヲ得又同郡清水村ノ磨製石斧一個ヲ得又山鹿郡名塚村下上吉田村ノ堺ナル吉田原ニ至リ石鏃ヲ得其他合志郡二タ子原，杉水村，龜尾村ヨリ出シ石鏃ヲ得熊本市坂口氏宅ニ於テ合志郡立田山三軒屋ニテ得シ石斧二個ヲ見ル其中一個ノ石斧ニハ帆立貝ノ小ナルモ

ノ附着シオレリ又佐々干城氏ノ祖父ガ居ヲ本妙寺山ノ麓ニトセシ際掘リ得タル石斧一個ヲ見ル又合志郡亀尾村ノ石斧ヲ見ル共ニ出處明カニシテ參考ノ資トナレリ余ガ今回ノ旅行ニツキテ知リ得タル人類學上ノ知識ハ第一當國石器時代ノ遺跡散布ノ概略ニシテ此遺跡ハ多ク大野ト名クル地ニ於テ發見シ得タルコト而シテ此遺跡中ニハ貝塚アル事又石器ノ如キ遺物ノミ發見スル場所アル事ナリコヽニ記セル貝塚ハ本邦ノ本土及ビ北海道ニアルモノト同クシテ同人種ノ手ニナリシモノト考フルヲ得ルナリ

次ハ石器時代ノ遺物ニツキテ啓發スル事多シ特ニ石斧ヲ熟視スレバ製法ノ麁ナルモノ十分ノ八九ニ居ル之ヲ北海道青森縣ノ地方ヨリ出ルモノニ比スレバ製法未ダ進マズ磨リ截リテ造リ石斧ノ如キハ見ザルナリ從テ側面ヲ磨キシモノ或ハ截リ目ノ痕アルモノヲ認メザルナリコレ製法ノ拙ニシテ一個ヅヽ自然ノ石ヲ持チ來リ一個ヅヽ石斧ヲ造リシヤ知ルベシ余ガ筑後ニ於テ採集セシ石斧及ビ實見セシモノニ同ジコレ本邦新石器時代ニ進ム前ニアリシモノト考フヲ得ベキナリ（本邦新石器時代ニ属スル遺物ハ東洋學藝雑誌九十七號ニ出セリ）精ク言ハヾ肥後ノ石斧ハ本邦石器時代ノ中ニ於テ特ニ北部ノ遺物ヨリハ製造使用サレシ時期ノ舊キヲ見ルナリ次ニ貝塚土器ヲ見ルニ其製法ハ青森縣下ヨリ發見セル精製ノ土器ニ比スレバ肥後ノ精製土器ト認ムベキモノハ麁ナルヲ知ルナリ模様中縄紋ハ本邦諸處ヨリ發見スルモノト肥後ニ於テ發見スルモノト形ニ大小アルノミニシテ異ナルナキナリ然レドモ模様中或ルモノハ一種他地方ト異ナル點アルヲ見ルナリ恰モ青森縣下ノ貝塚土器ニ一種ノ趣ヲ存スルガ如シ（此事ハ陸奥ノ貝塚土器數多ヲ實見セシモノハ容易ニ解スル處ナリ）

之ヲ要スルニ石器土器ヲ比較シ其製法ノ術ニツキ其進歩ノ度ヲ視レバ本邦石器時代中肥後國ハ本邦北部特ニ陸奥地方ニ於ケルヨリモ早ク人類ノ棲息セシヲ知ルベキ也

附言從來本邦石器時代ノ事跡ニツキテハ本邦西部ヲ研究セシモノ少シ實ニ遺憾ノ至リナリ北部ハ多ク石器時代ノ遺物ヲ發見スルガ故ニ属世人ノ注意ヲ促セリ之ニ反シテ西部ハ遺物ヲ發見スル事少キガ故ニ世人ノ注意モ薄カリシ然レドモ充分捜索セバ尚數多アルヲ見ルナリ而シテ北部ノ遺物ト比較セバ互ニ有益ナル說明ヲ得ベシ舊東京大學教授モール氏ハ夙ニ肥後ニ至リ大野村ノ貝塚ヲ研究シ石器土器人骨ヲ得シガ（此採集品ハ理科大學人類學室ニアリ）報告ヲ世ニ公ニナリシヲ聞カザルハ遺憾ナリ

コレ今日迄肥後ニ於ケル石器時代ノ有樣ヲ充分知ル能ハザリシ一原因ナリ又其當時ニ於テハ本邦西部ニ此大野村ノ貝塚ノミ知ラレシガ故ニ本邦西部ニ於ケル石器時代ノ有樣ヲ知ル能ハザリシ原因トモナレリ

理學士坪井正五郎君ハ明治二十一年冬豊前ニ至リ會員小川敬義氏ト共ニ筑前鞍手郡木月村ノ貝塚ヲ發掘シ土器獸骨ヲ採集シヌ骨子此地ヨリ出シト云フ石斧一個ヲ携ヘ歸ヘラレタリ又會員寺石正路氏ハ廿二年夏前ニ記セル肥後字士郡岩古層村ノ貝塚ニ至リ筑前鞍手郡木月村貝塚ニモ至リ新ニ鞍手郡楠橋村ノ貝塚ヲモ發掘サレタリ此ノ如ク會員諸君ノ西部地方ノ遺跡ニ注意アルニモカヽワラズ其報告ノ雑誌上ニ現ハレサルハ遺憾ナリト云フヘシ因テ余ハ更ニ坪井寺石ノ兩君ニ其報告ヲ寄贈サレン事ヲ希望シ又余ガ缺ヲ補ハレン事ヲ請フ大島町ノ貝塚ハ地學會員鈴木敏氏ノ報ニヨル此處ヨリ得タル貝塚土器ハ理科大學ヘ寄附サレタリ

（『東京人類学会雑誌』第5巻第49号，東京人類学会，1890年）

2　曾畑式土器文化に関する一考察

杉村　彰一

プロローグ

縄文文化早期初頭の土器群としては，関東地方の南部，東京周辺から三浦半島方面，東京湾の西部に分布する撚糸文土器群がある。

早期縄文式土器について次のような編年がなされている。撚糸文土器群の次に無文土器群→沈線文土器群→条痕文土器群と変移する。

それでは関東地方以外の地域ではどうかというと，撚糸文土器群に並行するのではないかと考えられるものに，中部地方の一部にかけて分布する押捺文土器群が知られつつある。撚糸文土器群の終りに近い頃か，或は無文土器群になってから，北関東，中部地方から西にかけて押型文土器群があらわれる。

関東地方の無文土器群の終末になって，北海道，東北地方，関東地方の大部分にかけて沈線文や貝殻文をもった一群の土器があらわれる。

これらは早期初頭にかけてあらわれる土器群であるが，それらとは異なった土器群が九州の西部に分布する。曾畑式土器がそれである。曾畑式土器が縄文文化の成立にどのように関与しているのか，或はないのか，この問題を解決するのが，私の論文のねらいの一つでもある。

私が九州地方の縄文文化に位置する曾畑式土器を取り扱うことにしたのは，次の点からである。それは曾畑式土器文化の内容がいまだ明瞭にされていないことである。

残念ながら曾畑式土器が学術調査によって発掘された例は数少ない。学術調査によって層位を確認し，層の移り変りにしたがって各層に含まれる曾畑式土器の変移が見出せれば一等資料としてつかえるだろう。

そのように恵まれた例は少ないので現存する資料を様式によって分類し，合理的な解釈をこゝろみようと思う。

一型式について次のような理解のしかたがある[1]。『一型式aはある限られた地域で，限られた時間につくられた土器の組合せをいう。その型式aはそこで生まれ，土器を作り，用い死んだところの人間の集団を意味すると解する事が出来る。考古学的遺物を人間の歴史的遺品として把握するための最小の単元が「型式」であると。』型式の解釈を以上のようにすると曾畑式土器は再検討しなければならない。

歴史上の発展について次のことがらがありうる。一地域の文化のある時期に他の高度の文化が伝えられその内乱を通じて既存の文化が中枢部において粉砕され，それにとってかわって内乱を指導した人々の文化が新しく樹立されることもあろう。また，内乱にもかゝわらず既存の文化はその本質をかえることなくたゞ内乱を通じて既存の文化が修正されるか，あるいは再新されるか，また，崩壊への転期となるかである。それから内乱もなくそれ自体の内的な変化や発展がありうる訳である。以上のことがらが曾畑式土器文化の研究を通していえるかどうか。

九州の考古学者のなかには九州では縄文文化後期頃まで，押型文土器が存在すると考えておられたが，最近になってそうでないことが明らかにされた。私はこの押型文土器については全国的な押型文土器のあり方より考えて慎重に検討してゆく。曾畑式土器と押型文土器との関係については，学術調査に於て両者の関係が層位的に把握された資料に重点を置いて論を進める。

曾畑式土器と大陸に分布する櫛目文土器（カムケラミーク）については，多くの学者は両者の文様，

胎土その他の類似から速断に結びつけて考えられているようであるが，私は曾畑式土器文化のあり方を早く明らかにするのが急務と考える。

1　曾畑式土器の形態

一般に曾畑式土器と呼ばれているのは，次のようなものである。熊本県宇土郡宇土町曾畑貝塚から出土した深鉢形丸底土器を標式として曾畑式が設定された。細型刻文又は細直細文土器等と呼ばれる灰黒色，黄褐色を呈するもので比較的薄手のものが多く胎土に滑石粉末混入のものが多い。繊細な篦状の施文具で平行刻線，刺突文，連点文，平行沈線，三角形細線文（鋸歯文），羽状文等幾何学的文様をほどこした土器である。

曾畑式土器は九州地方に限って出土するもので，西北部から南部（福岡県，佐賀県，長崎県，熊本県，鹿児島県）にその分布をみる。

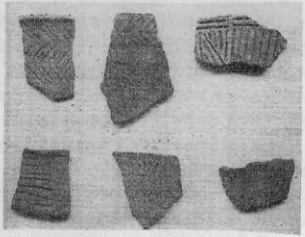
曾畑式土器の出土例は約60ヶ所を数え，特に熊本県下の出土例は30余ヶ所にのぼる。曾畑式土器が学術調査によって得られた例は少ないので，現存する資料を様式によって分類することにした。

第一類は佐賀県唐津市西唐津海底から発見された曾畑式土器[2]をタイプとするものである。すべて破片であるから復元困難であるが，知りうることは次のようである。

口辺部，胴部に施される文様の組合せには規則的なものがある。口辺部は直口するものと外反するものとがあって，外反する口辺部が数を上まわる。口唇上面に刻み目がある場合は口辺部が外反するのに多い。内面に文様がある場合は外面の第一文様帯が施される。例えば外面の第一文様帯が横の平行沈線文であれば内面の文様は横の平行沈線文であるわけである。縦の平行沈線のみで文様帯を構成することはない。二本単位の鋸歯文（三角文）が施される場合それは横の沈線の上に施文されている。まれに一本単位の鋸歯文が横の沈線の上に施される場合がある。鋸歯文が文様帯を占める場合は一本単位で，鋸歯文の他の部分は斜の沈線でうずめている。鋸歯文は口辺部に限られる。刺突文（連点文に近い）が施される場合は主に口唇直下に施されている。

頸部にある場合は必ず口唇直下にも刺突文（連点文）がある。いわゆる刺突文（連点文）が口辺部になくて他の部分に施文されることはないのである。口辺部に施される最初の綾杉文は左開きであって胴部以下に施される場合，最初の綾杉文は右開きである。

1．佐賀県唐津海底発見（松岡氏蔵）



2．熊本県曽畑貝塚出土（熊本市博物館蔵）

底部は平底に近い丸底と，丸底がある。前者の文様はいわゆる蜘蛛巣状を呈し，後者の場合は横の沈線である。

おそらく器面全体に文様が施され，全ての土器中に滑石粉末を含み，篦状の工具で施文したものといえる。しかも施文具は篦状のもの一種類と考えられる。唐津海底出土の曾畑式土器をいくつかに分類する必要はないと考える。唐津海底出土の中に大陸に分布を示す櫛目文土器とまったく同一の土器が5，6片ある。

第二類とするのは，熊本県宇土郡宇土市曾畑貝塚出土の曾畑式土器[3]である。形態はわずかに口唇部の肥厚したものがあり口辺部のやゝ外反するものと，直口するものと二種で胴部は弯曲しない深鉢である。底部は丸底と平底がある。文様は篦状の先端で平行する沈線を横縦斜に組み合せたものと，竹管先端で施文した連点文，刺突文等である。口辺部の上面から胴部の下面まで文様が施される。わずかながら地文に条痕を残し，意匠文として曾畑式土器の特徴である幾何学的文様が施される。曾畑貝塚から出土した曾畑式土器に胎土に滑石粉末の混入しているものと，そうでないものがあるがいずれも文様上の相異は見出せない。

外面の文様はやはり第一類と同じく組み合せには規則的なものがある。内面の文様について述べると，外面の第一文様が内側の文様と同一なもの。外面の文様は横走する沈線に斜の沈線が加わった文様で，内面は横走する沈線であるもの，また，外面の文様は横走する沈線で内面は横の沈線に斜の沈線の加わったもの。その次に外面の文様と内面の文様が違ったもの等である。

第三類とするのは鹿児島県大口市山野日勝山出土の曾畑式土器[4]である。採集された土器片はいずれも小破片であって復元困難である。詳細に検討するとおそらく平坦な垂直線をなし胴部はやゝ張って底部は丸底を呈する鉢形の土器であったと思われる。文様は横縦斜の沈線を組み合せたもの，連点文，刺突文，曲線文等に大別される。これらの文様が相互に組み合さって文様効果を上げている。曲線文が多量に出てくるのは日勝山の特色である。連点文及び刺突文は主として口辺部近くに横位二列及び三列に施されており口辺部の文様を構成している。この種の施文方法はおそらく篦状の先端等を使用して刺突されたものと思われるが，一部植物の茎を横断し，その篦状の横断面を押圧して施文したと思われるのがある。

2　曾畑式土器の編年的位置

曾畑式土器の編年的位置を考えるにあたって押型文土器，貝殻条痕文土器等について述べてみる。

昭和33年，4年に佐賀県小城郡東分竜王遺跡[5]が調査され次のような層位が確認された。だいたい5層から成りたっていた。第1層の耕土は淡灰黒色土で遺物はほとんど見られない。第2層は主に御領式を出す層で，第3層は主に阿高式が出土し数片轟式も出土している。第4層は曾畑式の出土の層で同層の下位から押型文土器（楕円文で器壁は厚く，楕円文は比較的大きい）が数片出土している。最下層の基盤は帯黄褐色砂層であった。

昭和34年10月江坂輝彌氏等が熊本県曾畑貝塚を調査されて次のような成果をおさめられた。貝塚は6層からなっていて第1層は15～20センチメートルで無遺物層であった。第2層は5～10センチメートルの厚さで第1貝層と呼んでいる。土器は鐘崎式に近い土器片，市来式に近い文様をもつ土器が出土した。これらの形式の土器は第1貝層（第2層）直下の第3層の上面からも発見されている。第3層は小石を混えた黒褐色土層であった。第4層（第2貝層）は少々小石を混えて厚さは30～45センチメートル前後

南部九州縄文時代編年表

早期	押型文文化	
	轟下層	
	曾畑	石坂
	沖の原	
前期	日木山	
	轟上層	石坂
		手向山

であった。第５層は褐色土層で40～50センチメートルの層である。第６層は紅灰色で小石を混えた粘土の基盤であった。

第３層下部から第４層（第２貝層）と第５層上面にわたって曾畑式土器が多量に出土した。第５層の上半分からは，表裏に篦状で施文した結果出来た細隆起線の土器が出土した。第５層には曾畑式土器，貝殻条痕文土器，押型文土器が出土したのである。この押型文土器は平底で円筒形をした深鉢であろうと思われる。阿高式土器の出土はなかった。曾畑貝塚に於ては押型文土器は曾畑の層より下層より出土したのである。押型文土器自体は新しく熊本市カブト山出土の押型文と同時期と思われる。

佐賀県多久市西多久板屋綿打遺跡[6]では曾畑式土器出土の層より下層から押型文土器の出土があった。福岡県小倉市平尾台御花畑[7]では曾畑式土器がやはり押型文土器より上層から出土している。

以上数カ所の例をあげてみたが，曾畑式土器は押型文土器文化の後に位置すると思われる。

貝殻条痕文土器の出土は九州全土にわたっている。曾畑式土器が出土するところはだいたいに於て貝殻条痕文土器の出土がある。唐津海底，竜王遺跡，長崎県平戸，福岡県沖の島，曾畑貝塚，日勝山遺跡，鹿児島県手向山遺跡，熊本県轟貝塚，同沖の原貝塚。

同じ貝殻条痕文土器と云っても特に九州南部に分布を示す吉田式は貝殻腹縁文で，石坂式と云われる土器は口辺部の文様は貝殻腹縁文で胴部は貝殻条痕文の土器である。

曾畑式土器はこの貝殻条痕文である石坂式，吉田式と同一層から発見された事はない。

昭和33年７月熊本県宇土市宇土町宮之庄轟貝塚を調査された松本雅明熊大教授は次のような事を報告された。比較的原状を保っていた層については６層からなっており第１層は貝の細片を交えた表土。第２層はカキを主とした純貝層であり，第３層は混土貝層。第４層はアカガイを主とした純貝層であり，第５層は黒土層，第６層は黄土層（基盤）であった。各層から出土する土器をあげると第２層から阿高式，第３層の下半部から轟式と云われるものが出土した。同層から出土した轟式土器は地文に貝殻腹縁文を有しその上に土をはりつけた云わゆるミミズばれの土器であった。第４層からは貝殻や篦状の先端で突いて出来た連点文，爪形文の土器が出土した。第５層出土の土器は第４層とほぼ同一土器であった。

轟貝塚に於て轟式土器を分類することは出来なかったが，たゞ傾向として云えることは轟式を包含する層で上半部から，地文に貝殻条痕を持ちその上に指で土をはりつけて大きな強いすじをつけ，そのミミズばれの大きな文様を示す轟式土器が出土したこと。その下半部から曾畑式土器と，平行する沈線を主体とするがその間にアルカ属の貝殻口唇を押捺した文様を配した土器が出土した。これより下層に土器がごく柔らかい時貝殻の先端や篦の先で表裏を引きかき，ミミズばれが出来たもの。この文様をもつ尖底土器２個が出土した[8]。

轟貝塚においては，最下層の貝殻条痕文土器が出土する上層に曾畑式土器と，曾畑式土器の伝統と考えられる土器が存在した事実は認めなくてはならない。伝統の残る土器については後述する。

昭和34年８月熊本県天草郡五和町沖の原貝塚の調査[9]が行われた。沖の原貝塚は５層からなっており最下層から曾畑式土器数片，轟貝塚において曾畑式土器と同一層から出土したところの平行する沈線を主体とするがその間にアルカ属の貝殻口唇を押捺した文様を配した土器が，沖の原貝塚に於ても出土した。貝殻腹縁で押捺した土器（この土器と類似したものは鹿児島県日木山遺跡から出土している）と地文に貝殻文を施文しその上に隆起文を配したミミズばれ土器，いわゆる轟式が出土した。最下層からは

大きく分けて曾畑式土器片と曾畑式土器の伝統の残るところの地文に貝殻条痕を施し，平行沈線のある土器とそれに貝殻腹縁文土器が同一層から出土したことである。轟貝塚でも曾畑式土器数片と，曾畑式土器の伝統の残る土器は同一層から出土した。轟貝塚でも沖の原貝塚でも曾畑式土器と曾畑式土器の伝統の残る土器は同一層から出土し，しかも曾畑式土器よりも曾畑式土器の伝統の残る土器が数に於て圧倒的に多かった。轟貝塚に於ては曾畑式土器の伝統の残る土器の出土する上層からミミズばれの轟式が出土した。沖の原貝塚に於ては同層からミミズばれの轟式と曾畑式土器，曾畑式土器の伝統の残る土器，それに日木山式土器に類似する貝殻腹縁文土器が出土し，いわゆる日木山式的なものが他の土器よりも圧倒的に多く出土した。轟貝塚と沖の原貝塚の両貝塚に於ていえることは曾畑式土器の伝統の残るのは貝殻腹縁文土器であって，曾畑式土器の要素であった沈線は時とともに貝殻腹縁文に圧倒され消えていく。曾畑式土器の伝統の残る土器文化について一型式もうけていゝかどうかわからないが，私は沖の原文化期と呼んだらどうかと考えている。この沖の原文化こそ日木山式土器文化につながりミミズばれの土器つまり轟式文化を産み出す基調が芽ばえていたと考える。

私は前頁のような編年をこゝろみた。

3　曾畑式土器文化の様相

九州西部に限って分布を示す曾畑式土器文化は縄文時代早期末に比定されるべきものであった。曾畑式土器文化は押型文土器文化，貝殻条痕文土器の後に位置する文化であった。曾畑式土器文化は押型文土器文化，貝殻条痕文土器文化から自然的な形で発生したものではなく九州に於て押型文文化が終り，貝殻条痕文土器文化にはいり一部の地域でその発展を呈しようとした時に，曾畑式土器文化は外来したものと思われる。

曾畑式土器の由来を日本内に求めることは困難である。私は朝鮮全土に分布を示す櫛目文土器に曾畑式土器の粗形を求めるものである。櫛目文土器と曾畑式土器との文様は完全に一致するものではない。南鮮の櫛目文土器人が島づたいに九州にやって来て，その文化を伝えたのであろう。貝殻条痕文土器人に外来者の櫛目文土器人は，篦状の施文具によって施される幾何学的文様を地文に篦状の施文具で引きかいて出来る条痕を伝えたのであった。唐津海底出土の遺物はこのような状態をよく表わしたものと理解される。貝殻条痕文土器人が櫛目文土器人の真似をして作った土器がいわゆる唐津海底出土の曾畑式土器であろう。内面に篦状で引きかいた擦痕文と貝殻条痕文があり外面に幾何学的文様を施した土器がこれである。これを仮に曾畑の第１期と呼ぼう。唐津海底出土の曾畑式土器が１本の篦状のものであるのに対して櫛目文土器は櫛状の数本のもので施文されている。将来に於て唐津海底出土の曾畑式土器よりも一段階櫛目文土器に近い土器が発見されるかも知れない。

朝鮮から伝えられた櫛目文土器[10]を自分のものに消化したのがいわゆる曾畑貝塚出土の曾畑式土器に代表される土器ではないだろうか。これを第２期としよう。第２期の文化はかなり曾畑期の中でも広範囲にわたっている。

曾畑式土器の特長的文様であつた幾何学的文様が乱れ曲線化し曾畑文化期も下り坂をむかえる時期が日勝山にみられる土器ではないだろうか。これを第３期と呼ぶ。

第１期から第３期までを曾畑式土器文化期とする。この曾畑文化期は時間的にかなり短い時期であったのではなかろうか。それは貝殻条痕文文化期と貝殻腹縁文文化期の間に位置した事からもいえる。押型文文化期が終りを告げ，貝殻条痕文土器文化期になった直後に曾畑式土器文化が存在したと解した方

が合理的であるように思う。貝殻条痕文土器，貝殻腹縁文土器，ミミズばれの轟式等が強い関係にある以上ある地方では曾畑式土器文化期になってからもこれら広義の貝殻文土器文化は何らかの形で脈々と続いていたのかも知れない。すると曾畑式土器文化期と並行して存在したと思われる貝殻文土器文化は何であろうか。鹿児島県下から出土する石坂式土器文化ではないかと思っている。曾畑式土器と一緒に石坂式土器が出土しないことは並行関係を示すものかも知れない。九州も縄文時代前期初頭になって日本の縄文文化のあり方と歩調を合せて横の連絡をしながら発展するのである。

曾畑式土器文様の発展をみるとまず鹿児島県大口市，熊本県人吉市に分布する手向山[11]式がある。手向山式土器文様構成をみると，押型文，縄文，撚糸文，条痕文，轟式，曾畑式土器の各土器文様を踏襲している。手向山式土器の分布は前述の大口市，人吉市つまり盆地状の所に分布するのである。

他に曾畑式土器文様の伝統は阿高式土器とよく云われるが曾畑式土器文化と阿高式土器文化との時間的間隔が大きい。

曾畑式土器文化は縄文早期に於て全国的な変移を示す撚糸文土器群，押型文土器群，沈線文土器群，貝殻条痕文土器群という文化の推移の型として生まれたのではなく，本来外来文化であったのである。

しかしその文化は九州全土に広まることなく，九州の西北部から南部にかけて一時期他の文化を圧してしまうのである。だが全国的な力でおしよせて来る広義の貝殻条痕文土器文化に吸収されてしまい，影をひそめてしまうのである。

本来ならば外来文化は既存の文化を指導する例が多いように思えるけれども，曾畑式土器文化については，伝える側の立場と受入れる立場とが一致していなかったと云えるのではないかと思う。

曾畑式土器文化期内に於て内的な変化はあったが，九州の縄文文化の発展に影響したかどうかの判断については現在のところ何とも云えない。

註

（1）芹沢長介氏。

（2）図版１松岡史氏所蔵。

（3）図版２熊本市博物館蔵。

（4）木村幹夫氏「薩摩国伊佐郡日勝山土器について」考古学７－９　昭和11年。

（5）「佐賀県小城郡三日月村大字東分竜王遺跡について」教育佐賀　昭和33年。

（6）松岡史氏教示。

（7）隈昭志教示。

（8）その後，松本雅明・富樫卯三郎氏「轟式土器の編年―熊本県宇土市轟貝塚調査報告―」考古学雑誌　第47巻第３号　昭和36年12月　が発表された。そこではミミズばれの縄痕文を曾畑式より古いとされているが，本稿においては充分利用できなかった。

（9）乙益重隆氏，坂本経堯氏，田辺哲夫氏，調査（未報告）。私の卒論のために特に許しを得た。

（10）藤田亮策氏「朝鮮考古学研究」昭和23年。

（11）賀川光夫氏　日本考古学講座３昭和31年。

（『熊本史学』第23号，熊本史学会，1962年）

3　肥後国宇土郡花園村大字岩古曾字曾畑貝塚

清野　謙次

第1章　曾畑貝塚研究記録の考古学上に特に重要なる理由

ソバタ貝塚は曾畑田と書くのが正しいらしいが，諸報告には曾畑と書いてある。曾畑でソバタと発音出来るから私も曾畑と書くこととした。

曾畑貝塚は石器時代土器研究者によつて細形刻紋または細直線紋と呼ばるる特色ある紋様の土器を出すので九州に於ける有名な貝塚である。殊にこの紋様が朝鮮の石器時代土器の或る種類と至大な関係があるし，また琉球の石器時代土器と関係が深いので，考古学者によつて大いに注意せられた。

ところがこの貝塚は今日全滅に近い姿となつてしまつた。後述の如く，私はまさに開墾せられようとする直前にこの貝塚を発掘して数100片の土器片を採集し得た。そしてまだ残地があるので貝塚はこの残地にも残存すると思つて居つた。後年，九州の石器時代土器研究家小林久雄氏に面談した所が，貝塚の残地は殆んどなく，土器の小片を少数採集し得たのみであつて，私の採集し得たる如き大破片はもはや見当らないと聞いてびつくりした次第であつた。

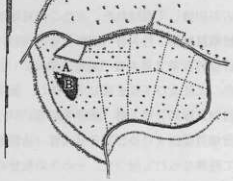
それだから私の蒐集が曾畑貝塚最大の遺品であつて，この蒐集に基づける記載が曾畑貝塚発掘の最も精細なものだといへる。それで以下の記載は簡単ではあるが，考古学の資料として重要である。

第2章　発掘の概要と人骨の出土状態

大正11年3月に，私は別記の如く（第1部第4篇）肥後国当尾村大野貝塚を発掘した後に，その発掘品を荷造した。それが了つてから熊本県史蹟調査委員であつた所の古賀精義氏に案内せられて，麗らかな春光を満身に浴びつつ人力車上にゆられながら北方里余を隔つる曾畑貝塚に着いた。

曾畑貝塚は轟貝塚（第1部第2篇）と阿高貝塚との中間部に位置する。貝塚から南方には山をめぐらし，西から北にかけては遠く肥後の水田平野がひらけて居る。この貝塚は僅かに高まつた丘の上に在つて，その大部分は桑畑になつて居る。ただ貝塚西南端の一番低い所は，私の訪れた当時には土採りの作業中であつたから，荒らされて居つた。

貝塚のこの部分の地主は曾畑の人で木村定次郎氏といつた。私等は同氏を訪うて来意を告げ，再び貝塚へ行つた。木村氏の話では自分の所有地の一部に貝塚があつて，地味が悪いから貝殻と土壌とを運び去つて低い水田にする筈で，目下土工に着手中だといふ。目下残つて居る所は水田上約3尺高い畑地（第1図のB）30坪ばかりの所であつた。この部の断層を検査すると2尺内外の厚さの貝層が見える。地つづきの既に土取りしたAの部分から人骨が出たといふ。人骨の1片を棄てたといふ場所を捜した所が人骨片が出た。それはまぎれもない石器時代人大腿骨の特長を具へて居たから，私はこの残部すなはち図のB部位を発掘すべく決心した。しかるに遺憾ながらこれは当時突然に出遭した事件であつて，さらに引続い



第1図　曾畑貝塚付近地形図

てこの地に滞在する余日がなかつたので，他日再び発掘の目的で来訪することとして，その時までは残部に手を附けないこととし，従つてまた水田を作れない間の損害は私が負担する約束が成立して，一まづ私は京都へ引き上げることとした。

木村氏と話して居る内に，私はこの人と若干の因縁に結ばれて居る間柄であるのを知つた。私が大正9年に轟貝塚と阿高貝塚とを発掘した時に，同地方の住民から明治初年にこの両貝塚の貝殻を採つて石灰に焼いた人があつたと聞いた。そして轟貝塚の人骨の多く出る部分はこの時に失はれたといふ話であつた。ところがこの木村氏がこの貝殻焼きの当人であるのを知つてびつくりした。すなはち木村氏は当初この曾畑貝塚の貝殻を焼いて居たのであつたが，貝殻の分量が減少して来たので轟貝塚と阿高貝塚とへ出掛けたのだといふ。惜しむらくはかくの如くにして，この3大貝塚の貝殻の厚い部分は研究せらるることなく失はれて，貝層の薄い土まじりの部分だけが残つたのであつた。しかしその後に貝殻を焼いて石灰を採るのは採算上，引合はなくなつたのでこれを止めたといふ。

かくして私は曾畑貝塚から京都へ帰り，満1年後の大正12年3月2日から宮本博人君と共に曾畑貝塚の発掘に取り掛かつた。前述の如くA地点は前年発掘せられて既に水田と化して居つたがB地点は発掘の約束で残されて居た。木村氏との話では古くはA，B周囲の水田一面にも貝殻が在つたのだが上記の如く明治年間に掘下げて水田とせられたのであつた。そしてB部が大貝塚の最後の残存部であつたのを後に知つたが，発掘時には北方桑畑にも貝層が延長して居ることと思つて居た。

宮本君と私とはB地点の東北端から人夫を傭つて発掘を始めた。熊本からは古賀文学士等も来り授けられた。

3月2日は天気がよくて南地の空は暖かかつた。午前中に私は宮本君と現場に居つたが，午後には現場を宮本君に托して，古賀氏と共に下益城郡六嘉（ろつか）村貝塚を訪うた。それは拙著『日本原人の研究』(大14) 第73頁に示した如くこの貝塚からも人骨を獲たのであつた。

自動車を飛ばして3里離れた六嘉村を訪うて再び自動車で帰つて来ると，私の不在の間に宮本君は，やや完全な人骨と不完全人骨との2体（曾畑第2号及び第3号人骨）を掘出して居つた。発掘は3月3日と4日との合計3日間継続してB地域の全部を発掘し了つたが，不完全人骨をさらに3例加へ得たのに過ぎなかつた。

B地域の地層は約1尺の厚さの表土の下に厚さ1尺から2尺5寸の黒土まじりの貝層がある。人骨は貝層の下部に存在するが浅いので保存状態は不良であつた。貝殻は海産でカキ，ハマグリ，サルボウ，アカガヒ，ニシ，アカニシ等から成つて居た。石器若干のほかに，後述の如く，特色ある土器片が多かつた。なほB地域のほぼ中央部から重なり合つて，後掲の如く，40個近くのハマグリの殻に穴をあけたものが相接して現はれた。またこの貝塚から出土した6例の人骨に就て記載すると次の如くである。

曾畑貝塚第1号人骨（清野蒐集第199号）　第1回採訪時にA地点から偶然出土して居た人骨破片。

曾畑貝塚第2号人骨（清野蒐集第571号）　かなり完全な人骨で地下2尺5寸，貝層下部から発見せられた。上肢及び下肢を屈して仰臥し，頭位は東北にあり。

曾畑貝塚第3号人骨（清野蒐集第552号）　保存状態極めて不良なる人骨片。

曾畑貝塚第4号及び第5号人骨（清野蒐集第553号及び第554号）　保存状態不良。両人骨は極めて近接して埋葬せられて居つた。そのため肢骨の一部分は相混じた。両人骨共に仰臥屈葬，頭は東北にあつた。

曾畑貝塚第6号人骨（清野蒐集第579号）　保存不良。仰臥屈葬。頭は北にあり。

第3章　文献的記載

曾畑貝塚を学界に初めて紹介した人は若林勝邦氏であつて『東京人類学会雑誌』第5巻第49号（明23）にこれを記載した。同氏は曾畑貝塚から石斧のほかに土器片を採集し，その土器紋様として「刻み目の並行あり，斜線の交叉あり，表裏に画ける斜線あり，縄文を印せるあり」と記してある。これで見ても明らかな通り，若林氏はこの貝塚から数多く発見される代表的紋様たる細形刻紋に着目したと同時に，縄紋ある土器片も交つて居ることを記して居るのだ。

その後に寺石正路氏は『東京人類学会雑誌』第5巻第53号（明23）に曾畑貝塚に就て簡単に，この貝塚から半磨製石斧と縄紋土器片を出す由を記して居る。

大正7年に至つて中山平次郎氏は『考古学雑誌』第8巻第5号に「肥後国宇土郡花園村岩古層字曾畑貝塚の土器」といふ一文を掲げた。これは中山氏がこの貝塚の表面採集によつて獲られた土器片を基礎として，この貝塚の土器紋様を論じたものである。土器の大部分は後年の細形刻紋土器と呼ばれるものであつたが，少数の異なつた紋様ある土器片を出す由を述べて拓本を図示してある。それは阿高貝塚に多く見る所の太い凹線を使用しての曲線紋土器片（太形凹紋といはれるもの），磨消縄紋，隆線で画いた直線及び曲線紋様である。

以上の3報告が私の曾畑発掘以前に現はれたものであつた。その後，昭和14年8月に至つて『人類学先史学講座』第11巻に小林久雄氏の「九州の縄文土器」がある。これは曾畑貝塚の発掘報告ではない。九州の先史時代土器論の一部分として曾畑貝塚に多い細形刻紋土器に就て論じてある。

こんな次第だから曾畑貝塚で初めから問題になつて居るのは特色ある細形刻紋土器であつて，石器は一向問題にならない。それは石器が1個2個の少数しか出なかつたからである。ところが後年土器の破片は多数発見せられたのみならず，細形刻紋の類例が朝鮮から発見せられたのみならず，琉球の先史時代土器にも類例があるのでこの貝塚土器は考古学者の特に注意する所となつた。

こんな次第なので南鮮から北鮮に亘つて出土する所の細形刻紋の類品に就て手近にある文献から記述する。

昭和10年に斉藤忠氏が『考古学雑誌』第25巻第6号（昭10）に「慶尚南道蔚山郡西生面出土の櫛目文土片」として図示して居るし，山本博氏は「西日本の弥生式問題」（『考古学雑誌』第25巻第12号，昭和10）中に，慶尚南道牧之島，平安南道竜岡郡海雲面，咸鏡北道城津郡津面，同慶興郡雄基面，京畿道慶州郡九川面，同江華郡下道面から発掘せられた同種土器を図示して居る。後藤守一氏も，『東洋考古学』（昭9）の中の「日本考古学」部第483頁以下に櫛目紋土器の綜合的記述を行つて居るし，藤田亮策氏にもこの種朝鮮発見類似土器に就ての記述がある。

第4章　発掘遺物

1　馬歯

自然遺物中で特に記して置かねばならないのは，曾畑貝塚から1個の馬臼歯（長1寸9分）を発掘したことであつて，馬がこの時代に既に飼養せられて居たのが分る。

2　貝輪

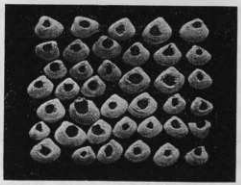
発掘の概要で記述した如く，B地域の中央部に近い小区域に図に示せる如く多数の貝輪が発見せられたが，その中の約3分の2，39個の貝輪を図に示した。その中のただ1個だけが図に示す如くアカガヒ製の貝輪で，その他はハマグリの大形のものである。このアカガヒ貝輪の大きさは3.2×1.8寸で，孔は

2.0×0.8寸の大さに穿たれて居る。ハマグリの穴もアカガヒの穴も極めて粗末に穿たれて居つて，穴の周囲は単に打ち欠いただけで毫もすり込んでいない。また貝殻の表裏共に研いだ跡がない。

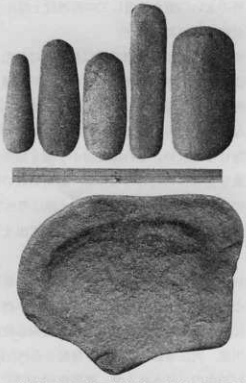
この多数の貝輪の出た辺には貝塚の貝層は切れて居つた。そしてこの貝輪群の穴の中へ1本の紐が通してあつて，古くこれを連ねて居たが，紐は腐つて消失したと思つても差支へない位置で発見せられた。

アカガヒ製の腕輪は石器時代人骨の前膊部にはめ込まれたまま発見せられたが，それは通常精巧な貝輪であつた。穴の縁部もすり磨かれて居つたし，貝殻の表裏面も平滑に研磨されて居つた。ただしここに見る程度に近いアカガヒ製貝輪であつても，腕輪たり得るのであつて，曾畑貝塚に近い轟貝塚の人骨はこの程度に近い粗製貝輪を佩用して居つた。それは京大考古学教室から報告した私の「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告」（『京大考古学研究報告』第5冊，大9）に記しておいた。

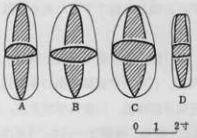
しかしこの場合にはアカガヒ製貝輪はハマグリ製貝輪と一所になつて居る。ハマグリ製貝輪が腕輪に使用せられた例はまだないし，またこの39個の貝輪の穴には腕輪に使用し得ない程小形の穴もある。そ



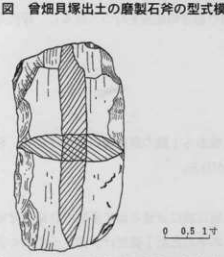
第2図　曾畑貝塚の一区より発掘の粗製貝輪写真



第3図　曾畑貝塚出土の石杵，石皿写真



第4図　曾畑貝塚出土の磨製石斧の型式横式図



第5図　曾畑貝塚出土の打製石斧実測図

第6図　曾畑貝塚出土石庖丁使用法想定図

れでこの貝輪は多分腕輪用のものでない。従つてこの貝輪群は腕輪たる目的で作られたものでない。他の目的の用品であるが穴に紐を通じて装飾用に使つたものやら，或いは他日夫々必要な目的に使用するために紐を通じて保存したものやら分らない。しかし珍しい所見として注意すべきである。

かつて大野雲外氏は三河貝塚から出土した多数の貝輪に種々の大きさの穴を穿つたものを並べ写したことがあつた。それはここに写したものとは異なつて一小局所から発見せられたものではなく，貝塚の各所から発見せられたものであつたが，これを穴の大きさに順じて並べて，まづ小さな穴を穿つて後に次第にこの穴を拡大して貝製腕輪に見る如き大穴ある貝輪にしたものだと解釈した。これに対して江見水蔭氏は，穴の小さい貝輪は貝輪の未製品のみだと考えるのは宜しくない。或る程未製品もあるだらうが，小穴を穿つたままで別の用途に使用せられた場合もあるに相違ないと考へた。水蔭氏の批難の方が尤もである。

また私達はこの貝塚をかなり広く発掘して石器は相当数出したのに拘らず，骨器角器の類を全然採集し得なかつたのは注意を要する。

3　石杵

曾畑貝塚から割合に多数の石杵を発掘したのはこの時代に既に原始農耕によつた収穫で一定度の穀食が行はれたのを示すものではあるまいか。私達は下の写真に示す合計５個の石杵を得た。その横断面は円形ないし楕円形の長形である。自然に長味を帯びた河原石を採り来つて多少の加工――側面研磨を加へて規則正しい形にした。そしてその上下端にはすり跡或は叩き跡が附いて居る。

第３図の右端の品から左端の品へと計測して見ると表の如くである。ただし重量は秤の都合上，ｇで示した。

番号	長さ	中央部直径	重さ
1	4.2寸	1.8×1.7寸	700ｇ
2	4.9	1.0×0.9	290
3	3.4	1.4×0.7	240
4	3.8	1.3×0.7	190
5	3.2	0.9×0.6	100

4　石皿

小形の品がただ１個出た。それは第３図下に示した品で関東発見石皿とは少々形式が異なつて居る。大さは5.5×4.3寸で厚さ0.5寸，重さ610ｇである。裏の凸面は美しく磨かれて居り，表の凹面には多数の小さい叩き跡を留めて居る。

5　磨製石斧

磨製石斧は11個出土したから，曾畑貝塚で多く発見出来るものだといへる。すべて両刃の石斧で多くは短冊形だから柄の部分も刃の部分もその幅が大して差がない（11個中の10個まではそれである）。ただ１個のみが柄部がやや著しく狭くなつて居る。製作法としては石斧の形状に近い自然石を採り来つてこれに多少の加工を施して石斧の形状にすり上げたものが多い。加工法の一部として自然石面に多少打撃を加へて形を整へたものもあるので，胴の一部分に打製の跡を留めて半磨製石斧といふべき形のものもある。

中央部の横断面からいふと，大体に於て４型式がある。その中のＡ型はただ１個であるが横断面半月形であつて石斧の一面は平たい。これは片刃の傾向が著るしいが，実際の片刃石斧は遂に見られない。

B型は曾畑貝塚に多い。11個中の4個がこれである。この型式は横断面レンズ型を呈するが分厚いものと薄いものとある。C型も曾畑貝塚に多く11個中の4個である。D型はC型の一部と考へてよいものだが，石斧は分厚くて細長い。のみといはるる種類であるが，朝鮮に少なくない。C型の横断面は楕円形ないし丸味のある四辺形ともいふべきものである。11個の石斧の大きさと形状とは次の如し。

番号	長さ	幅	厚さ	型式	破損の有無	重量
1	4.6寸	1.5寸	0.8寸	A	完全	235g
2	4.5	2.0	0.7	B	完全	250
3	4.0	1.5	0.5	C	完全	125
4	4.3	2.2	0.8	C	完全	420
5	4.0	1.3	1.0	C	完全	230
6	5.1（以上）	1.9	1.4	D	刃部欠	640
7	3.5（以上）	0.8	0.6	D	柄部欠	100
8	2.7（以上）	2.0	0.3	B	柄部欠	130
9	3.5	1.6	0.4	B	完全	100
10	3.6	1.8	0.5	B	完全	170
11	3.7（以上）	1.7	0.6	C	刃部欠	320

6　打製石斧

打製石斧は4個出た。その1個をここに図示するが，いづれもこれに似た長方形である。用石は雲母片岩，硬砂岩のほかに黒青白色の紋をまじふる美しい蛇紋岩製のものが1個あつた。大きさは下に記す通り。

番号	長さ	幅	厚さ	重さ
1	5.1寸	2.3寸	0.6寸	340g
2	4.0	2.0	0.3	150
3	3.0	1.7	0.3	110
4	4.5	2.3	0.6	410

7　石庖丁

石庖丁といへば満鮮の石器時代遺跡から出土するスレート製磨製石庖丁を想起せしめるが，曾畑貝塚からその形式のものは発見せられなかつた。以下述べんとする3品はその用途からいつて石製庖丁といふべき品であるが類品を余り見ないものである。

第1種は使用法を想像して図示した品で淡褐灰色の硬砂岩製の磨製品である。長さ5.3寸，幅3.8寸，厚さ0.8寸の大形分厚の品で，どうもスレート製石庖丁とは余り似て居らない。どこまで関係があるかは後来の研究を要するが，大野延太郎氏「石鋸に就て」（『人類学雑誌』14-161，明32）の中にいく分これと似た品が3個ある。ただし大野氏の品は破損品ばかりであるからよく分からない。出所として大野氏の3と4は，北海道室蘭，5は武蔵国西ヶ原だといふ。

第2の石庖丁は第1の品と大分異なつた形で半磨製石斧の一種と解してよいかも知れない。淡黒色片岩製で鋭い刃が附いて居る。石斧にしては側面にも刃が附いて居つて異形だ。長7.0寸，幅2.3寸，厚さ0.6寸の大形品である。

8　土製紡錘車

黒褐色の土製品である。直径2.1寸，厚0.6寸。大形で中央部に穴がある。表面はへらでなでて平らにされて平滑だが，少し角張つた所が残つて居る。南鮮の石器時代から土製紡錘車の発見が稀でないが，曾畑貝塚からこの品を発見したことは曾畑文化と朝鮮石器時代文化とをさらに一歩近寄せたこととなる。そして曾畑住民は既述の如く原始農業を営んで居たと共に大陸式紡織を行つて居たと思ふべきである。

9　土器

土器の特色は褐色のものが多いが，時として黒色のものもある。厚さは概して薄手（2-3分）のものが多いが時として3-4分の中厚手のものもある。土質は砂を含むこと少なくして比較的堅硬，時として雲母の混入の著明なものがある。森本六爾氏はこれを滑石末の混入と解して関東の繊維土器にこれを比して居る（「滑石混入の縄紋土器」『考古学』第5巻第10号，昭9）。土器の表面は研磨せられて居るが充分でない。器物の形状は深い鉢形或は浅い鉢形に限られて居る様だ。殊に前者が多い。口径は4-7寸のもの，つまり中形土器が多い。大形破片を測つた所が，直径4寸のもの2個，5寸のもの6個，6寸のもの5個，7寸のもの7個，8寸のもの1個，9寸のもの1個あつた。

土器片には紋様のあるものが多い。そして紋様の8-9割は細形刻紋だ。縁は平縁であるが，口唇部に連続切り目を附して，きざみ縁としたものが少なくない。細形刻紋の印せられた土器は悉く平縁で波縁はなくまた把手もない。それは土器の形態図に示せる如くである。ところが，5阿高式紋様のある土器，8曲線縄紋のある（鐘ヶ崎）土器には縁瘤が造られたものもある。また，4みみず膨れ線で紋様を附せられた品の中には小把手ともいひ得べき突起が縁に附されたこともある。

紋様は土器の表面に附してある。縁に沿つて紋様帯となつて居るだけの場合もあるが，しばしば縁を越えて胴腹部にまで及んで居る。しかし底に近い所は紋様がない。

割合に多数の場合（約2-3割位）縁の内側に沿つて内紋様が附されて居る。これは当然外開き土器に多いが，直壁の口の開きの少ない土器にもこれを見ることがある（他の貝塚では内紋様は平たい皿以外には余り見ないものである）。この内紋様は列点紋，列線紋，或は両者混用の簡単なもので縁に沿つて帯状に画かれて居る。

土器の内面と外面との中間部，すなはち口唇部には，往々きざみがある。ただしきざみの幅の広さは種々である。そしてまた，ここには貝殻の圧痕紋が印せられて居ることもある。

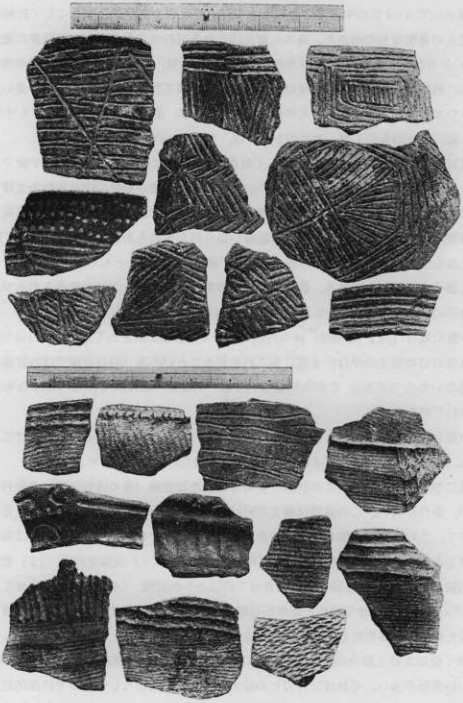
細形刻紋について考へると，この紋様の要素は点または直線（多くは短直線）の並列である。稀に曲線もあるが，曲りが弱い。この直線は棒先で附けられた沈紋だが，稀には凝爪形紋に見る様な節が附いて居る。さて，これ等要素を組合せて次の如く細形刻紋が画かれて居る。その大要は第7図写真を見ていただけば分るが，組立てられた紋様として現はれるものは（1）点線並列紋，（2）短直線或は長めの直線の並列紋，（3）短直線を斜めに並列させて羽状とした紋様，（4）直線を組合せて重複三角形に近い紋様，（5）直線を組合せて重ねた四角形紋様，（6）直線を組合せて重ねた菱形紋様とする。かくして出来上つた紋様が細形刻紋として特異な印象を生ずるのだ。

上記の如く曾畑有紋土器中の8-9割までは表面に細形刻紋が印されて居つて内面には仕上げの時に附いたらしい条痕が多い。それはアカガヒの縁部で掻いて出来たらしいもので紋様的効果を帯びさせたものではない。

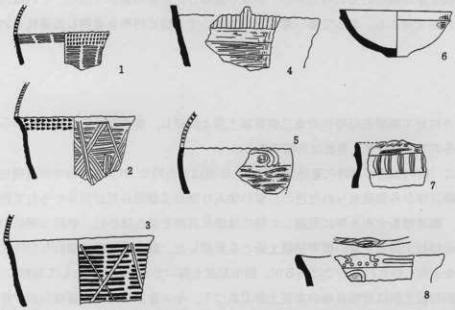
残りの数少ない紋様の内で割合に多いものは阿高式紋様（太形凹紋）といはるるもので，またこれは南福寺貝塚土器の紋様にも似て居る。ただしこれは小林久雄氏のいふ所の阿高式末期のもであつて，太

形凹紋帯が狭いものが多いのみならず紋様が簡素で瘤縁も見られる。ただしこの阿高式土器は細形刻紋土器よりも分厚に作られて居て焼きが赤い。器形は両者大差ない。またこの類は浜田，島田，小牧氏の「肥前国有喜貝塚発掘報告（下）」（『人類学雑誌』第41巻第2号，大15）では曲線絡縄紋といはれた類だが，曾畑貝塚では曲線の種類多からず，また複雑でない。

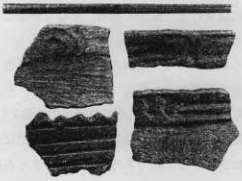
かくの如くして曾畑貝塚土器の中から細形刻紋土器を引去り，さらにまた阿高式土器を引去つた残余は極めて少数の土器片となるが，その紋様は単種類でない。それはここに轟式土器と仮に命名して写真



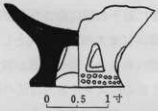
第7図　曾畑貝塚出土の土器片写真
上段　細形刻紋ある土器片（曾畑式土器）　下段　貝殻条痕紋と細隆起線紋のある土器片（轟式土器）とその他の土器片（上中央2片　中左2片）



第8図　曾畑貝塚出土の土器形態模式図（1，2，3曾畑式　4轟式　5阿高式　6，7，8鐘ヶ崎式？）



第9図　曾畑貝塚出土の阿高式土器片



第10図　曾畑貝塚出土の台附底部実測図

で示した土器片が主要なものである。便宜上これを轟式土器といふ理由は2片の縄紋の施紋された土器（轟貝塚から縄紋の施紋された土器は出なかつた）を除くのほか，写真に示した紋様の土器はすべて轟貝塚から出る。これは私等が発表した「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」（『京大考古学研究報告』第5冊，大9）を参照していただけば分るが，細隆起線紋があるし，みみず膨れに似た低い高まりの帯紋があるし，長い沈線紋もある。また前期「有喜貝塚発掘報告」で細形絡縄紋といはれたものもある。

縄紋の施紋された土器は僅かに2片出た。第7図下段の向つて上左から二つ目のもので，中左端のものである。前者はたいして特徴のない縄紋であるが，後者は曲線紋様ある磨消縄紋であつて御手洗B式或は綾村A式といはれる種類かも知れない。精巧品で朱塗の跡がある。出土した地層の深さは明瞭でないが，前文に記した如く，私等の掘つたB地域は明治年間に貝殻を採り去つた残地だから曾畑貝塚深層が主として残つて居つたものである。

最後に底部に就て注意すると土器底部は，すべて平底である。ただし精細にいへばその3分の1は底の中底部が僅かに上がつた平底である。底の直径は2寸5分のもの2個，3寸のもの4個，3寸5分のもの3個，4寸のもの6個であるから，口径が中形であつた割に底は大形であつたといへる。

平底が上記の如く15個出たほかに僅かに1つの台附の底部が出た。この土質は赤味があつて少し厚手

なので多分阿高式土器に属したものらしいが，かなり進歩した台附の底部である。それは図示するが如く三角形の透し穴が3個ある。そして細い葦の管でつついて2段に円形を並列した帯紋をめぐらして居る。

第5章　結語

曾畑貝塚は北方に於て朝鮮石器時代の東三洞貝塚土器と関係し，南方では徳之島遺跡からさらに琉球土器へと連絡するので，考古学上重要な貝塚である。

古く大正7年に「河内国府石器時代遺跡発掘報告」が現はれた時に（『京大考古学研究報告』第2冊，第54頁）肥後国轟貝塚から発見せられた所の分厚い抉入り朝鮮式磨製石斧が図示せられて居る。それで次篇に記す如く，轟貝塚を大正8年に発掘した時には玦状耳飾を得たほかに，朝鮮と関係のあるものとして大量の細隆起線紋土器と少量の細形刻紋土器とを発掘した。細隆起線紋が朝鮮石器時代土器に若干の類似あることを主張し得られるのではあるが，細形刻紋土器の方が一目瞭然として類似して居る。

しかもこの細形刻紋土器は曾畑貝塚の主要土器であつて，その曾畑貝塚は発掘報告が学界に現はれざる前に殆んど全滅した。そしてこの貝塚の最終遺物が割合に多数私の手に残つて居る。それで私はこの貝塚に就て念入りに記述して置いた。正式報告ほど図を多数挿入出来ないし，土器の紋様拓本を全部割愛したのは残念ではあるが，理解していただける程度には書けたと思つて居る。そして将来これが九州石器時代研究者に若干お役に立つならば幸いである。

さて曾畑貝塚は従来九州石器時代として古いと考へられて居つた。土器の器形が簡単なこと，土器の土質に雲母を混へること，細線刻紋が紋様として素朴なこと等を考へると一応肯定できる。それだから九州石器時代土器の研究者小林久雄氏の如きも轟式，阿高式，曾畑式を九州石器時代の前期として居る。

それは土器からの議論である。もつとも土器だけの議論であつても，私の発掘で，1片ではあるが磨消縄紋土器の出たこと，複雑な台附の底部の出たことは新しさうな話である。それからまた石杵が多く出て穀食を想起せしむること，馬歯が出ること，紡錘車の出ることも高文化，すなはち時代の下つたのを考へさせる。ただ私達のこの貝塚発掘は，地層的に深さを定めて土層を順次に上げて行つたのではないから，年代的序次を考へる上には熟考の余地があらう。しかし曾畑式土器を古いといひ切るには未だ後の研究を必要とする。

また曾畑貝塚に共存する阿高式土器から考へると阿高後期のものだと思へないこともない。ただし細線刻紋と阿高式紋様との間には曾畑貝塚で中間紋様或は移行紋様は見当らない様である。

（『日本貝塚の研究』岩波書店，1969年）

付 編 3

曽畑貝塚及び曽畑式土器（文化）に関する文献一覧

曽畑貝塚及び曽畑式土器（文化）に関する主な論文，報告

No.	著者名	発行年	表題	収録誌巻号	発行所
1	若林勝邦	1887	「九州に於ける石器時代遺跡遺物の梗概」	『考古学会雑誌』1-10	考古学会
2	若林勝邦	1890	「肥後旅行談」	『東京人類学雑誌』5-49	東京人類学会
3	若林勝邦	1890	「肥後における石器時代の遺跡調査報告」	『東洋学芸雑誌』7	東洋學藝社
4	寺石正路	1890	「九州ノ貝塚」	『東京人類学雑誌』5-53	東京人類学会
5	中山平次郎	1918	「肥後国宇土郡花園村岩古曽字曽畑貝塚の土器」	『考古学雑誌』8-5	考古学会
6	清野謙次	1924	「肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑田貝塚」	『歴史地理』43-2	
7	清野謙次	1925	『日本原人の研究』	『日本考古学文献集成』Ⅱ期2	第一書房
8	小林久雄	1935	「肥後縄文土器編年の概要」	『考古学評論』1-2	東京考古学会
9	三森定男	1938	「先史時代の西部日本」	『人類学先史学講座』1	雄山閣
10	小林久雄	1939	「肥後縄紋土器補遺」	『人類学先史学講座』11	雄山閣
11	小林久雄	1939	「九州の縄文土器」	『人類学先史学講座』11	雄山閣
12	乙益重隆	1954	「肥後上代文化史」	『郷土文化叢書』8	日本読義社
13	藤田亮策	1956	「外国文化との関係」	『図説日本文化史大系』1	小学館
14	乙益重隆	1958	「肥後のあけぼの」	『日本の歴史』Ⅰ	
15	松本雅明・富樫卯三郎	1961	「轟式土器の編年」	『考古学雑誌』47-3	日本考古学会
16	杉村彰一	1962	「曽畑式土器文化に関する一考察」	『熊本史学』23	熊本史学会
17	賀川光夫・坂田邦洋	1964	「曽畑式土器に関する一考察」	『九州考古学』22	九州考古学会
18	杉村彰一	1965	「曽畑式土器論考」	『九州考古学』24	九州考古学会
19	乙益重隆	1965	「縄文文化の発展と地域性—九州の西北部—」	『日本の考古学』2	河出書房新社
20	小林久雄・三島格	1965	「縄文時代」	『城南町史』	熊本県旧城南町
21	江坂輝彌	1967	「縄文土器　九州編（6）」	『考古学ジャーナル』13	ニューサイエンス社
22	乙益重隆	1967	「縄文文化の発展と地域性10　九州西北部」	『日本考古学』Ⅱ　縄文時代	
23	清野謙次	1969	「肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚」	『日本貝塚の研究』	岩波書店
24	山崎純男	1972	「天草地方の始原文化の一側面」	『熊本史学』40	熊本史学会
25	Albert Mohr and 吉崎昌一	1973	「Cultural Sequence in Western Kyushu」	『Asian Perspectives』XVI.2	The University press of Hawaii
26	江上敏勝	1973	「原始」	『竜北村史』	熊本県旧竜北村
27	坂田邦洋	1973	『曽畑式土器に関する研究—江湖貝塚—』		縄文文化研究会
28	坂田邦洋	1974	『曽畑式土器に関する研究—尾田貝塚—』		縄文文化研究会
29	坂田邦洋	1975	『曽畑式土器に関する研究—曽畑式土器の器形—』		縄文文化研究会
30	新田重清	1976	「糸満市喜屋武同村貝塚出土の曽畑・轟系土器について」	『沖縄県立博物館紀要』2	沖縄県立博物館
31	新田重清	1976	「野口第2遺跡発見の曽畑・轟系土器について」	『沖縄県立博物館紀要』2	沖縄県立博物館
32	江坂輝彌	1976	「朝鮮半島櫛目文土器文化と西九州地方縄文前期文化の曽畑式土器との関連性について」	『考古学ジャーナル』128	ニューサイエンス社
33	斉藤林次	1976	「海水準の変化から見た含曽畑式土器層の層序学的研究」	『微雨・曽畑』熊本県文化財調査報告19	熊本県教育委員会
34	菊池泰二	1976	「貝類の分類および分析結果について」	『微雨・曽畑』熊本県文化財調査報告19	熊本県教育委員会
35	木村幾多郎	1976	「動物遺存体」	『微雨・曽畑』熊本県文化財調査報告19	熊本県教育委員会
36	岩永省三・塚崎道雄	1976	「オーガーボーリング器材貝塚調査報告書」	『微雨・曽畑』熊本県文化財調査報告19	熊本県教育委員会
37	大迫靖雄	1976	「第Ⅸ層出土の木片について」	『微雨・曽畑』熊本県文化財調査報告19	熊本県教育委員会

No.	著者名	発行年	表題	収録誌巻号	発行所
38	杉村彰一	1978	「曽畑式土器考」	『九州の原始文様』	佐賀県立博物館
39	高宮廣衛	1978	「縄文時代の沖縄諸島」	『九州の原始文様』	佐賀県立博物館
40	江坂輝彌	1978	「朝鮮半島と西北九州　櫛目文土器と曽畑式土器」	『九州の原始文様』	佐賀県立博物館
41	坂田邦洋	1979	『C14年代から見た九州地方縄文土器の編年』		広雅堂
42	賀川光夫	1981	「いわゆる曽畑式土器の問題」	『考古学ジャーナル』188	ニューサイエンス社
43	高宮廣衛	1981	「波見知東原遺跡曽畑層出土の土器」	『沖縄国際大学文学部紀要』10-1	沖縄国際大学文学部
44	松岡史・森醇一郎	1981	「佐賀県西唐津海底出土の縄文土器」	『考古学ジャーナル』188	ニューサイエンス社
45	熊本県西原村教育委員会編	1982	『西原村の史跡と文化財』		熊本県西原村
46	田島龍太	1982	「菜畑遺跡縄文前～中期の土器群の編年と様相」	『菜畑』	唐津市
47	田中良之	1982	「曽畑式土器の展開」	『末盧国』	唐津湾周辺遺跡調査委員会
48	中村愿	1982	「曽畑式土器」	『縄文文化の研究』3　縄文土器Ⅰ	雄山閣
49	任孝宰	1982	「韓国櫛文土器の展開～曽畑式（日本）形成の母体」		統一日報
50	坂本経堯	1983	「曽畑式貝塚」	『肥後上代資料集成』	肥後上代文化研究会
51	渡辺誠	1983	『縄文時代の知識』		東京美術
52	中村友博	1983	「曽畑式土器の紋飾変遷について」	『論苑考古学』	天山舎
53	平田豊弘他	1984	「原始・古代」	『苓北町史』	熊本県苓北町
54	久原巻二	1985	「西北九州沿岸の沖積世海面変化」	『長崎北陽台紀要』1	長崎北陽台高等学校
55	渡辺誠	1985	「西北九州の縄文時代漁撈文化」	『列島の文化史』2	
56	木下巧	1985	「縄文時代」	『三日月町史』上	佐賀県旧三日月町
57	奥野正男	1986	「先史時代から始まる日朝交流」	別冊太陽『AUTUMN86』	平凡社
58	水ノ江和同	1987	「西北九州における曽畑式土器の諸様相」	『考古学と地域文化』	同志社大学考古学研究室
59	甲元眞之	1987	「先史時代の対外交流」	『日本の社会史』1　列島内外の交通と国家	岩波書店
60	柴畑光博	1987	「南九州における曽畑式系土器群の動態とその背景」	『鹿大考古』6号	鹿児島大学考古学研究室
61	江坂輝彌・渡辺誠	1988	『装身具と骨角製漁具の知識』		東京美術
62	水ノ江和同	1988	「曽畑式土器の出現―東アジアにおける先史時代の交流―」	『古代学研究』117	古代学研究会
63	畑中健一	1988	「曽畑貝塚低湿地遺跡の花粉学的研究」	『曽畑』熊本県文化財調査報告100	熊本県教育委員会
64	藤沢浅	1988	「曽畑貝塚低湿地遺跡出土の植物種子の同定」	『曽畑』熊本県文化財調査報告100	熊本県教育委員会
65	渡辺誠	1988	「曽畑貝塚低湿地遺跡出土の大型植物遺体」	『曽畑』熊本県文化財調査報告100	熊本県教育委員会
66	大迫靖雄	1988	「曽畑貝塚低湿地遺跡から出土した木質遺物に関する一考察」	『曽畑』熊本県文化財調査報告100	熊本県教育委員会
67	渡辺誠	1988	「曽畑貝塚低湿地遺跡出土の動物遺体」	『曽畑』熊本県文化財調査報告100	熊本県教育委員会
68	松下孝幸・分部哲秋	1988	「熊本県曽畑貝塚低湿地出土の縄文時代人骨」	『曽畑』熊本県文化財調査報告100	熊本県教育委員会
69	山田治	1988	「曽畑貝塚低湿地遺跡のC14測定結果」	『曽畑』熊本県文化財調査報告100	熊本県教育委員会
70	海津正倫	1988	「曽畑貝塚付近における地形環境の変遷」	『曽畑』熊本県文化財調査報告100	熊本県教育委員会
71	藤下典之	1988	「曽畑貝塚低湿地遺跡（縄文前期）から出土したヒョウタン種間 *Lagenaria siceraria* Standl. の変異と種子について」	『曽畑』熊本県文化財調査報告100	熊本県教育委員会
72	渡辺誠	1988	「縄文時代食用植物研究上の意義」	『曽畑』熊本県文化財調査報告100	熊本県教育委員会
73	賀川光夫	1988	「中国長江流域にみる櫛物（網代）について―曽畑出土資料と関連して―」	『曽畑』熊本県文化財調査報告100	熊本県教育委員会
74	堀川義英	1988	「縄文時代の人々」	『玄海町史』上	佐賀県旧玄海町
75	木村幾多郎	1989	「曽畑式土器様式」	『縄文土器大観』	小学館

No.	著者名	発行年	表題	収録誌巻号	発行所
76	中村慎	1989	「曽畑式土器の文化」	『シマ研究会』第31回	南島文化研究所
77	小林達雄・小川忠博	1989	『縄文土器大観』1		小学館
78	坂田邦洋	1989	「対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究」	『別府大学考古学研究報告』3	別府大学考古学研究室
79	水ノ江和同	1990	「西北九州の曽畑式土器」	『伊木力遺跡』	財団法人伊木力遺跡調査委員会
80	水ノ江和同	1990	「中・南九州の曽畑式土器」	『肥後考古』7	肥後考古学会
81	渡辺誠	1990	「縄文時代の日韓関係」	『市制百周年記念　東アジアと日本　特別考古学講座講演集』	福岡市埋蔵文化財センター
82	緒方勉	1991	「曽畑式土器の祖形について（予察）」	『瀬田裏遺跡調査報告』1	瀬田裏遺跡調査団・株式会社阿蘇大津ゴルフ場
83	島津義昭	1992	「日韓の文物交流」	『季刊考古学』38	雄山閣
84	広瀬雄一	1992	「韓国櫛目文土器の編年」	『季刊考古学』38	雄山閣
85	水ノ江和同	1992	「曽畑式土器の成立」	『季刊考古学』38	雄山閣
86	坂田邦洋	1993	「曽畑式土器の研究：韓国岩寺洞遺跡の櫛文土器」	『別府大学紀要』34	別府大学考古学研究室
87	加藤晋平	1994	「前期の土器（縄文尖底土器／円筒土器／黒浜式土器／北白川式土器／曽畑式土器）」	『縄文文化の研究』（3）縄文土器1（第2版）	雄山閣
88	えびの市史郷土史編さん委員会編	1994	「縄文時代」	『えびの市史』上	宮崎県えびの市
89	杉村彰一	1994	「曽畑式土器・曽畑貝塚」	『縄文時代研究事典』	東京堂出版
90	富田紘一	1998	「縄文時代」	『新熊本市史』通史編第一巻　自然　原始・古代	熊本県熊本市
91	矢作健二・橋本真樹夫・小田静夫・江坂輝彌他	2001	「縄文時代前期曽畑式土器にみる九州～南西諸島の人間活動　胎土分析から」	『日本第四紀学会講演要旨集』31	日本第四紀学会
92	帆足俊文	2002	「曽畑貝塚」	『新宇土市史』資料編2	熊本県宇土市
93	古森政次・金田一精	2003	「縄文時代一土器と植物食の発展一」	『新宇土市史』通史編1	熊本県宇土市
94	井立尚	2003	「千里ヶ浜遺跡出土の隆帯を施した曽畑式土器」	『西海考古』5	西海考古学同人会
95	水ノ江和同	2003	「曽畑式土器～縄文時代の海外交流」	『熊本歴史叢書』1	熊日出版
96	木崎康弘	2004	『豊饒の海の縄文文化　曽畑貝塚』		新泉社
97	藤田和裕	2005	「曽畑式土器の作成」	『西海考古』6　正林護先生喜寿記念号	西海考古学同人会
98	小田富士雄	2005	「縄文の航海貿易」	別冊太陽『古代九州』	平凡社
99	村川逸朗	2006	「日韓・縄文及び新石器時代前期の交流について」	『日韓交流史理解促進事業調査報告書』	日韓交流史理解促進事業実行委員会
100	建石徹	2007	「九州の前期土器一曽畑式土器群一」	『日本の美術』No.496　縄文土器前期	至文堂
101	山崎真治	2007	「曽畑式土器の統系一有明海北岸部の事例分析から見た九州縄文前期末土器群の様相」	『古文化談叢』57	九州古文化研究会
102	古環境研究所	2007	「曽畑遺跡出土曽畑式土器付着炭化物の放射線炭素年代測定」	『熊本県立装飾古墳館研究紀要』7	熊本県立装飾古墳館
103	堂込秀人	2008	「曽畑式土器」	『総覧縄文土器』小林達雄先生古稀記念企画	『総覧縄文土器』刊行委員会
104	鍾ヶ江賢三	2008	「九州島嶼部における縄文土器の移動形態についての予察－五島列島出土縄文土器の岩石学的分析から－」	『九州と東アジアの考古学－九州大学考古学研究室30周年記念論文集－』	九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
105	宇土市史編纂委員会編	2009	『宇土の今昔百ものがたり』		熊本県宇土市
106	木之下悦朗	2009	「曽畑式土器の製作法について」	『上水流遺跡』3　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書136	鹿児島県立埋蔵文化財センター

曽畑式土器に関する発掘調査報告書等

山口県

No.	編著者名	表　題	発行年	収　録　誌　巻　号	発　行　所
1	豆谷和之・田崎美佐	「光構内教育学部附属光中学校武道館新営に伴う発掘調査」	1994	『山口大学構内遺跡調査研究年報』XII	山口大学埋蔵文化財資料館
2	山口大学埋蔵文化財資料館編	「御手洗遺跡」	1998	『学内発掘20年の歩み』	山口大学埋蔵文化財資料館

福岡県

No.	編著者名	表　題	発行年	収　録　誌　巻　号	発　行　所
3	飛高憲雄他	『蒲田遺跡』	1975	福岡市埋蔵文化財調査報告書33	福岡市教育委員会
4	柿原野田遺跡調査団	『柿原野田遺跡』	1976		福岡県甘木市教育委員会
5	柳田純孝	『四箇周辺遺跡調査報告書』２	1978	福岡市埋蔵文化財調査報告書47	福岡市教育委員会
6	二宮忠司	『四箇周辺遺跡調査報告書』４	1981	福岡市埋蔵文化財調査報告書63	福岡市教育委員会
7	浜石哲也	『田村遺跡』Ⅱ	1984	福岡市埋蔵文化財調査報告書104	福岡市教育委員会
8	萩原裕房・富永直樹	「安国寺遺跡の調査（２）　第１次調査（２）」	1984	久留米市文化財調査報告書39	福岡県久留米市教育委員会
9	山口信義	『楠橋貝塚』	1988	北九州市埋蔵文化財調査報告書69	北九州市教育委員会
10	吉武学	『四箇遺跡群』第23次調査報告書	1989	福岡市埋蔵文化財調査報告書196	福岡市教育委員会
11	横山邦継	『四箇遺跡』四箇遺跡群第22次調査	1989	福岡市埋蔵文化財調査報告書199	福岡市教育委員会
12	狭川真一・山村信榮	「宮ノ本遺跡第３次調査」	1991	太宰府市の文化財17	福岡県太宰府市教育委員会
13	井上裕弘・木下修	「稗畑遺跡の調査」	1991	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告20	福岡県教育委員会
14	前田義人	『貫川遺跡』５	1992	北九州市埋蔵文化財調査報告121	北九州市教育委員会
15	池田祐司	『脇山Ⅳ　県営圃場整備事業に伴う脇山Ａ遺跡５次調査報告	1992	福岡市埋蔵文化財調査報告書312	福岡市教育委員会
16	井上裕弘	「鎌塚遺跡の調査」	1992	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告22	福岡県教育委員会
17	井上裕弘	「山ノ神遺跡の調査」	1992	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告22	福岡県教育委員会
18	前田義人	『貫川遺跡』７	1993	北九州市埋蔵文化財調査報告書139	北九州市教育委員会
19	山口信義	『永犬丸遺跡』	1994	北九州市埋蔵文化財調査報告書151	北九州市教育委員会
20	中村修身	「山鹿貝塚」	1994	福岡県芦屋町埋蔵文化財調査報告書６	福岡県芦屋町教育委員会
21	榎本義嗣	「栗尾Ｂ遺跡第１次調査の記録」	1994	福岡市埋蔵文化財調査報告書386	福岡市教育委員会
22	水ノ江和同	「大綱遺跡」	1994	一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告８	福岡県教育委員会
23	谷口俊治	『上曽根遺跡』	1995	北九州市埋蔵文化財調査報告書181	北九州市教育委員会
24	小池史哲	『新延貝塚』	1995	福岡県文化財調査報告書122	福岡県教育委員会
25	井上裕弘・仲間研志	「天園遺跡の調査」	1996	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告42	福岡県教育委員会
26	池田祐司・山口譲治	「次郎丸高石遺跡第３次調査」	1997	福岡市埋蔵文化財調査報告書536	福岡市教育委員会
27	富永直樹・神保公久	「野口遺跡（第７次調査）」	1997	『平成８年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書127	福岡県久留米市教育委員会
28	白木守	「筑後国分寺跡―第38次調査―」	1998	久留米市文化財調査報告書139	福岡県久留米市教育委員会
29	仲間研志	「楠田遺跡」	1998	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告49	福岡県教育委員会
30	加藤良彦	『田村』14　田村遺跡群第20次調査	1999	福岡市埋蔵文化財調査報告書611	福岡市教育委員会
31	米倉秀紀	「大坪南遺跡第１次調査」	1999	福岡市埋蔵文化財調査報告書619	福岡市教育委員会

No.	編著者名	表　　題	発行年	収 録 誌 巻 号	発 行 所
32	仲間研志	『金場遺跡　上巻』	1999	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告54	福岡県教育委員会
33	山口譲治	『曰佐遺跡』曰佐遺跡群第１次調査報告	2000	福岡市埋蔵文化財調査報告書646	福岡市教育委員会
34	宇野慎敏	『貫・井手ヶ本遺跡』３	2001	北九州市埋蔵文化財調査報告書257	北九州市教育委員会
35	大塚紀宜	『中山遺跡』	2001	福岡市埋蔵文化財調査報告書687	福岡市教育委員会
36	戸田哲也他	「カヤノ遺跡第７次調査」	2001	太宰府市の文化財58	福岡県太宰府市教育委員会
37	柏原孝俊	「干潟向畦ヶ浦遺跡」	2001	『小郡市史』４	福岡県小郡市
38	松本直子	「横隈山遺跡四地点」	2001	『小郡市史』４	福岡県小郡市
39	柏原孝俊	「津古東宮原遺跡」	2001	『小郡市史』４	福岡県小郡市
40	近藤康治	『横道遺跡Ⅱ』	2001	久留米市埋蔵文化財調査報告書173	福岡県久留米市教育委員会
41	白木守	「市ノ上北屋敷遺跡（第５次）」	2002	久留米市文化財調査報告書183	福岡県久留米市教育委員会
42	佐々木竜郎	「日焼遺跡第３次調査」	2004	太宰府市の文化財74	福岡県太宰府市教育委員会
43	米倉秀紀	『今山遺跡第8次調査』～石器制作址と縄文時代前期から平安時代までの遺構・遺物の調査～	2005	福岡市埋蔵文化財調査報告書835	福岡市教育委員会
44	阿部泰之	「乙石遺跡第２次調査の記録」	2006	福岡市埋蔵文化財調査報告書874	福岡市教育委員会
45	加藤良彦	「広瀬遺跡」２	2006	福岡市埋蔵文化財調査報告書901	福岡市教育委員会
46	小林勇作	『古島榎崎遺跡』	2006	筑後市文化財調査報告書72	福岡県筑後市教育委員会
47	藏富士寛	『警弥郷Ｂ遺跡』３　第５次調査報告	2007	福岡市埋蔵文化財調査報告書929	福岡市教育委員会
48	田上勇一郎	『西新町遺跡』９　第18次調査報告	2007	福岡市埋蔵文化財調査報告書939	福岡市教育委員会
49	中村恒次郎	「日焼遺跡第２次調査」	2008	太宰府市の文化財100	福岡県太宰府市教育委員会
50	齋部麻矢他	『竹重遺跡』３	2010	福岡県文化財調査報告書227	福岡県教育委員会

佐賀県

No.	編著者名	表　　題	発行年	収 録 誌 巻 号	発 行 所
51	松尾禎作	「佐賀県西唐津海底遺跡」	1955	『日本考古学年報』４	
52	西田和己他	「六本黒木遺跡」	1980	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書１	佐賀県教育委員会
53	高瀬哲朗他	「香田遺跡」	1981	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書２	佐賀県教育委員会
54	堤安信他	「浦田遺跡」	1983	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書３	佐賀県教育委員会
55	多々良友博他	『金立開拓遺跡』	1984	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書４	佐賀県教育委員会
56	高瀬哲朗他	「下石動遺跡」	1987	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書６	佐賀県教育委員会
57	多々良友博他	「礫石Ｂ遺跡」	1989	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書９	佐賀県教育委員会
58	明瀬慎吾	『赤松海岸遺跡』	1989	鎮西町文化財調査報告書７	佐賀県鎮西町教育委員会
59	小松譲	「山浦西北方遺跡」	1991	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書14	佐賀県教育委員会
60	田島龍太	『中尾二ツ枝』１	1991	唐津市埋蔵文化財調査報告47	佐賀県唐津市教育委員会
61	渋谷格	「猿嶽Ａ遺跡」	1993	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書16	佐賀県教育委員会
62	家田淳一	「鈴熊遺跡」	1993	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書16	佐賀県教育委員会
63	田平徳栄・副島正道	「大久保三本松遺跡」	1993	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書16	佐賀県教育委員会
64	西田巌	「大野原遺跡」	1993	佐賀市文化財調査報告書48	佐賀市教育委員会
65	谷澤仁	『大願寺二本松遺跡』	1993	大和町文化財調査報告22	佐賀県大和町教育委員会

No.	編著者名	表　　題	発行年	収録誌巻号	発行所
66	西田巌	「川久保遺跡１区」	1994	佐賀市文化財調査報告書55	佐賀市教育委員会
67	古賀章彦	「大日遺跡２区」	1996	佐賀市文化財調査報告書66	佐賀市教育委員会
68	田島龍太	『唐ノ川遺跡群　唐ノ川高峰遺跡（3）』	1996	唐津市文化財調査報告書72	佐賀県唐津市教育委員会
69	古賀彰彦	『金立遺跡』Ⅱ	1998	佐賀市文化財調査報告書87	佐賀市教育委員会
70	市川浩文	「戦場古墳群１区の遺構と遺物」	1999	佐賀県文化財調査報告書140	佐賀県教育委員会
71	八尋実・桑原幸則	『船塚遺跡―縄文・弥生・古墳時代編―』	2000	神埼町文化財調査報告書67	佐賀県神埼町教育委員会
72	田島龍太	『菅牟田荒谷遺跡』	2001	唐津市文化財調査報告書96	佐賀県唐津市教育委員会
73	徳永貞照	「東畑瀬遺跡３区」	2007	佐賀県文化財調査報告書170	佐賀県教育委員会
74	渋谷格他	「西畑瀬遺跡」２	2009	佐賀県文化財調査報告書180	佐賀県教育委員会

長崎県

No.	編著者名	表　　題	発行年	収録誌巻号	発行所
75	麻生優	『岩下洞穴』	1967		長崎県佐世保市教育委員会
76	佐世保市教育委員会	「下本山岩陰」	1972		長崎県佐世保市教育委員会
77	渡辺康行	「深堀第Ⅲ群遺跡について」	1983		長崎市立深堀小学校
78	永松実他	『長崎市深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』	1984		長崎市教育委員会
79	安楽勉・藤田和裕	『名切遺跡』	1985	長崎県文化財調査報告書71	長崎県教育委員会
80	安楽勉・中田敦之	『楼橋田遺跡』	1985	長崎県文化財調査報告書76	長崎県教育委員会
81	福田一志	『殿崎遺跡』	1986	長崎県文化財調査報告書83	長崎県教育委員会
82	高野晋司	「宮田Ａ遺跡」	1989	長崎県文化財調査報告書93	長崎県教育委員会
83	同志社大学考古学研究室・多良見町教育委員会編	『伊木力遺跡』	1990	多良見町文化財調査報告書７	長崎県多良見町教育委員会
84	福江市教育委員会	『福江・堂崎遺跡』	1991	福江市文化財調査報告書４	長崎県福江市教育委員会
85	旧福江市史編集委員会	「江湖貝塚」	1995	『福江市史』上	長崎県福江市
86	旧福江市史編集委員会	「白浜貝塚」	1995	『福江市史』上	長崎県福江市
87	旧福江市史編集委員会	「黄島泊浦（泊崎）遺跡」	1995	『福江市史』上	長崎県福江市
88	長崎県教育委員会	『伊木力遺跡』Ⅰ	1996	長崎県文化財調査報告書126	長崎県教育委員会
89	有川町教育委員会	『頭ヶ島白浜遺跡』	1996	有川町文化財調査報告書１	長崎県有川町教育委員会
90	長崎県教育委員会	『伊木力遺跡』Ⅱ	1997	長崎県文化財調査報告書134	長崎県教育委員会
91	小値賀町教育委員会	『山見神海底遺跡』	2002	小値賀町文化財調査報告書16	長崎県小値賀町教育委員会
92	塚原博	『野首遺跡』	2003	小値賀町文化財調査報告書17	長崎県小値賀町教育委員会
93	川瀬雄一	『貝津横島Ｂ遺跡』	2008	諫早市文化財調査報告書21	長崎県諫早市教育委員会

熊本県

No.	編著者名	表　　題	発行年	収録誌巻号	発行所
94	清野謙次	「肥後国宇土郡花園村岩古曽字曽畑貝塚―附貝輪の用途―」	1924	『歴史地理』43-2	
95	江坂輝彌	「曽畑貝塚の発掘調査」（1）～（4）	1959		熊本日日新聞

No.	編著者名	表　　題	発行年	収　録　誌　巻　号	発　行　所
96	乙益重隆	「熊本県上益城郡カキワラ貝塚」	1959	『日本考古学年報』8	
97	江坂輝彌	「曽畑貝塚発掘調査報告」	1960	『日本人類学会』第15回研究発表抄録	日本人類学会
98	坂田邦洋	『曽畑式土器に関する研究―尾田貝塚―』	1974		縄文文化研究会
99	江本直他	「曽畑」	1976	熊本県文化財調査報告19	熊本県教育委員会
100	松本健郎	「天ノ岩戸洞穴」	1978	熊本県文化財調査報告31	熊本県教育委員会
101	松村道博	『中後迫遺跡調査報告』	1978		九州電力株式会社・中後迫遺跡調査団
102	中村愿	『桑鶴土橋遺跡』2	1979	『研究活動報告』5	熊本大学考古学研究室
103	林田憲義	「宮島貝塚（町指定）」	1979	『松橋町史』	熊本県松橋町
104	佐藤伸二他	『矢週川日向遺跡調査報告』	1980		九州電力株式会社・日向遺跡調査団
105	中村幸史郎他	『方保田東原遺跡』	1981	山鹿市立博物館調査報告書2	熊本県山鹿市
106	菊池市史編さん委員会	「伊野遺跡」	1982	『菊池市史』上「縄文時代の菊池」	熊本県菊池市
107	菊池市史編さん委員会	「伊牟田遺跡」	1982	『菊池市史』上「縄文時代の菊池」	熊本県菊池市
108	隈昭志他	『沖ノ原遺跡』	1984		熊本県五和町教育委員会
109	花岡興輝	「苓北町内の縄文遺跡　黒染遺跡」	1984	『苓北町史』第2章第1節	熊本県苓北町
110	高木恭二・木下洋介	『西岡台貝塚』	1985	熊本県宇土市埋蔵文化財調査報告書12	熊本県宇土市教育委員会
111	浦田信智	『曲野遺跡』Ⅲ	1985	熊本県文化財調査報告75	熊本県教育委員会
112	大城康雄	『神水遺跡発掘調査報告書』	1986		熊本市教育委員会
113	林田憲義	「際崎貝塚」	1987	『三角町史』	熊本県三角町
114	島津義昭	「前島貝塚」	1987	『松島町史』	熊本県松島町
115	丸山真治他	『竜田陣内遺跡』	1988	熊本県文化財調査報告98	熊本県教育委員会
116	江本直他	『曽畑』	1988	熊本県文化財調査報告100	熊本県教育委員会
117	隈昭志・西住欣一郎	『鼓ヶ峰遺跡』	1988	熊本県文化財調査報告96	熊本県教育委員会
118	水俣市教育委員会	「木白野遺跡」	1990	水俣市埋蔵文化財調査報告書1	熊本県水俣市教育委員会
119	水俣市教育委員会	「西さんどう遺跡」	1990	水俣市埋蔵文化財調査報告書1	熊本県水俣市教育委員会
120	緒方勉	『瀬田裏遺跡調査報告』Ⅰ	1991	『大津町文化財調査報告』	瀬田裏遺跡調査団・株式会社阿蘇大津ゴルフ場
121	山崎純男	「鳴子崎遺跡群」	1991	『本渡市史』	熊本県本渡市
122	山崎純男	「立浦遺跡」	1991	『本渡市史』	熊本県本渡市
123	山崎純男	「南古郷遺跡」	1991	『本渡市史』	熊本県本渡市
124	富田紘一	「大谷遺跡」	1993	『旭志村史』	熊本県旭志村
125	富田紘一	「前原遺跡（菊池郡大津町）」	1993	『旭志村史』	熊本県旭志村
126	富田紘一	「川戸貝塚」	1996	『新熊本市史』史料編1	熊本市
127	富田紘一	「八景水谷遺跡」	1996	『新熊本市史』史料編1	熊本市
128	富田紘一	「上古閑遺跡」	1996	『新熊本市史』史料編1	熊本市
129	富田紘一	「弓削宮原遺跡」	1996	『新熊本市史』史料編1	熊本市
130	富田紘一	「水源地遺跡」	1996	『新熊本市史』史料編1	熊本市
131	村崎孝宏	「古池さん遺跡」	1997	熊本県文化財調査報告書162	熊本県教育委員会
132	村崎孝宏	「古池さん北遺跡」	1997	熊本県文化財調査報告書162	熊本県教育委員会
133	松村真紀子	「江津湖遺跡群第1次調査」	1999	『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集―平成10年度―』	熊本市教育委員会

No.	編著者名	表　　題	発行年	収　録　誌　巻　号	発　行　所
134	野田恒親他	「梨木遺跡」	1999	熊本県文化財調査報告175	熊本県教育委員会
135	濱田彰久	『古閑山遺跡』	1999	熊本県文化財調査報告171	熊本県教育委員会
136	矢野裕介他	『蔵城遺跡』	1999	熊本県文化財調査報告172	熊本県教育委員会
137	戸田清恵	「大鶴A遺跡」	1999	熊本県文化財調査報告176	熊本県教育委員会
138	村崎孝宏	『耳切遺跡』	1999	熊本県文化財調査報告180	熊本県教育委員会
139	文化財環境整備研究所	『古閑原遺跡』	2000	豊野町文化財調査報告２	熊本県豊野町教育委員会
140	山下義満	『灰塚遺跡』（1）	2000	熊本県文化財調査報告187	熊本県教育委員会
141	池田朋生	『石の本遺跡Ⅲ』	2001	熊本県文化財調査報告書194	熊本県教育委員会
142	亀田学	『梅ノ木遺跡』Ⅱ	2001	熊本県文化財調査報告199	熊本県教育委員会
143	西健一郎・塚本国男	『ヒイデン洲遺跡』	2002		熊本県長洲町教育委員会
144	山城敏昭	『頭地田口A遺跡』	2002	熊本県文化財調査報告206	熊本県教育委員会
145	亀田学他	『ヲスギ遺跡』	2003	熊本県文化財調査報告214	熊本県教育委員会
146	山口健剛	『方保田東原遺跡』（5）	2004	山鹿市文化財調査報告書17	熊本県山鹿教育委員会
147	西住欣一郎他	『東鶴遺跡』	2004	熊本県文化財調査報告222	熊本県教育委員会
148	大坪志子	「熊本県小波戸遺跡の植物種子」	2004	『先史・東アジア出土の植物遺存体』２	熊本大学文学部
149	岡本勇人	『曲手西原遺跡』	2005	菊陽町文化財調査報告４	熊本県菊陽町教育委員会
150	帆足俊文	『阿高貝塚』	2005	熊本県文化財調査報告223	熊本県教育委員会
151	杉井健他	「柳貝塚採集資料報告」	2005	『上天草市史大矢野町編資料集』１	熊本県上天草市
152	芝康次郎他	「小波戸遺跡発掘調査報告」	2006	『上天草市史大矢野町編資料集』２	熊本県上天草市
153	西山絵里子	「荒木浜遺跡」	2006	『上天草市史大矢野町編資料集』２	熊本県上天草市
154	米村大	『陣ノ内遺跡』	2007	合志市文化財調査報告１	熊本県合志市教育委員会
155	高濱未来	「禿島遺跡」	2007	『上天草市史大矢野町編資料集』３	熊本県上天草市
156	山崎純男	『大矢遺跡』	2007	天草市文化財調査報告書１	熊本県天草市教育委員会
157	西慶喜	「高畑乙ノ原遺跡」	2007	山都町文化財調査報告１	熊本県山都町教育委員会
158	西慶喜	「高畑前鶴遺跡」	2007	山都町文化財調査報告１	熊本県山都町教育委員会
159	藤本貴仁	『轟貝塚―慶應義塾大学資料再整理報告―』	2008	宇土市埋蔵文化財調査報告書30	熊本県宇土市教育委員会

大分県

No.	編著者名	表　　題	発行年	収　録　誌　巻　号	発　行　所
160	栗田勝弘	「新生遺跡」	1984	『野津川流域の遺跡Ⅴ　新生遺跡　下藤遺跡』	大分県旧野津町教育委員会
161	田中裕介他	「手崎遺跡」	1998	一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ	大分県教育委員会
162	田中裕介他	「大部遺跡」	1998	一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ	大分県教育委員会
163	今田秀樹	『大肥下河内遺跡』	2006	日田市埋蔵文化財調査報告書63	大分県日田市教育委員会
164	塩地潤一他	『横尾貝塚』	2008	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書83	大分市教育委員会
165	綿貫俊一・小柳和宏	『岩ノ下岩陰遺跡発掘調査報告書』	2008	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書32	大分県埋蔵文化財センター

宮崎県

No.	編著者名	表　題	発行年	収録誌巻号	発行所
166	飯田博之他	「田向遺跡」	1994	『県道向山・日之影線道路改良事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』	宮崎県教育委員会
167	金丸武司	『元野河内遺跡』	1997	旧田野町文化財調査報告書39	宮崎県宮崎市教育委員会
168	大學康宏	「大谷遺跡表採縄文土器資料」	1999	高原町文化財調査報告書4	宮崎県高原町教育委員会
169	金丸武司・森田浩史	『本野遺跡（縄文時代遺物編）』	1999	旧田野町文化財調査報告書32	宮崎県宮崎市教育委員会
170	金丸武司	『本野原遺跡』2	2005	旧田野町文化財調査報告書52	宮崎県宮崎市教育委員会
171	柴原光博	「笹ヶ崎遺跡」	2006	『都城市史』史料編　考古	宮崎県都城市
172	出山真次他	『尾花A遺跡Ⅰ　旧石器時代～縄文時代』	2009	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書185	宮崎県埋蔵文化財センター
173	藤本聡	「カラ石の元遺跡」	2010	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書189	宮崎県埋蔵文化財センター
174	有馬絢子	『鵜戸ノ前遺跡』	2010	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書193	宮崎県埋蔵文化財センター
175	秦広之	『山中遺跡』	2010	小林市文化財調査報告書4	宮崎県小林市教育委員会

鹿児島県

No.	編著者名	表　題	発行年	収録誌巻号	発行所
176	戸崎勝洋・立神次郎	「指辺遺跡」	1977	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書5	鹿児島県教育委員会
177	金峰町教育委員会	『阿多貝塚』	1978	金峰町埋蔵文化財調査報告書1	鹿児島県金峰町教育委員会
178	志布志町教育委員会	『別府・石踊遺跡』	1979		鹿児島県志布志町教育委員会
179	井上秀文他	『中尾田遺跡』	1981	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書15	鹿児島県教育委員会
180	倉元良文・中原一成	『神野牧遺跡』	1996	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書20	鹿児島県立埋蔵文化財センター
181	堂込秀人	「波留貝塚」	1996	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書72	鹿児島県教育委員会
182	池畑耕一・前迫亮一	『干迫遺跡』	1997	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書22	鹿児島県立埋蔵文化財センター
183	清水周作	『船窪遺跡』	1997	大隅町埋蔵文化財発掘調査報告9	鹿児島県大隅町教育委員会
184	清水周作	『川路山遺跡』	1997	大隅町埋蔵文化財発掘調査報告11	鹿児島県大隅町教育委員会
185	宮下貴浩他	『上水流遺跡第1次調査』	1998	金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書9	鹿児島県金峰町教育委員会
186	宮下貴浩他	『小薗遺跡』	2000	金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書11	鹿児島県金峰町教育委員会
187	宮下貴浩・相美伊久雄	「島追薗遺跡」	2001	金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書12	鹿児島県金峰町教育委員会
188	前迫亮一	『高井田遺跡』	2002	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書35	鹿児島県立埋蔵文化財センター
189	宮田栄二・東和幸	『計志加里遺跡』	2002	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書38	鹿児島県立埋蔵文化財センター
190	中村和美・池畑耕一	『上野原遺跡』	2003	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書52	鹿児島県立埋蔵文化財センター
191	宮田洋一他	「猿引遺跡」	2003	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書53	鹿児島県立埋蔵文化財センター
192	前迫亮一・森田郁郎	『中原遺跡』	2003	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書54	鹿児島県立埋蔵文化財センター
193	八木澤一郎他	「山ノ脇遺跡」	2003	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書58	鹿児島県立埋蔵文化財センター
194	八木澤一郎他	「西原遺跡」	2003	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書58	鹿児島県立埋蔵文化財センター
195	有馬孝一他	『城ヶ尾遺跡Ⅱ　縄文・古墳時代編』	2003	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書60	鹿児島県立埋蔵文化財センター
196	清水周作	『萩原遺跡』	2003	大隅町埋蔵文化財発掘調査報告書31	鹿児島県大隅町教育委員会
197	宮下貴浩他	「上焼田A遺跡」	2003	金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書15	鹿児島県金峰町教育委員会
198	黒川忠広	『東郷坂A遺跡』	2004	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書65	鹿児島県立埋蔵文化財センター

No.	編著者名	表　題	発行年	収録誌巻号	発行所
199	西園勝彦他	『フミカキ遺跡』	2004	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書74	鹿児島県立埋蔵文化財センター
200	中原一成	『桐木遺跡』	2004	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書75	鹿児島県立埋蔵文化財センター
201	野澤盛雅他	『松山田西遺跡』	2004	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書76	鹿児島県立埋蔵文化財センター
202	鹿屋市教育委員会	『川の上・中ノ丸遺跡』	2004	鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書74	鹿児島県鹿屋市教育委員会
203	上東克彦・福永裕曉	『中山遺跡』	2004	加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書25	鹿児島県加世田市教育委員会
204	中村耕治他	『窟見ノ上遺跡』	2005	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書83	鹿児島県立埋蔵文化財センター
205	中村耕治他	『建石ヶ原遺跡』	2005	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書83	鹿児島県立埋蔵文化財センター
206	寺原徹	『白糸原遺跡』	2005	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書86	鹿児島県立埋蔵文化財センター
207	彌榮久志他	『南田代遺跡』	2005	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書88	鹿児島県立埋蔵文化財センター
208	長野眞一他	『桐木耳取遺跡Ⅲ』	2005	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書91	鹿児島県立埋蔵文化財センター
209	西園勝彦・東和幸	『山下堀頃遺跡』	2005	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書92	鹿児島県立埋蔵文化財センター
210	最上優子	『柳原遺跡』	2005	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書94	鹿児島県立埋蔵文化財センター
211	橋元邦和	『大品遺跡』	2006	旧野田町埋蔵文化財報告書１	鹿児島県出水市教育委員会
212	藤崎光洋・中村和美	『三角山遺跡群』（３）	2006	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書96	鹿児島県立埋蔵文化財センター
213	中村耕治・日高正人	『尾ヶ原遺跡』	2006	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書98	鹿児島県立埋蔵文化財センター
214	池畑耕一・三垣恵一	『中尾遺跡』	2006	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書99	鹿児島県立埋蔵文化財センター
215	長野眞一他	『隠迫遺跡』	2006	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書101	鹿児島県立埋蔵文化財センター
216	長野眞一他	『枦堀遺跡』	2006	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書101	鹿児島県立埋蔵文化財センター
217	長野眞一他	『仁田尾遺跡』	2006	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書101	鹿児島県立埋蔵文化財センター
218	寒川朋枝	『堂園平遺跡』	2006	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書104	鹿児島県立埋蔵文化財センター
219	繁昌正幸・三垣恵一	『市ノ原遺跡』	2006	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書105	鹿児島県立埋蔵文化財センター
220	有川孝行・深野麻衣	『地頭仮屋跡』	2006	鹿児島県鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書44	鹿児島県鹿児島市教育委員会
221	藤野義久・出口浩	『大龍遺跡Ｄ地点』	2006	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書48	鹿児島県鹿児島市教育委員会
222	上東克彦・福永裕曉	『二頭遺跡』	2006	鹿児島県南さつま市埋蔵文化財発掘調査報告書１	鹿児島県南さつま市教育委員会
223	長野眞一他	『仁田尾中Ａ・Ｂ遺跡』	2007	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書110	鹿児島県立埋蔵文化財センター
224	寒川朋枝他	『前山遺跡』	2007	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書115	鹿児島県立埋蔵文化財センター
225	藤崎光洋	『上山路山遺跡』	2007	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書116	鹿児島県立埋蔵文化財センター
226	平美典他	『安茶ヶ原遺跡』	2007	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書118	鹿児島県立埋蔵文化財センター
227	相美伊久雄他	『仁田尾遺跡』	2008	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書128	鹿児島県立埋蔵文化財センター
228	日高正人他	『市ノ原遺跡第４地点』	2008	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書130	鹿児島県立埋蔵文化財センター
229	牛ノ濱修・橋口拓也	『鷲ヶ迫遺跡』	2008	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書132	鹿児島県立埋蔵文化財センター
230	清水周作・杉山真二	『宮岡遺跡』	2009	曽於市埋蔵文化財発掘調査報告書８	鹿児島県曽於市教育委員会
231	溝口学他	『上水流遺跡』３	2009	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書136	鹿児島県立埋蔵文化財センター
232	溝口学他	『下ノ原Ｂ遺跡』	2009	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書137	鹿児島県立埋蔵文化財センター
233	関明恵他	『桜谷遺跡の発掘調査成果』	2009	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書138	鹿児島県立埋蔵文化財センター
234	彌榮久志他	『建山遺跡』	2009	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書139	鹿児島県立埋蔵文化財センター
235	冨田逸朗他	『市ノ原遺跡第３地点』	2009	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書140	鹿児島県立埋蔵文化財センター
236	小林晋也・川口雅之	『堂原遺跡』	2009	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書145	鹿児島県立埋蔵文化財センター

No.	編著者名	表　題	発行年	収録誌巻号	発行所
237	岩澤和徳・小林晋也	「尾付野山遺跡」	2010	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書147	鹿児島県立埋蔵文化財センター
238	平木場秀男他	「建山遺跡」	2010	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書152	鹿児島県立埋蔵文化財センター
239	前迫亮一他	「定塚遺跡」	2010	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書153	鹿児島県立埋蔵文化財センター
240	冨田逸郎他	『榕城跡』	2010	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書155	鹿児島県立埋蔵文化財センター

沖縄県

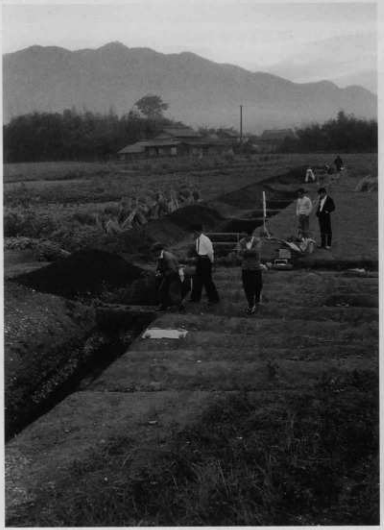
No.	編著者名	表　題	発行年	収録誌巻号	発行所
241	新田重清	「喜屋武洞村貝塚」	1976	『沖縄県立博物館紀要』 2	
242	新田重清	「野口第２遺跡」	1976	『沖縄県立博物館紀要』 2	
243	安部克子	「高又遺跡」	1979	『研究活動報告』 3	熊本大学考古学研究室
244	高宮廣衛	「渡具知東原遺跡」	1981	『沖縄国際大学文学部紀要』10-1	
245	伊是名村教育委員会	『具志川島遺跡群』	1993	伊是名村文化財調査報告書９	沖縄県伊是名村教育委員会
246	名護市教育委員会	「大堂原貝塚発掘調査概報」	2001	『沖縄考古学会報告資料』	沖縄県名護市教育委員会

※不備な点も多々あると思うが，順次訂正・追加したい

図　版

PLATES

調査地遠景（西より）



Aトレンチ調査状況（西より）

図版２

Ａトレンチ１区及びＢトレンチ調査状況（南より）

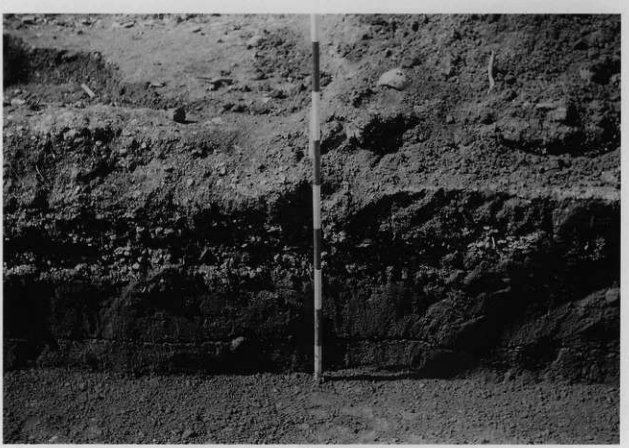
Ｂトレンチ３区調査状況

Aトレンチ１区北壁西半側中央部土層断面（南より）

Aトレンチ１区北壁西半側の貝類堆積（南より）

図版４

Ａトレンチ７区土層断面



Ｂトレンチ２区西壁土層断面（東より）

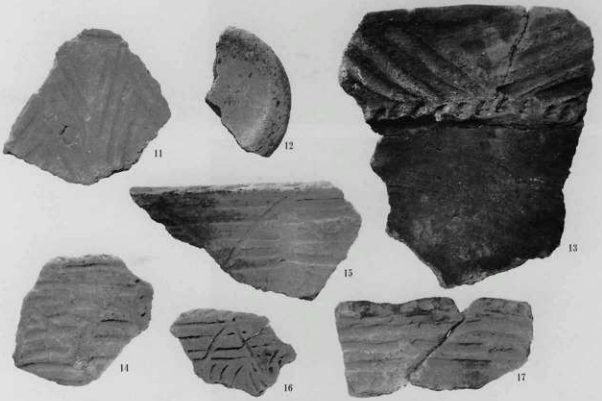
土壙墓検出状況（Aトレンチ３区，南より）

Aトレンチ７区北久根山式土器出土状況

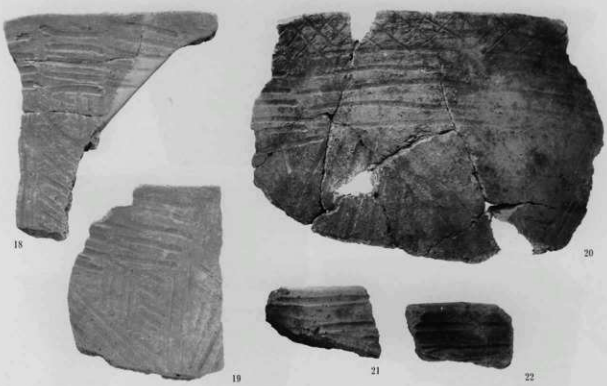
Bトレンチ３区曽畑式土器出土状況

図版 6

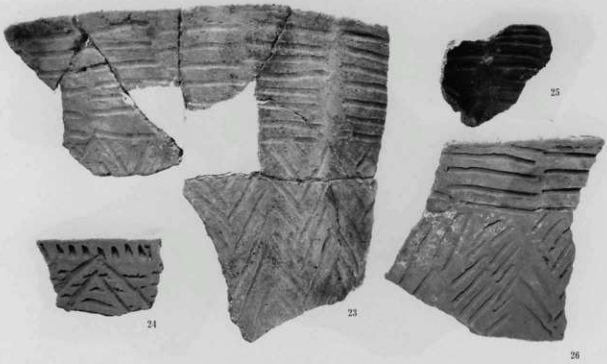
Aトレンチ１区撹乱層及び表土層出土縄文土器



Aトレンチ１区第１貝層及び礫層出土縄文土器・土製品

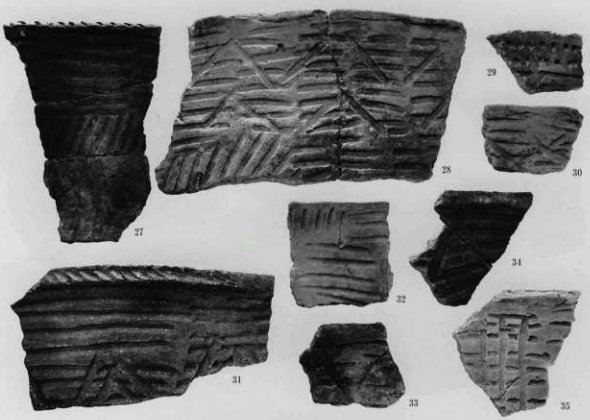


Aトレンチ 1 区第 2 貝層出土縄文土器 1



Aトレンチ 1 区第 2 貝層出土縄文土器 2

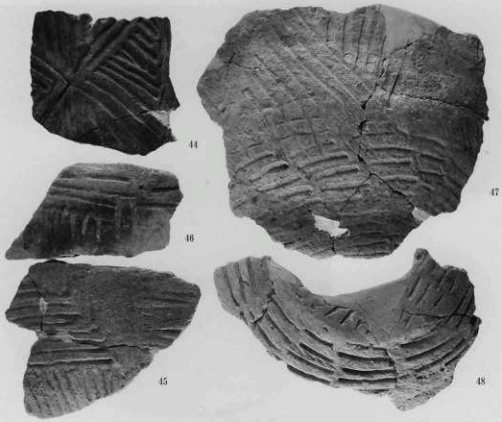
図版８



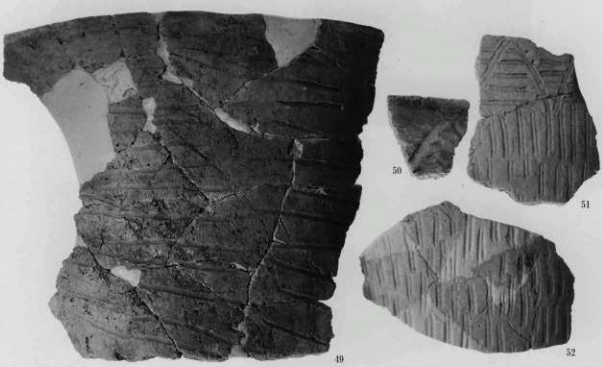
Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器３

Ａトレンチ１区第２貝層出土縄文土器４

Aトレンチ 1 区第 2 貝層出土縄文土器 5

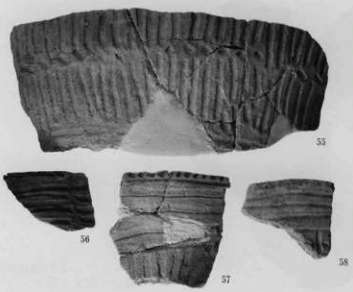


Aトレンチ 1 区第 2 貝層出土縄文土器 6

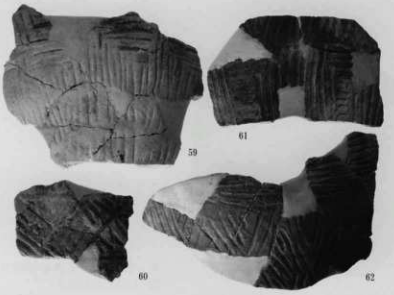


Aトレンチ1区第2貝層最下部出土縄文土器1

Aトレンチ1区第2貝層最下部出土縄文土器2



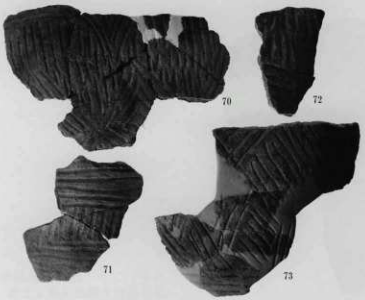
Aトレンチ１区第２貝層最下部及び褐色土層出土縄文土器



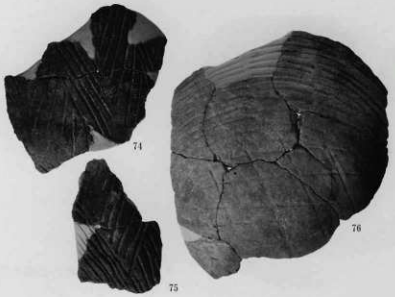
Aトレンチ１区褐色土層出土縄文土器

A・Bトレンチ連結部第２貝層出土縄文土器１

図版12



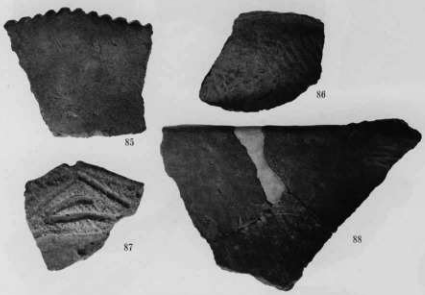
A・Bトレンチ連結部第2貝層出土縄文土器2



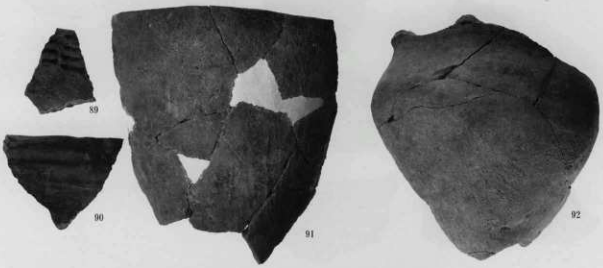
A・Bトレンチ連結部第2貝層出土縄文土器3

A・Bトレンチ連結部第2貝層出土縄文土器4

Aトレンチ2～5区混貝土層
出土縄文土器1

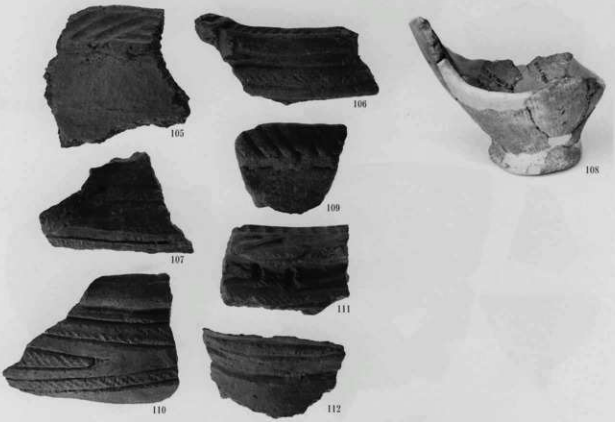


Aトレンチ2～5区混貝土層
出土縄文土器2



Aトレンチ2～5区茶褐色土層出土縄文土器1

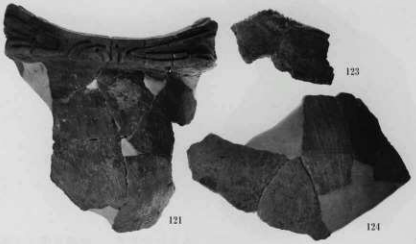
Aトレンチ２～５区茶褐色土層出土縄文土器２



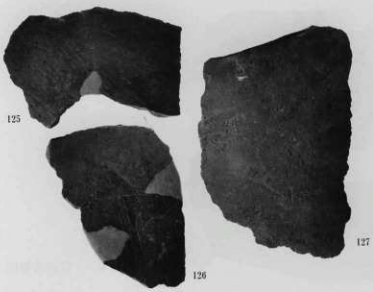
Aトレンチ６・７区混貝土層及び純貝層出土縄文土器

Aトレンチ6・7区純貝層出土縄文土器1

Aトレンチ6・7区純貝層出土縄文土器2



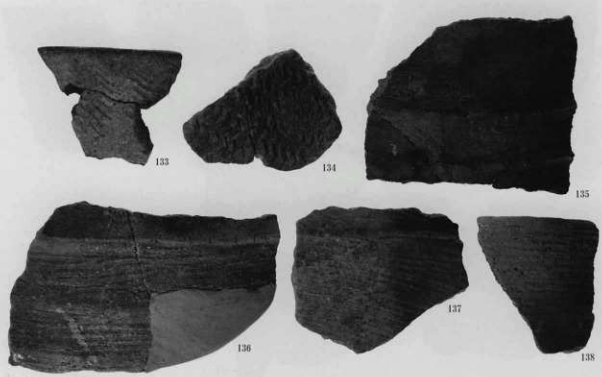
Aトレンチ6・7区純貝層出土縄文土器3



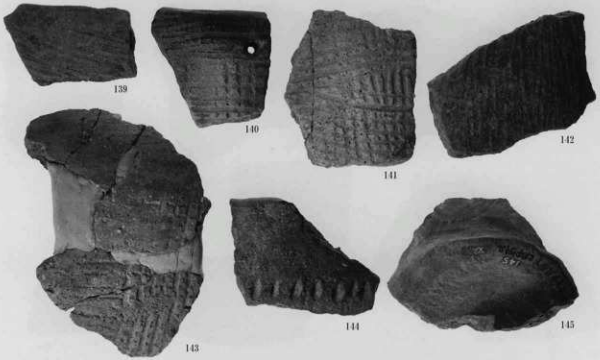
Aトレンチ6・7区純貝層出土縄文土器4

Aトレンチ6・7区純貝層出土縄文土器5

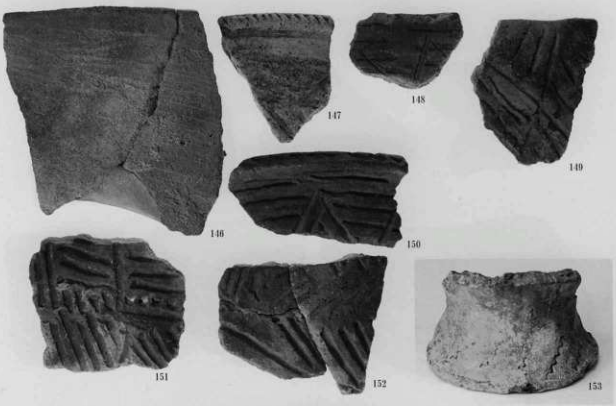
Aトレンチ6・7区純貝層出土縄文土器6



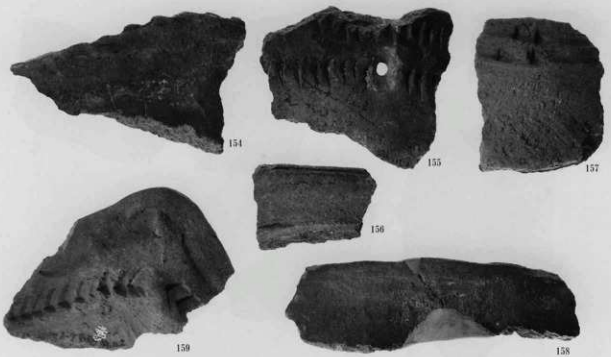
Aトレンチ６・７区褐色及び茶褐色土層出土縄文土器１



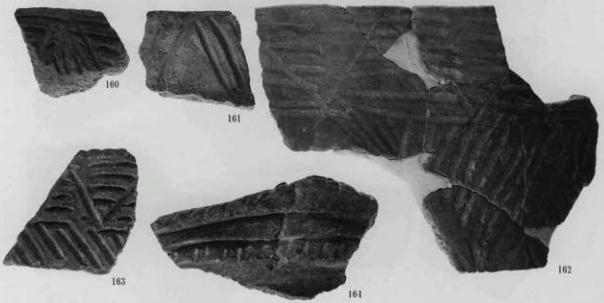
Aトレンチ６・７区褐色及び茶褐色土層出土縄文土器２



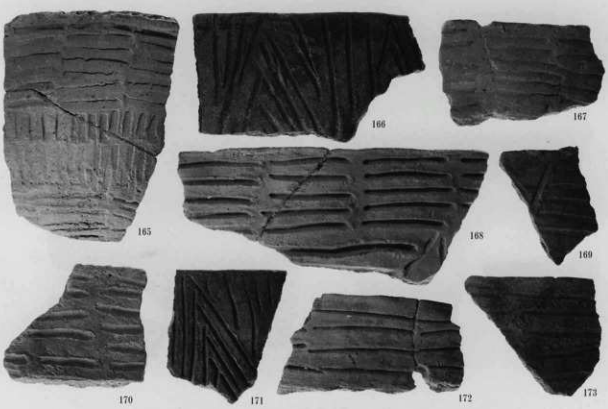
Aトレンチ出土層位不明縄文土器1



Aトレンチ出土層位不明縄文土器2



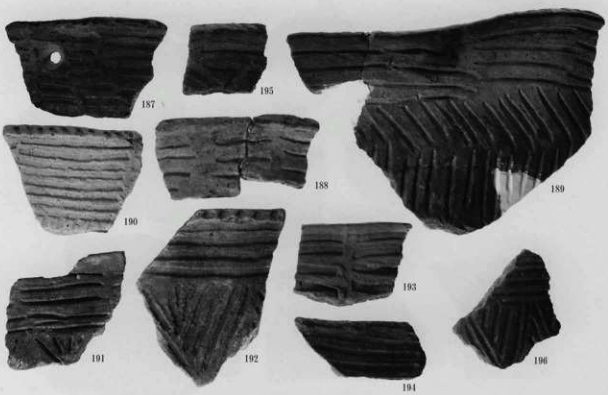
Bトレンチ表土層及び第１貝層出土縄文土器



Bトレンチ第２貝層出土縄文土器１

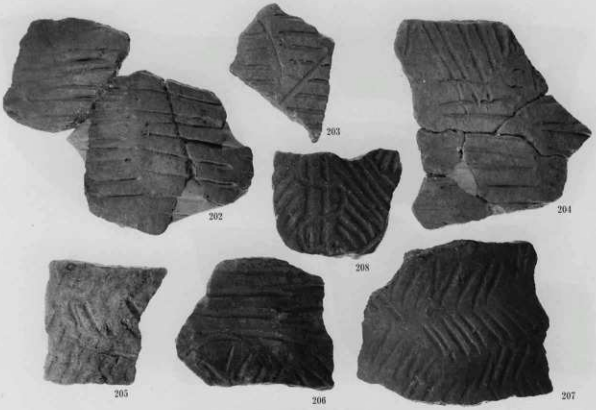
Bトレンチ第2貝層出土縄文土器2

Bトレンチ第2貝層出土縄文土器3

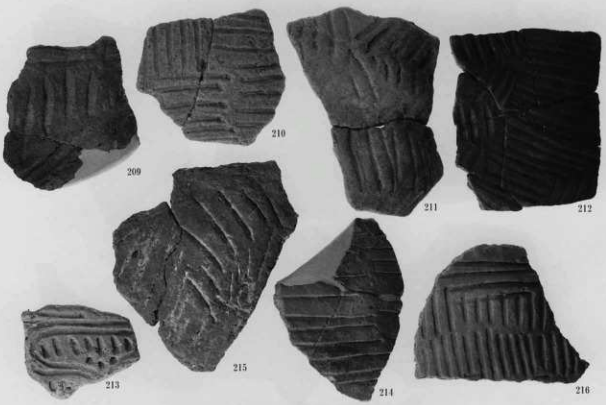


Bトレンチ第2貝層出土縄文土器4

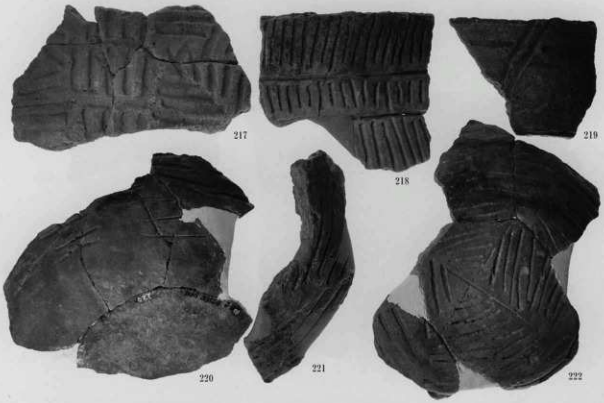
Bトレンチ第2貝層出土縄文土器5



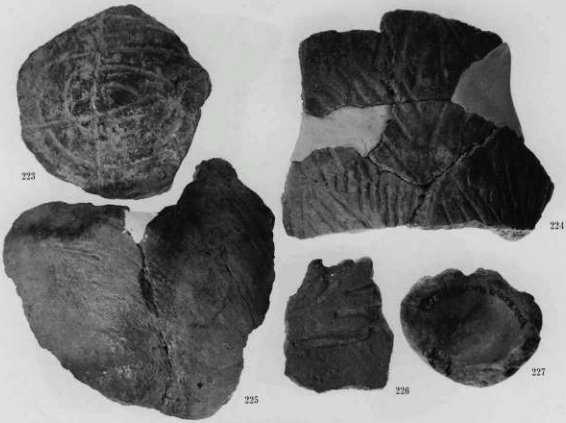
Bトレンチ第2貝層出土縄文土器6



Bトレンチ第2貝層出土縄文土器7

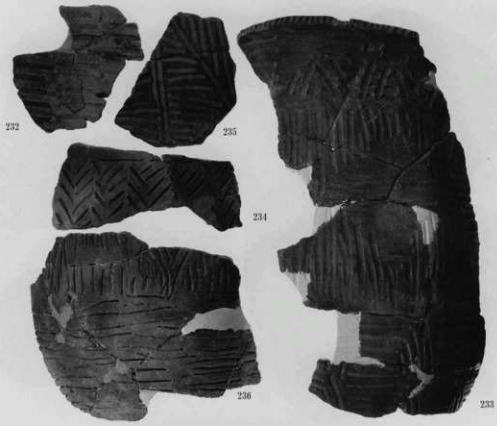


Bトレンチ第2貝層出土縄文土器8



Bトレンチ第2貝層出土縄文土器9

Bトレンチ第2貝層最下部出土縄文土器1

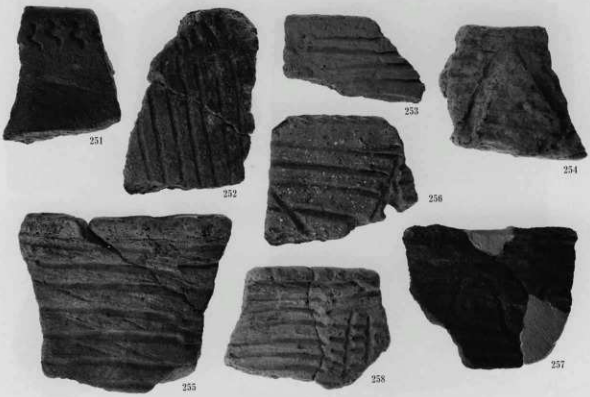


Bトレンチ第2貝層最下部出土縄文土器2

Bトレンチ第2貝層最下部出土縄文土器3

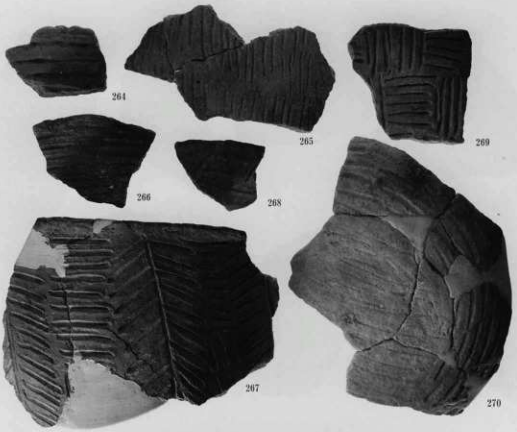
Bトレンチ第2貝層最下部，褐色土層及び黒褐色土層出土縄文土器

Bトレンチ褐色土層及び黒褐色土層出土縄文土器

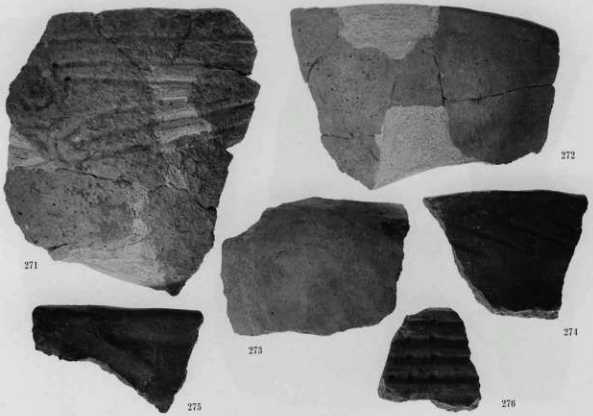


Bトレンチ貝層出土縄文土器 1

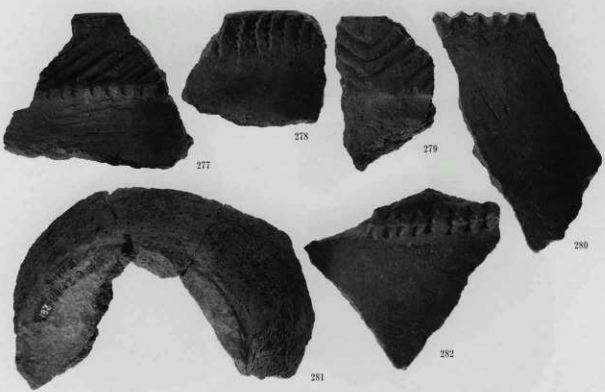
Bトレンチ貝層出土縄文土器2



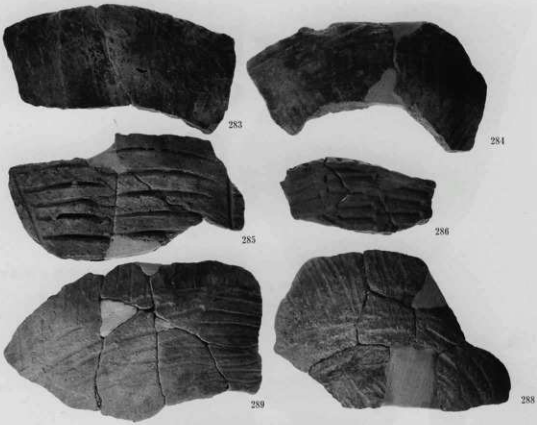
Bトレンチ貝層出土及び出土層位不明縄文土器



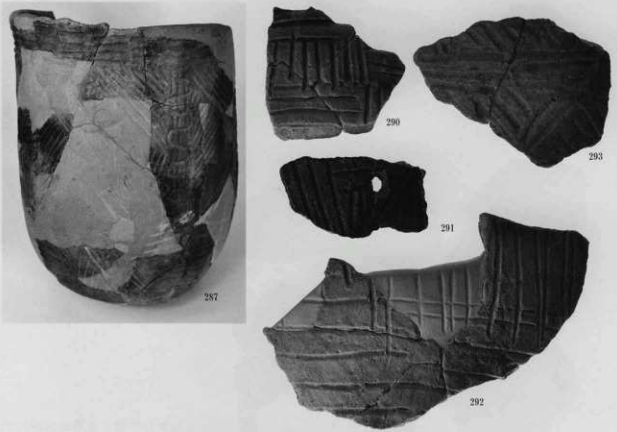
Cトレンチ第１貝層出土縄文土器１



Cトレンチ第１貝層出土縄文土器２



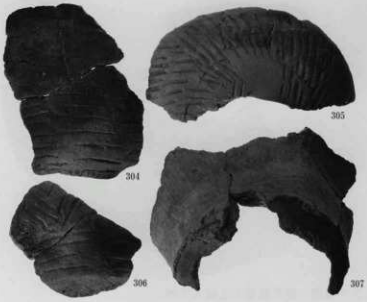
Cトレンチ礫層・第2貝層出土縄文土器1



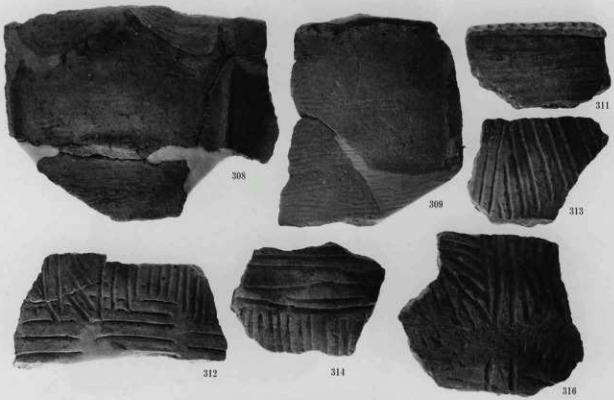
Cトレンチ礫層・第2貝層出土縄文土器2

Cトレンチ第２貝層出土縄文土器１

Cトレンチ第２貝層出土縄文土器２

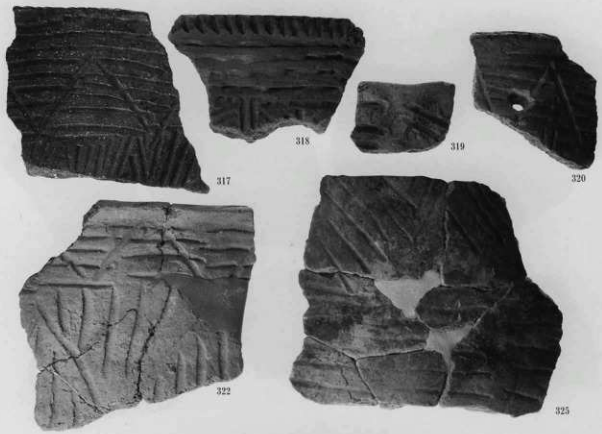


Cトレンチ第２貝層出土縄文土器３



Cトレンチ黒色土層以下出土縄文土器 1

Cトレンチ黒色土層以下出土縄文土器 2

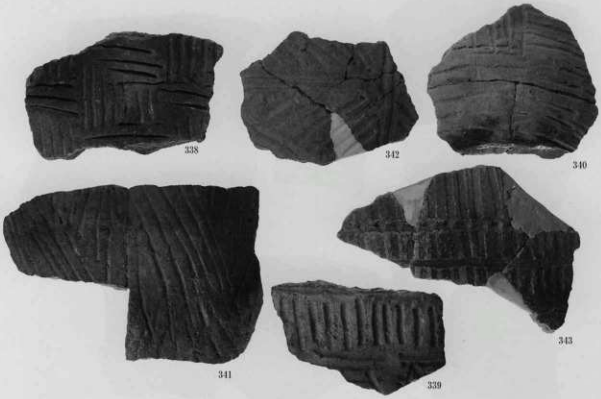


Cトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器 1

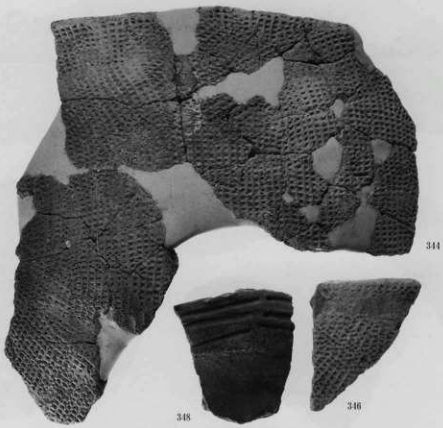
Cトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器 2

Cトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器３

Cトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器４



Cトレンチ（推定）貝層直下出土縄文土器５

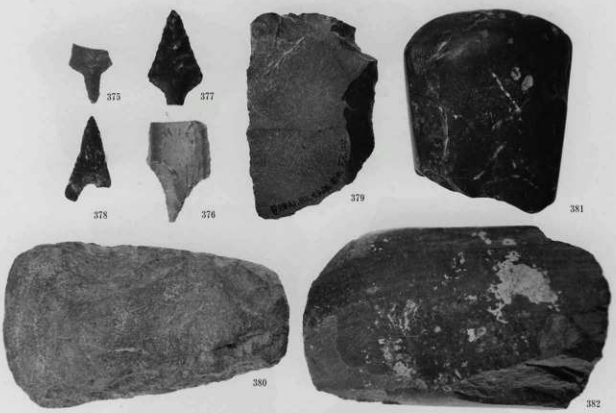


出土トレンチ不明縄文土器１

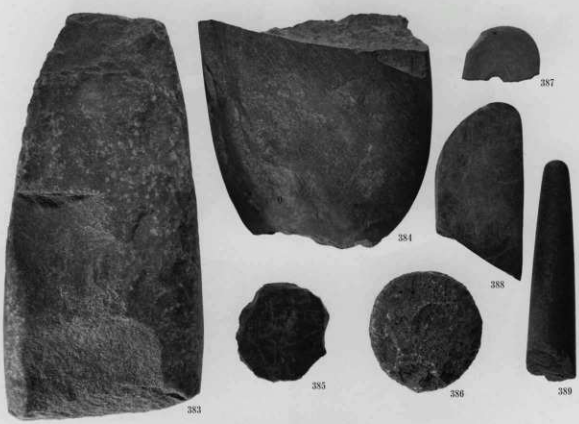
出土トレンチ不明縄文土器 2

出土トレンチ不明縄文土器３

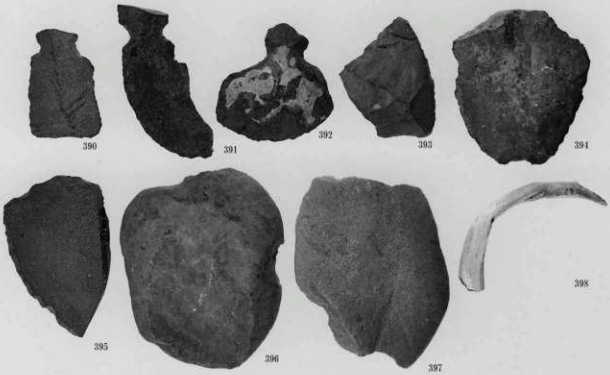
出土トレンチ不明縄文土器 4



Aトレンチ出土石器



Aトレンチ出土石器・石製品



B・Cトレンチ出土石器・貝製品

報告書抄録

ふりがな	そばたかいづか
書　　名	曽畑貝塚
副 書 名	慶應義塾大学資料再整理報告
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ号	第32集
編著者名	藤本貴仁・土野雄貴
編集機関	宇土市教育委員会
所 在 地	〒869-0433　熊本県宇土市新小路町95
発行年月日	2011年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北　緯※	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
そばたかいづか 曽畑貝塚	くまもとけんうとしいけこまちそばたに 熊本県宇土市岩古曽町字曽畑	43211		32°41′06″ 東　経※ 130°41′11″	132㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
曽畑貝塚	貝塚	縄文時代	土壙墓	縄文土器（押型文，轟式，曽畑式，市来式，鐘崎式，北久根山式など），石器（石鏃，削器，石匙，石錘，磨製石斧など），貝輪，貝類遺体（マガキ，ハイガイ，オキシジミなど），脊椎動物遺体（シカ，イノシシ，クジラ類など）

特記事項

調査区西側と東側で貝層を検出。前者は西貝塚，後者は東貝塚と呼称され，西貝塚では形成時期が異なる２層の貝層（第１貝層と第２貝層）が確認された。

西貝塚下層のマガキを主とする貝層（第２貝層）は，出土遺物から縄文時代前期に形成された貝層と判断され，その広がりは直径10m程度と推定される。また，上層のハイガイやマガキを主体とする貝層（第１貝層）は，後期に形成された貝層とみられ，その広がりは南北約25m，東西約８mと推定される。なお，第２貝層下の土層でも曽畑式土器が出土しているが，土器の形態や文様構成は，貝層出土のものと共通する。

一方，直径20m程度と推定される東貝塚の純貝層もマガキを主としており，縄文時代後期の土器が出土した。純貝層から出土した炭化物の炭素年代測定では，出土した縄文土器の年代的位置付けとも合致する結果が得られた。

出土遺物の中心は縄文土器であり，押型文土器，轟式土器，曽畑式土器，市来式土器，鐘崎式土器，北久根山式土器などが出土したが，なかでも曽畑式土器の出土量は突出している。出土した曽畑式土器については，口縁部が外反するものが多く，口縁部文様帯は横位の平行沈線文やこれに加えて山形文を施文するものが主体であり，文様帯にやや整然さを欠くなどの特徴がある。このことから，曽畑貝塚低湿地で出土した口縁部文様帯に刺突文を施す曽畑式土器より新しい段階に位置づけることができよう。

※北緯及び東経は世界測地系を使用

曽畑貝塚

－慶應義塾大学資料再整理報告－

宇土市埋蔵文化財調査報告書　第32集

発行年月日　2011年（平成23）３月31日

編集・発行　熊本県宇土市教育委員会

〒869-0433　宇土市新小路町95

TEL 0964-22-6500㈹　FAX 0964-58-1005

印　　刷　㈱城野印刷所

〒861-2296　熊本県上益城郡益城町広崎1630-1

TEL 096-286-3366　　FAX 096-286-3321